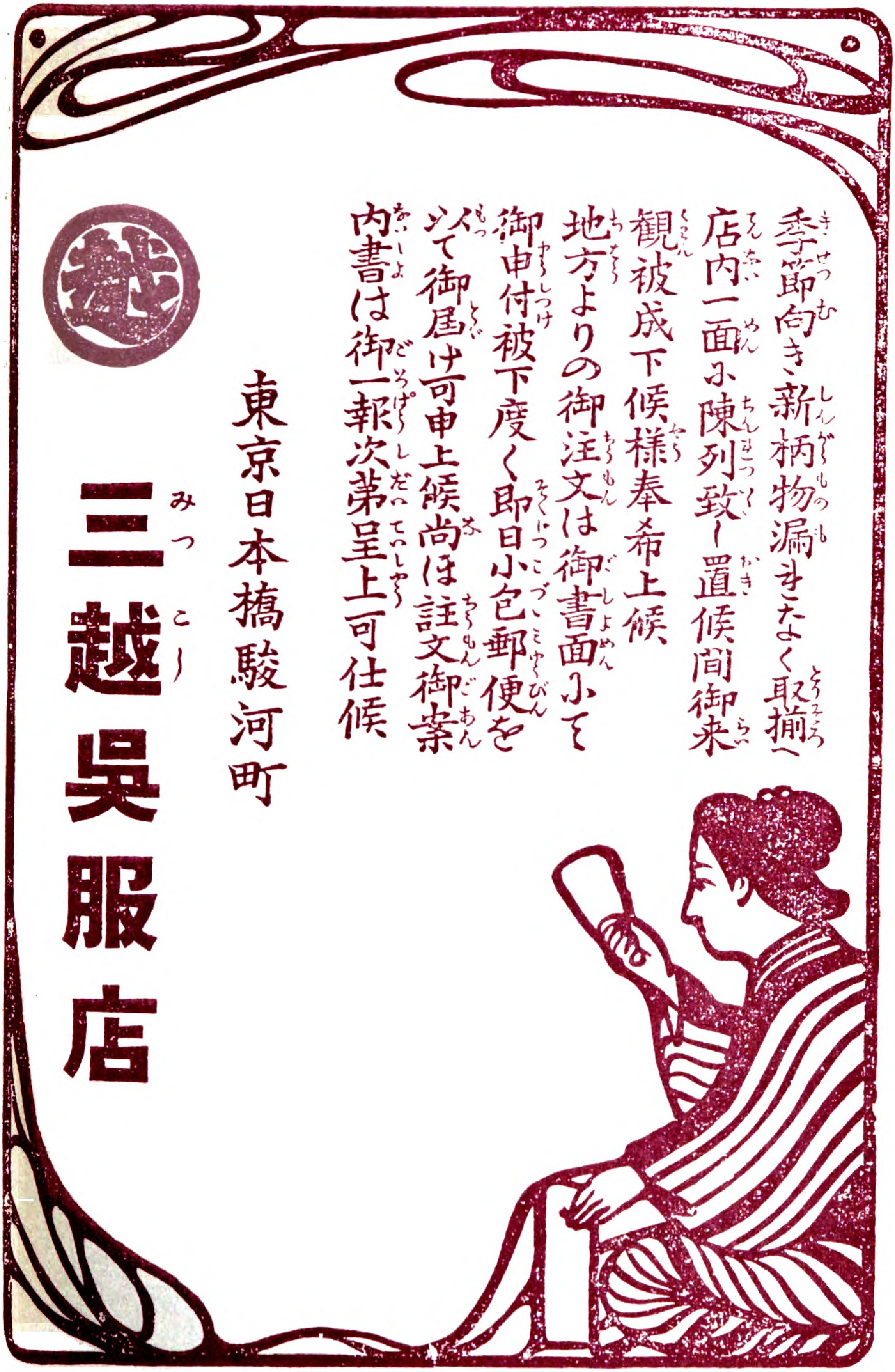
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可
明治二十四年八月創刊毎月一回一日發行

女鑑

第拾五年
第拾壹號




季節向き新柄物漏れなく取揃へ
店内一面に陳列致し置候間御来
観被成下候様奉希上候
地方よりの御注文は御書面にて
御申付被下度く即日小包郵便を
以て御届け可申上候尚ほ註文御案
内書は御一報次第呈上可仕候
東京日本橋駿河町
三越呉服店

女鑑 第十五年第十一號 目次

新刊廣告

人類學講義

理學博士坪井正五郎先生講述

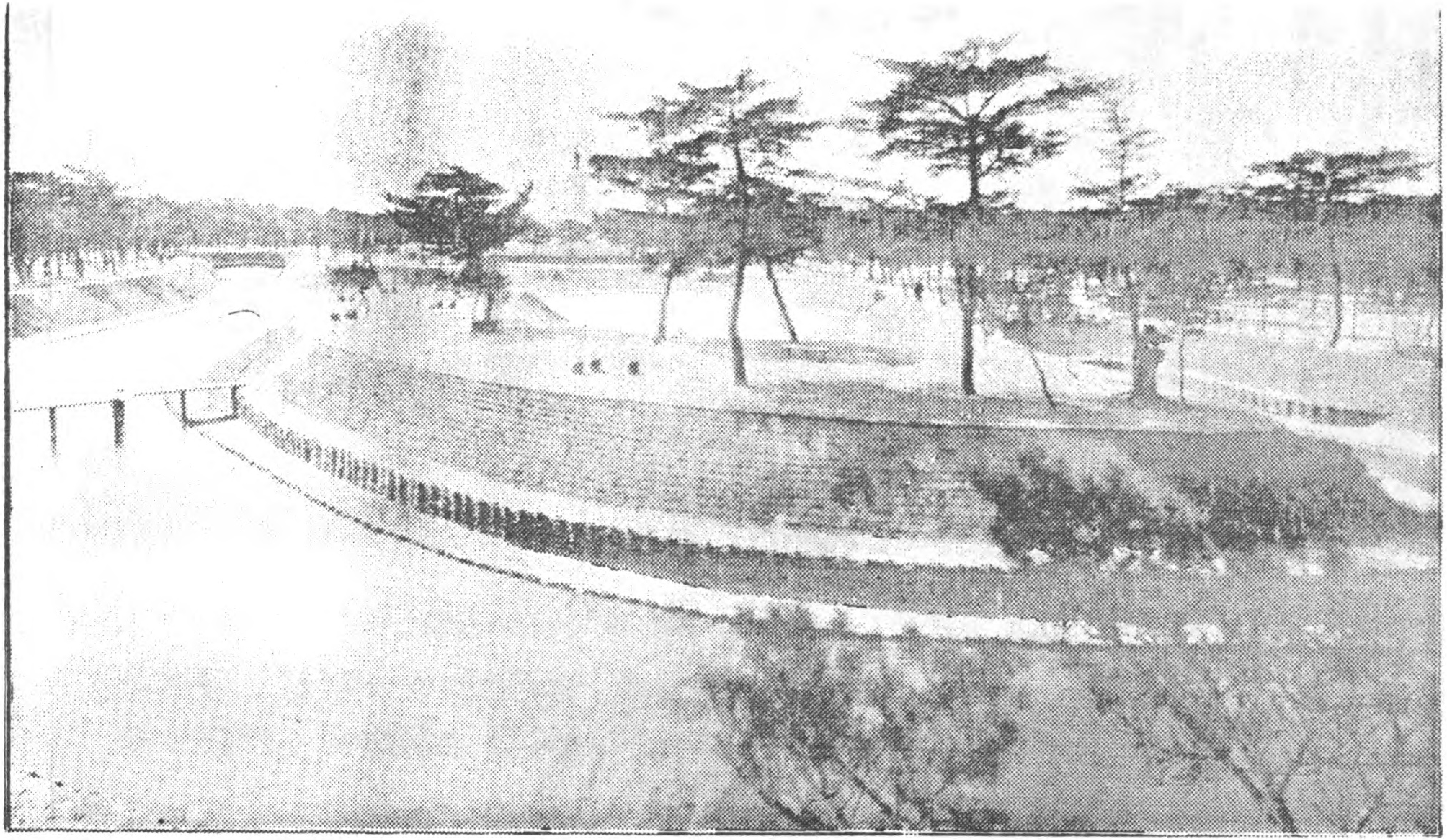
菊判洋裝全一冊
定價金一圓拾錢
郵稅十錢

吾人の祖先は如何にして出現せしか出現せし當初は如何なる状態なりしか如何にして文明の端緒は開かれしか如何にして今日の複雜なる社會を組織するに至りしか是れ人類學上最も興味ある研究なるべし本書は我國に於て人類學の泰斗たる坪井博士の極めて平易なる言文一致にて講述せられし者なれば創世紀の人類說、人類一種論と人類多種論、諸種族系統の探り方、人類の大別小別、日本種族、人類の本源地、人猿同祖論、等あらゆる人類に關する要件を網羅せられたり歷史及人類を研究する人々には座右缺く可らざるの良書たるを信ず

新刊廣告

發行所
東京市京橋區築地二丁目
株式會社 國光社
（電話新橋八・二六九三）

千代の松原



元寇を紀念せるこの千代の松原に尊嚴なる異彩を發現せる龜山上皇の御銅像を此圖の中央なる松の左方に拜せよ

龜山上皇御銅像



各國皇室及ビ王家御用

ミルクフウド



歐洲諸國及本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ。小兒、病者又平素不消化ニ苦ム者ニ適當ナル最良滋養食物ナリ。

最モ盛カンニ藥舗洋酒食料品店ニ於テ販賣ス

歐米各種化粧品直輸入商

最新煉香油

(紳士用)(貴婦人用)

パール



東京濱町一町目

平尾賛平商店

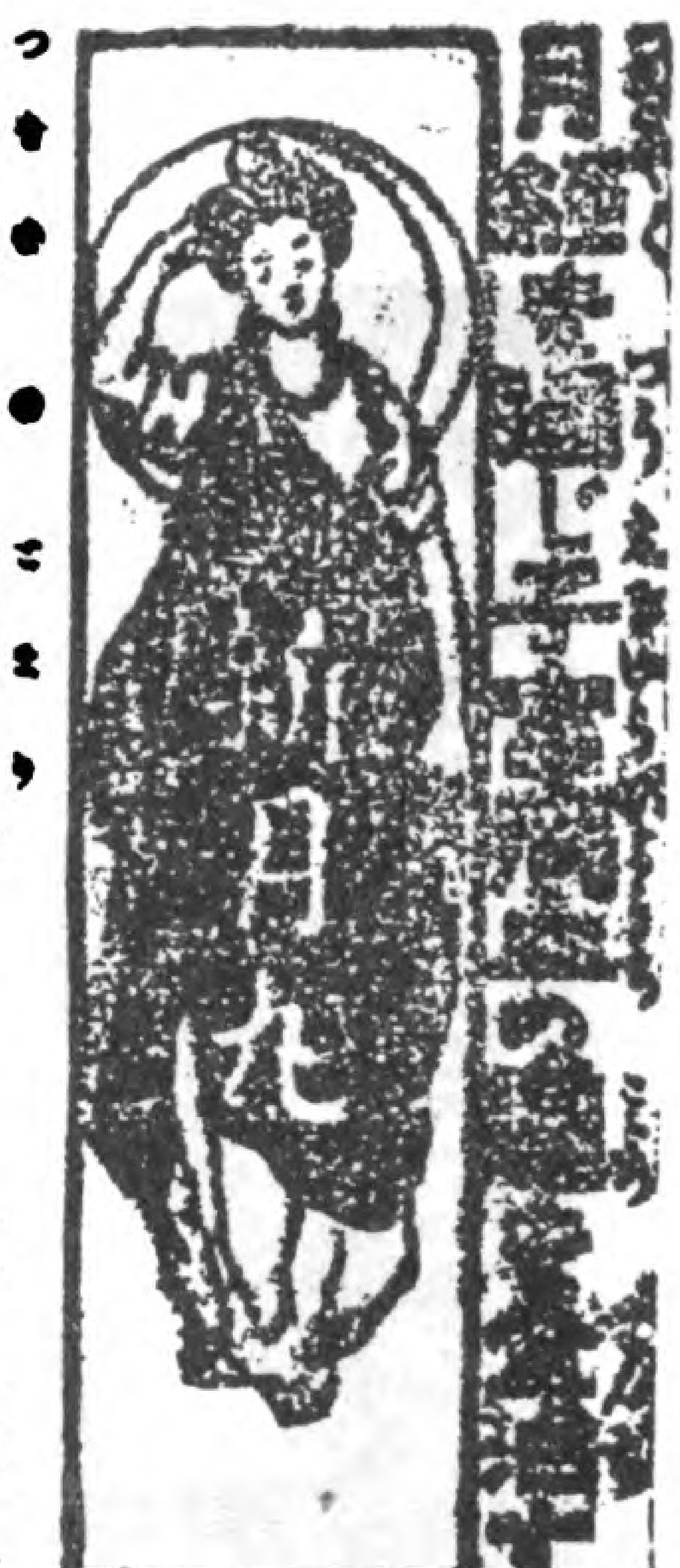
香油(ゴールド、オトキル)發賣元

〇大日本の淑女方が一般に渇望する處の原料の確實なる洗紛は此の花洗紛也



一度御試用の上御高評を乞ふ

特約販賣店
淺草公園第六區 辻小間物店
京橋區橋町 增田勉强堂



藥價
半廻分 二十五錢
一廻分 四十五錢
二廻分 八十五錢
三廻分 一圓二十錢

月やく閉止 三四ヶ月の月經閉止も二廻分にて必ず通ずる不思議の効あり

月やく遲延 常に月經閉止を苦惱するより神經性にて月經閉止を來し亦は遲延れることあり此藥を一廻分も用ちゆれば直ちに通下す

血の道にて頭痛眩暈し 目かすみ、逆上して顔面潮紅する人亦は常に月やく過少にて肥滿たる人處女十五六才にして月華なき人等は毎月持藥として此藥を用ゆれば**子宮病**月やく閉止、遲延、過少と感ふことなく通利を快よくし**血の道を根治**し身體强壯に**容貌爽快**ならしむること此藥特有の偉効なり

本舖 東京市日本橋區藥研堀町四十三 藥劑師 **高本與八郎**





定價・金五十錢・金廿五錢・金十五錢・金十二錢

雲上の花



閑院宮妃智恵子殿下



東伏見宮妃周子殿下

貴婦人中の貴婦人



公爵夫人　島津田鶴子
公爵母堂　毛利安子
前公爵夫人　近衛貞子

公爵世嗣夫人　九條惠子
公爵夫人　岩倉久子
公爵夫人　二條洽子

參謀次長夫人　長岡芳子
侯爵夫人　山内禎子
侯爵夫人　黒田清子

法相夫人　波多野爲子
侯爵夫人　池田亨子
子爵夫人　田村貞子

尾崎男爵の家庭







共立女子職業學校教室



造花科



繪畫科

愛國婦人會京都支部員經木眞田製造の狀況



名所の天長節




於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醬油
ヒゲタ印醬油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN
田中玄蕃醸造

小川直子刀自著書

高輪御殿 進話録

侯爵夫人 鍋島榮子君題歌
三輪田女學校長 三輪田眞佐子序

本書は著者が、十有餘年間高輪御殿に出仕して、常宮、周宮兩殿下に進話したる草稿を、佐々木御養育主任伯の丹精によりて、一冊に纏まりたる世にも稀なる珍書なり、貞操めでたき著者が、二百餘の談柄いづれも人道に稗益すべきものゝみにて、世の子女を持てる人たちは須らく一本を備へて、春の日、秋の夜の語り草とし、殿下の御餘教を仰がれんことを、且つ本書は女學校修身科用に適當なる良著なり

最新版菊判形
和裝美製本
實價五拾錢
郵稅八錢

鳫の音づれ

東宮侍講 本居豊穎君序
華族女學校教授 小野鵞堂君書

女子の第一藝としては、美はしき筆もて、やさしく文を綴ることなり、まことにこの藝に秀でたるは、其人柄も床しくおぼえて、曾て逢見ぬ人さへ、十年の知己の如く懐かしくも感じ、互ひの心を通はし、事を便じ、後の思ひ出草ともなるべきものなれば、よく／＼習ひ覺えざるべからず、文は雲の上にもつらなり、賤の女にも立まざり、世情に通じて正しき小川刀自にて、書は假名文字にて當代第一流の小野先生の筆に成りたれば、手紙書習ふ人たちには又なき良書と謂ふべし

最新版菊判形
和裝日本紙印刷
實價五拾錢
郵稅六錢

新編女子記事文

東宮侍講 本居豊穎君序

本書は著者が高輪御殿へ出仕の餘暇、折に觸れ、物に感じて記叙せられたるものにて、四季の風物より、論說、傳記、教訓、記行等の名文つもり／＼て一冊となりたるものなり、其優婉なる所は鶯の初音の如く、悲哀なるものは血に鳴く杜鵑の如く、情中にあふれ、語外にあらはれたるものなれば、讀者諸君をして卷を措く能はざらしむるものあらむ

最新版和裝綴
美本印刷鮮明
實價廿五錢
郵稅四錢

大阪東區北久寶寺町讀本明昇堂發行

日本橋際 大倉書店　東京大賣捌　前川文榮閣 日本橋通銀町

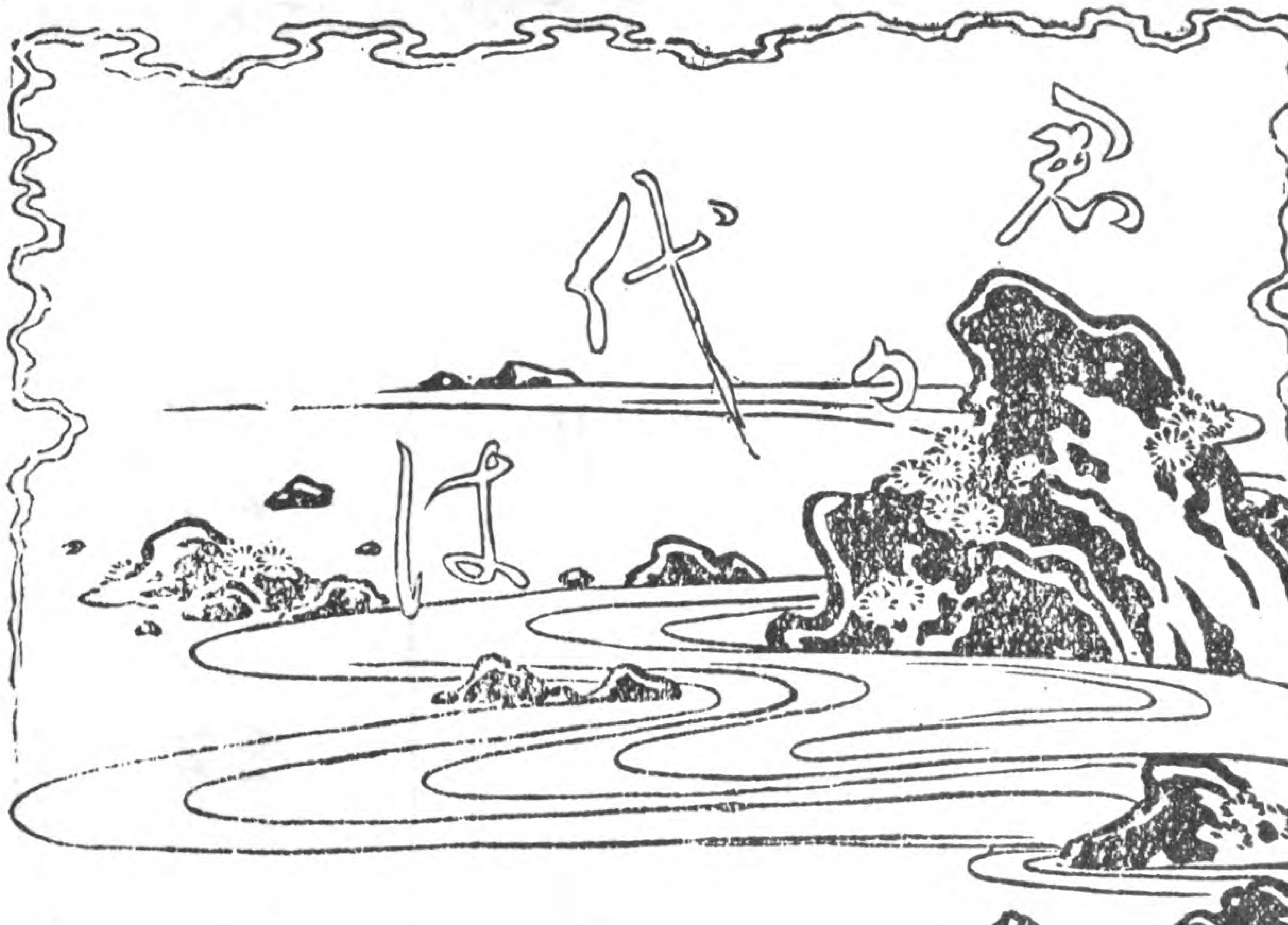
魁リボンは最新式の染工術を應用し他に比類なき兩面染出模樣なり眞にこれ流行魁



魁リボン

元祿好嶄新意匠
時事適意新意匠

全國至る所和洋小間物店にあり

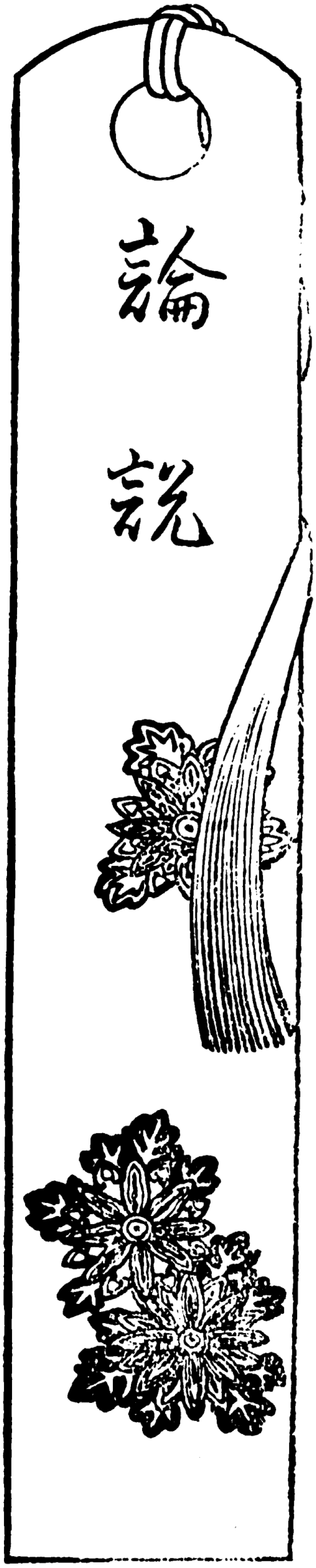


女鑑

第十五年
第十一號

唐くれなゐの紅葉は、民のこゝろのまことを染め、籬ににほふしら菊は、君が千歳をことほぐ、まことにけふは、かけまくも、あやにかしこきわが大君の生れさせ給ひたる、めでたさの限りもあらぬ日なり、取わきて今年は松の内の七三五ひきはへる時しも　皇孫殿下は生れさせ給ひ、この吉報の傳はるとゝもに征露の軍は旅順を陷れたり、げに草木も靡くわが大君の御稜威は、いよゝ四方に輝きわたり、さしもの大敵と戰ひし軍も、勝また勝、勝つゞきて、今や凱旋の歌野も山も動かさんばかりなるぞめでたき、こゝに筆を洗ひつゝしみて君が世を三唱し、皇室の御繁榮を祝し奉る。





妻となるに就て

伯爵 柳原義光君談

女は妻となるべき天職を有するものである、女は妻となりて始めて其智徳を圓滿に發揮し得らるべきものである、と同時に妻となる、即ち結婚するに就ては、己れ自らその夫とすべき人の、己が理想に適當せるや否や、而して一生を托するに足るべきや否やを識別して、百年の運命を過まらぬやうにせねばならぬ、然して結婚の徑路は、洋の東西に於て、大に異る所あり、自らそれに長所短所がある、日本の如きも、之を一生の大儀として、極めて愼重の態度を執來れる如くに見えるが、それは表面の形式のみで、多くの場合に就ていへば人物を相知らざる、相互の意志の疏通せざる二個の男女を、巧辯なる仲人口に醉はされ、一遍の不完全なる見合によつて、夫婦とならしめるのである、地位財産に嫁するならばいざ知らず、容貌衣服に嫁するならばいざ知らず、苟も人に嫁する以上は、其人を知らざるべからざるは勿論である、其人を

知らざる結婚は、夫を定むべき第一の資格を無視したる話で、當るとも外れるとも解からぬ、恰も米相場や株式相場を為す樣な投機的である、而も米相場や株式相場のごときは、一たび失敗に歸すとも、運がよければ又再び恢復する事もあるが、投機的結婚で失敗すれば、百年の貧乏鬮を引いた譯である、日本に離婚の多いのは、全く右の次第で止むを得ぬ結果と思はれるのである、西洋に於ては、或る程度までは青年男女の交際の道を開いて、夫婦となるには、相互の人物を知るに便宜を與られて居る、それでさへ人物を見損ひ買被つて、結婚前の理想と結婚後の現實とは一致せず、折角造らんと大に樂んだスヰートホームは棚へ上つて、女房は亭主の存外金離れがわるいのに不平を抱き、亭主は又女房の酷く我儘なのに懲き、遂に衝突の起る例も決して珍しくはないのであるから、一片の仲人口位を以て、輕卒に結婚すべきものでないことは深く考ふる迄もない話である、

普通の場合では先づ結婚をするのには、其橋を渡すべき所謂仲人がなければならぬ、而して其仲人は責任の重いものでなければならぬ筈であるのに、唯物の成立する愉快を、結婚の上にも施したく、其時さへよくばといふ考で、雙方の短所は全く棚にあげて長所のみ業々しく並べ立て、耳障よき仲人口を信せしむるやうにして、唯言譯的の見合位をせしめて、結婚を成立せしむるが、其の働きとなつて居る、そして玆に又一ッ話し度のはそのせめてもの見合も、容貌風采の外に、其人物の幾分をも研究し得らるゝならばまだしも宵にチラリと見し三日月の影を捉ふる如き不完全なる見合であるのに、この見合に落第したるを、一生の大恥辱の如く思ふやうである、既に及落なきものとすれば見合の必要もなき譯で、見合といふ者のある以上は、殊に此の一瞬間に己れ運命を定むるのであるから、諾否の自由を充分許さねばならぬ、決してこの見合の結果を恥辱と思ふべきものではない、要するにこの方法は甚不賛成である、されば如何にせば

よからんといふに、多年の習慣を一時に破るとも出來ねば、さなきだに近時悪風聞の種を蒔くに敏き青年男女をして直ちに西洋風に自由なる交際をせしむるほど寛大にもできぬ、さればとて又仲人の破れる末を考へずして、眼前の成るをのみ喜ぶ如き無責任のものでなく、その間愼重に而も誠實に周旋して、相成るべくは本人相互の人物をも識別し得らるべき便利を與へらるゝやうしたきものである、斯くて相互の意志確定の上結婚すべきものであつて、許嫁と稱するものゝ如きは、全然不都合のものである、併ながら此の許嫁なる者は近來あまり耳にせねば、或は玆に心配するほどの價値なきかも知れぬ、

次はこの結婚に附帶して起る儀式であるが、これは一生の極めて大切なる場合であるから、出來得べき丈莊重にせねばならぬ、而も浮華にとは望まぬのである、鶴龜の三幅對、松竹梅に尉と姥の島臺の前に、三三九度の式を行ふ、實に詩的で、甚だ優美ではあるが、莊重なものであるとは思はれない、西洋では宗敎に關聯する所から、結婚の式は概ね寺院にて莊重に行はれて居るが、日本に於ても、近時神宮奉齋會などで、神前に結婚の式を擧げる者が往々あるやうである、これはよき思付きであるが、とてもの事に古來緣結びの神といはれたる、出雲の神の社前で此式を擧げたればなほよからんと思はれる、東京でも其の支社ですれば、頗る妙で、尤もふさはしき事の樣に思はるゝが、まだそれを思付いて言出したものを聞かないさもなくば日本では、家を重んずる國風であるから、先祖の位牌の前に式を擧ぐるも宜からう、もしそれを位牌即ち佛の前では不吉のやうに思はゞ、各々其家に祭れる神前に行ふも宜からう、これを三幅對や島臺の前に於てするより、大に有意味で、而も莊重である、

さて妻となつては、自個の權利を侵害せられぬ限りは何處までも從順でなければならぬ、獨立の自由を夢みて、己一人を輕く見ては決してならぬ、常識を發達せしめて、一家を圓滿に處理せねばならぬ、夫が理

性に富んで世の風浪に船を浮ぶるが必要なるが如く、妻は同情に富んで、此の船の舵とも櫓ともならねばならぬ、斯くて女は妻たる時代に於て、積極的に大に其智能を働かせ、其性情の美を發揮し得らるゝのである、

序に茲に一つ擧げて述べたい日本婦人の一美風たるは、古來より分娩の時に於ける身體の苦痛を、よく堪へ忍びて從容自若たるを以て、立派な覺悟即ちタシナミとして居る事である、西洋にては妻は分娩の時の苦痛を容赦なく訴へ、夫は之を慰むるにつとめて、實に見られた圖でないとの事である、或は日本婦人のこの忍耐を、天性を撓める不自然の事と云ふものがある、これは西洋風の漫然たる考で、日本の强國と稱せらるゝ所以も、或る意味からいへば、此の如き婦人の克己心からも亦胚胎するものと見て差支あるまい、日本婦人の缺點とすべき個所は、素より夫の貧富、職業及其趣味の如何により觀察を異にすれども、一般に社交に不馴といふ事である、然し今回の戰爭以來、間接に大に婦人が活動して居るやうであるから、これは追々新生面を開くやうになるであらう、と喜んで待ちつゝあるのである、

さて妻となつて、良妻賢母と稱せらるゝ如く、姑となつてもよき姑とならねばならぬ、姑は妻の功成り名遂げたものでなければならぬ、と同時に第二の妻たる嫁即ち後繼者を待つに、潔く一家の主婦たる務を移し、自身は全く消極的態度を執らねばならぬ、斯くして始めて婦の三從の道を全うし得らるゝのである、然るに因襲の久しき、丁度國家の元老と稱する人々が、自ら進んで干渉的に政治に嘴を入るゝ如く、姑の世話の燒過ぎるのは甚だ困つたもので、此の元老的態度は決して執らぬやうにせねばならぬのである（勿論相談を受けた場合は別として）其手段としては、財政の許す限りは別居するに限る、遠きは花の香といふ諺の通りで、朝暮顏を合はす間には、双方氣まづき事も起つて、不知不識の間に一家の不和を招くこと

もある、若し別居が出來ぬならば其心して、姑となりては、第二の妻たる嫁に花を持たせて、思ひ存分家事にたづさはらさねばならぬ、即ち妻は飽くまでも家事に就ては積極的に活動し、姑は飽くまでも消極的に隱退するのを原則とせねばならぬ、かくて女はよき娘に始まり、よき妻となり、よき姑に終るのであるなほその他妻としては、育兒上の事等種々の責任があるが、これは誰しも知つて居る事で、今更新らしげにいふ必要もあるまい。（文責在記者）

女子と教育

日本女子大學校校長　成瀬仁藏

世の中に女と云ふものは非常に輕蔑されて居るもので、昔から凡ての聖賢の立てました教でも、譬へば佛教なり、儒教なり、大抵女子と云ふものは、非常に男子に取りまして劣るのみならず、極甚だしきに至つては、國家社會を亂す所の禍の源とまで云うて居るのですが、詰り私の考へは、然う云ふ風に云はれ又此女子の一生涯から考へて見ると、幼少の時から矢張其の風習があつて、男の子からも非常に輕蔑され娘になりましても人の弄びものであるかのやうに思はれ、殊に嫁入つてからは男子に服從すると云ふ有樣でムいまして、女の一生から考へて見ても、昔から聖賢の教に對しましても、又普通の教にしても、皆んな女子と云ふものを輕蔑して卑しめられて來て居りますが、一つ女子に何處から見ても輕蔑されない點がある、其輕蔑されない點と云ふのは、母たる點であります、全體世の中の人が先天的女子を賤むと云ふの結果、女子が生れるを喜ばんと云ふ、是を佛教に於ては又說いて、女子に十惡がある、第一には生れた時に父母をして落膽せしむる、これ其罪の初めなりなど云ふ者がありまして、誰でも生れた時は女子を喜ば

ぬと云ふ、此一言で殆んど女子の一生涯は盡されて居る、これに反して男子が生れると非常に喜ぶ、尤も我日本あたりでは下層社會の賤業者は女子が生れると云ふことを、或る一種の野心の爲に喜ぶ、それは愛憎の點からでも何でもなく、成長の上は女郎にでも賣らうとか、藝者にして左團扇で暮さうと云ふ賤しい了簡からであつて、殆んど女子の出生を喜ぶのは、かういふ部分に限られて居る、一般から云へば喜ばない、外國に於きましても、矢張さう云ふ問題が時々起ると見えまして、此頃或る學校では教師が生徒を集めて、自分が女に生れたことを好むか好まんかと云ふ問題を出しました所が、亞米利加は御承知の通り女權が擴張されて居りますから、大抵女子は女子たることを榮譽として喜ぶと云ふ意を述べたさうであるが是は果して本統であるか、未だ私は疑問中に屬して居りますが、然しながら能く考へれば、他の位置は何んなに惡いとしましても、又惡く思はれて居りましても、母と云ふ位置は何處から見ても價値ある立派な神聖なものである、若し母の位置が女子になかつたならば、女子は誠に氣の毒な人類の一部であると云はなければなりませぬ。

それで昔から此大罪人でありましても、死ぬる時には母の恩などを思ひ出す事は往々話に聞込んで居りました、或は羅馬でありましたか、非常に罪人があつて、凡ての法律や公徳には從はずして、時の警察官吏も法官も呆れて居たが、母が最後に涙を垂れて戒めた其の言葉は、一言の返事もなく、從つて自分の罪を改悟したといふ話もありますから、大罪人でも矢張母の恩などは確かに感じて居る、ソコで佛教の如きは女子に七去三從の教、又亂非降自天生婦人とか、婦人は長舌なり、是れ禍の階なりと、種々の事を云ひて婦人を攻擊して居にも拘らず、母の恩と云ふものは非常に褒めたゝへて、佛教ほど極端に罵り極端に褒めて居るものはない、然らば母と云ふ事は女子に取つて、是だけが動かすべからざる男子の力を以ても、ど

うする事も出來ぬ天賦の光である、

ソコで女子の教育と云ふものは、何の點に重きを置くかと云ふと、母としての教育に一番重を置なければ成らぬ、母としてが一番感化力の多い點であるから、其點に重きを置て、女子教育を施さんければならぬものである。ソコで他の男子の教育にしまするとゝ、色々職業教育をいたしますけれども、女子の教育の目的とする所は、職業教育にあらずして德育である、是が母たるの品位を高からしむる……否女子の光りを輝かせる主眼の點であらうと思ふ、それで大抵種々の傳記を讀んで見ましても、自分が斯う云ふ身分に成つたのは、大抵母の爲だと云ふことは、何の書物にも殆んど無いものは無い位で、勿論妻の力に由つて事業をなしたと云ふ人もあるけれども、それは寧ろ其妻の母が與へて吳れた恩であると、感謝して居る人が多いやうに思はれまする、ソコで私共が賢母良妻といふものを養ひ立つるのは、女子教育に如くものなしと云ふのは、矢張斯う云ふ點にあるからで、又女子は社會に居つて輕蔑されて居つても詰らぬものとされて居つても、此の實がある以上は、女子は大に奮發して、又自ら女子たることを榮譽として、善良なる母となると云ふことに心を注けて、其善良なる母と云ふことは、又非常な社會に重大の影響を及ぼすと云ふことを、益々進めば、決して婦人の將來は悲むべき世界でなくして、喜ぶべき世界であらうと思ふ。

女子の地位

華族女學校學監　下田歌子

曾て、泰西人の文明論を讀みたる中に、面白き比喩ありき、曰く『文明は、恰も、空氣の何人にも、専領

せられざる如く、遂に世界各國民の共有に歸するものなり』と、然るに、古より今に至るまで、孰れの國民を問はず、所謂『愛國の偏頗心』なる生國自慢の風質は唯自國有を知りて、他國有るを知らず、果は他國民も均しく共有の權利ある、其文明をさへも、自國民の專有物視し、埃及人は、『埃及文明』と謂ひ、西剌比亞人は『亞剌比亞文明』と叫び、曰く、希臘文明、曰く、羅馬文明等、みな、この歷史上其國民、其人種の專有物となる、今も猶『歐洲文明』とは、啻に、白皙人種の通語なるのみならず、白皙人以外の他人種迄も、所謂、歐洲文明なるものは、到底之を他國に通用す可らざるものなるが如く、確信する者すらあり、恰かも、是れ、空氣をしも、一民族一人種の專有物視して、他人種他民族も、均しく其空氣に生存しながら、しかも之にむかひて、自ら共有權無しと自棄するが如くなるなり、さても空氣無くして、動物の生存し難き物理を覺る人の、何ぞ一步を進めて、文明なくしては、國民の發達すべきにあらざるの道理を悟るに躊躇するか、淸き空氣が、人身の營養に必要なるを識る所の我等は、亦新らしき文明の何ぞ、國民の發達に缺ぐ可からざるを認めざる、抑も、文明とは如何なるものぞ、渾て國民の生活に關する、制度習慣全體の、完全に發達したるを云へるにて、家庭の淸快圓滿なる、社會の整頓完美せる、風俗の善良溫厚なる、其他、法律、敎育、工業、商業、及び農事に至る迄、みなことゞゝく、秩序整然、基礎强固なる等、小は一身一家の生計より、大は國家の經濟に至るまで、之を人情に訴ふるも、之を道理に爭ふも、いかにしても、慕ふべく羨むべき組織實行の相伴ひつゝある、人事萬端の活氣ありて然る所の生活は、世界に生きとし生ける、各國民の共有すべきものなりとす、

此文明の普及に關し、此廿世紀文明の普及が、如何に東西國民の間に懸隔し居るか、更に我等同性の境遇運命につきては、何故に、文明の普及が、斯く遲々として進まざる乎、否乎、廿世紀文明普及の氣運に應

ずる、我等同性の覺悟し、修養すべきものは何ぞ、請ふ試に之を言はん、
政治にもあれ、敎育にもあれ、社交にもあれ、苟くも、人間に賴りて成功すべき、人事の進步につき、其人間の切半數たる、我等同性が、進步せざる社會に於ける、人間の成功は、果して健全なるものなりや、抑も亦、永續すべきものなりや、我等は敢て、東西國民の文明に關し、其政治、經濟等の程度に就きては暫く之を言ふを好まざるも、新聞に、雜誌に、談話に、我等の目と耳とは、我等同胞の切半數たる、男子の職分に一任し、退きて、我等同性の職分たる、家に居り、世に處する、我等今日の境遇を一考せざるを得ず、
見るべし、均しき天地の間に、女子と生れながら、其所謂、文明國と未開國とに於ける、女子生涯の幸不幸より、其職分に對する任務の範圍に、非常の相違あることを、文明の婦人は、男子と雁行すべき敎育を受け、男子と隨伴すべき健康を有ち、愉快なる家庭の王國は、賢き女や、妻や、母の手に造られ、健全なる社交の樂園は、感化力あり、同感あり、品性あり、純愛ある、婦人の集合となり、樂しくして濁らざる社會の制裁力は、無邪氣なる少女の唇端よりするも、輿論に反響を及ぼし、潔らかにして卑しからざる風俗習慣は、天さがる鄙の少女も、之に薫せられ、弱は飽くまで之を護り、之を助け、强は强きが上にも、之を正しく且つ硬からしめ、邪なるもの、惡なるもの、不正なるもの、不公平なるもの、殘忍なるもの、壓制、無道、非理等は、法律、制度にも、之を許さず、額に汗して、己れに衣食し、衣食成りて、朋友親戚快く其家庭に出入し、社交の傍ら、慈善に、敎育に、病院に、育兒院に、苟くも、暇あり、餘財あれば其暇、其餘財の一部は、我等同性に賴りて、其社會の善事に注がれ、一村一町一國の天下の婦人の內に、其家庭の圓滿を整へ、外は社會の福利を計り、一代數代、習性となりたる、文明國婦人の境遇に引きかへ

未開國に於ける、同性の生涯は如何、生れて、聖代の恩澤に浴しながら、男子と雁行すべく、文明の教育を受けたるものは、なほ、我等東洋の國民中に、果してそれ幾ばくかある、況んや、父母從來の習慣は、其遺傳の體格と共に、我等の健康は、男子と隨伴すべくもあらず、我等の家庭中に、淸く高き幸福が、而も、夫唱へ、妻能く之に和し、内助の實功擧がるもの、亦幾人ぞ、其家庭の爐頭に集まる我等の子女は、能く身心の發達營養に缺く所無き乎、我等の社交なるものは、盆暮の義理仁義、婚儀喪祭の挨拶口上等を除くの外、一年默々、たゞ家に籠りて、曾て人に及ぼす感化力も、能くまた其の感化を受けんとする、社交の濶達なる道も無く、生れて長じ、長じて老ひ、つひに死なる境に臨むまで、夢の如く幻の如く、あたら光陰を消磨しつくす者、蓋しまた尠しとせず、是に於て乎、我等同感の姉妹、社會の制裁力を押し進めまく希ふも、力弱く識少なく、心は矢竹にはやれども、身は活潑の働きを爲す能はず、歷世相襲の制度風俗の強き力に壓迫せられて、猶未だ文明の大道に雄飛するの機無きなり、然れども、如何に、國法の整頓を希ふも、如何に制度文物の完備を期するも、人事の源は家庭に有り、其家庭の主權者たる、我等が今日の教育、今日の體力にて、爾も數百年來積堆し來りたる、習慣を打ち破るの力かあるべき、

されど、廿世紀の文明は、決して我等を見捨つるものにあらず、今より、我國は、世界の人類の共有物たる、世界の文明に浸潤せられ、感應せられ、遂に同化せらるべき日の近づき來れる時期にあれば、我等前途の生活も亦世界の文明に同化せらるべく我等同性が將來の覺悟、決して忽にすべきにあらず、征露の戰爭に依つて、更に國光を世界に輝かしたる今日、我等の父兄、一族、同胞も、我等が境遇の進歩、生涯の改善には、飽までも同情を表せらるゝなるべし、返す〲も、我等自身が、廿世紀の今日に於て、我日本の文明の、御身の伴侶として耻かしからざるやう、我等が足らざるを補ひ、我等が後れたるを助けて、

以てよく彼岸に達せしめよ、我等も自ら亦退きてその足らざると、後れたるとを補ひ助けて、進みて世界文明の婦人たるの資格を造らんことを勉めんとす。

禮樂を學ばるゝ女子に

何事であつても、物を學ぶといふことは、なか〳〵骨の折れるもので、骨の折れぬやうな學び方をしては、否その骨の折れるのを樂むやうでなければ、所詮物は學ばるゝものではない、到底役に立つ藝は出來るものではない。そこで女子の學ぶべき藝は、文書を別物として、禮節、音樂、裁縫、割烹、茶の湯、生花等である。

人の人らしく、殊に女子らしきは、禮節といふ藝があるからで、支那では六藝の第一としてある、さうでもあらう、人に禮節がない時は、或は天眞でもあらうが、人は鳥獸とも違ふから。あまり無造作に過ぎて、場所によつては一足も動けぬことがある、師直の言葉ではないが、鯖が大海でまごつくやうな目に逢ふ事もある、であるから人の世を渡る上からも、學んで置かねば不都合である、しかし世を渡る都合上のみで、他の前では禮節でも習うたやうであるが、其の人の平素は禮節を知らない人と少しも變つたことのないのは、百中九十八九である、そのやうな禮節は、俳優が舞臺の上の行儀と同じことで、一時の飾りになつて仕舞ふばかり、六藝の一でもないものである、そこで禮節でも習ふ人は先づ言葉から氣をつけてもらいたい、さうでないと梅の花に鶯が鳴いて居る形になる、又座つて居る人の前に立つて物を云ふ、物を投遣にして其行を失ふ如き、苟も禮節を學んだ人のあるべき事でないが、ある所を見ると禮節はこの邊の所に極めて注意をして貰ひたいものである、それから音樂である、音樂は人の心を樂ましむるといふが第一の功能で、鳥の聲虫の音にかへて賞翫するのである、苟も人としてこれ位な風雅心がなくてはならぬ、此精神にさへ叶はは、三味線でも胡弓でも一向さしつかへはない、否玄關で鳴らしても不都合はない、併し心を樂ましむると云うて、あやしい歌の相伴をさせたり、浮華な曲を奏して貰うては困る、それは賭博をして樂しいと云ふと同じことで、立派な樂みではない、どうか自分の心に恥ぢない樂みにして貰いたい、否それを以て不潔な心を洗ふやうにして貰いたい、さて立派不立派と云ふことであるが、此樂器は惡所で弄はれるから、よい音聲を持つて居るが、避けねばならぬ、と云ふ如きは、立派な音樂ではない、君子は其の罪を憎んで其人を憎まずと云ふ、偶ま聞くに堪へぬ音聲を發した所が、それは之れを用ふる人の罪で、決して樂器の罪ではない、然るに三味線胡弓の如きは、多方面の音聲をもち、兎角浮華の人種に弄はれる所から誠に不評判であるが、風雅人の手にかゝると、なか〳〵美妙な上品な音聲を發する、此風雅人といふは、世の擬物なる乞食宗匠　如きものを云ふのではない、眞に文字に示す如き人を云ふである、てあるから心を洗ふほどの歌曲であらば、樂器は三味線でも胡弓でも差支はない、堂々と鳴らして樂んで貰ひたい、必ずしも外國の眞似をして、オルガンやヒヤノでなければならぬといふ道理はない、然るになさけないのは、日本のは音樂を學ぶには、今の所魔窟へ出入せねばならぬ、自然惡い垢が身に染みるといふ事になる、それに反して西洋の音樂を習ふには、斯の如き心配に少しも入らぬ、どうか日本音樂を學ぶにも、此心配の入らやうにして貰ひたい、と同時に此心配の種を蒔かぬやうにして貰ひたいのである。



女子と家庭

伯爵　徳川達孝

近事我國の狀態を通觀するに、敎育の事は日進月步の有樣にて、殊に女子敎育の事は、其の施設日尙ほ淺きにも拘らず、駸々乎として其の步武を進めつゝあるは吾人の慶賀すべき所なり、

さて女子敎育の目的は那邊にあるやといへば、種々あるべしと雖、婦人の天職たる良妻賢母の資格を備へ、一家の主婦として、圓滿幸福なる家庭を造り、以て國家社會を補益せしむべきは、最も必要のことなるべし、

されば家庭てふ事は、女子の最も注意すべきことにして（男女に拘らず必要なれど）、良家庭を組成するは女子の力與つて多しと謂ふべし、これを古今東西の歷史に徵するに、家庭に於ける良妻賢母の實例は、一々玆に枚擧するに遑あらず、國の東西、時の古今、風俗・習慣、境遇の如何により、其の事蹟を異にするも、家庭を重んずる精神に於ては、同一なりと謂ふべし、家庭の良否は、一家の榮辱存亡に關するのみならず、延いて國家社會の盛衰に多大の影響を及ぼすものにして、一日も等閑に附すべからざるものなり、故に現今我國家庭の狀態は如何にや、社會人文の進步に伴ふて、完全なる域に進みつゝあるか、或は然らざるかを研究して、各自これが改善を計るは、

吾人の急務とする所にして、前に述べし如く、女子の最も注意を要する事故、學校に通ひたまふ諸嬢（極ゝ幼年の方は兎も角）は、日々に學びしことを研究すると同時に、父兄母姉の膝下に於て、家庭の教育を受けつゝある間に、他日人の妻となり、母となりし時は、圓滿幸福なる家庭を作り、將來の健全なる國民を造らんことの理想を養成せられんことを望む、又現に一家の主婦となりし人は、如何に改善せば完全の家庭を組成するかの域に達し、社會の模範となり、國家を補益し、以て良妻賢母の實を擧げられんことを望む、

家庭のことは、近時具眼の士の、深く注意し、改善を計りつゝあるところの傾向あるは、吾人の大いに喜ぶべきことにして、殊更喋々茲に述ぶるの必要なしと雖も、殊に女子には最も注意を要すべき故世の主婦方や諸嬢方の一考を煩はさんと欲して、聊か卑見を陳述せし次第なり、

秋の雨身の上話聞かんかな

加納子爵の家庭

中川愛氷

十月十三日の夜子爵加納久宜君を大森の邸に訪問した、この日は池上本門寺に御會式があつて、其御利益は電車會社にも及び、大森停車場の大献燈に、皆歸妙法と大書したものである、子爵の邸前はこの參詣者の往さ來るさで、なか〳〵の賑ひであつた、子爵もこの雜沓を見物して居られたが、予の訪問を快く引受けられ、邸内を次第に高くなれる茶園の柵外、あるは廣やかなる美しき芝生の庭を踏みて、開放したる一室に伴はれた、折ふし申分のなき月は、邸の内外の景色を遺憾なく照らして、身先づ繪畫中の人となり、夜を子爵の高話に更して、こゝにその美しき家庭の一部を寫すことを得たるは、甚だ光榮とする所である、

▽論より事實

話ばかり古くなつて、事はいつも新しく、家庭に於ける缺點は、去年も今年も變つたことがなく、新希望よりはまづ其缺點の穴埋をして行く方が急務であるが、さてそれを說くものは、又かと蒼蠅がられ、事實が改まつてくれぬから、いつも同じことを言うて居らねばならぬので、なか〳〵新しい注文があつても、そこまでは進んで居らぬ、以上は子爵の話で、實に現今家庭の改善など、口ばかりの人の耳を痛むるに足るべき警語である、子爵は口で云はるゝ前に、まづ實行して居らるゝのである、

▽白粉とコエトロ

この頃の五時といへば、まだほの暗いのであるが、令息令孃とも、五時を合圖に床を離れ、食事をすまして、總出で學校へ通はれる、小學校時代には、村方の學校でもと云ふので、汽車の便を借れば、新橋附近が一番便利であるから、さうと極めると、場所が場所であるから、生徒相互の品評や俳優を引合に出して、令孃が學校から歸つて、團十郎の眼玉といふのは、何の事ですかといふ質問などが始まる、子爵はこれは大變、まだ白粉臭い方よりコエトロの匂ひが子供の利益であるといふ次第で、匆々土地の學校に引上げられた、今は上の令息二人は學習院、次の令孃四人は華族女學校へ通はれて居る、

▽雨天には除外例

學校の道中は、新橋まで汽車で、これは六ケ月通用の三等切符を買うて、二割の利益を得らるゝといふ話、それから學校までの道程は、あまり近くはない、否遠い方であるが、これは徒步で通はれて、雨の降る時だけは除外例である、その時はかねて銘々に用意せられて居る回數乘車劵で電車の便を借りられるのである、華族の若樣お姬樣でなくとも、普通の家で子供に、先づこの眞似をも得させぬやうに、意氣地なく育てゝ居るのが多いやうである。

▽間食は禁物

それからお茶受の刻限は學校で經過して、午後四時頃、前後して學校から歸られる、四時三十分振鈴の

聲に連れて食堂に集まり、食後引續いて、水菓子なり、干菓子なり、煎餅なり、牡丹餅なり、有合せのものを口にして、この食卓に腹を肥やす外は、決して間食といふことを禁ぜられて居る、この間三十分なり四十分なり兄妹の方々で、英語の問答がはじまる、お伽噺がはじまるで、なか〳〵賑はふ、兎角する程に、日は西山に傾く、これから打連れ立ちて運動場に走せるといふ有樣、思ひ存分學び、思ひ存分食ひ、思ひ存分遊んで、その日は快く終る、八時近くなれば、また振鈴があつて、それ〳〵部屋に入つて、暖かき夢に入るのである、

▽加納流の改良服

衣服は加納流の改良服で、冬はフランネル、夏はカシミズ、これが學校服にもなり、稽古着にもなり、寢卷と不斷着でないだけで、外出一切、旅行の時にもすべて一枚看板、材料は何丈といふものを買置いて、當時十二より三、四、五と四人の令孃の衣服、地質も何も同じことである、そこで子爵の意見は、世間の振合を見ると、女の子が十五にもなり、少し子供離れがすると、赤い着物を着けたり、島田に髮を結つたり、大人振つた態度を執らせる、また天然的大人になつて居らぬものに、人工的で大人らしく見せるやうにする、勢ひ形と物との距離が遠くなつて來る、それは甚だ不贊成で、自分の方針は一つ〳〵年を重ぬるに隨つて子供ぶらせ、成るべく人工的に發達せぬやうに仕向けて居る、これ等は女子教育上必要の事で、その位にして丁度よい加減になる、そこで大人ぶらせぬといふ手段方法は、末の妹も中の妹も、色から地質から、末の妹を標準として、同じやうな着物を仕立てゝ着せることである、尤もこれは年のあまり掛離れて居るもの、又一人娘もあれば、男一人に女一人といふのもあり、全然ないのもあれば、世間一般には不可能のことであるが、自分のやうに、子澤山の親としては、年來の經驗上極めて好成績であるから、これは孰れにも同意を求めたいのである。

▽服裝と精神敎育

世間一般、娘が十五にもなれば、妙に片付て、大人らしく裝うて居るが、同家にては、十五にならるゝ令孃なども、鬼ごつこなどして面白く遊ばるゝかと思へば、三間も地を離れてブランコを飛ばせる、丸太の上をかけらるゝ、子爵の希望通りに、十二になる、下の妹君と同じやうに駈廻つて居られるのである、大器晩成は、かゝる時に於ける必要の語で、自然の發育に伴ふ、自然の發達を待たず、生意氣に大人らしく仕立上げやうとする結果は、運動ぎらひな、陰氣に不活潑な人物が出來上る事となるのである。

▽すべてお揃ひ

親の子を愛するに一視同仁が當然であるが、大に注意をせねば、子のヒガミの種を蒔くことがある、そのヒガミを防ぐ一方法としては、服裝を一定するに限る、例へばカスリの着物を着せるとしても、大ガスリもあり、蚊ガスリもあり、種々の織方染樣がある、甲のよいと思ふ所に乙の氣に入らぬものあり、乙のよいと思ふ所甲の好ましからぬものあり、丙も丁もこの調子に、皆見る目が多少異つて居るから、親の公平に與へた品物を、不公平に見て不愉快の念を起させることがある、これ等は誠に餘計な心配を招くものである、といふ子爵の說で、同家の令孃がたは、衣服は素より、髮かざり、胴締から簪、時計、履物に至る迄、すべて一樣にせられて居る、

▽淚の數が少い

同家の家庭には、ベソをかく、泣く、左樣なことからして落つる淚の數が少い、否泣くことなどは一年中同情の外には、皆無といふても宜しとの事である、それは子爵の方針が、泣かせるやうに叱るのは親の恥で、子供の泣く聲は、親の不行屆を訴へるものと聞いて差支ない、と云ふので、すべて小言といふ事はなきものにし、叱らねばならぬ時には敎へる、前の過に向つては寛大にして、後の過ちをせぬ注意を促がされる、であるから、態度の恐ろしさに途方にくれる淚、自分の意志になきことを叱られて、怨む

にはあらねど言葉にも窮して意外に生ずる涙等、さやうな勢力の弱い涙をこぼさせることなどは以ての外とせられ、子爵は口ぎたなく罵る親の子は、必ず強情で、後悔などは思ひもよらず、その時々輕蔑される度が重なるばかりであると語られたが、實に穿つた言葉である、

▽迷惑をも分擔

子爵が令孃がたに用を仰付けられる事などある時、お二人以上の場合には、誰と名を呼ばれず、單に「子供」と聲を掛けられる、相手の都合で、用は辨じても辨せぬでもよろしい、呼ばれて迷惑なと思へば、その迷惑は分擔させる、すべて二人以上の時にはこの主義でやる、といふのである、それで年に三四回上野へ行かれるとか淺草へ行かれるとか、遊びに出掛けられる時には、令夫人に、子爵の言葉を拜借して云へば、半ダースの子供を連れられて、誰を一人置くの、のこすのといふ事をせられぬ、これは女中にでも、一人を連れて、一人に留守番をさせるといふ不公平をせられず、他の關係のなき僕一人位を置いて、家族全部で出掛けられる　さて出先で、茶屋で飲食をするといふやうなことをせずに、面白く遊ばれるやうにせられる、さればとてまんざら相手が子供方であるから、何も口へ入れずには面白くもあるまい、そこでの御馳走に曰くは、上等で蕎麥、下つて汁粉、この位であるとのこと、又同家には舟の用意があつて、鯊の釣れる時などは、前同樣家族全體で舟中の人となる、斯ういふ工合に、同家はいつも團欒の樂みを分たれるのである、

▽水に睦むべし

上の令息二人の舟遊びをせらるゝ時には、下の令孃四人はいつも伴はれて行く、隨つて水に溺れてもすぐ浮くことの出來るやうに、游泳の術をも心掛けられて居る、子爵は女でも游泳を覺えさせて、嫁に行つても游泳の趣味を敎へ、お母が渡を見て胸がわるくなるの、水を見て恐ろしいなどゝいふやうな事など、成るべく水と親むやうにせねば、海國男子など

と成れる人物を生むことは出來ぬ、親がゝりの子供でも、六十哩や八十哩は獨立して旅行する位の勇氣がなければならぬ、それに今日では世界の日本として、帝國の名勢を世界に輝かすやうにせねばならぬのであるから、西洋各國を漫遊することも、持つた良人次第ではせねばならぬから、女もつとめて水と親睦するやうにせねばならぬ、といふ御論である、

▽金がなくなれば乞食

それから同家には、一年に一度か二度は、銘々の獨立經濟で、令息令孃方を旅行させることがある、日子と、金錢を豫算して、行く所へ行き、見る物を見らるゝ、その途中金を掏摸るれば、止むなく乞食にならねばならぬ、金を使ひ過ぎれば、豫定の道中は不自由せねばならぬ、といふので、宿屋の掛合から道中の萬端を修業させて、旅に於ける注意の缺げることのないやうに、萬事この心して教育せられて居る、

▽經濟の仕方

一家を相續し、又世に獨立して行く時の經濟は、未だ獨立せず親がゝりで居る時から多少修業して置かねばならぬ、それで幾分か公共的事業に從事せしめて、事業に對する經費は、借錢をせずして、事業を發達せしむるやう、經濟思想を作り置く必要がある、實業教育など、疊の上の理屈ばかりで、實地に當つたことのない話は、何の役にも立つものではない、子爵は以上の説で、子爵の令息方で發企し、同邸の裏に當れる千二百坪の運動場を造り、諸種の運動機械を備付け、有志運動會といふものを組織せられた、この委員も委員長も皆少年で、この少年の連中で會費をあつめる、帳簿を整理する、器械を修繕する、支拂をつける、一切大人が干渉を受けず、思ふまゝに其技倆を振ふのである、そこで其成績は、近來月に三十錢の會費で八十餘名の會員が出來、地代なり何なりで三百圓の創業費の中、創業以來一年八ヶ月でそのうち百五十圓を返濟し得らるゝとになつた、

この會の利益は會員の體育に於ける事は素よりであるが、經濟思想を養ふ上に於ても、借金の稽古、そを返す工夫、金の融通法、やりくりの仕方等を覺えて、金を得る事の容易ならぬことを覺え、成長して獨立世に立つ時に於て、大なる蹉跌を招くやうな事のない修業にもなるのである、

▽國家の柳ごし

同家にては、主人の子爵が體育といふ事に極めて重きを措かれて居る所から、令息令孃方に、生れて一度も藥を飲まれたのがないとの事である、子爵は笑うて語らるゝに、何さま娘等に運動を奬勵するものであるから、足も太し、手も太し、なか／＼柳腰などゝいふやうな譯には行かぬ、京都邊の人からは、それでは嫁入の邪魔になる、とわつて、なか／＼同情を得ない、去ながら身體が細くて、柳ごしで、頬骨の出た娘でなければ、口がわるいと云うて、そんなものを欲しがるやうなものばかりになつては、國家の不利益であるから、娘の賣口よりまづその方から心配してかゝらねばならぬ、そのうちに手足の太いのゝ欲しいといふ氣まぐれものも出て來ぬとは限らぬ、

尾崎男爵の家庭

豫見道人

近時めでたき話の二つ三つ續いて、一家に時ならぬ春風の通へるは、麻布材木町なる尾崎男爵家である、多くの姉妹を持てる本誌を、そのめでたさにあやからせんとて、道人は尾崎男爵を訪ね、玄關に待つ程もなく客室に對座するの榮を得た、

男爵はかねて子福者と聞いて居る所から、お子樣はお幾人と尋ねた、男爵は西洋で二人、日本で六人、と答へられたので、その中の令孃二人の敎育方に就て、差支なき限りを洩らされんことを求めた、

男爵は極めて無頓着に、何を話しても差支る事は一つもないが、さればとて別に話をする程の事もな

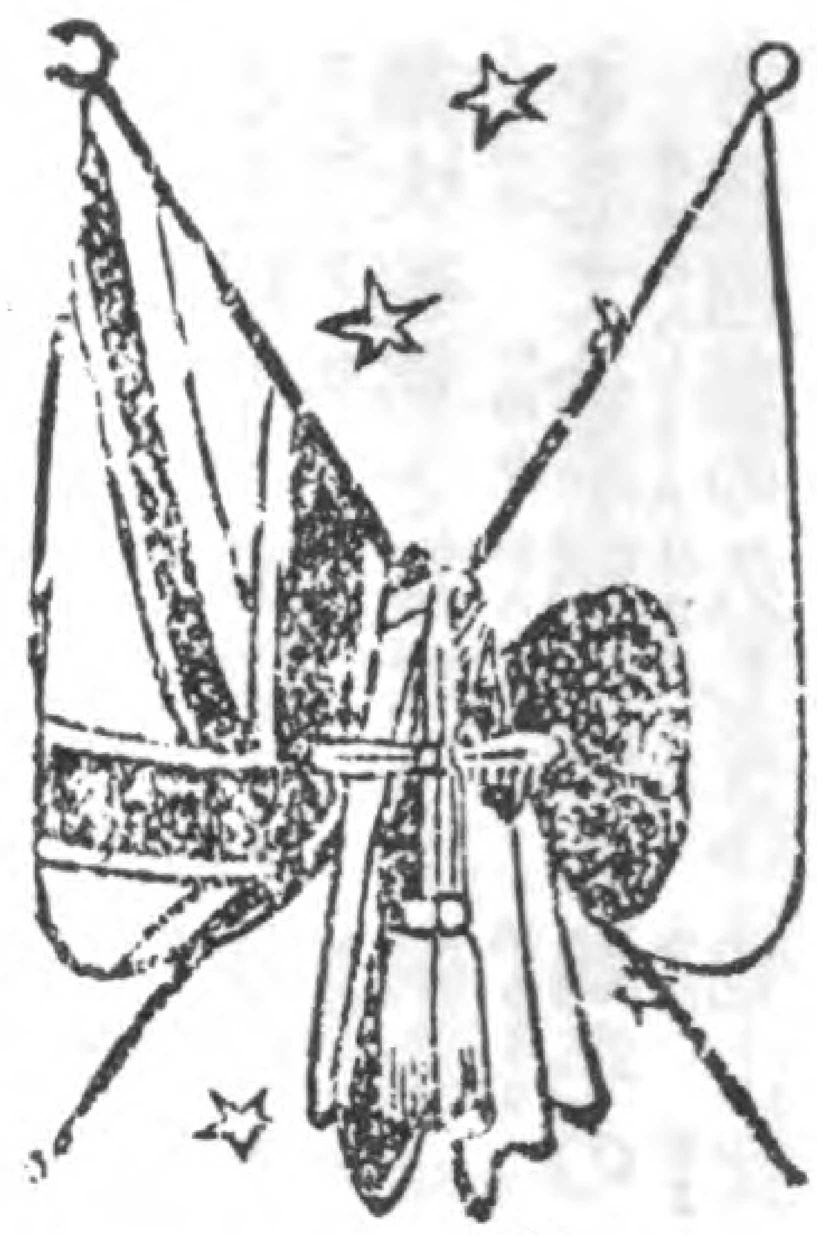
い、教育の仕方に就て彼アすればよい、此うすればよいと、それは十人十色で、何のやり方がよいとは限らぬが、私の考では、女に大した學問の必要はあるまいと思ふから、よい加減にその方を切上げる、女用の文章が綴れて、日用の帳面が附けられて、少々物が讀めさへすれば、それで澤山で、あとは裁縫を學ばせる、料理をやらせる、琴三味線も結構、茶生花それも覺えて置いた方がよい、まづ嫁入つて困らぬだけの事さへ覺えて置けば、教師にするでもなければ、別に月給取にするのでもないから、夫以上の事はさう八釜しう云ふに及ばぬ、それで長女の壽子といふは、今年十八歳、一昨年華族女學校を、もう一年で卒業する所であつたが、例の流儀で、免狀を取る必要もないから、それを止めさせて裁縫を習はせる事にした、師匠もさう八釜しいのを撰ぶにも當らぬ、近所で素人の内室さんに、上手なのがあるといふので、唯今それへ通はせて居る、次の妹は浅子といふ名であるが、これも學校へ通うて居るうちに、倉橋子爵の嗣孫泰昌といふにくれぬかとの事であるから、まだ學校最中であり、ちと嫁入の年には早いのであつたが、學校の途中はもとより例の説で差支なく、その代り少々世帶向のことは教へてあるから、まアくれと云ふ時が花で、これは一昨年の話、早や孫も出來た、次の娘は十一、これは今高等小學校へ通學中である、

斯うとばかり男爵の話を聞けば、日本新智識の魁となられて、學問といひ、識見といひ、此節の人であれば、ハイカラーで、たとへ口でばかりなりとも、學校教育に就ては、今少し變つた考がなければならぬ筈であるが、これは近時の女學校の價値の乏しい話で、學校と社會とが相容れぬものたるを證明せられたもので、男爵の無頓着に似たる教育が、學校以上に價することが、既に論より事實に證據立られて、これと案を立てゝ置かずとも、日々自然の發育にまかせ、自然の理性を辨へるに任せて、手に當り次第に掃拭も覺えさせ、買出し方も覺えさせ、交際振も

覺えさせ、娘時代は娘時代で、圓滿に娘らしくし、それにて押行けば、妻となれば、妻となつて、圓滿に妻たる務の缺げぬやうにする、云はゞ無言の教育で、やれ理想の、やれ良妻賢母のと、さう理想や、良妻賢母を八百物のやうに、やすく擔ぎ廻らねば、擔ぎ廻はらずとても、自然によい家庭が出來、良妻賢母となられるやうな仕掛になつて居る、食事は主人の男爵のみ洋食で、あとは面倒のないその時次第の惣菜で、衣服は絹もよし、木綿もよし、必ずどちらでなければならぬと云ふことはない、實に理屈もなき、面倒もなき、むつかしい顔する人もなき、さしてグラ〳〵と笑ふばかりでもなき。期せずして圓滿に、企てずして多くの理想とせるスヰートホームが造られ、一家團欒の樂みを朝夕に見るを得るのである、卷頭に掲げたる男爵の家庭は、十二年前の撮影に係るもので、男が之に題したる一詩がある『螽羽振々郭氏ノ流。大兒は學に從ひ幼は嬉游、王侯相將元種なし、他日期成す伊呂の儔』この詩意は今に於ても實地に反復せられて居る所である。

山縣次官の忠婢

あはれにもまたやさしき話を聞くものかな、内務次官山縣伊三郎氏が明治廿一年愛知縣書記官として名古屋にありし頃、下婢に雇ひたる、愛知縣海東郡川淵村機業家山田吉左衛門の伯母山田その(六十八)はおはるおはると呼ばれて山縣家に忠勤を盡し、今日まで十八年間能く家事を助け、非常に信用を受け、殊に同家の小兒はゝるを母の如く慕ひ、はるも亦主家の爲に自己を忘れて事に從ひ、小兒を愛すること實子よりも厚く、されば同次官も今や道義地を拂ひ、世にめづらしき忠婢なりとて、大に愛し、殆んど家事萬般を彼に委ね居たるが、今年三月はふと脚氣症にかゝり、轉地療養の爲、川淵村の實家に歸りたるに病氣日に加はり、去る七日終に主家の事のみ言つゞけて世を辭せりと、されば同次官も同十六日旅行中同家をたづねて慇懃に香花を手向られたりと



社會

婦人社會の美

跡見女學校長　跡見花蹊

妾嘗て謂へらく、婦女子の一生身に之を行ひ心に之れを繰るべきもの、唯一の美在るのみ、苟くも身に美とすべきなく、心に美となすべきなからん乎、婦女の實安くにか在る、其禍を社會に播き、毒を人生に流す決して尠少に非ざる也、而して其所謂身の美なるものは紅粉を粧ひ綺羅を纏ふの謂に非ざるなり、其所謂心の美なるものは子史を渉獵し、科藝を咀嚼し、玄妙の理、艱深の說、左右源に逢ふの謂に非ざるなり、一擧手一投足、及び性情の動く所、溫乎として玉の如く、以て能く其餘技に達し、以て能く其家政を理す、是れ之を眞成の美と云ふ、而して之を養成し、之を生育し、大に本邦特有の美性を發揮するの任、妾之を女鑑に望まざるを得ざるなり

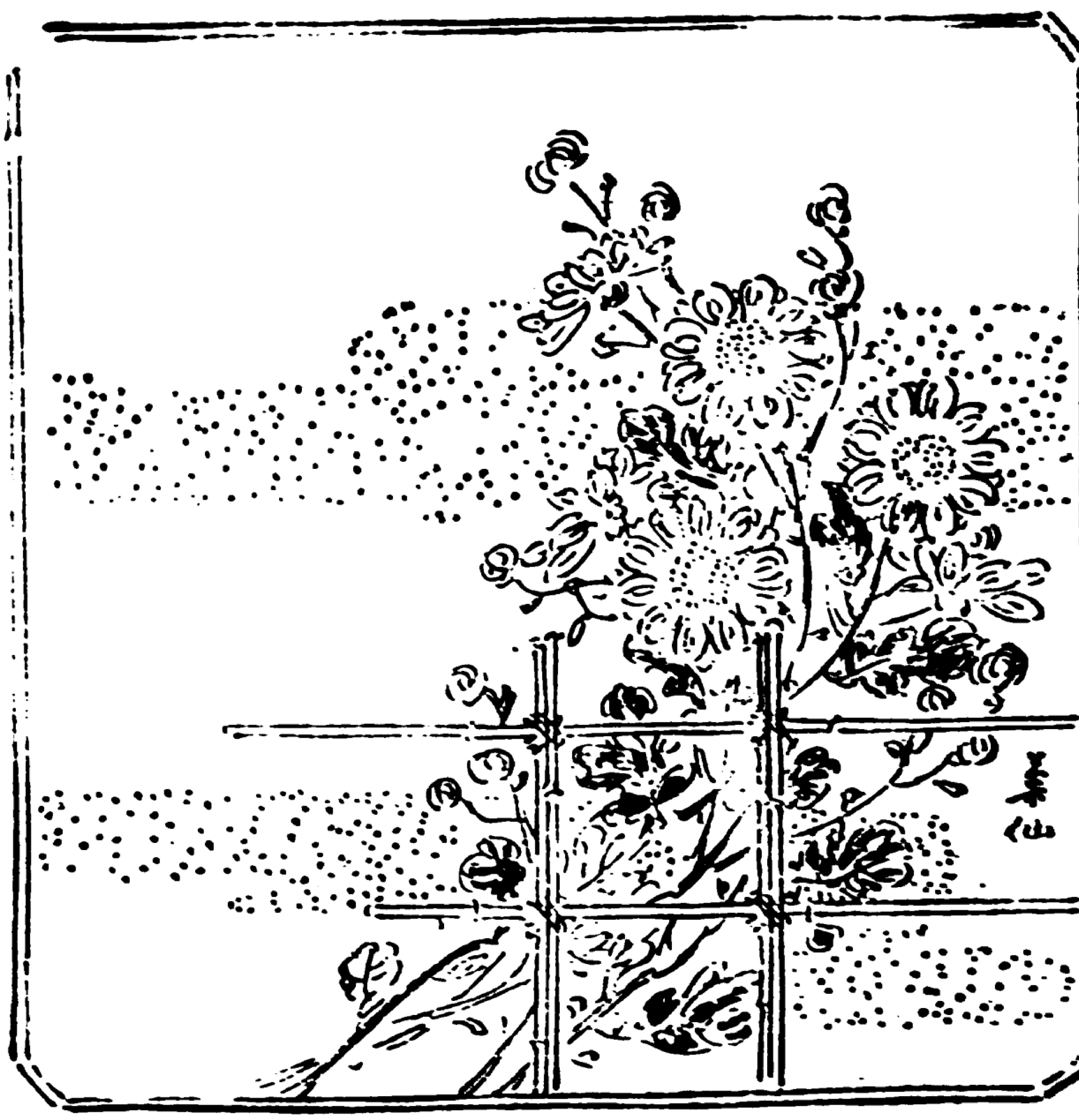
人なれば斯れ美あり、然れども男女異なれば、其美も異なり、國あれば彼れ美あり、然れども境域同じからざれば、其美も亦同じからず、國家の美性をして各々相異ならしむるは、其源一にして足らず、風俗習慣、制度、宗教、其主要を占むるや論なしと雖能く此數者の首位に居り、國家の一大要素を造るものは、蓋し歷史上の關係是なり、歷史上の關係は能



く其國人の腦力を左右し、竟に各國其特性の美を異にする、秦越啻ならざるの觀わらしむ、妾本邦女子敎育の特性を論ずるに當り、請ふ先づ此一大源因を精究し、以て我の歐米に異なる所以を明らかにせん、

論者動もすれば曰く、歐米は女子を尊崇するの美俗あり、我邦宜しく之に倣ふべしと、然し之を尊崇する固より可なり、然れども其弊竟に木を矯めて直きに過るの恐れなきを保せず、妾聞く西人云へることあり、曰く女子を敬愛尊崇するは、ジャーマニック種族の特性にして、其勇武任俠の氣象に基づけりと抑も十世紀の頃ジャーマニック種族西羅馬の衰亡に乘じ、中土を蹂躪せしより、歐州大陸尙武の世となり、士人の甲を擐し、戈を橫ふもの、女子を尊崇するを以て、城廓中の規律となし、且之を以て人生の最大義務となせり、其女子を重んずるの念慮、彼等をして命を輕んずる鴻毛の如くならしめたり、是より後因襲の久しき、竟に女子をして昂然自得、社會に獨歩せしめ、夫の佛國碩儒コレトの如く、女子を以て人類の崇拜物となすに至れり、是を以て之を視れば、歐米女子今日の位置は、倫理敎育に基きしに非ず、制度宗敎より來りしにも非らず、職として往古士人の弱を救ひ、愛を求むるの奇風に基因せしのみ、而して其の流弊の百出する彼國習俗の然らしむる所にして、曾て怪しむに足るなしと雖も、直ちに遷して之を我邦に用ゐんとするに至りては、亦無稽の甚しき者なり、我邦從來支那古代の風習を採り、女子社會上の勢力を抑制せしと雖も、人倫上の勢力に至りては、更に軒輊あることなし、之に敎ゆるに婉娩謹愼、牝馬の貞を以てせしも、曾て氣力なく、節操なき、芻狗木偶の如きを願はざるなり、之を戒むるに關雎葛覃の和德を以てするも、曾て內政修まらず、逸居して敎へなきを許さず、千古一日の如く以て今日に至れり、之を要するに彼は男子の女子を敬するを以て美とし、我は女子の男子に下るを以て美とせり、是れ彼我歷史上特性の異なる所以なり、

夫れ斯の如く我邦建國以來幽嫻の風、清貞の德を以て女子を薫陶銘化し來り今日に至るまで、其腦漿に記印し、牢乎として拔くべからず、緖を彼一時の奇風に胚胎し、偶然俗をなすものに比せば、霄壤も啻ならざるなり、然れども各其短を擧ぐれば彼は之を過に失すると云ふべく、我は之を不及に失するの短あり、過の不及と其女德の瑕瑾たるは均しく是れ一なり、妾や固より從來の屈下主義を以て、最良の女德となす者にあらず、其不及の弊を矯め、進んで世務に當り社會の事業凡そ女子の身に適し、分に應ずる者は、悉く負擔の勞を執らしめ、而して後始めて文明女子の本分となすべしとは妾の平素鋭意唱導する所なり、而して其所謂業務とは、大は家政經濟の整理、及び家庭教育の義務にして、小は凡百の工藝家を利し國を益する者を謂ふ、然れども是女子有形の美にして、女子第二の要素のみ、夫の無形の美、天然の陶冶に出で山河の靈秀、花木の精英、化して一片の性情を造り、以て國家の大基礎を建つるものは、蓋し我幽嫻清貞の女德に在る哉、嗚呼德操の美、獨り我邦女子の特性にして緜亙



菊十題　（其一）　九重の圖

不及に失するも、倘女子たるを失はず、苟も德操なからん乎、才學技能の觀るべきあるも、妾之を如何ともするなきのみ、而るに世の論者直に我特性の美を打破し、歐米の奇風に浸染せしめんとす、吁此の如くにして已まずんば、本邦女子を何れの地に置かんとするや、

妾不似を以て叨りに教育の任に膺り、夙に女子德育の美を唱へ、以て十有餘年の久しきに及べり、學を課するの傍好んで丹靑の餘技を修む、獨り自から謂ふ、繪畫は人工の美を以て、天然の美を模す、蓋し美中の美なる者なり、而して國各其法を殊にす、一枝の兎毫能く天眞の靈妙を具へ、綵繢燦然たるの外、復た氣骨の犯すべからざると趣味の掬すべきあるは日本畫なり、山水花卉能く其眞を模し、位置配合殆ど鬼神の工を奪ふあるも、氣骨趣味の稱すべきなく、人をして嚼蠟の想あらしむるは、歐州畫なり、嗚呼是亦以て彼我特性に差異ある好證左となすに足れり、妾本邦子女に望む所のものは、勉めて此無形の美を失はず、造次にも顚沛にも、亦必ず是に於てし、其有形の美に至りては、歐州の精を採りて其短を補ひ、內外兼備はり、錦上花を添ふるの觀を呈すること、猶彼の日本繪畫の漢洋の上に卓出せるが如くならんことを、夫れ此の如くにして始めて有形の美、無形の美倶に其全きに至らん、

婦人社會の醜

文學士 久保萍水

或は自ら罪惡の主體となり、或は異性男子の罪惡の動因となる、五障の雲に蔽はれて成佛する事能はずと云ふ女子は、直に罪惡なりと云ふも可なりと思はしむるのである、素より女鑑などを讀む人、即ち智識の高級にある夫人令孃には、さる忌べき惡性を具へざるは明かである、且つ私が申す樣な事は見聞にも入らざる事ならん、されど世の多數の女子には、皆

惡德との關係が存在するものなれば諸先生がたの高尙優美なる文章を見らるゝ傍に、私の申す如き惡口を耳にせらるゝも、世の中の學問である、而も私の申すことは、智識の下層にある社會に存することではあるが、若し誤つて、皆さんの中に思ひ當る節などありては、其罪惡は一層忌はしきことである、と云ふものは智識の高き程、其罪惡の根ざしも深く、融利改悛の機會少く、且つ世の中に惡しき感化を及ぼすこと大なるからである。

先づ茲に申しまするのは、家庭と女子の罪惡との關係であります、家庭關係以外の惡德であるとか、男子の罪惡の原因をなすとか申すことは、事甚だ常道を遠かり、皆さんのお耳に入れるといふ事が、既に失禮でもあり、且つ此方は女子特有の罪惡と云ふよりも、一般社會的罪惡であつて、從つて、種々の制裁もあり、又偶有のもの、多くは表見のものなれば、事體の甚だしきに比して、其流毒は少ないものであるが、婦女子の家庭關係に於ける罪惡は、通有普通なるに拘らず、制裁の力弱く、且つ多くは陰密のものなれば事の小なるに比して、世間皆其忌むべき害毒に苦まざるものはありません、

私が實見したる一二の例を御話し致しますが、私の非常に敬愛する人の妻たる人は、富有なる家庭に生れたる先妻の女であるが故に、長女にして相續權を有するに拘らず、養子をなして分家せしめられたる人である、其良人たる人は即ち私の知人であつて思慮學識に富み、紳士たるの性格に於きまして、殆んど缺ぐるところはありませんが、幸運の神も疎遠にして、爲すところの事多く挫敗に屬し、常に失意の境に在るが故に、勢ひ妻たる人の父親に向つて求むるところあるは、實に免れがたき事情でありませう、然るに其繼母たる人が、此間に介在するよりして、其求むるところは常に反對のものを以て充されます、即ち反對のことは讒誣と妨害と疾惡とであります、かくの如き身邊の不幸と、人心の慘酷に甚く心身を害しまして終に病を得て夭折するの最大

不幸に遭遇いたしました、其時に於きまして良人たる人の最も悲しみ思ふところは、自身の境遇の逆なることでもなく、又其妻たる人の夭折したることでもなくして、継母たる婦人の心よりして、此不幸なる亡妻の精神を破り傷けたる、人心の惨憺なる有様でありまして、継母たる人と、此不幸なる人との關係を追想して、又終に重患を得るに至りました、又一つは少しく下級なる家庭の有様でありますが、其長男たるものに妻を持たせました、兩親の揃ひて存する間は先づ幸に格別の事もなくして、過ぎ去りましたが、一年舅なる父親が亡くなりましてより、其姑が段々に嫁を悪むの端を開きました、普通かゝる場合に於きまして起りまする一家の不和は、舅の死亡によりまして、姑たる母親の家庭の間に於ける勢力の失墜より生ずる反動と、嫁たるものゝ増長とに原因するが常でありまして、日常目撃するところのものでありますが、此家庭に於きましては、却て勢を潜むべき母親が攻勢を取りて、嫁たる人を酷遇するのであるが、是には理由たる原因があります、といふものは其良人が、或る自分の不心得より妻に對して愛情を減じたので、此嫁姑の間に立ちて蔭ながらも、憐むべき妻を庇護することなくして、却て母親の無理非道に放任致しましたからである、夫れを又母親たるものがよい事にして、二人間には二人の小供のあるをも顧みずして終に夫たる子に命じて離縁をさせました、

大凡家庭の關係をして、婦人の心に放任して思ふ所を矯めず、志すところを言はしめ行はしむれば如何でありませう、若しもこゝに人の嫁たる二人の人が相遇ひましたならば、必ず其中には私どもの家庭は却て六ケしうございますからといふ言葉が出ませう、是れ即ち婦人罪悪の端緒であります、其所で一人の人は其を慰め戒しむれば結構でありますが、平日左迄舅姑の待遇を苦しみ思はぬ婦人でも、多くは御同様であると答へませう、是に於て罪悪は既に本文に入ります、此二人の婦人は決して精神境遇に於て

相遇ふところはないのであるとしても、其二人は恰も知己を得たかの如く感じまして、ついうか〳〵と己の舅姑乃至は夫たる人の兄弟姉妹等の、大體の性質に對する非難を交換することになります、夫が追々に進みましては、其等の人の個々の言動に及ぶ様になりますれば、互に知らず識らざるの間に煽動せられまして、己れの偏狭なる精神を發露するやうなことになります、何故世間の姑たり嫁たる人の間の一寸した會話すらも、家庭的罪惡を胚胎せねばならぬのであるか、偏愛、嫉妬、猜疑、媢嫉は先天的に或は習慣性に、婦人の通有性である、そして、是等の諸々の性質は皆偏狭なる精神より出づるのである、偏狭なる精神は即ち主義の念が強よ過ぎまして他を容れんが爲に、心を空うすることが出來ぬからであります、是等の罪惡を救解融和することは、どのやうになりたらばよいのであるか、私は教育の力社會の制度の或る變更、其他の方法に依る外はないと思ひます、婦人が偏狭なる精神を有するは、一は先天的でもありませうが、又是まで日本の婦人は、家庭の間にのみ跼蹐致しまして多くは社會的教育を受けませず、從つて世の中のことは知らず事理を解するの力が乏しいのであるから勢ひ己れをのみ主として、偏狭に傾くのでありますが善き教育方法のもとに、智識淑徳を並び養ひまして己れを守る事、平かに人を容るゝに寛なることを得るやうに、婦人の性格を改造することは急務でありませう、

社會制度の變更とは、一家に於ける古格形式の打破と、別居制度の變更とは、一家に於ける古法形式が往々にして姑嫁の不和の種になり、或は實際に嫁たるもの丶性情を卜する規矩となることは誠につまらぬことであります、是は家族制度が追々に勢力を失ふに從ひまして、其弊を少なくするでありませう次は別居制度でありますが、家族が何時も同居をいたしますると、其遠心力の作用からして、往々反撥することあるを免れません、私の持説を極端に申しますれば、たとひ無妻の人でも丁年以上になりまし

て、可なり一人立の出來得る樣になりますれば、別居することを好むのであります、殊に妻ある人はたとひ惣領にて父母を養はざるを得ぬ人でも資力の許す限り必ず別居するやうにしたいのである、嫁姑なぞでも、初めより別居するやうになれば、必ず行違ひなしに愛情が保てることは、種々の道理のあることでありまして、昔より嫁が惡いが、婿が可愛いといふのでも知れております、結局嫁も婿も共に己れの子たるものゝ配遇であるから、彼が可愛くして、是が惡いと云ふ理屈は更にありません、唯普通嫁は同居し婿は別居するからである、別居制度の愛情を保つに可なるは、識者を俟つて初めて知るのではありません、かうなりますと彼の姑去と云へる不都合極まる人倫の破壞、忌むべき厭ふべき罪惡の骨頂を實現することも少くなりませう、又普通嫁姑の間に起る不和に就きましては、非理の多くは姑に存する所以は、一は權力の關係からでありますが、尚大なる精神上の原因は、老人の將來の希望を有せざるからであります、人として安心滿足を有するか、否らざれば希望を有せずんば、即ち心の破れたるものであります、安心滿足希望の何者をも具へざる人に、心の平ならんことを強ひるは甚だ無理であります、故に嫁たるものは形式的に尊敬の儀を表するよりも力めて實際に安心滿足の道を與へ、又親切に子女の鞠育を托しなどして、苟も疎かにせず、永遠の希望にあらずとも、其日々々の希望心を喚起せねばなりません、

不知々々話が嫁姑の上にのみ流れましたが、御免を蒙ります、又自由なる學校生活より、直に獨身男姑なき人の妻となりて、誰憚ることもなく下婢を叱り、車夫を怒りなどし給ふ方には、無用の御話しであります、此邊で引下ります、

◉私立女子大學生徒數　去月現在數左の如し

校名	本科	豫科
日本女子大學	六六九	一九七
青山女學院	一四二	四

電話交換手

豫見道人

◎九段の土となるか、谷中の土となるか、途に行くべき所へ行く道中には、必ず職業といふものがなければならぬ、人格に甲乙はあれど、職業に上下の區別あるべき筈はない、されど世間の所謂體裁のよきと、同宜しからざる區別がある、これ迄は男子内に外に職業に就て、たま〱小商人の家に、女子はお世辭の幇助をする位に止まつたのである、然るに近年女子の職業、次第に男子の領分を侵し、進んで女子に限られたる職業など初まるに至れり其一は電話交換手の如き、即ち前述の體裁のよき分に入るべき職業である。

◎蝦茶をはじめ、色まち〱の袴を穿き、當世流の廂髪に、辨當其他を包める風呂敷を持ち、近所の手前も悪しからざる姿して出入し、勞働といへば勞働なれど、手足の風致を害する如き職業でもないから電話交換手は、見得を飾りたがる女子の職業としては、學校の教師、會社員などについで、體裁のよい女子の文明的職業である、

◎而して電話交換手となるべき資格はといへば、機敏でなければならぬのであるが、仕事が單純なだけに、學問の入用は小學校を卒業する迄にも及ばぬ位である、即ち身體の强壯なるが第一の資格で目と耳と口が機敏に働けばよいのである。目と耳と口が機敏に働けば、なか〱の人物であるが、それは機械的に働き、自分の耳と目と口が混線せぬ所まで行かば申分なく、頭痛持などはイの一番の落第である

◎勤務時間は、東京の五局略同一の由で、五日目に時間割が一廻するのである、即ち第一日は午前七時出勤午後三時退出、第二日は特別と稱し、午前のもの、午後のもの、午後三時頃より夜にかゝりたるものの等の區別がある、第三日は午前八時より午後四時迄、第四日は午後四時より夜勤、第五日は夜勤の退

出午前七時より、此日をアケと稱して休暇となる、これが五つの組に分れて、順次五日目に一日の休暇を得らるゝ事となり、第四日の夜勤は、疲勞を休むるに足るべき睡眠時間があつて交替し、毎日の時間中にも補缺員があつて、一時間に十分の休息が出來るのである、以上の如く五日の中に、特別の日の午前又は午後、夜勤の午後四時前、アケの日の午前七時後一日、即ち五日に纏まつた二日半の休暇を得らるゝのである、

◎肩と肩と相摩する程接近して、各椅子にかゝり、耳には聽信器を仕掛け、口の前には發信器を吊し、目は上下に間斷なく働いて兩手を差圖し、一刻も油斷のならぬ、極めて忙がしき仕事なれど、馴れては身體疲勞の度に於て、巡査、郵便局員等一日交替の仕事に比しては、極めて輕く、唯仕事の厭倦の度の上それ以上のものあれど、休めば船に醉ひたる人の上陸したるが如く、この休暇に骨を休めねばならぬほどの疲勞を感せねば、職業さへかはれば、殊に氣の代りたる仕事なれば、二重の勤をも出來ないではない、

◎そこで女子の電話交換手志願は、一生の職業として、又は獨立し得らるゝ職業としてゞはない、或は一家活計を助ける爲のもあれば、自分一人の厄介を免れんとするもあり、一方に働いて一方に藝術を覺ゆる費用と時間をつくるもあり、嫁入の仕度金をつくるもあり、極端に走つて物見遊樂の費用をつくらん爲といふのもある、かくて妻となり、妻となるまでも一歩進んだ職業に就くもの、或は墮落するものもある、

◎要するに此仕事に趣味を感じ、面白くて勤務して居るものは、恐らくは一人もあるまい、遊興費を作る目的者の外は、何かの都合たるには相違ない、されど纏つた半歟の休暇を得らるゝ此職業に就て、一の藝術をも覺えず、休暇の時を足を伸す時と心得て他に何の得る所もないに至つては、實に此時間に對して勿體ない話で、電話交換手もマッチの箱貼も變

つた事はないのである、

◎近來女子墮落の聲極めて高く、電話交換手の如きは、多少の費用と時間を得らるゝ所より、其の渦中に入るべきであるが、否嘗て聞く所の電話交換手はもと學問の乏しい人の多い所より、品性も墮落し易かつたので、隨分困つたものも多かつたのであるが又親の脛をかじれる學生とは違ひて、世帶じみたる所もあれば、監督者の監督次第に行屆いてうか〳〵邪路に赴くといふのが少くなつて、現今電話交換手の風儀はといへば、まづよき方である、

◎給料も節儉にさへすれば、自分を養ひ、一二の藝術を覺えるだけは得らるゝのであるから、讀書、算術、裁縫、茶、生花、琴、三味線を習ふ等、休暇の時は物學びする人がだん〳〵多くなり行くやうであつて、まことに喜ばしい事である、茶、生花、琴三味線を學ぶにしても、たゞ時間を空費するには千萬優つて居るが、十三四歳以上、實用に供せらるべき學問をすべき時、この職業に就いてそを爲し得ぬのであるから、先づ實用的學問をなし、遊藝などは後廻はしにしたいものである、

◎故に電話局などでも、風儀に注意すると同時に、餘暇を善用することに注目し寧ろ獎勵せられたいものである、或局では島田髷を結うてはならぬ、簪をさしてはならぬ、など、下らぬ干渉をするとの事であるが、島田髷は日本妙齡の女子第一の髮の結ひ方ではないか、既に髮を結ぶ以上は簪また差支ないではないか、そのやうな事より今少し注意して貰ひたきこともあるが、それ迄心配して風儀を持直してくれたのはまた感謝せねばならぬ、

◎現今女子の職業中、第一に需用が多くて、自營勉學し得らるゝに於ても、他に之に比するものもないのである、故に文明第一の利器たる電話を、當年架設の目的の如く、人民一般輕便に使用さるゝやう擴張し、電話交換手なる職業に就かるゝものを多くしたゞ食つぶしのみの女子を少くしたいものである、これは電話事業には限らねど、差當り充分の勞働の

外に餘暇の多く求め得らるゝ職業の、他に比類するものもないのであるから、

◎予は此題下に電話交換手の狀態をのみ書く考であつたのであるが、不圖筆が橫にそれて老爺臭き無趣味のものとなつて仕舞つた、終に望んで一言し置きたきは、電話で喧嘩の相手となる、ツンケンドンな交換手は、必ずこの術に於ける腕利である、

西部利亞の別天地

加島汀月

西部利亞と云ふと國事犯罪人や、大惡漢の流竄される所であるから、嘸彼方でも此方でも鎖の音ばかり響いてゐて、其中でも監獄などゝ云つたらゲオルギイ、ケンチナやドストエフスキイなどが『生ける墓死者の家』と云つたやうに此世ながらの地獄で其內に居る罪人は朝から晩迄太陽なぞを見たことなく、何時も鐵の檻に手械足枷を置かれて其上に太い鎖で身動も出來ない樣に縛られてゐるので、最う監獄に入れば死んだ人と同じやうに我々は想像してゐるが其れは全くの間違で善く監獄の內のことを聞いて見ると決して地獄でも生ける墓でもなく却て日本などの監獄よりも秩序がたつてゐて、罪人は案外自由な生活をしてゐる先頃イタリヤの或新聞に倫敦の「デーリイニユース」の通信員が西部利亞のアレキサンドロフスクの監獄を訪問した訪問記が載せてあつたが、其訪問記は如何にも監獄の內部の有樣を詳しく記載してあつて中々我々の爲めに興味のあるものであるから、讀者に西部利亞の監獄は決して諸君が想像するやうな地獄のやうなものでないことを知らする爲めに玆に其記事を譯載して見やう「デーリイニユース」の通信員は記して云ふには自分等がアレキサンドロフスクに着いたのは丁度朝の四時頃であつた、四方は寂として未だ深い眠の內に閉されてゐて、只番兵が堤の上を彼方此方往來してゐるのが夢のや

うに見えて、近くの少さい家では盛に火を焚いてゐた、これは外でもない監獄附の週番士官の當直する家なのである。

自分の荷物は士官の斡旋で從卒（此從卒は品行の良い囚人が務むるので現に自分の荷を運んで呉れた從卒も囚人である）が持て行て呉たので自分は直ぐ小綺麗な小さい室に案内された大凡十五分も經つた頃であらう朝飯をとて中々此田舍では味はれぬ美味な「カッレッ」「チョコレート」麵麭「バタ」などを自分等の前に持て來た、で自分等は此朝飯を充分に食つてから暫く旅の疲勞を休める爲めに其室に休憩した。

菊十題



《其二》宮人のかざし

十時頃であつたらうアレキサンドロフスクの此監獄の典獄が自分等の居る室に音信れて來た、其典獄と云ふ人は露國の役人と云ふよりも寧ろ獨逸邊の「オーケストラ」の指揮長と云つたやうな風采の人で、極く快活な、長い髯のある人で、種々面白い話のあつた末、先づ監獄な案内する前に村を案内しやうと云つて、自分等は程遠からぬ村に導かれた、自分等の此散歩に加はつたのは典獄の外に三四人の士官と獄醫とで、自分等は雪の堅く氷つて居る路を幾度か辷らうとしては蹈み止まつて村の方に向かつた自分

等は極めて愉快な話を續けて村に通ふ路を辿つたが其内にも典獄の話した談話は特更に興味多きものであつた、自分等が途を歩んでる内に典獄に一禮しては行き過ぎる男に幾人も遭つたが、典獄の話によると其男等は皆囚人で、只品行の方正な爲めに民家の傭に應じて晝間監獄から勞働に出てゐる人なので、時々逃亡することもあるが、シベリヤを旅行する爲めには必ず必要な旅行劵を持つてゐないので直ぐ逮捕されるとのことである、典獄は微笑して尙ほ續けて云ふには、『畢竟彼等に取つては監獄内の生活は獄外の生活よりも安全であるのであらう何せかと云ふと冬にでもなると此邊の細民などは間々故意と物を盜んで監獄に喜んで來るものがあるが、其者等の言ふ所を聞くと監獄にさへ居れば少々苦くても飢ゑることも凍ゑることもないと云つて居る云々』とシベリヤの監獄の規則によると、シベリヤの監獄で處刑を終つた囚人は或年限間シベリヤに住居した後でなければ本國に歸る事が出來ぬ定めであるが、今では殆ど十中の八九迄は本國に歸る人はないさうで多くはシベリヤで職業を見付けて此處に永住し職業の見付からぬ者は政府で其敎育に應じて相當な地位を見付けてやつて、極めて前の惡路に歸らぬやうにしてゐる、で敎育のある者は多くは一寸した官吏や學校の敎師などにするさうで現在イルクツスクに居る勞働者は多くは此種の無敎育な者の正業に歸つたものであるとのことである。

週番士官の當直小屋の向ふ側に少さい煉瓦造りの會堂があるが、其會堂は皆囚人等の手に成つたもので、內部の裝飾でも彫刻でも皆囚人の作たものである、で此會堂の入口は別に他の會堂と少しも變つてはゐないが、內部の構造は餘程妙で、側の方に格子の塡つた所が出來てゐる、其所に祈禱の時囚人を携れて來て皆祈禱をさせるのださうである。

自分等は大略町を見て了つたので此度は監獄の內を案內されることになつた。

現時此監獄に繫がれて居る男囚は大凡千二百六十八人

で、殆ど露國全國から集つてゐて中にはトルケスタンあたりから來てゐるものもある、監獄の建築は四方形を成してゐて、別に目立つやうな裝飾はないが廊下は廣くて、凡てたゝきで、綺麗に掃除されてあつて床上には、小さい石が敷いてあるのである。

自分等の案内されたのは五十人ばかりの男囚の居る檻房で、自分等の一行が檻房に入ると囚人は一同起立して一列に並んで、自分等の挨拶に答へた、囚人等の容貌は何れも險惡で灰色の長い囚衣を着て居た典獄の彼等に對する應對は至つて優しく、或囚人の如きは自分等の所に近づいて來て、自分は靴屋であるとか、仕立屋だとか、大工だとか云つて切りに仕事を求むるものもあつた、四五の檻房を見てから後自分等は此度は回々教徒とジユデヤ人を收容してある檻房に導かれたがジユデヤ人の居る室には隅の方にジユデヤ人が祈禱に用ふる器具が備えてあつた。

次に自分等の導かれたのは監獄內の工場で建築は一階建の四五の室のある建物で、窓は一體に高く廣い廊下から直ぐ工場に通ふやうになつてゐる、內に入ると、囚人の靴を作れるもの、着物を縫へるもの、水車を修復せるもの、其業は皆思ひ〳〵であるが職人は皆囚人で自分等の見た第一の工場は多くは監獄內の需要物を作つてゐたのであつた、次の第二の工場は美術品を作つてゐる工場で、自分等が最も面白く感じて不覺半時間を暮した所である。

此工場に入つて先づ自分等の目を惹いたのは一人の年取つた囚人が熱心に本を裝釘してゐたのであつた其隣の四人は切りに時計を修繕してゐた、で又他方にはモデルを見て畵を畵いてゐる四人と、何か黑い木に熱心に彫刻をしてゐた四人があつたが、自分等は此工場に居た時、自分が監獄の內に居ることを全く忘れたのであつた、生ける墓とは斯樣な所であらうか、自分は思つた恐らくはロンドン、マンチエスタアを探しても斯樣な自由な工場は見當らぬであらう彼等四人は皆「タバコ」を薫らして雜談をしながら仕事を爲てゐるのである、これが若し「死者の家」

であつたならばロンドンあたりの監獄は果して何であらうか、

其時典獄は自分に談つて云ふには、囚人の爲る仕事は今甚だ少ないので、時々囚人は手を空しくして休む時もあるが、何うか斯うか今日では少しづゝでも仕事があるので囚人等も非常に喜んでゐる、彼等は仕事を爲ることを非常に好んでゐると云ふのは、此アレキサンドロフスクでは隨分善い賃錢を彼等に與へる、で其賃金は彼等の使用を許すので、只其れを樂みに彼等は熱心に働いてゐるのである云々』

美術工場を出で自分等は獄内の賣店の前に來た、其所では白麵麭（白麵麭と云ふと甚だ可笑しいが露國の細民は日本のやうな白い麵麭を食ふことは年に二三度よりないので日常は大麥の黑い麵麭を食つてゐるものである）や乾酪や、肉や、菓子や、煙草を賣つてゐて囚人の需に應じてゐる、自分は此店を見て能くこれで獄内の秩序が保てるものだと、漫ろ心の内で疑つたのであつたが、其の時典獄は自分に向つて自分の主義を説明して云ふには、自分は日頃から茲に繫がれてゐる不幸な者の生活を可成的輕く安らかに爲てやりたいのが自分の主義である、でこれは只主義ばかりではなく我等の盡すべき當然の義務であらうと思つてゐるのである『君よ』と典獄は云つて其灰色の目で自分を見戍つて、そして自分の手を把つて尚ほ云ひ足して云ふには『自分が思ふには大方君は新聞記者であつて君は見聞したことを書かうと思つてゐらるゝであらうが、何事も包まずに其事を述べて貰ひたい一躰自分は英國や米國の新聞が我我の監獄に就いて種々な虚説を傳へてあるのを見て甚だ悲んでゐる一人である、君も知らるゝ通り監獄は監獄で其以上何も外に有る筈の無い譯である、勿論自分等とても或囚人に對しては嚴格なこともあるが、然し同じ人なる自分等の如きものが我等と同じ人なる彼等の罪惡に對して其非を罰することは果して出來得ることである、それであるから唯一つ君に向つて願ふことは君が見給ひし事實を其儘に君の

新聞に書いて貰いたいことである云々』と自分は典獄の此言葉に非常に感じたが、故意と揶揄半分に『唯一つ此監獄に設備の足らぬことは芝居のないことである』と云ふと典獄は至極眞面目に『いや芝居ならば玆に實は在るので、尤も芝居の設備の在る監獄は此所ばかりで他にはない、自分は些少なりとも囚人に慰を與へてやりたいと思つて芝居を設備したので、社會では罪人と云ふと罰することを目的としてゐるやうであるが、自分の考では罪人は決して罰すべきものではなく、其れを矯正すべきものであらうと思ふ、それには斯様な娯樂も或程度迄は必要であらうと思ふ、そは兎も角も君に監獄の芝居の設備を示さう』とて導かれたのは二階の大廣間で、見渡すと成程引幕もあれば書割もあり不完全ながら芝居に使ふ諸道具は大抵備はつてゐて舞臺の前には見物人の座る椅子もある、自分は其れを見て非常に驚いたのである、而ると典獄は自分に向つて云ふには甚だ殘念ではあるが、今日は君に此芝居を御覽に入れることが出來ない、然し自分の監獄には兼ねてから音樂隊を組織してゐるので其音樂は今君が耳に聞かせることが出來るとのことで、暫く煙草を薰して待つてゐるとやがて、自分等の前に顯はれたのは大凡二十人ばかりの合唱者で、何れも皆音樂でもやる程であるから外の囚人に比べると温和な容貌を持つてゐる、彼等の歌つたのは皆露西亞の歌で、中々巧なものであつた。

囚人の音樂を聞いてから後、自分等の導かれたのは圖書館であつた、品行の良い囚人は圖書館に行くことを許されるので、其様な囚人は自由な時間を此所で送るさうで、自分等の行つた時は二十人ばかりの囚人が圖書館に座つて、切りに本を漁つてゐた、壁には種々な人の肖像が掲げてあつたが、中に飲酒の結果を顯はした畫もあつた。

圖書館を出た時は、最う夕暮であつたので自分等は二三の監獄の役人と共に、典獄の家に晩餐に招かれた、丁度其時太陽は最う悉皆沈んで了まつてちらち

らと雪が降り出して來たが、自分は何だか斯う平和な温い氣に觸れたやうで、今日監獄を見舞たとは如何にすとも信せられなかつた、自分は實に露西亞の人の客受けの良いのには非常に感じたのである、食後典獄は箱からヴアイオリンを取出し、獄醫はウイオロンツエリを持ち、愛らしき典獄の娘はフオルテピアノに向かつて合奏を始めた、先づモツツアルトから初めて、ウエベル、ショペン、グーノを奏し來つた時自分は實に云ふに云はれぬ愉快な、そして何とも名狀し難い感に打たれた、あゝ奇なることよ、此荒漠たる遠きシベリヤの野の末に在りての温かき此團欒、快活な人々、うら若き娘のピアノの音、歐羅巴人が常に想像してゐる破落漢の親分に似も附かぬ典獄の人となり、其人の巧なるヴアイオリンの妙なる響――自分は其れから其れに想ひ至つて、何だか今迄自分の豫想してゐた想像が罪のやうにも思はれて、空恐ろしく感じたのであつた、

外庭には今少し前から降り出した雪が幻のやうに靜かに落ちて、時毎に巡視する番兵の點呼の聲が遙かに犬の聲と雜つて響いて來る、

◎井上圓了博士の京北幼稚園　博士曰く『西洋の幼稚園では神に禮拜させる、それが小兒の德性を養ふ基になる、かくして其心の種を蒔く、これが後に修身の手本になる、結局西洋では神を禮拜させて、將來の德育基礎をつくる。然し日本では不可だから此點のみを除いて他は西洋のと同一にした。然しこれでは輪をかいて瞳を入れざるに同じきものなれば次に述ぶる如き方法を取つた』。人に敬信或は崇信といふことを小兒の時より敎へこまないではならぬ、然し小兒の時には利害得失を說くも判らぬ故、形の上に於て敬禮を行はせる。即ちわが國は皇室を基とした國柄なれば、兩陛下及び皇太子殿下の御肖像を飾り置いて形の上に於て敬禮を行はせ、一方には行儀を敎へ一方には精神敎育をやつて居る。又日本人は元來神經質であるから智識を進むる方を扶け同時に運動を奬勵する。これまた西洋の幼稚園と面目が違ふが西洋では、各自の家及び衣服などが一切運動に便なるやうになつて居るから特に幼稚園で運動を勵ます要はないのである』と、園は閑靜なる本郷駒込富士前町にあり、意匠斬新なる運動器械なども完備し小兒遊戲の觀念を養はしむ、保育料は一ケ月一圓二十錢にて別に保姆練習生の募集もありとぞ。



家庭唱歌 天長節

大和田建樹

軒には靡く日の御旗　園にはかをる菊の花
嬉しや今日は待かねし　天長節ぞ祝ひ日ぞ
仰ぐ御空に日は一つ　わが住む國に二つなき
天皇陛下の御誕辰　喜び祝へや萬民よ

王政維新の始めより　國家を進め民を撫で
聖徳たかく仁ひろく　古今無類のよき御代ぞ
學制さだめ敎育の　道を天下に施して
國に學ばぬ民なきは　わが大君の御めぐみぞ
郵便電信汽車汽船　設けて普き交通の
便利を民に與へしは　わが大君の御めぐみぞ

憲法こゝに制定し
　議會をこゝに開設し
前代未聞の聖代と
　謳はれ給ふは此御代ぞ
日清戰爭をさまりて
　かゞやく朝日の旗たかく
世界に示す日の本の
　光は君の御德ぞ
正義の戰ひらかれて
　海陸軍の兵つよく
天地にとゞろく極東の
　ほまれは君の御德ぞ
謳へや山に住む人も
　謳へや海に住む人も
めでたき今日の一日
　樵網引休暇して
われら子供も國の民
　うたへや謳へ君が代を
富士の峰まで響くほど
　太平洋まで響くほど

小楠公

文學士　大町桂月

第八　菊水流

正行の弟正儀は、正行より三歳劣り、此年即ち四條畷の戰の時は二十歳なりしが、四條畷の戰に與らず、獨り生き延びて菊水の旗を守り南朝の柱石となり、南朝の歴史は殆ど正儀の獨舞臺となりぬ。此後の南北朝の歴史は、落寞として何等の趣味もなし、然れども暫く之を觀察して、落付く先を見屆くるも、行きがゝり上必ずしも徒勞にあらざるべし。

されども少しく玆に正儀の身の上を離れて一言すべきは、正行の妻子のことなり。正行十九歳の時、

隣國攝州野瀨の莊なる內藤滿幸の女を娶つて、明る年男子生れ、多門丸と名けしが、正行の討死に先だち、不幸にして夭折し、全く跡絕え終りぬ、尤も正行討死の際、其妻の腹に宿れる子はありしも、正行の死後滿幸、高師直に隨屬したるにより、正儀怒て寡婦を滿幸の家に送り還しぬ。間もなく滿幸は之を池田敎依に嫁せしめ、池田家にて男子生れしが、實はこれ即ち正行の子なりといふ。長じて池田六郎敎正といひ、後細川賴之に屬して戰功あり、子孫世々池田氏を冒せりとぞ、

さても師直は、吉野を燒き拂いて京に歸り、師泰踏みとゞまりて正儀に當り、正儀は河內の石川河原にて之を防ぎ、一二年は大事もなく過ぎて、正平五年の十二月となりぬ。北朝にては今や畏るべき勁敵なきに狎れて、徐々に內訌始まり、先づ尊氏の弟直義は、高師直兄弟が威福を擅にするを憎み、之を除かんと圖りしが、事漏れて師直等の窘迫する所となり、計窮して髮を薙り屛居したるも、尙不安心とや思ひけむ、南朝に歸順し來れり。もとより眞實の歸順にあらざれば、之を誅せんとの議もありしも、其事に至らざるうち、翌六年の二月果して叛き去りて、此度は尊氏の兵を御影濱に破り、鎌倉に立籠るに至りぬ。依りて尊氏往て之を討たんとせしが、京師の空虛となるを憂ひ、例により僞りて降を請ふ。南朝も此度は一先うはべに之を許して直義を討たしめ、而して北朝の假神器を收め、關白以下公卿の官爵各一等を削つて、明年は車駕闕に還るべき計畫をなせり。

翌七年、尊氏東に向ひ、京都を守るは尊氏の子義詮のみとなりければ、此機に乘じて車駕行宮を發して京師に向ひ、帝親ら軍を御して進ませらる、正儀は和田正忠等と西路を取り、夜桂川を渡つて昧爽、細川顯氏と戰ひ之を破り、一蹴して京師を突きしが義詮は父が歸順の請を允されたりしに心を緩め、敢て備を設けざりしかば、全く戰ひを交ゆるを得ず、從者百五十人を拉して近江に走り、車駕は京の南半

日程なる男山まで近寄りぬ、既にして義詮は近江にて兵を整へ、三萬騎を以て男山に迫り來る、正儀、正忠兵三千を以て前方荒坂山に防ぎしも、遂には衆寡敵せず、退て男山に陣し、敵に攻め圍まれしが、間もなく官軍の敗績に歸して藤原隆資此戰に討死し、京師は又義詮の手に落ち、帝は再び吉野の奥の行在に還幸せられたり。

八年には正儀、和田正武と共に山名時氏と會し、復た義詮を京師に攻む、義詮戰はずして北帝を奉じて東に遁げ、二月を經て逆襲して回復す。尊氏も此年、東より歸り來れり。

此後三五年は別に何事もなし、正平十三年には、尊氏死して義詮嗣ぎ十四年には、畠山國清大兵を率ゐて來り犯しゝが、正儀は赤坂に據り、尋で金剛山を保ち、之を防ぎ、進で譽田を攻めて王師稍振へり十六年には降伏せる細川清氏と共に、正儀三たび京を攻て義詮を追ひ、三たび回復せられて、京を退きたり。十七年には、山名、細川、對峙の基を開きぬ、此年、細川清氏四國を略し、正儀と呼應せむとせしも戰死せり。其後何事もなくて數年を過ぎ二十二年には、足利義詮死して、子義滿十一歲にて嗣ぎ、細川賴之之を輔導し、二十三年に至つて、後村上天皇崩御し給へり。

扨此所までは、正儀も花々しき大功を建てぬまでも、先づ菊水の流れを汚さず、一意南朝の興復を圖り居たりしが、翌る正平二十四年の正月、何を感ぜしにや細川賴之の勸誘に從ひ、密かに北朝へ降り終りぬ。此事に就ては、隨分史家に議論もあれども、降りし事實は何處までも事實にして、疑ふべき點なし、正成の子、正行の弟、後醍醐天皇の遺臣として、唯一人、譽れある菊水旗を持して南朝に仕ふること、正行の死後こゝに二十年。歲は四十一の働き盛り、代は替り世は移りしも、依然たる南北の兩朝岐れ居れり、當に大に奮起して活劇を演じ、晚節を全くすべき秋に方り、如何なる感を抱きて、かゝる陋態に出でしなるべき歟、もとより義詮の死後を嗣ぎし義

滿には怨みなからむも、後村上天皇の位を襲ぎし長慶天皇には果して忠勤を盡すべき謂れなしといふを得べきか。抑も又南朝の爲めを圖りて降りたるか。五百年の下、恩讐同じく貉一邱、幾度問へども、枯骨答へず。金剛山下むなしく暮雲の歸るを見るのみ。

是に於て、義滿は檄を河内和泉に傳へて、正儀の降を布告せり。よりて楠氏の遺臣連合して、正儀を討ちしも克つを得ず、翌建德元年、帝和田正武に勅して正儀を攻む、又利あらず。其後六年間は何の事もなく、天授二年に至り、細川頼之和を南朝に請ひ來りぬ、其言、今神器を北朝に禪り、約するに兩統迭立を以てし、公卿、武辨、官職、食邑は彼我削奪を加へずして、冀くは干戈を止めんといふにありしが、南朝の公卿拒んで納れず、此時南朝の食邑は二十餘國ありき、其後又五年を經て弘和二年、正儀官軍と平尾に戰ひて、宗族六人家人百四十人を亡ひ、其後正儀も間もなく病死したり。

正儀の二子を正勝といひ、正元といふ。父の變節に拘らず、ふみとゞまりて南朝に孤忠を盡し、屢ば北軍を惱ましぬ。元中元年義滿乃ち正勝に書を贈つて招致せんとするも、正勝聽かず。尋で正元は潜に京に入り義滿を刺さんとして、事發覺れて斬られたり。同じく其年、義滿使を南帝に遣はして、再び兩統更立を條件として、和を請ひしが、此度は南朝もこれを許して、閏十月廿八日、車駕行宮を發して京に入り、父子の禮を以て神器を北帝に傳へ、皇子寛成を立てゝ、東宮とし、十一月宮中に御宴あり、南北茲に始めて合一して皇統無窮に垂るゝの礎を堅めたり。顧みれば後醍醐天皇南遷ありたる延元二年この方、數ふれば實に五十有六年の星霜を經たるなり。

此所にて此傳の記事も盡きしが、主人公たる小楠公正行に對しては未だ言ひ殘しゝ事あり、吾人は聊か正行の人格を觀察して、此傳の結論に充てざるべ

からず。

正行は不幸にして短命なりき。四條畷にて戰死せしは、僅に妙齡二十三の春、餘りといへば死期を急ぎ過ぎし樣に見えざるにあらざるも、吉野にて奏上せし如く、身虛弱多病にして、迚も正成遺訓の通り今後六七年を待つことの覺束なきを自覺せし事は、蓋し事實なるべし、病名に就ては、學者の間に面白き說もあり、若し萬一四條畷にては助かりしとするも其餘命は恐らく幾ばくもなかりしならん即ち正行の舞臺は如何にも幕間の短き運命を有し、隨て其行動、功蹟も多からず。其歷史を染むるところは、父正成の殆ど半にも足らず、之を南朝五十餘年の史より見れば、實に一涓滴に過ぎざるなり。

然れどもその傳はり來れる事蹟を見るに、眞に良將たるに必要なる各種の美質、長所を兼備し居れることを知るに難からず、史上幾多の英雄豪傑なるものも何れかの方面に於て缺點のなきものは少く、渾然たる模範的人格を具へ居るものは、誠に多く見るべからざる中に於て、其一人として吾人、正行を數ふることを得るは、實に愉快なる事といはざるべからざる也。

第一に、忠孝の二は、事新しく論ずるまでもなかるべし。唯兵を擧ぐること早きに失したるは、或は非難の起る所にして、正成の遺訓に背くが如き觀あるも、こは正行幾年かの間、天下の形勢を見、自己の健康に徵し、熟慮に熟慮を重ねて、苦心慘憺の末衆に詢ひ、母に諮りて決心せしものにして、まことに已むを得ざるに出でたるもの、地下の正成も、蓋し深く之を咎めざるべき歟。殊に其志一に皇室に存し、全く心身を南朝に捧げ居たりしことは、特筆するも蛇足なるべし。

乃父の遺鉢を傳へて、智略に富み居たる事、亦一見して知る事を得べし、瓜生野楠田林の陣立、四條畷の懸引、其度數は少く、且此傳には餘り詳しく記載せずと雖も、其兵を用ゐるに方て、立ろに奇想妙計を案出して之を施す所、頗る乃父の面影を存する

ものあるなり。

勇に至ては、更に又注意するを要すべし。固より暴虎憑河の勇は取るに足らず、沈毅豪膽大敵を扣へてびくともせざるに至て、始て稱すべきもの、四條畷い兵粮食ひの一條を以て、之を證するを得む。雲霞の如き大敵の中央に座を占めて、生き殘れる一族團欒し、悠々閑々と食を濟まして一憩するわたりは、最早勇の境域を通り過ぎて、寧ろ風流欽すべしとや言はんか。

菊十題



（其三）花の下水

而して其情に厚く涙脆き特質に至ては、蓋し一に慈母より享けしものなるべし。瓜生野の溺兵を救ひ上げ衣薬を給していたはるところ、四條畷にて、上山高元の身替に、敵ながらも憐れを催して、其節義を思ひやるところ、其襟懐、眞に慕ふべきものあるなり若し夫れ絶代の美人、辨内侍と假りの契りを結ばざりし一事に至ては、眞に人生多情多恨の極致、常人の企て及ぶべからざる所あり。とても世にながらふべくもあらぬ身の、しばしの契を結びてはやくも死別の悲に泣かしむること、正行の性とし

て如何でか忍び得べき、つれなく見ゆる其裏には、溢るゝまでに情の潜み、涙も潜む。愛といひ戀といふも、此處に至て、はじめて神聖の極也。

君と二人

佐々木信綱

君と二人、ふたりすむべき、國あらば、海の果にもいなんとぞ思ふ。

ましろなる、君がよそほひ、ましろなる、君とがこころに、ふさはしき衣。

今日ならで、又いつの時、君とふたり、君と唯ふたり語る時のあらむ。

手折きて、わが水入に、君がさしゝ、昔なつかし、をだまきの花。

君と二人、ふたりをのせむ、雲もがな、星のみくにに行きてすまはむ。

吉野の里

石榑千亦

千木良にて日はくれぬ。與瀬はちかけれど、吉野がよしといふに、名さへよき心地して、そなたへとこゝろざす、まことはまだ與瀬にだに來ぬなりけり、いさゝかの勾配なれど、石しきたる道の馴れぬ草鞋の足にひびきていたし。

與瀬にてきけば、新道を回れは一里、近道は半里に過ぎずといふに、今は近き方をといひあはさねど、自からそなたざまに向ひぬ。

村はづれの煉瓦やく釜のほとりを曲りて、畑の中道をたどる。石多くしてやゝもすれば躓かむとするに夜の色は全く迫りて、ただ薄明に辿り〳〵ゆく。杉の森の下道、くらさ又一しほなるに、捜り〳〵下れば、大きなる川あり。多摩川にか、それとしてはあまりに此方によれりなど、いひあらがふうちに、

川におりぬ。
水たう〳〵と音して流れゆくに、橋なし。向の岸に火の光見ゆ。渡なるべしと、聲高におゝいと呼べばおゝいと答へ、水の上を横ぎれる針金の綱傳ひくりて、底をさき舟もて來ぬ。こゝは何川かときけば、相模川といふなり。馬入は余り廣くも深くもなきやうなるに、上流は流急く、深さも深きやうなりとぞ。
山をめぐりて、又同じ川をわたり、桑の木のさし出たるに、幾たびか顔すられつゝ、吉野につきぬ。

石やまの路なき路をすべりおりて
名も知らぬ川に渡し舟呼ぶ

吉野へのちか道すると山をこえて
二瀬の河はら夕こえわたる

甲州街道最終の宿、相模の國は津久井郡吉野の里は高くなれる丘地の上に一筋の町を成し、帶なせる相模川の流の音は、松ふかく、風渚による波かと疑はしむ。

村はづれなる坂本屋といふに入り、まづ浴みて、さて酒くみかはす、
何かあるかときけば、牛で願ひたいと思ひますといふなり、この地に[illegible]漬物のみ何の設けもなけれど、肉新らしく葱よきに、幾たびか持來らしめ、山中の太古の村の心地すが〳〵しく醉ひぬ。仆れぬ。夢は今日の山今日の川を、二度三度かけめぐる。
坂本屋の後の崖をすべりなづさひつゝ、川におりぬ、大きなる岩、小かなる石、おのがじし處をかまへたるに、玉を碎きて流すが如き音、さら〳〵と常とはにひびく。われこゝにして神の境ならずやと疑ふ。恨むらくは、昨日山路にあひし木こりの老翁こゝに來りて、この大きなる巖の上に立ちたらむには、いかばかり神神しう思はれなむに。
水車のひまなくめぐるは、米などつくにやあらむ。さても人一人ゐず。つけたらむ折には人來てもてゆき、更に黑きを入れおきて、去るにやあらむ。
清ければ棲まずとは、誰かいひけむ。魚のあつまり

て上り且つ下る。あはれ、魚とならば、かゝる瀬にかゝる淵に、棲まむぞ宜かるべき。この境も人の世の如しとせば、魚の隠君子ともいふべきものか。かの大海に鰭ふり遊ばむ、もとより面白からぬにあらず。かの泥水にひたりたらむ、思ひきりては、これも面白き一つなるべし、さりとては、かの泥を呑みて一生を過ぎむと、この水をのみて一生を過ぎむといづれぞ。大海それはた浮世には知らぬ波風に苦しまむことおほかるべし。さては魚として心安く一生をおくらむはこゝわたりの川なるべきか。

淵となれる水の底にも波あれや
　ながれてはまた魚の登る見ゆ
むれ遊ぶ小さき魚の身がへりに
　いなづまなせりみな底にして
しづかなる岩山かけをゆく水に
　さかりのほるは何のうをぞも
谷をゆく玉なす水に畫の具ときて
　きよき境を寫してをゆかむ
畫具とき畫筆わらひし山川よ
　世のちりうけずとはにきよかれ
岩に觸り岩にくだけてゆく川の
　水いそがしきおといそがしき
岩にふりて曲りながるゝ谷水に
　ちりて巻かれてゆくもみぢ哉

玉を愛づる心

従七位　小川直子

大凡世の人を見渡すに、珠玉を尊ばざるもの萬人に一人もあらずとこそおもほゆれ、其尊ぶ心人皆同じといへども、之れを用ふるにさま〳〵ありて、大厦高樓の床飾として客人に誇り、あるはたをやめがかざしの玉を愛づるもあり、はた指環にちりばめ、襟飾ともしつゝ翫ぶこと大方ならず、其尊ばるゝ玉種種わりて數へがたし、色に紅白あり、形に大小あり

ていづれもとり〴〵に見所多くうるはしければ、かれを劣れりとも、これを優れりとも定めがたかるべし、これを好める人もおのがむき〴〵我好む所の物を得て喜ぶなりけり、彼の吉田法師こそ、黄金は山に捨て、玉は淵に投ぐべしとはいへり、おのれも玉を愛づる性質ありて、上なき寶とはすなり、されど偏に價の貴き物をのみ好むにあらず、唯其色の眞白にして透き通りたるものを好めり、されば水晶の玉を買ひ求めて床の置物とし、座右の銘に換ふ、其意は此玉よ如何にして斯く尊はるゝものとはなりしかと考ふるに、始めは氣疎き奥山のこゞしき岩がねの中にひそみて、日の光をだにあふぐを得ず、埋れてのみ年經しを、ひと度坑夫に堀出されて世に出でしより、これぞ寶の玉なりといはれける、されどそのとき露ばかりの光もなく、形はた角多くて愛すべき物にもあらざりつるを、玉磨の手にみがゝれて、かゝる光もいで來しなりけり、其の磨かれたりけるほどのさまを思ふに、玉磨の心のまに〳〵、愛の角を切りたゝれ、かしこの隈を削られて、荒々しく砥石にあてられ、朝に夕べにすられて、漸々丸くなりもて來つるも、また曇りのあればとて、今ひときはこまやかなる砥にかけてすらるゝ事、日數つもり、月重なり來て、爰に始めて輝きわたるうるはしき玉とはなりけるなり、あはれ此玉てふものをつく〴〵見るに、いとも〳〵まろらかなれば、見る目なつかしう目に障る所もなく、手にとるにはたなめらかなれば撫づるに心ちよし、まろばすに輕々止まる事もなく物に障らで走りゆくさま、人の命令に隨ひていそしむに似たり、又は床の飾りとして据ゑ置けば、重らかにして動きなく、輝きみちて、しかもすが〳〵しう透き通りたり、さるからに玉は月の精なり、柔和善順を德とす、慈善の本源なりと、北畠准后も記しおきたまへり、くすしからずや、たうとからずや、されば、おのれも常にこれを愛でゝ心を磨く鏡とし、心の底のすが〳〵しう、此玉のごと潔からん事を願ひ世の人に交るに、慈悲の心を本として柔和善順、

角なくて愛敬を旨とし、人の勤むべき道を得んものと、これをもて座右の銘とぞしたりける、あはれ我教へ子達もおなじ心にこれを尊び、此玉のごと清くなり給はむ事の願はしければ、いささか拙き言のはもて書しるしぬ、

朝霜

桐廼舎桂子

殘る紅葉のなか〳〵に、あはれも色もふかゝるに、朝日の影のさしそふを見はやと、つとめて起出でしにも似ず、なほ火桶のあたりはなれがてなるを、いつしか埋火のしろうなれるに、庭にも霜や置そめつらんと、せめておのが心をかきおこしつゝ、窓の戸おしひらきて見れば、秋のかたみはいろもとゝめず、こは一夜の風のつれなくも、いづこにか誘ひゆきしなめり、されど寒げなる梢のさながら薄ものかつぎたらんやうに、霜の初花白う匂へるを、をかしと見るほどに、黒きものゝ見ゆるは、ねぐらをいづる烏なりけり、

もみぢ葉のあかぬ眺はかれぬれど
　けさめづらしき霜のはつ花
心してねぐらをいでよ山がらす
　羽かぜに霜の花もこそちれ

霜の朝

玉造梅子

となりの家の垣越に
　夜あけ〳〵にはとりの
時呼ぶ聲のをかしくて
　我は枕をはなれけり
常にも似ずとわが夫が
　笑ひたまふもはづかしく

手桶さげつゝ踏出せば、
　身にしむ下駄の高ひゞき
うすむらさきの横雲に
　はやかくれゆく星の影
霞むばかりにみ空とぶ
　鴉の羽根もひゆるらん
四方の田ごとのたまり水
　八重の氷にとざゝれて
圍む山よりそよ〳〵と
　髪ふく風の肌さむや
まだ酌初むる賤も來ぬ
　井戸端ちかく見わたせば
つる瓶の竿のひと筋に
　おくやくまなき霜の色
わなつめたしと己が手に
　息吹き入れゝ立てる時
我家にたき火燃え上り
　なさけもわつきつまの聲

折柴園小集

秋夜　照内清子

月にうつ賤が砧の音さえて寢覺がちなる秋の夜半哉

霧　同

見渡せば夕霧ふかく立こめて船漕ぐ宇治の川つら

擣衣　山本八重子

夜は更て月も傾く賤が家に音をやみなく衣うつなり

鹿　同

小夜更て砧の音の絶え間〳〵妻戀ふ鹿の聲ぞ聞ゆる

露　佐藤多摩子

なく虫の聲より滋し八千草の葉末に結ぶ露のしら玉

嵯峨懷古　同

嵯峨の奥とふ人もなき憂秋をたどるも悲し松風の聲

秋　八幡貴與子

白露のおきたる儘を乙女子の袖に縫はまし秋萩の花

初冬　同

木々の葉を拂盡して吹風に淋しさ添ふる冬は來に鳧

月
垣は破れ軒は朽たゞ賤か家も影は變らぬ秋の夜の月　澁谷貞子

雁
故郷の母と語りし夢さめて聞くも懷かしはつ雁の聲　同

雁
秋風に聲を帆にあげて鳴雁の翅に月のかゝりける哉　富田知可子

月入雲
蔭たかき松の梢を心あてに月待つ空にくやたつ雲　同

秋夕
片々と風に吹かれて木々の葉の落るも淋し秋の夕暮　長倉登美子

月
澄渡るむさしの原を限りなき千草に宿る秋のよの月　中村げん子

鹿
秋風の身にしむ夜半を妻戀て深山の鹿ぞ獨り鳴なる　高橋利子

折にふれて
けふの月奈にと待し甲斐もなく獨空行く雲を見る哉　鈴木きん子

秋暮
いつしかに野邊の千草は枯果て虫の音弱る秋の暮哉　砂押美與子

鹿
月更て聲すみのぼるさを鹿の鳴音悲く身にぞ染なる　山本千代子

秋田家
をしねほす軒の杉垣鵠鳴きて秋寂にけり小山田の里　中川雪枝

秋夕
馬洗ふ小川の水に月影のさしも淋しき秋のゆふくれ　析柴園主人

新刊紹介（一）

◎由分社少年叢書（第一册）　堺枯川氏の「一眼のある人」、『三人大男』の二編を収む、有益なるお伽草紙なり（定價十錢、麹町元園町由分社發行）
會話の一節に曰く
　そりや寄生木といつて大變に珍らしいものだ、善く氣が付いたれ、その植物は妙な奴で、自分ひとりで地に根をおろす事は出來ないで、外の木にばかりくつゝいて居る、虫でいへば寄生虫、人間で云へば居候といふ様だ

◎準備案内（可南子著）　祝祭、送迎、婚禮、葬儀など改まつた場合には、何如にしてよきか一寸困るものなり、本書はその相談相手となれるもの如し（牛込矢來町闔屋書店發行、定價廿錢）

◎教訓歌集（大江榮人編）　本書は古來の國歌中教訓の意を寓するもの三千餘首を輯めたるものにて、其部門を神祇、國體、教育、文學、武勇、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友、修身、志操の十二に分つ、（發行所牛込矢來町闔屋書店、定價四十五錢）



幼兒の食物と牛乳

醫學博士　瀨川昌耆

普通多くの人の考へでは、近來牛乳の流行につれて、牛乳は滋養物以上の滋養物とまで信用するに至つたが、さうまで牛乳に信頼されては困る、そこで一年前の稚兒には、大に牛乳を飲ませねばならぬ、牛乳さへ飲ませばよいといふので、一日七合も八合も、甚しきに至つては一升も飲ますのがある、たゞ稚兒の牛乳によつて、ぶく／＼と肥えるのを喜んで居る、肥太るのはまことに結構な事であるが、體質がわるければ何にもならぬ話で、それと同時に、瘠せたからといふて決して心配するには及ばぬ、

牛乳を飲ませること、素より異存のあるべき筈はないが、牛乳ばかり飲ませるといふことはよくない、もう生れて七八ヶ月にもなれば、ゆるい粥であるとか、或は玉子の黄味であるとか、さういふ食物をも與へて、決して牛乳に一任して、ぶく／＼肥えることばかりをよいとしては、大に見當が違ふ、

それで牛乳の分量も、多くて五合、それ以上飲ませれば幾らでも飲むが、それを飲ませる必要はない、それへ成るべく外の食物を加味して、七八ヶ月、一年、一年以上になると、他の種々の食物を與へるやうにする、輕い煎餅であるとか、飴、其他何でも口

へ入れて溶けるものならばよい、歯がまだ生へぬから硬いものは注意せねばならぬ、

食物としては、鶏卵の黄味が第一で、初めのうちは一つ、それから後に日に二つといふやうにして、それを鹽か醬油にて味をつけた粥にまぜて與へる、又魚類では、鱚、鰈、鰹魚などのやうな軽いものはよい、これも生で食へるものは生がよいのであるが、鱚、鰈の如きかるい魚でも、生では筋があつて困るといふことになるから、その邊は注意をするがよい、野菜では豆また芋などはよろしい、皮を去つて、篩などでこしてやれば上等であるが、それほどにせずとも箸の先でほごしてやるやうにすればよい、

それから次第に食物の進むに從つて、牛乳を減じて行くやうにする、併し三四歳迄の小兒時代は、他の食物の味を覺へて牛乳を厭がるものもあるが、二合位は與へるやうにするがよい、

人の乳は人に適し、牛の乳の牛に適す、その他馬も羊も、それ〴〵特有の性質を有して居るのであるから、親の乳のあるものは、牛乳よりはその方が無論よいのである、それに調子のわるい子は、牛乳では育たないのがあるから、親の乳のよい人は、他人の乳で育てるやうにしなければならぬ、然るに親の乳を飲ませて、腸でもわるくなると、すぐに乳がわるいからであるなぞと騒ぎ出すやうであるが、人間の乳は決してさう急にあしくなるものではない、親の身體健康である以上は、その乳に心配を抱くには及ばぬ、であるから牛乳よりは人乳の方が、よいといふことに極めて置く方がよい、

又人乳と牛乳と、同時に飲ませること、これも亦差支はない、

近來牛乳の中毒説を唱へるものがあるやうに聞いて居るが、牛乳中に毒のある譯ではない、前にも云ふた通り、牛乳ばかりでは年のやゝ長じた小兒は肥るばかりで、貧血して體質が惡くなつて健康に育たないと云ふだけの事で、無論大人が牛乳を飲んでわるいの、大人がその毒に中てられるの、牛乳に適不適

の人があるといふことは決してないのである、大人が一合か二合の牛乳を飲んで、功能のよい方は別問題として、わるい氣遣ひは更にないのである、
又これの反對に、教育のない人は、牛乳は頗る滋養物であるとして、或は數十年間、續けて五勺飲んだ或は一合飲んだと、大にその功能を吹聽して居るものもあるが、病人の外は、大人に五勺や一合飲んで身體の健康に大した効果があるべき筈はない、牛乳は藥の如きものでないから、病人でない限りは、價の高い牛乳より、牛肉でも食ふはうが、其味と滋養に於て効能があるかも知れぬ、即ち牛乳は小兒と病人にとつて必要ある如く、大人にとつてそれほどの價値はないのである、(文責在記者)

黑くてよきもの

印度の美人、人形の目、繪の夜景、繪にかいた雨山(今津照子)
雪の野の小流、薄霧の中の案山子、夕燒の川上の景(香山久子)
染たる女の齒、白き絹地の額の緣、お祝文の墨の跡(眞岡雪子)
眉毛、燃緣、明方の馬、雪夜の月影、晴たる空の雁(伊藤政野)

小兒の萎縮症に就て

醫學博士　三輪信太郎

植木屋が一本の花卉を造るにも、花よりは蕾の時に、莟を結ぶ時よりは、其幹を作る時に於て注意せねばならぬ如く、すべて何事によらず、終をよくするには、始めの注意が最も大切である、これを人にしても、一年以内の小兒に就て、保育の方法を誤ると、萎縮の結果、物の用に立たぬ不幸の人になり終るのであるから、大に其心せねばならぬ、人道の爲に忽諸に附してはならぬ問題である、
保育の方法宜しきを得ずして、萎縮症となれるについて、いさゝか其所見を述べやうと思ふが、小兒は誰の見る目も同じことで、保育其宜しきを得て、思ふやうに發育する小兒に接しては誠に愉快な感が起るものである、まして小兒を持てる人に在つては、何とも云はれない愉快の念が湧くのである、それが

反對で、萎縮症のものに出遇ふと、甚しく不快に感ずるのである、恰も露を含んだ勢のよい花を見た目で、日影に凋む花を見ると同じ事柄で、前者の喜ぶべき以上、後者即ち小兒の萎縮症にかゝつて居るものを見ると、小兒の爲に甚しく悲しく思はれ、之を救ひたい念に堪へないのである、

この萎縮症の原因は、結核又は梅毒より來るものもあるが、その邊迄論究することは暫らく預かり置く事として、單純に營養の方から話して見やう、即ち生れたての小兒が、親の乳又は乳母の乳によつて育つといふことは、天然の營養の道であるが、それを爲し得られぬより起る塲合のみにて就て話さう、勞働者又は低い官吏などのうちに、自分の小兒を天然の營養の道を踏んで育てる事が出來ぬ、如何にも憫れな狀態に陷つて居るものがある、貧しき家に生れた子は、母親は外へ出て働く所から、冷たい脊に負はれて、乳粉を飮まされて、泣聲さへも甚だ勢のないものになつて仕舞ふのがある、

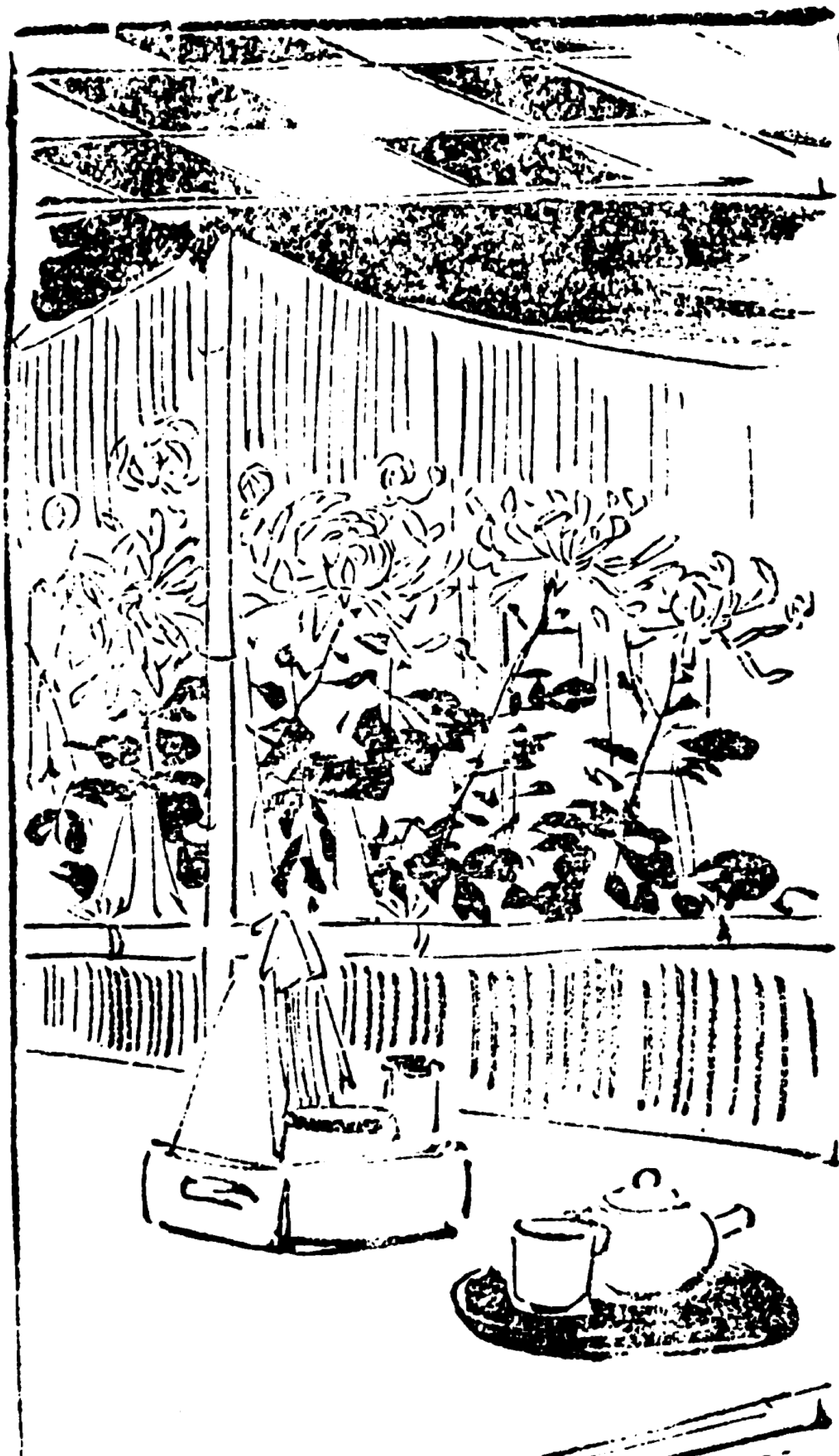
牛乳は母乳の代用品として宜しいのであるが、以上の如き身分の家では、なか〳〵五六合の牛乳を買ふといふ事が出來ぬ、甚しきに至つては、その牛乳の代をすら稼ぎ得られぬのさへ多いのであるから、跡は推察すべきである、そこで私が目今大學にて、外來患者に向つて、牛乳をこれ〳〵は飮まさねば行かぬと注意する、畏こまりましたと受負うて歸つたはよいが、それから幾日しても目方が昇らない、それでは不可ないと注意を反覆するが、さて效果がないから、止むを得ず病院へ引取るといふ事にする、併し大學の施療室だけで、萎縮症に陷つて小兒を收容し得らるゝものでないから、他に方法を講せねばならぬ、歐羅巴では遺憾なく此救濟の道が開かれて居る、これも肺病とか梅毒などが土臺にあるとか、その他の疾病があつて衰弱して居るなら、如何とも仕方がないことであるが、その取るべき營養を與へずして、萎縮症に陷らしむるは、如何にも氣の毒である、それを萎縮症に陷つたは、畢竟貧乏の家に生れ

た其者の不運であるから止むを得ない、と斯う冷淡に言うて仕舞へば話はそれ迄のことであるが、何とか人道の爲に、之を救濟する道を講じたいものである、

そこで小兒の萎縮症といふものは何ういふ有樣を呈して居るものであるかと云ふことを述べて見たいのである、

實に萎縮症に陷つた小兒は非常な姿になつて居るので、母親がそれを病院へ連れて來るのを見るに、其顏は骨立つて、上から下へ尖つて、一年前の小兒では頭の顋門の處が菱形にピッシャリ凹んで化骨しない、其外あちらこちらと骨が重なり合うて居る、それから眼の周圍は縱横は襞積を以て畳んで居る、眼は凹んで人を凝視める時は怨めしさうな顔をして見る、それから顔の色は土色で蒼くなつて居る、骨相學者でなくとも誰が見ても老人の顔をして居る、生れて間もない小兒が老人の顔になつて居る、聲は嗄れて居る、何うもそれだけ見ても氣の毒に思ふのである、それから

菊十題



(其四)觀菊の宴

裸軀にして見ると、全身皺だらけで肋骨が數へ立てることが出來るやうに瘠せて居る、それから臀部股の邊の肉は垂下つて居る、引張つて摘み上げることが出來る、私は虎列拉にかゝつて居らぬから摘み上げることは出來ぬが、さういふ風に摘み上げることが出來る、それから手足の先は冷めたいが腹だけ肥つて居る、是は尋常で肥つて居るのではない、皮膚が透通るやうに薄くなつて居る、さうして腹が大きくなるのは、腹の中には腸管があつて、其腸管が健全のものなら締つて居る、それが締りがない、譬へば一寸位擴がるものと假定すると、二寸にも三寸にも擴がつて居つて、それを締めて行くことが出來ない、それで腹が薄くなつて太皷のやうになるのである、ひどいのになると、腹の皮の色が眞黑になつて、非常に引込んで仕舞ふ、それから弱り眼に祟り眼で、股の周圍とか腋の下とか、頸のあたりが爛れる、さうして終にさういふ所から丹毒の如き惡い病が這入つたり、それから身體が弱つて居るから風邪をひいて肺炎にかゝつたり、或は其他いろ〳〵の疾病に罹る、營養法が少しでもわるいと、直に急性の下痢を起して、雪の消えるが如く死んで仕舞うと云ふやうな氣の毒な譯になるのである、總て斯ういふ病になると、脂肪が悉皆無くなつて仕舞ひます、斯ういふ風に脂肪がなくなつて肉は瘠せ、上は皮を冠つて居るのであるから、宛然大人のマルテルを着たやうな始末に見える、實に憫れな有樣である、若しこの言を誇大的であると思へば、之を證明する爲に病人を連れて來ると、決して嘘でないといふ事が分る、それで小兒がさう云ふ風になるのは、是は小兒に罪がある譯ではあるまい、小兒が怨めしさうな顏をして、それから悟つたやうな老人顏をして、ジロリと私共の顏を見た時には、お前私の爲に、何うか之を訴へてくれといふやうに見える、唯空言を吐いて居るのではない、自分は出來得るだけ盡したいと云ふ心を常に持つて居る、兎に角さういふことを承知して置いて貰ひ、女鑑の讀者諸君にも、この

救濟の相談に乘つて貰ひたいものである、

（文責在記者）

天長節料理

中島春郊

さゞれ石

この度趣向しました、天長節に因んだ料理の『さゞれ石』といふのを、披露いたします、いつもめでたい場合には、必ず鯛が御用を務めるといふことになつて居るやうでありますが、取わけ天長節の料理故、まづ鯛の吟味からはじめて、それから料理に及ぶことにしませう、

たゞ鯛といへば一列一體、同じやうに見えて、赤鯛でさへあれば眞鯛と思うて居らるゝ方が多いやうでありますが、それもその筈、魚屋渡世の人にでも、眞鯛と花鯛との見分がつけば一人前としてゐるさうでありますから、まづむづかしいものと見て差支はないのであります、とかうむづかしく云ふにも及ばぬ見分法をお話します、

眞鯛は、骨格も稍たくましく、自然肉附もよろしいものであります、第一鼻柱の邊がこの二つの發育がいちじるしく、眼の下より頬にかけて、肉附は最豐かであります、また腹の中も厚く圓く見える心地しまして、色合は頭より脊へかけて紅黒く、その色に締りがあるやうで、これを洋彩で云へばクリムソンレーキにニエトラールナントを配合して、箔を塗いたやうに見えます、鱗も何となく肉厚く見えるのでありますから、その心してさへ居れば、すぐに見わけがつくやうになります、花鯛はこれと反對で、鼻のあたり瘠せて肉薄く、頰の肉も少く、全體に於て肉薄であります、色も淡紅にいさゝか朱の氣味のある、洋彩でいへばライトレットの淡いのと見れば大差はありません、先づ斯う鑑別法を立てゝ置いて二枚並べて見ますと、女魚と男魚としか見えません、

私はいさゝかこの研究をしまして、今では鯛を燒く香で、眞鯛であるか、花鯛であるかの嗅分が出來るやうになりました、めでたき時のは、成るべく眞鯛を用ひたいものであります、
さてこれより本文に入りますが、まづ鯛を三枚におろし、其肉に玉子のときたるものに、いさゝか胡椒の粉をかき交せたるものを塗り、其大小は隨意に取交せとして、これを圓く石の體裁に卷き、砂糖と醤油、また味淋と醤油の煮汁なれば猶よし、それにて煮あげたるを上等の乾海苔にて卷き、いよ〱石の色となりたるものを、よきほどに配置し、それに朧卵をばらりと撒いて、苔むしたる體にし、其置石の間を、蒲鉾を纖に打ちて、糸の如くになりたるものを、流れの水に象り、これは天長節を祝して、流れの末を私どもまで悦び祝ふ趣向でありますから、皆さまも是非天長節當日の御料理に御採用を願ひます猶次號の紙上を拜借して、目新しい料理を御覧に入れることゝします。

食卓雜記

外山折柴子

一　馳走と時刻

世の中はます〱開ける、交際の道を繁く踏むやうになる、それに隨つて馳走をするといふことが多くなる、そこで何月何日何時、某所に於て饗應をする又は懇親會をする、さういふ場合には、早いものは早過ぎて碁にも飽き、遲く來る人は折詰を提げて歸る人と行違ひになるといふ有様、そこで此の如きを日本時間と稱し、引合に出さるゝのが西洋である、西洋だからというて、さう定規を引いたやうな譯にはゆかぬ、又日本時間といへば、それは諸事自墮落になつた此頃の沙汰で、德川時代では身分のある人は、悉く此時間といふことを重んじ、また西洋では客に馳走をする時、献立を見せるといふ例を引いて日本ではさういふのがなく、たゞ千篇一律の物を食

はせるといふ事であるが、これも徳川時代では身分のある人は、馳走の献立を、案内狀と同時に、客となるべき人に見せたものである、そこで其一例を左に示さう、

大名の若殿が家督相續で江戸へ乘出し、同席を招くといふ一條、此當時は婚禮の儀式なども素よりやかましかつたものであるが、家督を相續する時の事などは、極めて重い儀式としてあつた、さて家督を相續した若殿が、柳營に於て、柳の間であるか、或は帝鑑の間であるか、初見參をしたる、所謂向ふ三軒兩隣りの、同席の人を近附の爲に、我邸へ招待をする事になる、すると招待する日時と料理の献立を定め、主客を留守居役から留守居役へ何月何日何時に御出馬下さるやうにと、その招待狀に添へて献立を通じ、豫め禁食の有無を聞いたものである、これは西洋の話ではないが、何と行屆いた話ではあるまいか、さて其日になると、主人の方では定刻に客を招く總ての仕度が揃ひ、客人の方でも定刻にやつて參る、その時に魚河岸の都合などにて、豫定の献立通りに出來ぬ時は、其旨を客に通じ、顏揃ひとなるや否や馳走が併ぶ、大抵時刻は四つ時今の午前十時位、客なる大名は上下で供廻り、隨分いかめしいものであつた、さて盃事が濟む、二汁五菜の料理に臺引か何かゞ附いて、主人自ら客の馳走をする、そこで今いふ十二時頃飯が濟むと、上下を取り袴ばかりで庭前を散歩し、これから別間へ通る、するとこゝには徳川のお抱へなる狩野住吉なんどの畫師を招いて置いて、客の饗應に席畫を見せる、そこで客人は即席に淡彩を望むもあれば、面倒な畫を後日に約するのもある、

席畫がすむと畫師も同席にて、梅酒或は桑酒などの銘酒にて盃を傾ける、此時に出づるものが、大引盃に煮しめを盛り、前に香の物を盛りたる、菓子の椀盛、これは今の菓子椀の名ばかり殘つて用ひぬやうである、かはり重は上に煮しめ下に蒸菓子、それから眼紗吸物、口取、さしみ、鉢肴、留の吸物も、

段々に馳走が出る、後段になると、しる粉か又は蕎麥などが出で、それに鱚、鯵などの酢菜、これは永おろし付で出る、斯の如く滯りなき饗應があつた、よき程に客は歸邸する、其時に燒物、菓子などを土産に出すといふ寸法、この間の執持は、御本丸の表坊主を賴んで、いろ／＼の諧謔がある、そこで今の中流以上の客を招く時などには、斯ういふ風にしたいものである、上下は着けるに及ばぬが、

二　食膳と慈善

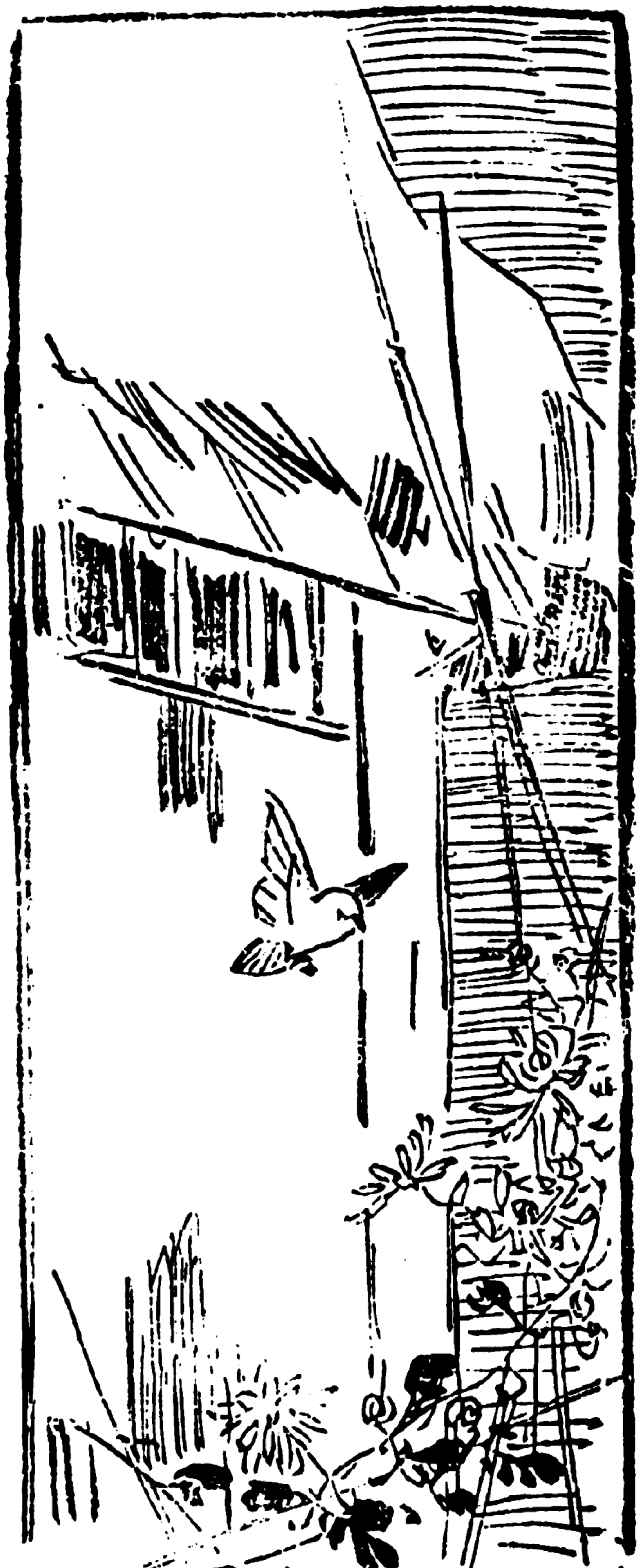
予は東京をズッと見渡した所で、何が一番慈善事業であるかといふ問題をおこして、自ら一膳めし屋と考へた、人間一日も食ふものがなくては生きて居られぬは云ふまでもないことで、その命を大切につなぐ糧を價安く得らるゝ、われはこのめし屋の玄關、即ち繩暖簾を見るごとに、いつも心で感謝して居る、身體を動物にして、汗や油となれる人の、先づ以て何が樂みで、齷齪するかといへば、一口に智惠がない結果とでもいふであらうが、貧富は生るゝ人の運、この運によつて智惠を得らるゝ、損得があるので、貧の境遇が智惠を忘れさせた勞働者の、氣樂なといふが智惠のある人の眞似の出來ぬ所である、氣樂といふ上には、雨もる軒の月を寢ながら見る風情もあり一枚のつゞれ着換へも面倒も入らねど、口にするものばかりはさうはならず、其日暮しには、衣のよきを得ること、家のよきを得ること以ての外なれば、その日を食うて樂むだけは得たきものに思ふ、この最上の樂は、僅かの金錢にて繩暖簾にて買ふことが出來る、この樂みによつて、身體を惜まず働かれ、働いた身體を安める事が出來る。

世の中にはその日暮しの人多く、われ等はまた暮しかぬる、一段下級に居る位で、まことに無價値であるが、腰辨當をほじくつて口にするより、暖きを味ふ繩暖簾が幾等まさつて居るかも知られぬ、

今の多くの家庭では、食物の工夫を用ひることが少ない、輕蔑しても商賣なり、食物に多少の工夫と趣向あり、多くの一膳めし屋は、多くの腰辨當屋より

食物に於て上位である、されば多くの家庭は、このめし屋に就て指南を受けねばならぬやうの有樣で、また受さへすればよいが、奥樣と呼ばるゝ人は、多くは上總房州女史に一任し自ら其任に當らねばならぬ際は、千篇一律、命を繋ぐ多くの人の樂みの主となる食物を、まづき思ひをせしめる、まことにつまらぬ話である、食物の高下は、其原料の價の高下にもよるが、價高きものも料理法の如何によつては箸にするもいやなり、つまらぬものも料理やうによつては舌皷うたれる、食ふことは毎日缺ぐわけには行かぬ、物のかゝらぬやうに、味のよいやうにせねばならぬ、岩崎彌太郎氏が世の中で一番うまきは香の物に茶漬と云はれたさうであるが、香の物に茶漬ならば岩崎氏の財産はなくとも口にせらるゝが、否口にせられ過るが、否口にせられ過ぎてあまり賞翫せられぬ向があり過ぎるが、要するにめづらしいからである、價の高下は味の甲乙より、その物の產額にも關係するので、一貫目十錢の薩摩芋の栗に比較して、味に多くの遜色のなきが如く、多くあるものも、

菊十種



（其五）軒の日かげ

珍らしくする工夫が第一である、家庭の料理に工夫さへ用ひば、營利一方の一膳めし屋よりは、屹度御馳走が出來るに違ひない、併し世間の見る所の其日暮しの乙なる勞働者は、その工夫より一膳めし屋に走る方が便利で、多くは其方に赴いて滿足せらるゝが、この一膳めし屋に行くことを得せぬ、所謂其日暮しの甲なる腰辨當屋は、どうしても自分の家で御馳走になるの外はない、

さて結局、一膳めし屋が、乙なる勞働者に歡迎せられて、慈善事業となれるが如く、即ち體裁のよき勞働者の臺所を預けらるゝ人の、價の廉にして味のよき物を食はすること、またなかゝゝの慈善事業である、

わが知れる人家に歸りて、もはや午後も六時となれるに、夕餉の仕度もせで、細君何か物を思はし氣なり、その人何をして在るぞと問へば、晩の御馳走の心配なりといふ、その人いたく喜んで、一時間餘を過ぎて膳部に着けば、御馳走は芋の無造作に煮ころばされたのであつた、これ等は慈善心に乏しい話で、臺所を預る人は、午後六時に急に慈善心を起しても、右の始末であれば、平素常に慈善心を持つて貰ひたいものである、既に毎日食ふ事ですら、この注文があるのであるから、其他の事は猶更である、

三　食品と名稱

女客に重寶がらるゝもの、饗する人の手數と、見た所のよきとにて鮓を第一に推すべく、さて其鮓の拵へ方に上手下手があつて、ケヌキなどいふ凝つたのもあれど、場所によつて、つるべ、御ぜん、吉野、與兵衞、初音、鳴門、蛇の目、松、翁などゝ東京のみでわが知れるもの三十八種ばかり、種と仕掛に相違がなくて、名ばかり異つて居るのがある、これは賣品に名を飾つたものであるが、豆腐百珍などゝ、百珍はさておろか、數百種の豆腐料理があつて、煎じつむれば五六種に過ぎないなどは、家庭の献立としては、下らぬことに智惠を絞つたものである、名ばかり味があつて、其の實は別に凝つた料理でもな

い料理名の一例として、豆腐を二つばかり、一つは野狐豆腐といふので、所因を聞けば、都に遠き片田舎には、易の占といふ事がないので、狐に吉凶を占はせる、その術は狐の出入る穴へ生の豆腐を供へ、狐の食ふ食はぬによつて善悪を定む、依つて生にて食するを野狐豆腐といひ、後に轉化して奴豆腐となつた迄は保證出來ず、一つは八戸豆腐、これはある行脚奥州南部の八戸に宿をもとめ、宿にて豆腐を細く打ち、味よく羹にして平に盛つたのが、甚だうまく箸にせられたので、其の後歸國して友人などにこれを拵へて饗し、南部八戸にてこの料理を覺えたる所から、八戸豆腐と名をつけた、それが八はい腐豆となまり來たのであるとの事である、これを更に命名すれば、其形から割出して、一は越の雪豆腐、一は白魚豆腐として、差支あるまい、

四　學校の料理

高等女學校を卒業しても、手紙一つ滿足に書けぬといふ愚痴は、其父兄より常に耳にする事であるが、手紙ばかりではなく、實用向はすべてこれ等の父兄を滿足せしめぬやうである、料理の如きも、これを女學校の一科目とするに至つたのはわれ等の大に喜びに堪へぬ所であつて、而も教へる人に教育學や學校管理法の一冊を讀んで、さて料理を研究したものが少くて、否皆無であつて、この科目を擴張すれば其卒業生は料理屋の料理人となる事を得べきが、家庭の料理人となることはむづかしいのである故學校にては、滋養物一點張、體裁一點張の兩極端に走つて、中庸を得ぬ不實用の料理を授け習うて居る、故に料理を習うたと稱する人に向つて、十一月の料理品ともなる重なるものは何か、其一品に就て工夫したる料理法は幾種かなどいふ問題を提出しても、直に答へ得らるゝものは多くはあるまい、殊に近來女子の學問するもの多くなりたれば、學校に在る多年飯を炊くことさへ、知らぬ者が多いのである、そのものに向つて、一足飛びに料理屋的料理法を教ゆる必要はない、まづ上總房州女史を煩はさですむべ

き事より初むべきで、教科書的にゆけば、一年に於ける食品を、其價格によつて上中下位に區分して覺えさせ、少くもノートブック中の物となし、其產額の多きものより料理法を教へ、一品より取合せに及ぶ等、又道具も成るべく輕便に且つ融通をきかせるやう敎へ、殊に此科は經濟と直接大關係あるものであれば、敎師はその邊にも多くの心を用ひねばならぬ、他の學科に加はゝる一科目たると、專門のとは大に區別せねばならぬ、即ち料理專門の學校でない限りは、料理屋的料理法を敎ゆる必要はないのである、

針のはこび

島田琴糸

裁縫を學ばんとせらるゝ人は、まづ運針の法を練習せざるべからず、縫ひ方の早き遲きは、氣配にもよる事なれど、運針の練磨如何によるものにて、始め此法を忽にするときは、縫方の遲滯するのみならず布のちゞみ、糸のつり、或はゆるみ生じて、仕立上りのうへに於て、體裁のあしきのみならず、後日必ず狂ひを生ずるものなり、よく研究すべし、

運針の始めは柔かき用布、すなはち白又は色木綿を巾貳寸乃至四五寸、長さ一尺乃至一尺五寸位に切り二枚又は三枚に合せ、木綿針（木綿針は種々あれども、四または三の四半とある印針、または之と同寸位のを用ゆべし）にて、初は用布の端より二分或は三分位奥の所を縫目正しく、針足一分、或は二分目位に右の端より縫初め、左の端へ一直線に針目の表裏を揃へ、不同のなきやう、且つ縫目の曲らざるやうに注意し、縫終らば一應其表裏を調べ、其糸を抜取り、再び其通りを縫試むべし、此針の運びは如何なる人と雖も、最初の間は工合惡く、且つ曲り、或は表裏の針の出、則ち針目の揃はぬものなれど、數回練磨すれば、段々に意の如く善く揃ひ、宛も尺度

にて割出したる如く、針目正しく成り、且つ針足も自然に早く成るものにて、用布二枚にて美麗に縫ひ得たる時は三枚に增し、尙美麗に縫得るやうに成りたる時は、用布を強き布と取換ふべし、尙充分美麗に縫ひ得る時は、用布の端より一寸乃至二寸と、奥の方を縫ひ、或は斜に或は輪に縫ひ試むべし、強き布にて充分に縫習はざる時は、他日實用の時唐棧織或は博多織黑八丈の如き強き品を縫ふ時、大に苦むものなり、又或時は紅指其他薄き切れ端ある時は之にて試み、凡て受學中は實地の衣類仕立てる時と雖も、運針用布を傍に置き、寸暇ある時は必ず運針を試み、充分練磨の功を積むべし、

衣服の流行に就て

久保田米齋君談

少々ばかり衣服の流行に就てお取次を申さう、婦人の衣服は、近來かつ色、栗梅、濃葡萄といふやうな色の濃いものを多く好くやうになつて參つて、模樣は江戸褄模樣の白ぬき、元祿模樣の流行につれて、模樣が以前より段々大きくなり、花やかになつて來た、帶は、茶がゝつた色が流行して、これも同樣花やかな方が受けるやうになつた、今年は縫の模樣が流行しさうな景氣である、そして金泥織、銀泥織といふのがあつて、この帶は、夜燈火に照らされると、底に光りが見えて、まことに奥床しくて美しいものであるから、夜會用としては殊に申分はない、普通の着物はお召が流行して、色合は寂利休、栗梅といふ所次いで、山繭縮緬を無地染にして共色で紋をつける、これがなか〳〵よいものである、

友禪は昨年三越にては元祿風の模樣を募集して、それを熾んに賣出して居るが、隨分賣行きがよいと云ふことで。尤もこれも華美な方が一體の受がよいやうである、序ゆゑ、小生はこの友禪の事に就て少々お話し申さう、これ迄の友禪は模樣より畵になつた

方が多い、ざつと歴史的に云へば、昔は裝束模樣といふものがあつて、それが模樣の上に發達して來たのであつたが、新規を好むのが何時の世にも同じ人情で何でも〳〵新規々々といふ所から、御存知の友禪法師などゝいふ洒落漢が出て、自分で畫をかいたものを世に問うて見ると、模樣よりは畫の方が面白いといふ人氣になつて、それから圓山應擧、其門人の山本守禮などいふ人もこの友禪畫を畫出し、何が大家の筆であるから、一時を風靡せしめ、それから友禪模樣といふより、友禪畫として、筆意をつけるとか、模樣として甚だ不調和のものになつて來たのであるが、近年になつて、模樣と畫の區別がついて來る、それに圖案會なども出來て、新生面を開かれるやうだから、今後大に見るべきものが現はれるであらうと思ふ、

男の方は別に變つたものはない、前年より引續いて清綾織、好貴織、山科お召などでこれも、色合は濃い方がよいやうである、

それから子供の被布に、裾模樣風の、面白いハイカラ模樣が流行しさうで、大分三越などでは意匠して居るが、來月は例の七五三の祝月であるから、その時に成績が現はれるであらうと思ふ

記者曰く、これは久保田畫伯が五分間の立話であるから、讀む人はそのお積りで、次號には更に同畫伯の名説を御紹介申さん

外國人の美術研究

近來外國留學生にして、我東京美術學校其他技藝學校へ入學を希望するもの尠からざる由にて、此程東京美術學校に於て、直轄學校外國人特別入學規程により前科第一年級へ左の四名に入學を許可したり

▲西洋畫撰科

清國人　黄輔周

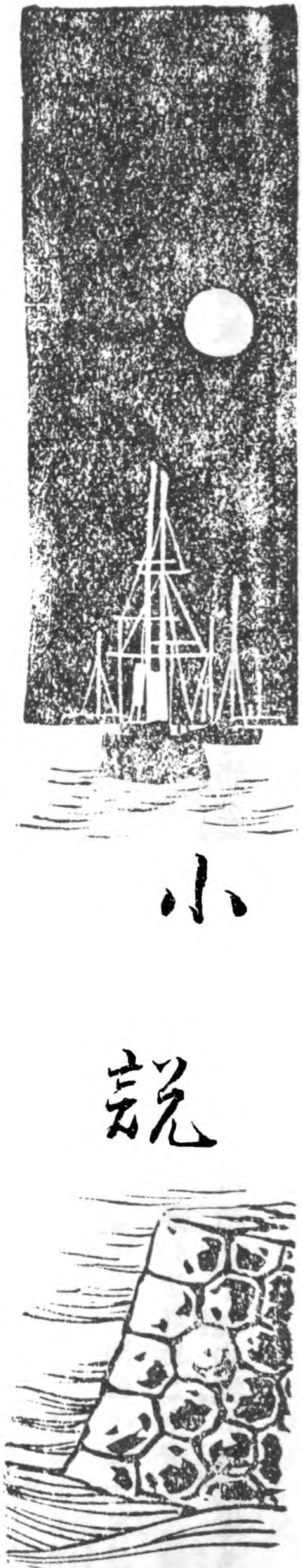
▲金工撰科

暹羅國人　チヤルン、スラチート

▲漆工撰科

暹羅國人　ボンプー、ワナート

英領印度人　エス、エヌボース



湯の香

大塚楠緒子

『姫様お寒くはいらつしやいませんか。
と侍女の京は頸を傾げて問ひながら袖を重ねた。

槐の菓子器、黒柿の盆、赤や紫に塗つた獨樂やら、袋に入つた子持箸、手に取りに寄る人の日毎に減つて、鞄やら行李と共に湯治歸りの客を乘せて物聞橋を渡つて往く人力車の地響きが此處までも響いて、それで何とはなしに斯う寂れてゆくのではあるまいかと思はるゝ、夏も果て方の湯元細工の店の前を、姫は緋鼻緒の三枚草履、絹足袋の爪先白く羽根のやうに輕くセルの裳裾を捌いて、さつさつと。

『いゝゑ、私は熱がりだもの、もうぽツぽと逆上せるやう、お前は寒いの。

『はい、姫様がお寒くないと仰しやるのに、斯う申しては恐れ入りますけれども、私は先程からぞくぞく致しまして、

『それは氣の毒だね、そんなら先へ歸つても宜い、私は此處から單身でちよつと例の處まで往て來よう、さては御機嫌を損じたことゝ、京は慌てゝ腰を低うして恐れ入る。

『姫樣おそれ入りました、御免遊ばせ勿體ない、たとへ姫樣のお許可が出まして、私くし此儘歸りましたとて、この私の分際で、秋の始めの伊香保の山の風が身にしみてなんぞと、どうまあ御玄關に斜に構へてお出になる石倉樣の前が通り切れませう、で無くて御侍女の京、つひ姫樣をお見うしなひ申してなんぞとは猶更の以ての外、あゝ私の例の我儘で御座いました、どうぞ御堪忍遊ばして、

とひたあやまりに、誤まり入る。聲をのみ聽いて見も返らぬ背のすらりと、咲き出でた百合の花の地をすべる樣に、姫は、歩み〳〵凉しい眼を轉じて谷を隔てた向の峯の忙しい雲の往來を眺めながら微笑で、

『私儘をいつて見たり、あやまつて見たり、それは京やのお定まりだわね、けれども好いのよ、お前と私は仲よしだものね、此間母樣が御歸京遊ばす時にだつて、願つて、お前一人を撰り殘して君も染も歸京して仕舞つたのだもの、一同に往かうよね、何處までも行かう

『姫樣、私嬉しう御座います、

と、京は始めて胸の痞の治まつたが如く悦ぶ。

『然れどもね、と姫は再び微笑んだ。

『湯元へ往く時ばかりはね、ほんとうはお前の來ない方が好いの、

『あら姫樣は……、

懷かしむ京が不思議氣に甘ゆる樣に見つむるをも姫去氣ない、時に鬢のほつれを吹く程の風が何處ともなく湯の花の香を傳へる。

『お前は左樣は思はないかへ、あの湯元のこんもりとした、日の影などは滅多にさゝす事ではないと、古い大木が枝を延ばして蓋ひ被さつて居るとしか思へない其下で、白い薄絹が漂つてゐるやうな湯氣を上げて溫泉が流れてゐる、岩は黃ろい湯花を附けて素直に流れを送つてゐる、觸つて見れば吃驚する程あつたかいけれど、地を踏んで立つて居ると、冷めたい氣が身を刺すやうじやないか、何者か居て罵しられるやうで諭されるやうでゾッとすると、悉皆今迄見て居た夢が醒めるやうに思ふもの、醒めて判明とわれに歸つて活々と自分の胸の底まで見透ほされるやう、京や、私はたつた單身で飽きるまで彼の岩の上に立つて物を思つて見たいと、思ふの、私は彼處が大變に好きだから毎日〳〵斯うして通つて往くのだけれど、夏ひとしきりは人が多くてね、あの折角の好い場所が淺草の觀音樣の仲店の樣になつてしまふのだもの、鼻紙だの、煙草の吸殼だの、蝙蝠傘でつゝいた跡だの、ステッキで敲いた疵だの、私はあれが厭で厭で……お前私の言つた事が解つて、

熱心に語つた姫は何時か頰に紅を潮してゐる、京は眼を丸うして聽いてゐたので、

『はい、もう姫樣の樣な方は世の中には御二方と無いんで御座いますもの、思召しますことも大したもんで人が澤山居りますのを賑やかでよいなんぞと思ひますのは、どうせ人間の屑なので御座いませうね、

と腑に落ちたやうな落ちぬやうな、

『それだから未だお前はいけないのよ、私の側に附いて居ながらどうしてそう茫然してゐるのだらう、

『ほんとうに自分でも愛想が盡きて居りますんで御座いますもの……あの姫樣、斯う申すとまた何で御座いますれど、もう金太夫もすつかり空になりました樣で御座いますし、武太夫にたつた一人僂麻質の御隱居樣が附添のお女中と毎日居眠りばかり爲ていらつしやるとか申します、此邊も此間までは緣日の

やうに賑やかで御座いましたのに…………、

と、猶續けたさを思ひ切つて無理に噤んで、京は再び此處よりは御供つらげに立ちすくむ、

『お前そんなに東京へ歸りたいかへ、

と姫は沈んで言つたが又氣を變へた樣に、

『如何近いといつたつて、さあ日が暮れるよ、早く湯元まで往つて來よう、さびしくつて氣味がわるければさあ手を引いてあげようか、

曇り日の雲の切目を不圖洩れ出でた午後の光を、羞明しげに美しう瞬いた二十の姫は、斯くて二十の侍女と手を引き合うて鮮やかに二人連れ立つ橋の袂、右手は險しい坂道で榛名通ひの山籠も此頃は絶えたのに二つが岳の蒸湯さへ人死のあつた後は閉されてしまつたので、おほよそ此頃は日に幾人此道を通ふものがあらう。左へ折るれば湯元道、道幅は狹からねど樹木繁つて月も星も射すとなければ土は常住の濕氣を保つて湯の花の香が魅するが如く立ち迷ふて居る、嘗て燈されたる瓦斯燈のぼつり〳〵と蕭凄まじう路を導いて居れど、人も無い新聞縱覽所には新聞の破片もなければ聲もない音もない、嘗ては俗めかしく人の騒いだ此邊、ほうづき提燈の蠟の流れの消えたは愚か鞦韆の綱も切れた、ベンチの足も朽ちた、ゑぐれた崖の下に沸き出づる温泉を小さい桶に溜めてある湯元までは猶些か遙か、其處は此處よりも未だ暗く此處よりは未だ濕つぽい、岩の間を縫ふ程は袂の尖が湯花に染つて前髪に湯氣が玉を爲すであらう、姫はさすがに裾重たげにしと〳〵と、さはれ嬉しげに向ふを望んだ時、京は忽ちものに驚いた。

『姫樣何者か居ります、

と震へ聲で京は逡巡をするので、

と見れば彼方の岩蔭に、ふわ〳〵と正しく白い形の動く樣にも動かぬやうにも見えるのを、暫時透した姫はホヽと笑つて、

『京の仰々しいことね、怪物かなんぞでも見た樣にあれはいつもの畵をかく方が散歩をしていらつしやるのではないか、能く御覽な、御肩にちやんと寫生の道具を掛けていらつしやる、

變化ならば又其樣の氣組みもあれ、目鼻の付いた人間と聽いて更に京は安堵が出來ぬので、

『然れどもやつぱりあの方じや氣味の惡いに變りは御座いません、姫樣あの男で御座いますよ、此間から姫樣のお跡ばかり付けねらつては、お出ましといふと必然彼の男が風にでも吹かれて來るかの樣に、何處からか何時の間にか來て居ては、後からそッと附いてきいきいするので御座いますもの、私もう氣になつて〳〵、私といふものがお附き申して居りながら、姫樣があんな者にお見込まれ遊ばしてはとそれは心配致して居る段では御座いません、やつぱり姫樣此處からお歸り遊ばして如何で御座います外には人も居りませんし、日も暮れかゝつて參ります……、

姫の聲は凛と響いた、

『いけないよ、ちやんと供をして來てお呉れ、彼れ、彼の方は畵家でいらつしやるのではないか、

『左樣で御座います、姫樣年功經た畵家は繪に魂を乘り移らせるとか申しますよ、やつぱりいくらか魔法を遣ふので御座いませう、薄氣味がわるいでは御座いませんか、

『失禮な事をおいひでないよ、彼の方々の爲さる事や又お胸の中はお前等に解つたものじやない、私はもう美術家の方と聽くと何うかして此方から願つてもお目にかゝつて御話を伺ひたいと思ふ、

『まあ姫樣は………、

と眉を顰めた京は最早言葉の出し様を知らで、口を噤んだまゝ切りに歩を早むる姫上を、見はぐつては一大事と詮方なげに從つて行くのである、

彼方の白き影は全く白シャツに白縞のフランネル紛れもない男の姿で、年頃は二十五六、三脚臺やらパンツトやら殘りなく用意して少し沈鬱の浮かぬ色をして伏目に湯元の上から石段を下りて來るのであつたが頓て近寄る女の足音を聽くと忽ち面を上げて活々と眼を輝かした、斯くて互に近寄ること十間五間滔滔と聽えるは湯の音、爪先上りの路を急いだ姫は流石に



息がはづむらしい、いつも休み馴れた處よりは少し手前の、河鹿の鳴くといふ崖の際のベンチへ腰を下ろさうと京が懷紙で塵を拂ふ間も待ち遠しげに、

『お丶草臥れた、』とほつと身を休めて息をつかれた其間に青年はずつと近寄る、姫の仰せの背きやうはなけれど無氣味な男を間近に京は氣が氣では無い近寄る畫師に眼を据ゑて、藤園家の姫君ともあらうお方に、無禮も有らば只は置かぬといふ念を込て居るらしいされど苦心も更心に水の泡で、ベンチの前を通り過ぎると思つた青年はつか〳〵と姫の側、ふわりと緋鼻緒の上へか丶つてゐる絹セルの美しい邊まで、紺足袋わらんぢ掛けのむくつけいを近よせたのであるもの、驚くまい事か、京ははツとして、蹲踞んだま丶圍ふ様に姫に添うたけれども再び更に甲斐は無かつた、青年は無雜作に押し並んで腰を掛けながら帽子を取る程の會釋はして



『大分お寒くなりましたな、
と突然に聲を掛けたを姫は莞爾と、
『左樣で御座いますことね、
と返した。向ふも向ふだがまあわられもない姫樣も姫樣、はしたない早速の御返答は、御知己か何ぞのやうに、それではお爲めに宜しく御座いますまいにと侍婢京の苦慮はひと通りでない、とも知らぬ青年は再び何か言ひたげにしたと思ふ時、姫は忽ち京に命じた。
『あの寒くなつて來たから、ちよつとお前御苦勞だが羽織を取つて來てくれないか、
此際此時飛でもないと、京は眼を圓くして、
『あの、お羽織を取りに參りますの、
『私は此處に待つてゐるからね、どうぞ早くね、
『けれども姫樣、姫樣おひとりでお置き申して……あのお寒ければいつそ御歸り遊ばしては……、
此處に至つては姫樣の御機嫌を損じる損ぜぬを思つてゐる限りでは無いので、言ふ間も青年を睨んで動かうともせぬ京は、近路をすれば六町にも足らぬお館へ、お羽織を取りに往つて歸つて來る足勞を決して厭ふなんぞのそれではない、
姫はせきこまれた、
『お前、私のいふ事をきいて呉れないの、
『いえ、決して左樣では御座いませんが、
と、重々恐れ入りながらも、

「それならば何うぞね早く取つて來て呉れないか、紫の被布の方にしやう、
青年は問答を聽いてゐるかゐないか、菊世界を吹かすこと夥しい、
「おゝ、そんなに仰しやれば參りますけれども、姫樣よくお氣をお附け遊ばしてね………、
せう事なしに立ち上つた京は、せめてもの眼配ばせをしたのであるが、姫は心附かなかつたらしい、立ち上つたもの丶更に裾の芥を拂ふやら袂の糸を引つ張るやらどうも果てしが附き惡い。
「京や、早く往つておくれ、
「はい、往つて參ります、
それではじめて叮嚀に辭義をして、十歩往つたが先づ振り返つた、ベンチの上の二人は行儀よく並んで畏りなく腰を掛けてゐる、二十歩往つて又振り返つた、姫は袂からハンカチを出して疊んでゐた、青年は煙草の灰をベンチの角で落してゐた、五十歩、百歩、百歩にして幽かに何事の無いのを見て取つた京は、やにはに見えも振りもなく恰も水に放した龜の子の如き手つきをして懸命に馳け出した、但し出來得る丈の短時間で馳け通しに馳け戻る算段。
向ふの角にちようど京の姿の消える頃であつた、ベンチの二人は居住居を動かして、先づ臆面のない姫は
「寫生は澤山お出來になりましたか、
ときく、すると實は先刻から再び話の糸口を見付けるべく思ひ惱んでゐた青年は嬉しげに答へて、
「いや折角東京から遣つて來ましたんですけれども、ねつから好い圖も取れませんので弱り切つてゐます榛名の方へも一週間ばかり往つて居りましたけれども何うも面白いのも出來ません、私はどうもこの湯元に執念が殘つてゐますんでね、溫泉といふ題で一つ書いて見たいんですが、場所は此處で好いんです

が、其どうも人物のモデルに困つて居りますで……、

『どういふ樣な圖になさるので御座います、

『左樣です、まあ奇麗な形の少女が裸體で岩蔭で湯氣のあがる温泉を浴んでゐやうといふのです、岩に凭れて半分身を拈るといつた樣な具合にと、下圖は疾うから出來てゐますんですけれども、何うも好いモデルが無くつちや、私なんぞは未熟極まるのですから、どうもその纏りません。

熱心に耳を傾けて居た姫は、

『それで、どんな少女なら宜しいのです、

『左樣ですなあ、まあ神の化身といつた樣な、見るからが高潔な、打ち割つたお話が失敬ですけれど貴孃のやうな方なのです。

青年は些か其頰を赤めたが姫は端然としたもの、

『それでは私の樣な者でもモデルになれば、貴方の御畫が出來るので御座いますか、

『それはもう、モデルさへあれば何う苦しんでも力限りの腕を振つて見やうと思つてはゐるのです、

青年の面にはうち明けた眞實が溢れて見える、姫はじつと見詰めてゐたが、

『私、それでは失禮ですけれども其處の岩の蔭で立つて見ませうが、私神聖な美術家の方のお役に立つのなら、今時衣類を脱ぎましたつて決して寒いとは思ひません。

と、青年は無言である、但し是れ程に感極まつたは生れて始めての彼れ、何と表情して感謝してよいやら如何に技藝の爲めとはいひながら、勿體なさが身に餘るとはこの事であらうと、其瞬熟々と思ひ浸みるのであつた、彼の姫の裸體をモデルにして、素晴らしい處女作が出來上つて俄に都下に名を擧げたと夢みた

もつい今朝の事である、怪しまれるをも構はずに、姫の外出を狙つては附き纏ふたも、彼樣が此樣かと肩つき、腕つき、衣の上から想像せんが爲めであつたもの。

「あゝ、御恩は死んでも忘れません、輪廓丈でも取らせて頂けば結構です、

「左樣仰しやれば私も滿足で御座います、

と、姫は手早にするりと衣服より脱け出でたかと思ふと、湯殿にでも進むが如く、其處か此處かと場所を撰ぶ青年のいふがまゝに、白き湯氣に身を纏はせながら格好よく岩蔭に立つたのであつた。

青年は今は一世に一度の得難い時と思ふが如く好き所に三脚を据ゑるや否や、此モデル對自分より外にはさながら天地萬物を忘れたかのやう。血走る眼に神佛を念じて畵面に筆を走らせながら、飽くまでも、離れて後の記憶にも留めばやと、モデルを急度、見詰め見詰めして居るのである。

間もなく遠くより馳け來る足音、又足音。

つい、納ひ忘れをしたので探すに手間取つた京は、息せき切つて走り付いたが、事の態にわッと云つたぎり呆れたのと息の苦しいのとでぴたりと大地へ坐つて仕舞つた、大切に胸に添へて居た紫紋縮緬の被布の土に引き摺るはおろか、卒倒しないのが未だしもといふ體、と思ふと、

「姫樣はお氣がお狂ひ遊ばした。

と泣き聲に叫んだが姫の側へ走り寄るとは爲で、とつかは元來し道へ走り去つたのである、迚も己が手一つには餘ると考へたので、家令石黒への御注進と出かけたのであつた。

經つこと時の三十分、眼の色變へて、京共々家令石黒の走せ參じた時は、既に青年の影もあらず形も無かつた。たゞ菖蒲の花の一輪咲いたと見えて、河鹿の鳴くといふ崖の際のベンチに、紫紋ちりめんの被布の

總を弄んで、天から降つたかのやうに姫がしとやかに在したのみ。
『まあ、石黒までが何事が起つて私を迎へに來たの、との仰せ。
石黒は、そら見ことかと強く京を叱つた、京は必死となつて其事實であつた事を辯じたのであるが、三代に仕へて忠勤を勵んで、藤園家の歴史を諳じてゐるといふ石黒が事實として聽入れる限ではない、勿論姫上は何事であると、ずんと澄していらつしやる、それで辯じ負けて身を揉んで口惜しがつた京も終には、
『それならやつぱり私が狐につまゝれましたのかしらと思つたのである、といふ。

大和ごゝろ

石川殘月

去年の八月一日のことなりき、和泉秀男は、朝早く起きいでて、近村なる古館に行き、實父より頼まれたる用事をへて、歸途村役場の前に來かゝりたるに、掲示場の前に、五六人の人が立ちて掲示を讀んで居た、秀男は何心なくそこに近きて、今しも張り出だしたる役場の掲示を讀み下せば、『第一師團第一聯隊歩兵豫備後備員召集相成候事　七月三十一日午後十一時三十分發令……』とあり、秀男は、二三度掲示を讀みかへして、足ばやに役場の門に入り、直に兵事掛の某を尋ねた、書記兼役の金井兵事掛は、眼鏡を鼻の先きにかけ、ふるぼけたる木綿袴をいめかしく穿ち、玄關に出でゝ、秀男に面會した、「イヤ和泉さんか、

と云ひながら、糸附の例の眼鏡を左の耳からはづして、右の耳にぶらさげた、秀男は默禮して、『金井さん私の召集令…………』と云ひもはてぬに、金井老人は、氣の毒三分喜び二分といふ樣な顔をして、『たつた今御宅まで使にもたして……………』『さうですか、今朝早く古館まで用達に出かけ、今歸る所です、いよ〳〵始まりましたな、何れ後刻別に役塲に參りませう』と云ひながら、金井老人に挨拶して、秀男は役塲の門をいで、更に召集の掲示をながめながら、腕に力を入れて、ステッキを横に握り、左の手で着物の前をたくりあげ、わき目もふらずに、足速に歸り去れり、片手に天秤を持つて、烟管を横さまにくはへながら掲示の前に立つて居たる、この村の作兵衛と云ふ老爺は、秀男を見送りながら、『あれは和泉の若主人だ、大方戰爭に行くのだらう、』秀男が家に歸りて玄關に入ると、實父の民彌老人は、召集令と今日の新聞紙とを片手に持ちて、あはたゞしく歸り來たれる秀男を迎へながら『秀男いよ〳〵始つたぞ、召集だぞ、直ぐ役塲に行け』秀男は召集令を一讀して、次いで父に用事の返事を濟ませて、母の針仕事をして居らるゝ座敷に行くと、其あとから弟の三郎も、妹のいく子も、又そのあとから頸の鈴をふりならして猫のタマヤも、六疊の小坐敷へ入れり、秀男は母と暫時なにごとか話して、自分の部屋の方へ行くと、又其あとから三郎といく子とタマヤと一列になつて行ッた、秀男は用箪笥から實印を出し、袴を着け、手帳を懐中して、父が新聞を讀んで居る客間に行くと、又それに續いて弟と妹と猫とが順を作ッて飛んで行ッた、母は簾のかげから聲をかけて『いくちやん、そんなにうるさくするんでないよ』

秀男は直に村役塲に行ッて、召集屆の手續をなしてかへり來て、明日の午後二時の出發に定ッた事を家人に告げた、其内に村内の親類の者や、知人などが交々きて、何れも出立を祝し、身の無事、武運の幸を祈りて、幾度か母親の袖にうれし涙をそゝがせた、

父の民彌老人は、夕刻から奥の小座敷に入りて、燭臺に蠟燭をともし、家傳の名刀を燈下に置き、打粉奉書紙丁子油などを出だして、名刀を切りに磨き居た、やがて刀を鞘に納め、妻を呼びて、二尺程の白縮緬をとりよせ、それにて程よく刀欄を卷き、麻の細糸にてゆはへ、座側に置いて秀男を呼んだ、秀男は父に呼ばれ、今しも書きかけた書面をそのまゝにして父の前に至り『御用ですか』老人は眼鏡ごしに秀男を見て、『秀男や、其方の出陣に、なにか善き引出物をと思ッたが、戰爭に行く者には、金もなにも無用だからこれ、これを其方に遣うと思ッて、今少々手入を致した所ぢや、これはな、御先祖が、三河出軍の際から大坂御陣の前後まで、目出度御奉公したわざものじや、――然し余が上野の戰爭で官軍に負けたのはこの刀の罪じやないぞ、それは例外だ――、中々切れるぞ、太平の世の中に、今頃この刀が用に立つとは夢にも思はなかッたが、若い者の面白い世の中になッた、これでやッてこい、戰死したら刀は返してくれ、今度は三郎にまたやるから、アハヽヽ、さううまくもゆくまい、主人と一所に戰場に埋められても、こんな片田舍でさび朽ちてしまうよりは、刀も滿足じやらう、明日は川向ふの園部と一所か……』秀男は名刀を父の手より受けて『頂戴致します、何より結構な……』と云ひながら、微笑を口邊にもらして、燈下に膝すり寄せて、靜かに鞘をはらひ、燒刄の匂を切先から鍔元まで幾度かながめ『どうも御手入まで充分に、私の細腕にはあまり立派過ぎて怖入りまする』と云ひながら鞘に納むれば、小口の合音が、錬鐵の鍔に響きてゆかしき音のしたるに、父は拍子をとつた樣に『ウヽ』と云ひながら秀男に向ひ『入營したら山路師團長に見せ、山路はその刀を知て居る筈じや、』

召集令の發せられた當日、耶蘇教の小倉傳道士と、當村の小學校々長、其他郡書記某氏などが發起者となりて、軍人奬勵會なるものを組織したるに、全村の有志家は、我も我もと入會を申込みて、夕刻までに

殆んど三四十名にも達した、其夜は有志者一同村會議場に會して、委員の撰擧や、其他出立見送りなどに關する種々の評議をなせり、この村の召集者とては、和泉のみにて、外には川向の他村に屬する闕部のみなれば、この村の評議はつまり和泉一人のためにするも同樣であつた、然るにこの會の議事は左の如くに決定して、それ〲の委員も定ッた、第一、敎會堂に於て從軍者の門出の祝賀を行ふ事、第二、村役場員村會議員小學校敎員生徒並に有志者は、從軍者を村堺の停車場まで見送る事、第三、從軍者のために乘馬一頭を用意する事、(但し村堺まで送るため)第四、從軍者の遺族は、本會にて充分に扶助保護して後慮なからしむる事、然るに、右の四ケ條を決定して、會員が散じたる後に、委員に撰定せられた村長、秋元藤右衛門氏と、當村の豪農三浦太郎兵衛氏との間に、ふとした事から爭論が始ッた、其は外でもない、右三ケ條めの乘馬用意の一件である、秋元村長の意見では、出軍者を送る乘馬を出すは、村民にとりて甚だ名譽な事であるから、何れも村民は乘馬の差出方を望むも、其撰定に因る故、寧ろ村長所有の馬を出す事と定むれば、村民に、別に恨みそねみもなからうと云ふ意見である、然るに三浦老人のいふには、それは村長の我儘である、この樣な事は決して權勢づくめでやるべき事でない、村中の舊家より馬を出だす事に決すれば、大に村の風儀にとりてよろしい、且ッ自分の家は、村中の舊家であるから、自分の馬を差出さなければならぬ、若し村中の舊家たる余にとりて、これ程の特待が出來ぬなら、自分は村會議員の職も辭する、堤防修繕の寄附金もやめにする、小學校の運動場に貸與してある地所も、村から返してもらはなければならぬと云ふ非常な勢である、秋元村長は、三浦に馬を出されては、實に村民に對して村長たる面目が立たぬから、村長を辭すると云ふ意見を主張して、中々何れに決する見込もない、大都會の人は、こんな議論の衝突を聞いたら、馬鹿げた事だと思ふかも知れぬが、其は誤解である、愛國心の性質や人の意地と

いふものは、其地方に應じて種々である、村は村だけ、市は市だけである、故に秋元三浦の兩人の樣な非常に熱心な爭論は、一小村の有志家としては、最も立派な爭論で、うぶな愛國心のあらはれである、決局三浦の馬を出す事に決して、村長も我を折りてそれに同意した、それらの手筈が定つた所で、傳道士と校長が通知委員となりて、其次第をその夜の中に和泉方まで通知した、

和泉方では、村の有志者の厚意と熱心とを聞きて、民彌老人を始め、秀男の母も、不肖なる秀男が軍人の數に加ッてそんな待遇を被ぶるかと思ふと、老の身にはうれし涙のみ先立ちて、中にも秀男は、村民の義擧に非常に感動され、通知委員の前に、我知らず手をつかへ、數ならぬ不肖、軍人の肩書を持ッたばかりで、左樣なる御待遇、なんとも御禮の申樣もムりませぬ、有志諸君へ何卒よろしく……』その言もはてず、身には冷水をあびせられた樣な感覺がして、心には、うれしき樣な、またかなしき樣な感情がむらむら動いてはては、悲喜一度に浪を心面に起して、一滴の涙は『軍人の本分を立て……』と云ふ一言と共に、一坐を感動せしめた、秀男は西京の某學校を卒業して、後東京に於て志願兵士となッた程の人物ゆゑ、勿論愛國心もないではない、然し召集令を受けても、手の舞ひ足の踏むところを知らずと云ふ樣な非常の敵愾心も愛國心も起らなかッた、夫故に別に心から喜んで出軍を望む心も起らなかッた、さればとて自分には、平素の決心もあるから、別に戰爭に行くのはいやだとも思はぬ、ただ國民の義務、軍人の義務だと思ふ冷やかな心ばかりで、國のため同胞のためと衷心から感激して、喜び勇むと云ふ樣な心は更になかッたのである

然るに通知委員なる小倉傳道士と、今井校長より村民の厚意を聞き、有志者の熱心な奔走を報知せられた時、かれは始めて軍人の價値を知ッた、全村の有志者が自分のために擧ッて優待厚遇の事を相談せし事を

知りて、かれは始めて、村民の總體が有する愛國心のいかに盛なるかを認め、自分の心を自分で責め、この不肖の身がどうしてこんな名譽を被るかと思ひ、この恩を報ゆるにはいかにすべきかを思慮した、其夜秀男は寢床に就きても、渡淸の事、戰爭の事よりも、『村中の有志者』『村吏敎員の見送り』『乘馬』その爭論』の事など幾度か同一の思念を繰り返して睡れなかつた、幾度か寢返りをしながら、これらの事を考ふると、この一身は自分のものでなく、自分が生長したこの村のもの、この故郷の山と川とのためには、一身をころしても、國民の本分を立てなければならぬとまで思ひ込んだ、この時の秀男の心は、國のためよりも、寧ろ村のために一身をさゝげんとしたる愛國者であつた、これは廣き國よりも狹き村は、かれらの心に愛すべきもの、したはしきものに感ぜられたのである、かれは遂に有志者の心に感激せられて、この恩義のためには、身を粉にしても盡さなければならぬと決心した、

翌朝母親なる國子は、下婢とども〴〵、常よりも早く起く出で、今日の仕度にいそがはしき樣子、秀男は今日の出立の事を忘れた樣に、七時頃になつても寢て居る、母親は幾度か秀男の寢間に來て、そのねがほを見ても、秀男が安心して家に寢るのは今日ばかりかと思ふと、女の胸のせまき心に、せきくる樣な思がして、起されもしなかッた、その中に時計は遠慮なく七時を報らせた、民彌老人は、一子が出陣の今朝も平常の樣に、茶座敷の前の庭を掃き、松や萩などの落葉をあつめて居たが、こなたをふりむき『秀男がまだ起きぬか、まう七時だに、、、起せ、、』、母親は秀男の寢間に行き、今日は常よりも尙やさしき小さき聲にて『秀男七時ですよ、、』『はい』と云ふ一聲に身を起したる秀男の心中には直に、『村の有志者』『乘馬』『村民の厚恩』など云ふ觀念が、それからそれと連りに流轉して居たが、今朝は自分でさへ不思議に思ふ程の元氣が出た樣に思はるゝ、昨日は年寄ッた父母や弟妹などに別るゝのが、何となく悲しかッたが、今朝

は心が勇み立ちて、昨日とかはッて、自分の方から、父上や母上を慰めやうと云ふ心さへも起ッた、何だか村中の人が自分と共に出發するやうに思はれ、戰場に行かば、身に相應な手柄を立てゝ、村の人々を喜ばせたい、めでたく凱旋して村の人々に譽められたい、父上や母上に戰爭の手柄話をして聞かせたいと云ふやうな種々な希望も起ッた、また氣の精か庭の景色なども常にかはッて見事にみえ、午後の二時になるのが待遠でたまらぬ程であッた、母親は、『御國のためとはいひながら、あれまでに育てゝ、人も我も立派な男だと譽める樣になつたものを、萬里の異域に戰爭に遣るかと想ふと、何だかほいなくて、昨夜もやすき夢を結ばず、朝飯たべたうもなく、物思ひに沈みて、人知れず裳衫の袖に、子を思ふ親のなさけの聖き涙をそゝいで居た、心よわくてはならぬと、自分の心をはげましても秀男の顔を見ると、幼少の時のことから二十二歳の今日までの事が心の鏡に現はれて、村の小供を集めて、戰ごつこをして遊んで居つたのがほんに昨日のやうに想はるゝに、今日は戰爭の門出かと思ふと、世の中が夢のやうにおもはれ、秀男が村の人々にも感心さるゝ程に孝心のふかゝつたのも、もしやこの別れが永のわかれとなりて、父母に先立つせいではないか、またあれ程までに纏つた緣談を、祝義は來春になつてすると云ひ出したも、心の虫がそんな事を知らせたのではあるまいか、あれがもしもの事があつたら、なんとせう、新婦と定たばかりの三浦の定子どのも出發と聞いて、さぞ驚いたであらう、さぞかなしんで居るであらう、寧そ子をもたなかつたなら、こんなうきめも見なかつたらうにと、心で泣いて居つたが、自分で心をとり直して、こんな女々しき心を出してはならぬ、母親たる者が愛子の出陣をなきかなしむやうでは、家門の耻辱である、御國のはぢであると、決心しては、わざと笑顏をつくりて秀男をなぐさめながら、腹が冷えぬための胴卷、持病のリーマチスがあるから、チルの下ばきなど、種々出立の仕度をして居つた、民彌老人は、開化したとい

ふ者の、この樣な時には昔時の事が思ひ出でられ、長子の初陣に晴天功名手柄を立てさせたき心より、出陣相應な儀式をあげて、立派に出で立たせんとて、客間の中央には、三寶の上に勝栗、祝昆布などをもり土器、銚子を順序よく置き並べて、秀男は父と對ひて上座にすゑられた、客間に居ならんだのは、秀男の兩親と妹のいく子弟の三郎と外に三人の親類であつた、民彌老人は出陣の子をはげまさんとて、よわき心などは露ほども見せず、殊更に喜ばしさうな顏をして、一座のものゝ心をなぐさむるもの、心中には恩愛の烈火が鐵石の膽を燒き爛らす樣にくるしめ、顏で笑ふときは心で泣いて居つた、この恩愛のこゝろをあくまで持ちながら、子をなぐさめ、子をはげまさんとて、心のおくにふかく秘して、その顏に現さぬを明かに見てとつたのは、只秀男一人であつた、各々の間に水盃がまはつて、式が終ると、別に酒肴が出でて、心ばかりの門出の祝をして居つたが、門前は急かにさわがしくなつた、其中に門前で『和泉君萬歲』と呼ぶ聲が一座を驚かせた、秀男は國光の名刀を左手に提げて『それなら皆樣、隨分御達者で、、、父上も母上も御老體を……三郎もいく子も丈夫で勉强をせ』と云ひながら、三郎といく子の頭を撫でゝ『おとなしくして御いで、兄さんは御土產を持つて歸てくるから』とは云つたものゝ、心中では生別死別をかぬるかも知れぬと想像した、この時三郎はなにをおもつたか『御兄樣、私といくは唱歌を一ツ歌ひませう』と云うて、妹と弟がかはゆいやさしき聲にて歌ふを聞けば『君が代は』のめでたき一曲、無心な小兒が兄の出發をうれしく、思うてか、無心で歌ふやさしき聲を聞きては、滿座の人々は、皆袖をうるほした、秀男は、戰爭から歸つて來た時、また歌てくれ、上手に歌つた、母上御褒美をやつてください』と云つて、再び三郎といくの頭をなでながら、左に提げた刀の袋で目をふき、につこり笑つて弟妹に別を告げた、秀男が家人に送くられて門を出づると、待ち設けたる村民は『帝國萬歲』『和泉君萬歲』と三呼して、右左から

其周圍をかこんだ、この時、昨日天秤を持ちて掲示場の前に立つて居た作兵衛どのは、『送征清軍士第一師團第一聯隊二等軍曹和泉秀男君』と筆太に書したる一旒の旗を以て、眞先きに立つて居つた、秀男は群集に送られて、村の中央に在る會堂に行きて堂門を入れば、村長、校長を始め數名の有志者は堂の玄關の側に立ちて秀男を迎へた、秀男はこの意外な鄭重な待遇に遭つて更に一層の感觸を與へられ、身に電氣にでも感じたる樣な感覺がした、其より會堂にて小倉傳道士の簡短なる祈りと說教とあり、村長は一村を代表して祝文を朗讀し、出軍の式終つて、いよ〳〵出發となつた、

馬はいさましく嘶いて、名譽の兵士を乘せて會堂の門を出で、數旒の國旗を持つたる有志者等は、その前後を擁して、村堺の停車場をさしてねり行けり、路傍に見送る村民は、かう盛に送らるゝのを見ると、誰れでも戰爭に行きたくなるな……』甲『さうよ和泉さんは將軍樣のやうだぜ』乙『三浦さんは馬を出して鼻を高くして送つて行つたの』甲『作兵衛めが威張つて旗を持つて眞先に立つた風を見たか』乙『和泉さんは日本刀を持つて行つたの』丙『あれが名刀だと云ふ事だ』『さうか、』

停車場の側には、小學校生徒が整列して居たが、秀男が馬を下りて其前に至ると、聲いさましく唱歌を歌うて、次に『和泉君萬歲』を呼んだ、和泉はほろりと一滴の淚をそゝいで『帝國萬歲兩陛下萬歲』を絕叫すると小學生も見送人も一同に其に和した、秀男の兩親は、この盛んなる見送りの樣を見て、感激せられてうれし淚にかきくれて、秀男は立派に名譽の戰死を遂げて、この恩に報ゆる樣にと心で祈つて居つた、秀男もとかくの言もいはず『帝國のため同胞のために、この一身を見事犧牲に供して、和泉の出でた、この村の名を天下に擧げて、この小學生なる未來の軍人に龜鑑を遺して、この恩に報いやうといふ、鐵石の樣な決心をなして、村民と家人とに別れを告げた、一聲の滊笛を、靑田をそよぐ風にひゞかせて、停車場を

立ちたる汽車の窓から、頭を出して帽を振りつゝ、故郷を後に出發したる秀男は、昨日召集令をうけた時とは眞に別人の樣に變つた、昨日は國民の義務で止むを得ず戰爭に行かうとした秀男、今日は、我から進んで一身を國家のために犧牲にせんと決心した秀男であつた、實に村民は秀男を一夜半日の間に、かくまで感化させた、國民は實に軍人の教育者である、

諸英雄の夫人

◎東郷大將夫人鐵子　偉勳赫々全世界を壓する東郷大將夫人は、其名を鐵子とよび、今年四十二と聞けど、容姿頗る端麗にして秀麗なり、料理、裁縫、生花、音樂の諸技に長じ、家政の任を一身に整理して毫も紊さず、傍愛國婦人會評議員として、東走西奔、婦人社會の傑才を以て稱せらる、殊に夫人の身を卑うして、家政に服するの一例は、其洗濯物をさへ自らするの一事にあり、

◎瓜生中將夫人繁子　夫人は益田孝氏の令妹、婦人社會に重んぜらるゝこと既に世の知る所也、夫人は明治四年岩倉大使に從つて外國に赴き、大山夫人津田梅子孃と共に留學多年、米國女子大學卒業生の學位を擁ひて歸り來る、かくて久しく女學校に教鞭を執られしが、良緣を得て瓜生家の人となり、家庭整理の大任を全うして、中將が偉才を助くること頗る多し、

◎梨羽少將夫人　夫人は不幸にして今はリマウチス病に罹り、歩行甚だ惱む、然れども裁縫、料理、育兒の事一も怠ることなし、

◎島村少將夫人管尾子　海軍將校中の美人、生家は山内侯の家士近藤某氏なり、年齒二十五歳の女盛り、貞淑温良の德、知るもの之を稱せざるなし、

◎三須中將夫人しさ子　上品にして如才なきは、他に其比を見ざる令夫人、婦人界の交際家とは誰も知る所なり、

◎山屋大佐夫人貞子　丹羽海軍大佐の令妹、能く舅姑に事へて貞淑の聞え高し、容姿艷麗、交際頗る圓滑なり、芳紀正に二十八、

繪畫教授法に就て

野口小蘋

我流儀では、初めに四君子を習はせまして、運筆の稽古をさせます、夫故に成る可く長く四君子を習つて吳れる方が宜いのでございます、四君子が好く書けるやうに成つてから、花草折枝類を敎へます、それから筆が動くやうになると、淡彩を敎へ、それから段々寫し物をさせます、寫生の出來る力がつけば、寫生もさせます、さうして成るべく古人の書いたものを見るやうにさせます、人の書いたものを鑑識することが出來ぬやうでは、迚も繪は書けませぬから、成るべく古人の書いたものを見せたり、寫すことの出來るものは、寫させるやうに致します、さうして試して見ますに、同じく繪を習つて居る子供でも、自分で繪の書ける者は、古人の書いた繪を見せても此處は良く書いてあるとか、こゝは良くないとか言いますが、私が平生見込が無いと思つて居る者は、其鑑識が出來ませぬ、夫故に繪を習ふには、どうしても鑑識がなければなりませぬ、己が書くことばかり知つて居て、人の書いた繪を鑑識することの出來ぬやうな者には、迚も繪は出來ませぬかと思ひます、

又繪を敎へるには、唯繪ばかり書けても、落款を書く位置を知らぬやうでは困りますから、是も敎なへ



ければなりませぬ、最初の中は落款を書く位置も分らず、縦し書いても餘り拙筆では肝心の能く出來て居る繪を打壞すことがございますから、繪を習ふよりは少しは學問もし、書も習つて貰ひたい、さうして落款の位置の治まるくらゐに書いて貰ひたいと思ひます、將來見込の無い人には申しませぬけれども、是ならば將來物になるだらうと思ふ人には、其事を話しまして、一寸繪を書いてもそれを私の前へ持つて參つて、どこへ落款を入れませう、どの位の大きさにしたら宜からうと云ふことを相談させるやうに致します、又餘暇があれば、學問もするやうにして貰ひたいと申して居りますから、少しはやる人もあるやうでございます、流儀によつてはさういふことにチョットも構はぬ流儀がございます、どこへ落款があつても、大きくても、小さくても、少しも構はぬ人があるやうでございます、それは必ず人が非難して居るやうでございます、あの社中は繪は巧いけれども、落款の拙いのには閉口するなどゝ云ふ人がございます、私は子供の時から學問は致しませぬが、學者や文人と交りまして、こんな落款を書いて置くと仰しやることが耳に這入りますから、自然自分も注意するやうに致しましたから、門人にも其事を心掛けたら宜からうと云ふことを申すやうになるのでございます。

我が繪を習つたのは親が好んで習はせたのでなく、私が四歳ばかりの時天然痘に罹つて、無理を云ふところから、筆くれ、紙くれと言ふのを、親が宜しく〳〵と云ふて與へられた時、是が梅だとか、これが菊だとか云うて、形狀も何も爲しませぬが、筆を持ことが嗜きでございますから、書いて居りました、私が繪を習ひ初めたる頃は、今より四十二三年も前のことでございますから、また世間には學校もなし、唯手習師匠とか何とか云ふものがあるだけで、普通の婦人は裁縫でも出來れば宜しいくらゐでございまして、婦人に繪を習はせる者は少ない時でございましたから、親も固より私に繪を習はせる積りはござい

ませぬで、お前繪ばかり書いて居て、どうするかと申しますから、繪書きになるなどゝ云うて居りましたが、段々人の書いた繪を見て書くやうになりまして、親も承知して繪を習はせるやうになりました、それから初めは大坂の人で今の流儀と違ふ人に手本を書いて貰つて、習つたことがございましたが、是は僅のことで、多くは古人の書いたものを見て習つて居りました、

それから、少し譯が分つて來てから、京都の日根對山と云ふ人の門に入りました、其頃まで自分勝手にても筆を持つて居りまして、少しは繪も書けるやうになつて居りましたから、折々繪を書いて先生の所へ持つて行つては論を聞き、こゝは惡いから斯うしろと云ふて敎へて貰ふやうにして居りました、日根が沒しましてから後は、誰に就て習つたと云ふ譯はございませぬが、私は何も繪に就て天禀の才があると云ふでもございませぬし、當時は勿論繪の學校があるでは無し、師匠を取つたところが、幾日々々に稽古をすると云ふ譯でも無し、唯師匠の所へ繪を書いて持つて行つて、こゝは繪にならぬ、斯う云ふものでは無いと云ふ話を聞くだけで、私が今小供に敎へるやうに、手を取つて敎へるのではございませぬ唯土佐風を書く人の所へ行くと、私等の書く時はああしないが、土佐派ではあゝ云ふ風に書くかと云ふことに眼を着けて、覺えるやうにしました、それは即ち自分の工風でございます、只今では三四年稽古して居つてもチョットも出來ぬ人がございますが、それでは困ります、昔は今日とは世の中が違ひますから、師匠からさう明細に敎へて貰つたのでも無い、自分がどうかして繪を書きたいと云ふ熱心から起つて出來るのでございますから、自分の流派でなくても、人の書く所に注意して、あれはあゝ書くものかと云ふことを見て、着色などを覺えたのでございますから、唯師匠から敎はるばかりでなく自分の働が無くては、迚も本當の繪を書く者にはなれぬと云ふことを時々娘などに話します、

今日は上手下手は措いて、若手に大層繪を書く人が出來まして、令孃方などにも繪を習はせるやうになつて流行物のやうになりました、美術學校などに入つて專門に繪を習ふ者は別でございますけれども、さうで無く慰み半分に親御も繪を習せたいと云へば、自分も習ひたいと云ふ者が澤山でございます、其中には非凡の上手も出來ませぬが、一寸筆を持つ婦人が大層出來まして、私の子供の頃に婦人で筆を持つ人は、大垣に江馬細香と云ふ人がございました、是は書畫共に出來、又詩も作りました、それから京都の梁川星巖の妻に紅蘭と云ふ人がございました、此人は詩は固より出來ましたし、繪も四君子ぐらゐは書きましたが、今日から見れば感心した繪ではございませぬ、又御一新後では奥原晴湖が出まして、一時文人畫のやうなものを書きましたが、此節は又密畫を書くやうになりました、先づ婦人で繪を書いたものはそれくらゐのもので、其外世間で知つて居るやうな人はございませぬ、今日では繪を書いて專門にして居る女子も大分ございます、其他慰みに繪を學ぶ人は數知れずでございます、尤も晴湖さんなどは私共より年長の人でございまして、他へ嫁せずに修業した人で、自分が望んで繪を習つたのでございますから、少し變つた人でございませう、今より四五十年前では親に勸められて繪を習つた人はなからうと思ひます、其頃は婦人は裁縫を習つて置かなければならぬとか云ふことで、縱令其子が嫌ひでも親が勸めて少でも敎へたものでございませうけれども、繪を書くとか、詩を作るとか、歌を詠むとか云ふやうなことは、自分から望んでした者の外はございませぬから、隨つて熱心に稽古をして、良く出來る者が現はれたのでございませう、今日はさうでなく、當人の嗜き嫌ひに拘はらず親が勸めて繪を習はせるのでございますから、習つても出來ない人の澤山あるのは當然かと思ひます、

昔時淸國には繪を良く書いた婦人がございましたが今日の淸國の人に逢つて話を聞きますと、婦人で繪

を書く人はございませぬ、支那人の婦人の繪を書くことを好みますが、一寸花卉を書く人があるくらゐのもので、山水などを書く人はございませぬさうです、私共へ支那人が繪を書いて貰ひたいと云つて賴に來る時は、必ず山水を書いてくれと云ひますから、どうして山水を好むかと云うて聞いたところが、支那には山水を書く婦人は無いと申しました、

此節は密畫々々と云つて、密畫が流行りますが、繪書きに取つては却つて密畫の方が書きよいのでございます、一寸古人の繪があつても、密畫なればどうか眞似が出來ますが、粗畫では一寸眞似をしやうと思つても出來ませぬ、世間では密畫々々とばか、り申しますが、餘り密畫でも面白くございませぬから、五十年も經つたならば、又餘り密畫でないものが流行るやうになりませう、併し眞黑なツクネ芋のやうなものを良いと云ふのではございませぬけれども……眞直な線を引くに、唯眞直に引けば眞直に出來ますが、大腕力でズウット眞直に引いたものを眞似をするのは、弱い手腕では出來ませぬ、

菊十題



（其六）殘りの稲垣

私共が數十年間繪を書いて居る中には、隨分困難なことに出逢つて、どうして斯う云ふやうに出來ないかと思つて嫌厭になることがございます、今でもさう云ふことがございますが自分で出來ないと思ふ時は、技倆の上る時でございます、其時は自分の書いた繪を


御諸學校
用品
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No.5
Urajimho-cho
KANDA.
TOKYO
Manufacturer
of Various Appliances
for Gymnastic &
Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 一、八八〇
其他各種御注文に應じ
製造可仕候
ピンポン改良室內テニス（旅行用）
一號一箱 一、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル 上等一臺
拾參圓 並等一臺 九圓半
號大人用
御用
體操器械
体育用品
東京神田裏神保町五
S.A.
安藤商店
484
テニス用ラケット一組
一號大人用 一三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
新人用（一號） 六圓
同二號 七圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓 參拾錢
二號 拾壹圓 七拾錢
三號 九圓 五拾錢
四號 八圓 貳拾錢
五號 七圓 貳拾錢
六號 六圓 貳拾錢
テニス組一張 一、七五〇ヨリ二、九五〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

見るのもいやになつて、突込んで置いて、一二箇月の後それを出して見ると、そんなに悪い繪ではございませぬが、其時は悪いと思ふのです、それが爲に中頃で止める人が往々あるのでございます、

私共のやうに繪の事を専門にして居ると、繪の事を忘れたことはございませぬ、餘所の家に行つて居つて、庭に鳥が飛んで來るを見ても、それに氣を注け又夜分でも寝られぬ時は繪のことを考へ出して、あれはどうしたら宜からうと考へることが往々でございます、其位に苦心して書いても、一枚として難の無い繪はございませぬ、書いてしまつて後こゝは斯うするのではなかつた、あすこはあゝするのではなかつたと思ふことがございますが、それを一々書直すことは出來ませぬから、其儘にして上げますが、自分で考へれば瑕瑾だらけでございます　（終）

◎女子職業の捷徑　として最も早く卒業し最も多く月給を得らるゝは簿記法とタイプライターと料理法を學ぶにありと云ふ

婦人と音樂

岩崎秋郊

音樂といふと、我邦では、一口に之を遊藝といひ、又其演奏者を藝人といつて、一般に之を賤む風がある、勿論これは、歴史上已むを得ぬ事情もあるが、結局日本の俗樂が、從來科學として研究されず又音樂とは如何なるものであるかを知らないからである併し科學として研究されなかつたから、日本の俗樂は最早音樂でないかといふと、決してさう云ふ理屈はない、却つて彼の西洋音樂などより優つてをる所がある、抑も音樂は美術中でも最も高尚なる地位を占めて居るので、其學理も至高至遠である、併し今茲に、さう云ふ難かしい事を列べ立てる考へでもなく、唯婦人には、是非とも音樂の素養がなければならぬ、又夫にはどう云ふ風の音樂が、適當であらうかといふ事を述べやうと思ふのである、此事を述ぶ

る前に、音樂の目的は、果して何であるかと云ふことに付て、僅か計り言つて見やう、音樂の目的と言つた所で、別に複雜な關係を有つて居る譯ではない、唯吾人に愉快なる感覺を與へさへすれば、夫で役目が濟む位なもので、外に別段深い目的はないものである、蓋し音樂は吾人の人情、風俗、習慣、言語等を體とし、吾人の感情を生命として居るので、例へば嬉しいとか、悲しいとか、可笑しいとか、愛らしいとか、恐ろしいとか、所謂喜怒哀樂、一切の情念を支配するのが特色である、そこで人は感情の動物であるから、此音樂を聽くものは、勢ひいろ〳〵の感情を衝かれて、知らず識らずの裡に、佳境に入るのである、就中音樂と愛情とは、洵に密接な關係を有つて居つて、此事を委しく述ぶるには、更に數百頁を費やさなければならぬ、西洋の或哲學者は、音樂と愛戀とは精神の羽翼なりと言つて居るが、これは洵によく穿つた說であらうと思ふ、故に音樂が人身を支配する勢力も亦、中々偉大なるものであることは、東西の歴史上屢ば散見する所である、然るに我邦には男女を問はず、音樂の耳のないもの、音樂を嫌ふものが隨分多い、耳がないといふと、なんだか變に聞ゆるが、詰り音樂を味ふ丈の機能を具備して居らぬので、之を聽いてもさつぱり感じがない、夫こそ、馬の耳に念佛である、是等は正に人類の至美至妙なる情性を缺いて居るので、恁ういふ人物は、丁度病人の樣なもので、天賦の美を味ふことが出來ぬ、寔に氣の毒なる次第である、

既に述べたる如く、音樂は感情を資本として居るのであるから、情に於て最も濃かなるのは、婦人であり、又婦人は殆んど美を以て凝まつて居ると謂つても宜しい位で、どうしても美術たる音樂は、婦人に附いて廻らなければなるまいと思ふ、又もう一つ大切なことは、家庭の快樂といふ事である、近來家庭といふ事に就いては、大に社會の注目する所となり、家庭教育だとか、婦人教育だとか、頻りに喋々する樣に成つて來たのは、頗る賀すべき次第であるが、

其末だ音樂と家庭との關係に就て論ずる者が寡いのは、甚だ遺憾である、

家庭は圓滿を缺いてはいけないので、夫には一家内に快樂が持續せねばならぬ、勿論其方法は種々樣々あるが、詰り靄々たる一家團欒の愉快を得ようといふには、どうしても一家擧つて一勢に等しく娛むことの出來るものを選ばねばならぬと思ふ、夫には音樂を擱いて、恐らく外に適當のものはあるまい、先づ音樂は之を奏するものも、之を聽くものも、共に愉快である、又一家擧つて之を奏することが出來れば、猶更結構である、例へば妻君が三絃を彈き、娘が箏を奏べ主人が唄ふとか、或は笛でも吹くと云ふ風に往けば、こんな愉快な事はあるまい、從つて餘計な支出も防ぐことが出來るから、自然と經濟でもあり、實に一擧兩全の策であらう、尤も家庭を修むる上に於ては、或る程度迄は、學問も必要であらうし、裁縫や割烹の樣なものも缺くべからざるものであるが、結り音樂を加味しない家庭は、假令其他のものが、都て遺憾なく、具備されてあつて、所謂秩序整然として居つても、一向に光彩を放たない、恰も光線の入り惡い家屋の樣なもので、如何に壯麗なる裝飾が施してあつても、何となく陰氣であつて、所謂不愉快なるものは、自然玆に胚胎して居る、而して此不愉快は、人生の最も忌むべく、最も恐るべきもので、先づ不愉快を生み、不愉快は、更に各種の不結果の動機となつて、不平、憤怒、疾病、不道德、不經濟、不量見といふ樣に、漸進して、家庭は遂に紊亂に陷るのである、然るに音樂は或は精神を柔らげ、或は心氣を活潑する、唯一の妙藥にして、不平のとき、怒るとき、愁ふるとき、悲しきとき一度び彼の瀏喨たる音樂を奏し、或は之を聽かば、心機忽ち一轉して、心神自ら爽快に復し、更に勇氣を增倍するのだから、音樂は又、人類活動の機關に注油するのであつて、其効用や蓋し偉大なりと謂ふべしである、此を以て、音樂は須臾も吾人に缺くべからざるもので、少なくも家庭の科目としては、最高

の地位を占めねばならぬ、そこで婦人は先づ、家庭の主婦たるべきものであるから、快樂揚々たる家庭を作るのも、又は乾燥無味なる家庭を作るのも、總て其掌中にあるのであるから、此の點に就ては、充分注意を請ふのである、西洋では、上流社會は勿論、下等社會に至る迄も、例の所謂、音樂の耳を有たぬものは、殆んどない、從つて優美なる、愉快なる家庭を作ることも出來、又實際に作られてある、日本では恁ういふ風の家庭は、極めて稀に見る所で、此點は實に西洋人が羨しいのである、

音樂の効用は先づ此位として、次にどういふ風の音樂が、最も適當であるかといふことに及ぶとせう、那樣いふ音樂が最も適當であるかといへば、彼の教育音樂の如きは、本問の範圍ではないから、暫らく措くとして、先づ現今の有樣では、日本固有の音樂が好いか將た又、西洋音樂が宜しいかといふことに歸着するのである、勿論、各其の好む所のものを選ぶべしだが、日本人には矢張り、日本固有の音樂でなければなるまいと思ふのである、日本固有の音樂といつても、雅樂の方は、漸く頽れて居り、之は一般の音樂としては、寧ろ不適當であるが、先づ在來の俗樂であらう、初め日本の音樂は、專ら上流社會に行はれ、中頃から、中以下の社會に移つてから、大に發達して來たのであつて、所謂俗樂が其結果である、これは中には、隨分惡いものもあるが、概して恥かしい曲はないといつて宜しい、然るに、近來西洋音樂が輸入されてから、日本の俗樂は、野蠻だとか、ヤレ鄙猥であるの、風教を害するのと、口を極めて非難する者が輩出して來た樣だが、是等は恐らくは、西洋の事物とさへ言へば、如何なるものでも宜しいかの樣に考へ、深く彼我の長短を研究もせず、所謂迷信的灰殼連ではあるまいかと、疑ふのである、何となれば、彼等は、無闇と罵倒を極むるのみで、其何が故に野蠻であるか、又那邊が鄙猥であるかといふ點に就ては、寸毫も說明が出來ないのである、又彼等は、實際西洋音樂を聞いて、果して其

眞妙を解し得るや否やを疑ふのである、蓋し美術としての音樂は、決して自然に存在するものでなく、人爲的に人類の感情を顯はすに過ぎぬものであることは前回既に述べた通りである、而して此感情の本家本元は、何であるかといへば、即ち人情、風俗、慣習、言語等であらう、此人情、風俗、慣習、言語等を異にして居る、外國人の手に成つた音樂が、如何にして日本人の嗜好に適しやう筈がない、少なくも、西洋の粋を抜いた者とか、若くは幼時より、彼の地で人と成つた者にあらざる限は、之を聽いても、到底其趣味を解し得ない、隨て愉快がない、快味を感じなければ、日本人には最早音樂として何等の價値もないのである、尤も西洋音樂は、學理的に研究されてあり、又記譜法の完備して居ることなどは、遙に日本に優つて居る所で、是等の事は、我日本音樂の發達上、大なる參考となるべきものであるけれども、西洋音樂其物が、直に日本人の快とし、妙とする所でない事は、兎に角事實であらねばならぬ、故に音樂といふものは決して世界的のものではない、世界的音樂を望むのは、猶萬國の人情風俗の一致を謀る様なもので、到底不能に屬することであらう、

そこで俗樂といふと、極めて範圍の廣いもので、澤山な種類と、多くの流派とがあつて、一々玆に示摘する譯には往かぬが、大體、義太夫とか、長唄とか箏曲、常磐津、清元、新内、歌澤、富本、一中、河東、薗八、荻江より流行唄、源氏節、浪花節、デロレン祭文等に至るまで、悉く此俗樂の範圍を脱せぬであらう、又樂器の方から言つて見れば、先づ箏、三弦、胡弓、琵琶、八雲琴、須摩琴、皷、太鼓、笛等である、扨此中で、何れが最も婦人に適當であるかを研究せねばならぬ、

近來三絃を賤むの傾向がある、之は三絃の曲には卑猥な文句が多いから、或は風敎を害するとか、或は品性を傷ふといふので、長唄や清元や新内や常磐津といふ風のものは、餘り上流社會に流行せぬ様になつて來た、成程之は一理ないでもないが、大體に

於て左程不都合は有るまいと思ふ、蓋し文句は果して那邊迄之を制限し得るやといふ事は、頗る難問であつて、殆んど極端に走つて居ない限りは、人々各其の意見を異にする所で、決して一樣でない、西洋音樂でも、恐くは文章に申分ないとは言へまい、併し日本の俗樂中、特に淸元、新内、常磐津等には、比較的聞苦しき文句が多いので、是等は漸々改删すべきものであるが、先づ夫迄は、他に高尚なものもないのではないのだから、是等を選らんで用ゆれば差支はないのである、次に又是等の曲は子女の教育上、非常に有害であるといふので、絶體に非認するものがある、これは餘り神經的であらうと思ふ、抑も小兒の唄ふのは、全く無心であつて、未だ文章を味ふ丈の、能力がないのだ、殊に日本の俗樂は、概して勸善懲惡を基礎にして居るのであるから、少しく物心付き其文意を諒する樣になれば、猶更思ふるに足らないと思ふ、心中物を敎へたから必ず其子が、之を見習ふといふ理由はない、却て戒心すべき筈である、若し之が爲め、子女の前途を誤まれりといはゞそは大なる間違である、之は決して音樂の罪でない、却て他の方面に、智育上間然する所があるのである、斯る人物は、假令心中物を習はずとも、不結果に終るのである、唯だ文句の餘り聞惡いのは、直接に弊害があるから、此點は充分に注意すべきである、

夫から音節は何うであるかといふに、之も少しも不都合はない、義太夫でも、カッポレでも、ホーカイ節でも、都て音節に高下はない筈で、唯だ、乞食の唄うて來るものだから、賤しいとか、藝人の演ずるものであるから、恥辱だとかいふに過ぎぬので、所謂聯想であるから、之は努めて避けねばならぬ、音樂といふものは、決して、斯る狹隘なる、窮窟な譯のものでないので、人情は上下の區別がないと同樣に、貴賤貧富の區別なく、相通じて共に娯むべきものが、音樂であるのだ、西洋音樂で、オトラリアーといへば、最も高尚なものとして歐洲一般の認むる

所であるが、其源に遡つて見れば、之は極めて野鄙な社會に流行せしものから採つたのであるさうである、唯だ日本の音樂に遺憾とする所は、唄の音節に、男女の區別を設けてない事である、元來音節には、自然音聲の强弱高低が伴うて來るもので、此音聲は、男女各々、其最高最低の度を異にして居る、男女の兩性は、決して音聲の强弱高低が同一でないことは明である、故に本來は、男子の唄ふものと、女子の唄ふものと、格別に作られてゐらねばならぬ、又同一の曲でも、男女で、各其領分を受持つべきものであらう、日本にはさう云ふ風の事がないから、男女各其妙所を發揚することが出來ないので、現今の所では、致方がないが、此點は、太に改良すべき所で、我俗樂の發達上、大に注意すべき點であらうと思ふ、

終りに樂器の方は何うかといふに、これも在來の箏三絃が最も適當である、因て樂器と作曲とは、決して獨立のものではなく、作曲といふものは、樂器を基として之に當嵌めたのであるから、那樣しても兩兩相離るゝ事の出來ぬ關係を有つて居る、長唄や、義太夫や、淸元や、新內等に、ピヤノ、オルガン、喇叭等を用ゐ、又三絃や、箏や、胡弓や、鼓を用ひて、西洋音樂を演じたら、果して何うであらうか、之を要するに、日本の俗樂は、如何なる方面から、觀察して見ても、日本の音樂として、毫も非認すべき點がないのみならず、寧ろ、之を奬勵し、益々之が發達助長の途を講ずべきものである、

關守の茶の湯

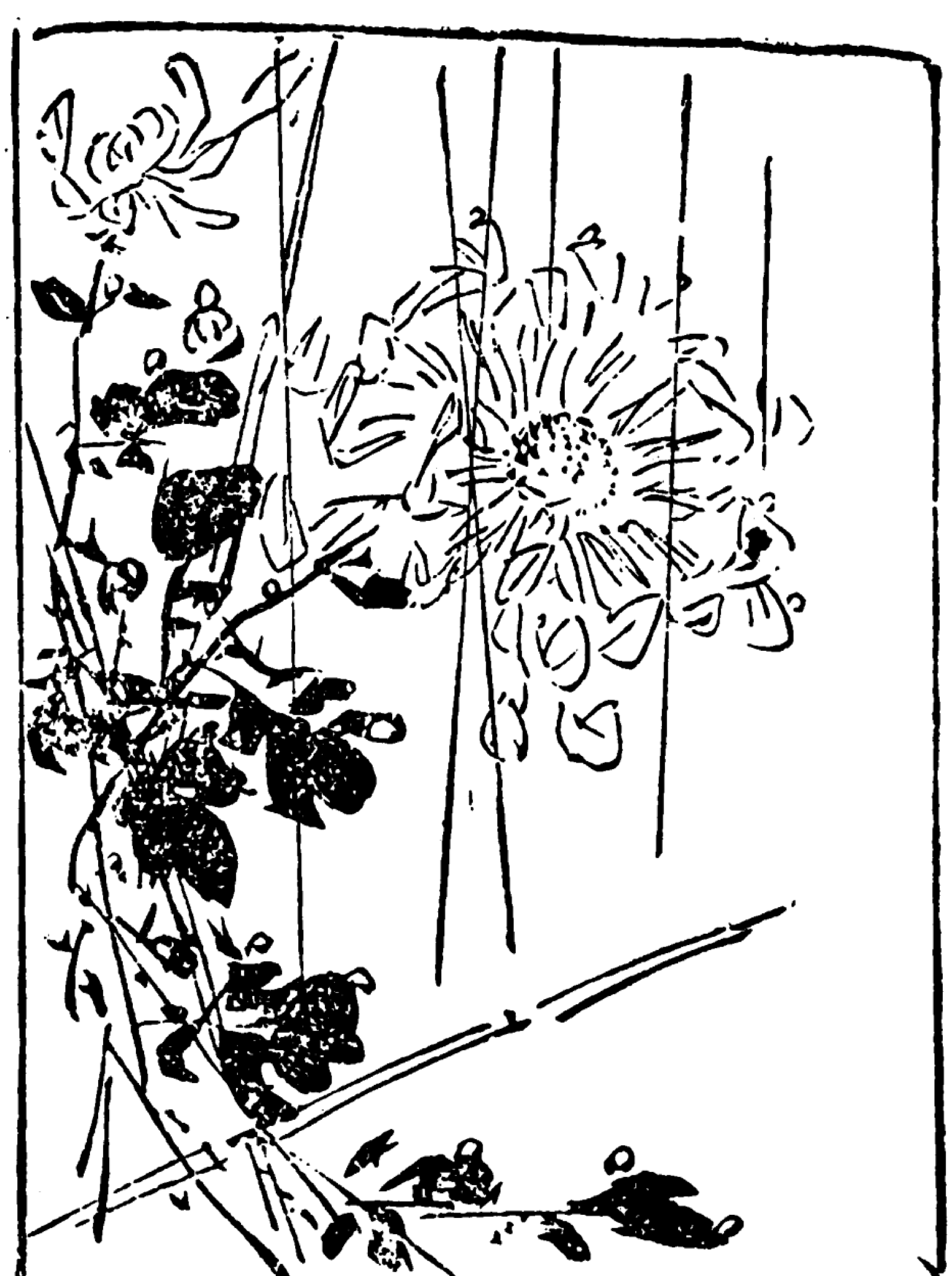
茶道利休流家元　正瓢庵宗行

◎金森宗和曰く、藥茶壺をクヾリの際にころばして置くことありと、

右クヾリの際に壺を置くに、客人習ありと云ふ、クグリをあけて壺ある時、主人を呼出して壺を床へな

をし玉へ、それまで座敷へ入るべからずと云ひてクグリ戸をたつ、或は貴人の亭主ならば、小姓を呼びて云ふべし、必ず床へ直させて、座敷へ入りてよし、亭主直させずしては右の置處徒事なり、此の如く置きては、必ず亭主も控え居ものなり、これは秘傳とあり、橋本久甫と云ふ人、此の如く壺をクヾル際に、傳授する客人手水に出し間にクヾリ、眞中の鴨居に舟を釣て、花を入れて置かれしも、亭主を呼出して最前の如く床へ直させ、座敷へ入るものなりと云ふ、右の二葉を關守の茶の湯と名づく、されど宗和は關守と云はずして、大事秘傳といひしも、後世この二葉を關守

菊十種



時雨の露（其七）

と云ひ傳へり、クヾリの口に壺を置く事理に叶はず、萬一これあるとも、提持て床の前疊に置て、亭主出でたる時、入口に通り難き故、壺を置直して、床へ上玉へと云ひて直させてよし、これ利休流の意なり、利休居士座敷にて茶を取出す折柄客來り、クグリの際に壺ありて通りにくき故、床へ直させて其客座中へ入ることなどありと、宗旦の云はれしを聞觸れて、之を習と云ふ、剩へ大事秘傳と云ふとは見えたり、殊更クヾリに舟を釣りて關守の茶湯など云ふこととあり、亭主は客人の機嫌よきやうにし、客は亭主の仕よきやうにするを、茶の

湯の第一義とす、然るに理もなきことをして悦ぶは、不遠慮とも下手とも云ふべし

◎或人曰く、荒木道粉と云ふ破家者茶湯して、利休居士、薩摩屋宗仁など振舞し時、しとと云ふ女房を床の間の正面に飾りて置しが、利休クヾリを明けて座敷へ入らんとするに、女房の居るを見て、床の品はかねて見知の品ゆゑ、勝手へ引取り玉はずば座敷に入るまじくと高聲に云ふ、然るに薩摩屋宗仁脇よりクヾリの中を暫く見る、利休曰く見ぬものなりと、宗仁かやうの名物重ねて見る事あるまじとなり、此の如き物語ありて、少し聞觸れて茶壺も右の通りか、

◎利休居士曰く、茶の湯には我秘藏せし道具は何によらず床に置ても見するは、客人へ馳走の心なり、これに依つて道粉床に女房を置きしが、言語絶えし不作法の誤りなり、

▲▲▲▲▲▲▲▲

○文部省の凱旋唱歌　文部省にては開戰以來我が海陸軍の大捷毎に其の戰役に關する唱歌を作りて汎く發賣したるが今回凱旋の歌曲を主とし附錄として旅順開城奉天附近會戰日本海々戰の三歌曲を編纂したる小册子を發行したり、

挿花の趣向

薪瓢庵宗水

活花にいろ〱變りたる趣向あり、たとへば竹の筒に松梅を活けて、松竹梅を見する如きは其一なれど、極めておもしろき趣向のものを左に列記すべし

◎祇園　油さしにむかごを活けたる◎墮獄　釜に蓮をさしたる◎西念　ふせ鉦に千日紅のしゆもくごめ◎三曲　琴の裏の糸をとり出す所へ、蕗と茗荷を活けたる◎聖代　宵座器に鳳凰竹と唐桐をさしたる◎用心　鐵置筒にひまはりを活けたる◎登山　新年ふくべにかるかやをさしたる◎走鬼　柊に鬼薊を取合して◎除夜　桝に杖うめもどきを活けたる◎雨乞　白丁徳利にひあふぎ◎廣慶　麥わら笠に朝顏◎梅枝　手水鉢に山吹をさしたる◎霜市　鮓桶に薑と蓼の穗◎魯生　旅枕の花活の名に粟の穗◎還城　笙のすひ筒にとりかぶとをさしたる◎御慶　挾箱の蓋に藤

袴の扇どめ◎亂綿　ひき臼に蕎麥の花を活けたる◎曾我　鎧に○。○。おもだかを挿たる◎夕凉　船にすゝきと唐辛を◎女川　飯つぎに女郎花をでんがく串どめ◎雛鳥　ほか○。○。○。ひに小菊と桔梗を◎親方　がんどう提灯に葱を◎順○。○。峯　法螺貝にすゝかけ◎谷戸　鳥籠に八朔梅とたに○。○。わたり◎長助　大鉢に松と濱菊を◎阿妻　金巾の花○。○。器にあざみ◎三叉　船に宮城野の萩と紅葉を◎野兎　船に柳と澤桔梗◎有政　龜の香爐にめど萩◎日參　提灯に水葵三もと◎菅原　御所車の花いけに松、梅、櫻、◎小鳥　鮑貝にみせはやぐさ◎四谷　馬盥○。○。にあやめの轡どめ◎蕁來　狐わなに野菊をさしたる◎長松　机文庫に紫苑◎夜泊　泊船(花器)に楓葉◎空也　茶筅にひさごをいけたる◎大森　土瓶に海棠をさしたる◎播州　釣瓶に菊九輪を缺皿ごめ◎七塵　はんぞうに、つねの花を楊枝どめ◎能事　うすばたに菊の耳搔どめ、猶かゝる趣向にてとりどりに活玉ふも一興なるべし

小川直子刀自の著書

貞女として女子萬世の模範となるべき小川直子刀自は、學殖また深く、畏くも常宮周宮兩殿下に仕へて、多年御教授申上げ、御覺さへいとめでたし、こたび本誌記者中川愛氷のすゝめにより、高輪御殿にて兩殿下に進講したる修身話二百餘を『高輪御殿進話錄』と、また出仕の餘暇女子作文の栞にもとて筆を執られたる通俗文、記事文を『雁の音づれ』『新編女子記事文』と題し、二冊の美文として、大阪明昇堂より發刊することゝなりたり　（廣告欄參看）

◎婦人記者倶樂部例會　去る二十七日牛込區河田町九番地東京女子美術學校にて先月の例會ありたり、當日の土産演說は『元祿に關して』、時間は一人て演說三分、

◎幸運の一少女　米國の珍客ハリマン氏は、先に擊劍に堪能なる一少年を米國に連歸る事にしたるが、今又一少女の不幸を憐み、此をも連歸る筈なりといふ、其は大阪東區安土町細井市次郎の長女ヌイ（十四）といひ、同人は氣質も優く學びの道にも疎ならずと、末いかなるものにかならむ、賴もしく思はるゝにつけても、ハリマン氏の義俠に涙こぼるゝなり、



江馬細香女史の小傳

文學博士　横井柳城

細香は、美濃國大垣の醫師江馬蘭齋翁の二子にして、通稱をきやうといふ、ゆゑに名を裊と稱し、號を湘夢と稱しき、しかれども細香の字を以て稱せられたり、幼より書畫を好み、詩をよくし、星巖の妻紅蘭とならび稱せらる、しば／＼京師にのぼりて、紅史を山陽翁よりうけ、畫を玉潾和尚、浦上春琴などにつきて習はれしが、後一格を出して、氣韻頗る高かりしかば、大に世人にもてはやされき、書も堪能にて、唐山の古法帖を窺はれしが、後遂に其堂に入られき、ことに墨竹は其妙を得て、平安の四竹にも勝れりと云ふ、呉興自ら其畫に題したる句にいふ、石如二飛白一木如レ籀、寫レ竹應レ須二八法通一と、細香の書畫を見るもの、また其書畫一途に出づることをしるべし、文久元年九月四日、年七十五にて身まかられたり、がて大垣の禪林寺なる父の墓側に葬りぬ、細香終身人に嫁せず、只筆硯を以て自ら娯み一生を終れり、年いとわかゝりし時、京師に遊びて山本梅逸の宅にやどられけるが、數日ならずして、その帶のはしやぶれしかば、梅逸の妻あやしみて問ひけるに、京師にいづるとて心いそぎしまゝ、つくろはで

まゐりしかば、かくはやぶれしなりと答へられしとぞ、この一事にても尋常の女流にあらざりしことをしるに足れり、細香の歿後、其甥某詩稿をあつめて湘夢遺稿と題し、上木して世にひろめらる、その遺稿一つ二つ

偶作

西東交友不㆓情疎㆒。老懶爲㆑堆未㆑報書。多少回音裁製了。春醪一盞覺㆓心舒㆒。

海屋先生留㆓旅窓所㆑挿梅花㆒而老

一枝分贈到㆓寒房㆒。偏喜江南遺意長。風雪陽天人已遠。可㆑憐瓶裏獨餘㆑香。

題書

山々收㆑雨夕陽多。江水平鋪浸㆓翠螺㆒。三兩漁村垂柳外。牙頭舫子貼㆓春波㆒。

母子の情

文學士　上田敏

この世に在りて、女の眼に映るこよなきものは、其初子なるべし。神、全能の批准をもて眺め、完全の祝福を下し給ふいと聖なる光景は、いち早く母子の間に燃えいづる愛情にして、その一方は、唯默然として、感泣、接吻、睇視のほか、終に何の言葉も無し。抑も此愛に達する種々の行程には、多くの思想情念ありて、之に基きたる明智こそ人界の最も美妙なるものなれ。先づ始に來るものは戀愛の大活劇なり。時歷るに從つて益々清淨の性を帶び、汚濁の質を失ひゆけども、其本性に必須なる結果として、戀愛は常に有限無限の間に搖動す。見よ、女性が自尊の矜は、げに貴は貴なれど、苟もすれば、迷誤の染習あるを免かれず、物語めきたる其心情の哀も、氣高くはあれど、これ亦常に相應しからず、漸く明けそむる情操の曙は、其指し仰ぐ理想の境には、え達かずして、又久しく保ち難かり。萬人の女性が、妙齢にして親ら閲歷する心動、恐怖、憬恍の大暴風を思へ。これ眞に造化の大法を踐み守るに他ならねど、そは亦淸濁併せ有したる自己の體質に基きたる

なり。肉を離れて、無邊涯の界に上らむとするも、終にこれ肉ある一の生物なり。人間の女なれば心弱く瑕多し。又神の女なれば、直立して天を仰ぎぬ。既にして男女兩性の温柔相思は起り、此世の春の踰越の大節會も果てぬれば、さきの性慾は位高まさりて、此情の玄奥より、靈鳥の焚けて又甦る如く、更に深き、更に心ときめく、更に聖なる一大神祕にぞ現はるゝなれ、これ、はた、歡喜にあらず、寧ろ安息の怡しき靜寧にして、さきの泯び易き經驗を噬み盡しぬべし、女性の深厚なる情を促して、向上の途に宛も心の神の變形する如く、燦然たる紫摩金色の態を脱して、かの翅あるものたらしめ、曙の奥に入り、無際上天の神壇に上らしむ。人間相思の情は、素より神の嘉し給ふ所、若し教法に依て之を淨めなば、光明の階なるべく、更に進んで、つゆばかりの淨化を要せざる聖愛に至らむ。これは、地上至聖の情なり。神・人性を通じて、顯著に自らを現し給ふなり。

女人大衆は、常に此變化を閲歴す。げに人間の光榮なにものか之に若かむ。神、また、此聖情の萌芽を女人の妙齢に近く置きて、夙にこの至聖なる訓練を授け給ひて、豫め貪婪なる墳墓の呑噬に備へ給ふこと、天意の靈妙實に讃む可き哉。獨り悲む可し、年若くして、白玉樓上の人となり、この光榮ある特權を返附するもの多きは。而も母子親愛の樂園に其初果を味ひし者亦少からじ。

此事につきて自家觀察の一端を述べ、女性の一顧を得むと欲す。人々心せよ。

即ち斯の如し。吾が見聞に上りしおほかたの例を擧げむに、己が兒と絶えず親しむこと難しとばかり、上つ方ならぬきはの女にとりては、其一生の樂しき時は、求婚の歲月にあらず、雙棲の初期にあらず、却つて心神を練磨する人げなき小室に坐する時なり母は終日家に殘りて、僕婢は邸内の隔りたる處にあるべく、又、さる者のたえて無かりせば更に善し。傍に在るは唯一人の侶のみ。幼き初子といふ天人

は裳裾に縋りて、歩も辿々しく喃々たる言の葉は、更に覺束なし。影の形に隨ふ如く、母に縋り、母を追ひて、其慈眼より、はためく稚心の養をとりて、楓なす纖指の觸るゝ處、密かなる悅樂の顫動を母に送らむ。朝夕に、此一人を友とし、若くは、同じ樹の生立ひとしからぬ彥生、まだ幼年の美を帶びたる三兒に圍まれて、かゝる樂園の榮耀に近づき得る多幸の女人は、自らは、識らざることあるも、一生のいと聖なる日を送るなりけり。夕されば、上最高の顯職を帶びたる人より、下は、かいなでの日がせぎに至るまで、種々の階級を通じて、夫は家に歸りて、男子の廣き智力にふさはしき思想を傳へ、事業を論じて、妻の心をや慰めむ。此時小兒、(小兒等)は小さき床の内に熟睡しつべし。さて翌朝も、常の如く日華やかにさし上れば、夜がもて來る團欒を前にひかへて、長々日の樂を思ひめぐらすに、これまた心情の經緯を織り交へたり。げに音靜かなるこの愛こそは萬にたちまさりて、神の惠み給ひ笑み給ふけしきなりけれ。〔ド、クインゼ遺文〕

閑窓情話（一）

愛氷散士

情の極粋

祇園の茶汲女百合子君は、容姿才情双美で、實に心憎きまで女らしき女である。多くの公卿高家の公達が、この茶汲女の爲に、うき身を窶すのを辭せぬのであつたが、一も節操を左右し得たのがなかつた。されどこの君も素より濃情の人、瘦浪人德山君を春雨に紹介せられて、小說中の人となり、子まで設け、幸運は德山君が立派な武士となつて、己が故鄉なる江戸に、令夫人として伴はるべきに至つた。德山半之亟君は糟糠の妻を愛重し、この幸福を永く分たんと欲したのであるが、百合子君は瘦浪人としての德山君が配たる身分なれど、所謂歸參叶ひたる旗本の

若旦那の妻たるには適せぬと謙退し、即ち夫の名譽を重んじ、張さけんばかりの胸の苦しみを忍び、德山君をして本意なからしめ、求めて片戀の身となり、娘お町を無理に申受けて、それを德山君の形身として愛育されたのである、氏なくして玉の輿に潛上を極める醜業婦などとは世界を異にした談で、其の心情の美しさ、敬服の外はないのである。その教育を受けた娘お町は、成長して大雅畫伯の令閨となり、愛情濃かなる夫婦の手本となられたのである。

情と利慾

名はこゝに記するに忍びぬのであるが、拙者の知れる家にて、素人下宿をして居る女主人がある。娘二人はよき家に嫁し、家に二人の娘と一人の息子が殘つて居る。二人の娘は生計上餘儀なく電話交換局に通はせ、この姉妹と母親が働いて得たる少からぬ黃白は、當年廿六歲になれる息子殿の學資となるのである。この家はよき親戚を持ち、賴みさへすれば、否これらの親戚から進んで仕向けて來る世話をも、悉く謝絶して、母子三人が一人の息子殿の成業を樂しんで居るのである。然るにその息子殿の出來のよろしくないことは、實に至れり盡せりで、其風采といひ擧動といひ、ごろつきの見本として遺憾なく、母や姉妹が血の涙も、蚊の欠伸ほどにも感ぜず、書籍と辨當箱は伊達に持つて、惡所に惡く遊んで廻はるのである、はじめは親戚も友人も意見をしたのであるが、更に些の効能なく、遂には子の放蕩より親の馬鹿なのが氣に喰はぬとなつて、親戚の大半も、この息子殿の爲に絶交の姿と成つたのである。然るに女主人なる母親は、それ等の事には少しも頓着せず、この手の付けられぬ息子殿を、學問を以て世に立てさせたいといふのである、到底行はれぬことは自覺して居らぬ事もないらしいのであるが、如何にしてもあきらめられず、この放蕩兒に殉じて、せずともの苦勞を重ねて居る。他人まで見兼ねて、枝ぶりわるき櫻木は、といふ例の妹脊山を說いたものもあるが、山上憶良の子にまさる寶なしを、今の息子

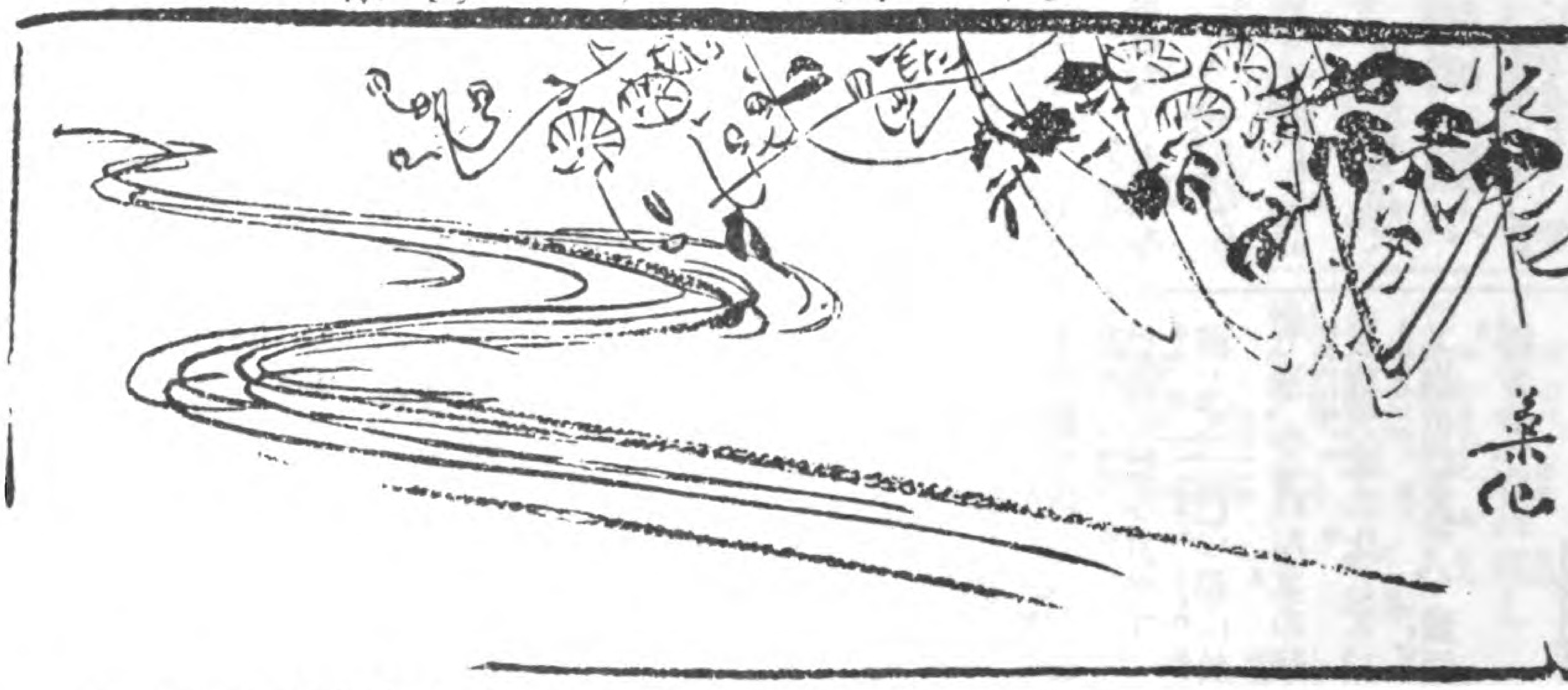
殿に應用して、千萬金の富も子に代へられぬと、更にこの放蕩兒に愚痴をこぼさぬのである。その養育の善惡は第二として、親としての心術實に尊きものである。拙者はこの女主人が、世の子を喰ふ左團扇的父母（子の愛を殺いで富家に嫁せしむる如きもその一例）の教訓ともなるべく、この世の中に苦勞して居る如く思はるゝのである。

情と黄白

三百年來の假名文字の名人として、千蔭翁の洒脫には及ばざるも、それ以上の筆致があつて、當代肩を並ぶるものなきは、多田親愛大人である。大人去る四月十八日世を辭せられ、現時敬服すべき人は、僅に大口鯛二氏位のものである。然るに風韻氣骨に乏しき、判下的千榮的假名文字の盛んに世に行はれ、その筆者の得々たるを見ても、甚しく哀れに感じられるのである。で先年大人の筆蹟を廣く永く傳へたきものと、これを兼て知れる書肆濱本明昇堂に相談に及んだ。然る處中々贊成とは云はぬので、幾度も思返したのであるが、勸めに勸めて其意を動かし。遂に明昇堂主人は大阪より上京することになつた。拙者は大に喜んで、早速同道、大人を兼て聞知れる向島の寓に訪ねた。實は大人とはこの時初對面で、拙者の心中を語り、習字帖の揮毫を賴んだ。案に相違、大人は腦病になやめる故を以て辭せられ、殆ど取付く島を失うて、大人と濱本氏と中間に、進退谷つたのである。さりながら誠意の貫徹せぬことはあるまじ、とあまり進まぬ濱本氏の前に、極めて進まぬ大人に、再三懇請して、漸く先生のお宅に明日參上すべし、それまで考へさせて貰ひたいと、いさゝか有望なる言葉を機會に、其門を辭したのである。實に人情は不思議なもので、書けぬとなると、濱本氏は大人に書いて貰ひたいといふ氣が進んだ。さて翌朝に至つて、大人は約を違へず、柴扉を叩かれたのであるが、大人は一葉の短册を示され、この故を以てと揮毫を謝絶せられた。其歌は『世の中は、いざひき舟の、さがり松、氣やすくおくる、老のとし

月』といふのである。されど拙者は懇請止まず、遂に道の爲死何かわらんとまで追及した。大人暫らく拱手せられたのであつたが、先生の言面しろし、予にお世辭を並べて書かさせんとせしもの幾人ありしかを知らず、されど命掛の仕事をせよとは初めてなり、宜しいお受合申した、さりながら毎度云ふ病をもてる老人なれば、出來る所勝負の催促なしに願ひたし、といふので漸く承諾せられた、即ち濱本氏にも其趣を通知した、時は去る明治三十四年三月の事であつた。それから屢大人を訪問をして、ますく親密になつたのであるが、依賴した揮毫の事は一度も互に口にせなんだのである。其年もやがて暮れんとする頃、濱本氏が上京せられたので、同道して大人を訪ねた、決

第十圖（其の[illegible]）時の流水



して催促の意味ではなかつた。然るに大人は快く百十餘枚の揮毫を出して漸く出來したり、とあつたので、るまでもなき日本一の好文字。濱本氏は有難しとあつて早速風呂敷中の物にした。さて此に問題の起つたは、この謝禮である。近來俗受のする判下流假名文字でも、相當の揮毫料を遠慮なくせられるのであるから少くも三百金は納めねばならぬ、濱本氏は心得てこれを封し、微志を大人の前に致した。大人目を圓くして、予は中川氏の懇請によつて命掛の仕事をしたのであつて、決して謝禮を受けやう爲ではない。殊に當地にて幾度となく此種の依賴を受けたるを悉く謝絕したのであるから、これへ聞えても、多田は金さへやればな

女鑑新聞

紀元二千五百六十五年、西暦一千九百四年、
明治三十八年十一月三日
◎定價　女鑑の景物にして、女鑑の讀者には自然ロハ也◎廣告料一行十五字詰　金貳拾錢　但し四の面に限る
發行兼印刷人　紫式部　編輯人　清少納言
發行所　東京築地　株式會社國光社

論説

奥山學問

カタバミ生

一日、知れる人を訪れて、他行の歸りを待合せる時間つぶしに、獼猿などすめる、淺草の奥山に行く、

（一）玉乘

小供と赤毛布とは面白き取合せなれど、淺草公園はこの二者の爲に甚だ賑はしく、兎に角に、氣取ることを知らぬ、無邪氣の人の足を留むるは、東京にてこの所第一なるべし、

見せんとするもの、聽かせんとするもの、聲のあらん限りを絞りてそれぞれ客をおのが小屋へ招きつゝあるなかに、必ず一度は呼留らるゝものあり、而してこの公園なる奥山に、足を曳く者の餘興として、第一といふべきは玉乘の藝當なり、この興行所二つあれどいづれも大差なし、その日くゞりし小屋は、十二階に近き方のなり、玉に乘れるもの多くは小娘にてその顔の言合したらんやうに、現今教育界の女大家に似たるもの多かりしには、頗る奇異の感を起さしめたりき、彼等は人間中極めて不仕合の子と生れて、餘義なく此藝を覺えさせられたるにて、一人ならず二人ならず、多くの一座よくも教へたるものかな、よくも習ひたるものかな、一擧一動膽を冷すべき藝を、其確かなるに安心して、笑ふて見らるゝに至れる、其教へたる人に、其目的の感服せられぬものあり、その習ひたる人に、同情の念を注ぐべきものあれど、彼等が賑やかなる囃子につれて、左もおもしろげに演藝する所、人生の悲慘を其場面に集めたるものとは見えず、予は彼等の己が運命に安んじてその藝を研き一分時も客に對して嫌惡の顔を見せず、熱心に其藝を演じて、己の務に於て間然する所なき、これを其の顔に似たる女子教育大家に比して、其得色に於て其遜色に於て、幾何の差數を生じ得るや。

犬吠えて見返る門や冬の月

文苑

子守

野川南嶺

夕暮告る鐘の音に、家路に歸る子守子の、互に歌ふ聲聞けよ、子守する身の憂辛さ、叱る母じやに咽がる子、目に稜立る父じや人、誠の親に語れ共、忍ぶが汝の勤めぞと、云れて今日も歸さるゝ、變らぬ人の子なれども、我身はいつも襤褸衣服、纒て世をば渡るなり、主の抜子は髪結うて、好い衣召て魚食べ、お羨しさやお身の上、早う大人にわれなりて、縫針仕事糸つむぎ、かひこを飼てはた織りて、髪も島田の高髷に、結て語らん子守せし、今日を昔の事にして、



百十四

社交

交際場裡の三名花

戰捷國は、此に都下の婦人界に向つて過去幾倍の活動を促しつゝあると同時に、明治式幾多の女學校また頻りに有爲名望の才媛を出しつゝあり、此に記さんとするは、近時の貴婦人界中、絶世の美人として傳へらるゝもの、一は九條公爵世嗣道實氏夫人にして跡見女學校の出身、二は舊土佐藩主山内豐景侯爵夫人にして、華族女學校出身、三は子爵田村丕顯氏夫人にして同校出身なり、

▽九條直子夫人　今年廿五才、東本願寺の令孃にして、最も畫を能くし、和歌に堪能の聞え高し、嘗て東西の華族社界中の美人として選に當り給ひしとか、目下愛國婦人會の理事として、立働きつゝある貴夫人中、翠帳紅閨裡に人と成られし姫君とは思はれぬほど淡白にして、而も平民的なる、九條夫人を措きて他に求むる能はずと、某上流夫人の實話なり、加之辯舌は頗る爽快にして、絶世の美人なるより、貴婦人なるより、貴婦人界にては、同夫人を以て、第二の鍋島侯爵夫人として、欽慕措かざる所なりと、

▽山内禎子夫人　今年二十五才、東伏見宮家より御降嫁あそばされし御方なり、『各種の團体より會長になりてくれろなど、御依頼がありますけれど、私のやうな年のゆかぬ者が……と申して斷つて居ります』と其謙遜にして人と語る、更に城府を設けず、而も平民的に何事も能く語り給ふ所は、到底金枝玉葉の御生れとは思はれぬ程なり、前九條夫人と共に美人の譽れ高し



嚴島の秋

▽田村貞子夫人　故佐野常民氏の令孃にして今年二十四歳、頗る快活の質にして、才氣縦横能く來客の意を迎へて反し給はぬ上に華族女學校時代、夙に既に才色双美の婦人として聲高かりき、如上三名花こそ、實に我國の美を飾るものなれ、

雜報

◎芝戰時婦人會　にては去九月中、全區内出征軍人遺族の極貧者六十五名に對し、金九十七圓五十錢、普通貧困者二百五十一名に對し、二百五十一圓を贈り、又新橋着の傷病兵百六十一名に手拭一筋と、卷烟草一袋宛を寄贈し、區内戰死者十二名の葬儀には、各金弐圓宛を贈りたりと、

◎神田婦人會　去る三日東京座に於て發會式を舉行し、幹事片桐夫人開會を告げて、君が代を吹奏し會長秋元子爵夫人の式辭朗讀幹事竹澤里子氏事業の報告をなし千家知事の演説尾崎市長並に愛國婦人會東京支部を代表して、千家男爵夫人の祝辭等あり、終て餘興に移り盛會なりしと、爾後同會は大に活動しつゝあれば將來大に其成績の見るべきものあらん、

敍任

栃木縣立宇都宮高等女學校教諭　吉野清三郎
任鹿兒島縣立高等女學校教諭

休職愛知縣立第三中學校教諭　佐藤正純
任山口縣立德基高等女學校長

山口縣立德基高等女學校長　福迫龜太郎
依願免本職

休職岐阜縣師範學校長　大久保介壽
任埼玉女子師範學校長

雜報

◉米國公使夫人の挿花　同夫人は日本の人情風俗を好み、先頃は美麗なる日本服を新調し、夜會の折など着用して出席さるゝが、先月來よりはまた〳〵生花の稽古を初め熱心に勉強なし居るとか

◉東京女子教育會　神田區錦町三丁目の同會は、裁縫家事中等教員受驗科に、塚本はま子、島田俊雄其他數名の講師を增聘し、尙別に第二回講習會を開催して、校務を擴張する由。

◉授產會の創立　軍人家族にして生計不如意なるものに對し、永遠に授產の道を講ぜんとの目的にて、牛込區內の貴婦人諸氏により軍人家族婦人授產會は設立せられたるが、發起人は金錢と勞力とを惜しまず、先月一日を以て市ケ谷仲の町五十二番地元陸軍軍馬補充部本部跡に設立したるが既に百名內外の工女申込あり、第一着に密針器械の使用法を敎授し居れりと、

◉廢兵に對する美擧　戰傷の爲不具癈疾となりし者は、當然國民より特別の尊敬を受くべき權利あるに係はらず、公衆をして之を識別せしむる方法なきより、却て陵辱を受くるが如き事ありてはとの懸念より、愛國婦人會員中には、之に一種の名譽徽章を與へ常に屋外に於て佩用せしめ、其名譽の不具者なる事を表彰すると同時に、公衆をして之に尊敬するに便ならしめんとの計畫あり、不日評議員會の議に上る筈なりと、又遺族及廢兵優待方法として左の如く決定せりと、

一 支部總會幹事部會等の際招待する事、
一 會員たる遺族等に對しては本人の希望に非されば會費を徵收せざる事
一 本支部役員其他時々慰問の上敬意を表し貧困者には相當の援助を與ふる事

◉電話交換手と其健康　某醫師の試驗する所によれば、電話交換手には、神經衰弱の者非常に多く中には發狂するものさへ尠からずと、それ程にてもあるまじ、本誌社會欄に豫見道人の交換手に關する記事を對照せよ

今日の馳走

▽鰕の團子　車鰕　サイマキ、芝海老等何れにても好けれど、芝鰕最も美なり、先づ鰕の皮を悉く去り、鹽を少し加へて、庖丁の背にて叩き、適當の大さに丸め沸騰せる湯に投じて茹で椀盛又は茶椀盛などの種に用ゆべし。相手には裂松茸か初茸を加へ、青味は茹し三葉かソギ柚子位にて宜し、

▽玉子すし　一枚に付鷄卵三個に味淋、醬油、アク引各猪口に一杯宛の分量にてよく攪廻し、之を平鍋に流し込み、火にかけ、ブクブク泡立ちし時鍋を下ろし、竹箆を以て玉子の下端より漸次卷き上げながら、ちぎれぬやう裏表を反し、再び鍋に火をかけ鍋蓋に強く之を壓し、他の器に移し取る、燒けし玉子はよく冷まし、端の耳は油臭き故落し、凡そ幅一寸五分長さ二寸五分位宛の長方形に截ち、色の淡き方を上にして握る。

餘興

笑話四則　抱腹女史

▽法螺を吹く人

或る片田舍に法螺吹先生がございました、來客と連立つて近所の田甫を散歩し、法螺吹客に向ひ、鼻高々と誇るやう、君は御存じか知らぬが、彼の所より此所までは私の畑ですが、隨分世話が燒きゝれませぬで、客は「ハーア成程、大層な御地面ですれえと、其處に驚きました．すると傍から百姓が口を出しまして、此人は虚言ばかり吐いて居る、他の人の地面まで、皆自分の所有だとは、法螺も大概にするがよろしいと申しました、法螺吹きすましたもので客に向ひどうも地面が廣くて雇人が多いと主人の顏を知らないには困ります

▽口を尋ぬる人

女大學などを夢にも見たことのない妻君が夫と何か爭ひて、兩三日物云はざりけるに、流石の亭主も不便でたまらず、茲に一策を考へ出し、眞晝妻君の裁縫をして居る前へ灯燈をともしてうろつきしに、妻君見るに忍びず、何ですれえ貴郎狂氣じみて、亭主ふりかへり、イヤ居た／＼、いまゝで汝の口を探して居たのだ、

▽之は意外な人

藪井竹庵どの、一日病人を診察して、此病は只運動の足ないのですから、能く養生をなさればすぐに全快します、マア此本でも御覽なさい、養生法を委しく書いてありますと云ふに、病人は本を手にとり詠めて、これは私の著した本です、

▽蠅除をする人

六兵衛隣へ行きますと、其家の母親自慢氣に、妾の息子は大層悧功でございます、六兵衛手持不沙汰に、何をなさいましたね、母親嬉しさうな顏をして、アレ奥を御覽なさい、甚麼顏をして居る親父の禿頭へ蜘蛛の巣を畫いて居りますが、あれは蠅除でございますさうな、

乳貰ひや野分がへした袖屛風

木枯や辻堂の額吹とばしけり

ど、思はるゝはいやなり、強ひてと云はるゝならば御免蒙るまでなりと、其の勢ひ中々當るべからずで、濱本氏が辭を極めて再三その受納を乞ふたのであるが、遂に其甲斐はなかつた、たゞ拙者の跋文を望むとの條件が付いて、其書籍は翌年一月早くも製本せられた。以上の如きは中々聞得難い美談ではあるまいか、愚文惡字を金にしたがつて、太平樂を並べる先生達に、是非一讀を仰ぎたいのである。

濃情の人

日本建國以來、どの點から見ても非難することの出來ぬ、同情の寄せらるゝ人は誰であらう。予は直ちに斯う答へる。人の君としては淺野内匠頭長矩君。人の臣として木村長門守重成君。

まづ淺野君の方より始めやう、唯諸國に飾付けてある多くの大名達と違うて、思慮分別のある名君で、節操の正しい美人を令夫人とせられた美男子で、切腹した年が若くて、これだけでも同情を寄せらるゝこの君。將軍でさへ叩頭させることの出來なんだ山鹿素行先生、どの大名も持て餘すほどのあばれ者も情の爲に皆其前に屈服せしめたのである。吉良氏を傷けて多くの家來に浪人させたのを、短慮より起れるものと罵る人もあれど、これは脇差の手前萬止むを得ぬことで、これが君の家來も亦希望する所で、寧ろこの爲に浪人となつたのを喜ぶ位であらう。依つてこの刄傷を短慮などゝは以ての外、淺野君は其臣下に不禮された折も、それは酒故と勘辨して、風を引かぬやうにと、羽織を脱いで着せてやつた事もある。人の君としては斯う行きたいのである。決して氣の利いた家來は、腰拔の主君を喜ばぬのである、次に木村君。これを日本大忠臣と稱せられて居る楠正行君と比較して見やう。南朝の忠臣、秀頼公の忠臣、臣と云ふ字に變りはない。木村君は大阪陣第一の美男子で、才智すぐれたる美人を細君にせられ、夫婦仲極めて睦じく、誰羨まぬものはなかつた、されど一朝事あるに當つては、細君は松殿、勾頭内侍たらざらんこと期し、重成君もこの覺悟であつた、

否義仲義貞の二本棒をして地下に顔色なからしめた正行君は後村上天皇より美人を賜つた、細君を持たぬ持つは別問題として、兎ても世に存ふべくもあらぬ身故と辭退したは、後村上天皇の宸襟を安んじ奉る道であらうか況んや辨内侍をして落飾せしめたに至つては無情な話である。扨て兎ても世に存へる事の出來ぬ身となつた時、重成君は叔母宮内局によそながらの暇乞にあすは花々しき戰爭をなして、關東勢に一泡ふかしてくれんと、なか〳〵凜々しいもので、これが討死を覺悟して居るものとは見えぬ、されど宮内局が時の不利を見て其覺悟を知り、討死に行くのであらうと云はれ、もはや包む能はざるに至つて所存を物語り、死後を潔くせんものと蘭麝待の名香を申受け、それを兜にかをらせて出陣したのであるが、正行君は自分を國家の柱石とも覺し召さる丶後村上天皇に奏上するに、此度の戰には討死の覺悟いたしたれば、今生の思出に拜謁いたしたいと云ふのである、而して天皇は畏くも自ら愛せよとて御落涙遊ばされ、決して此時正行君ある爲に、この時局に御安心遊ばされた事ではあるまい、如意輪堂でそれを亦叮嚀に書殘すに至つては念の入つた話である。いよ〳〵戰場に臨んで、重成君は敵を孝子

菊十種（其九）床の花[illegible]



の爲に助くるの餘裕あり、馬上ゆたかに武士の手本を遺したが、正行君は敵の首を間違へて喜ばるゝ狼狽、遂に切歯して自殺したのである、年齢はと云へは殆んど同年。最期の場所を若江が原とは、重成君の爲に初めから附けたのであらうと思はるゝ位。斯く臣として重成君の正行君に比較して見上げらるゝは、畢竟情の厚薄に歸着するのである。

天保年間に於ける女學校設立の趣意書

阿井飛洋

一夜坊間をあさりて、一書を購ひ得たり、菊判大木刻の小册子にして、銀砂子置いたる淺黄色の表紙に、中央に緣なしの栞、麗はしき文字にて、女學校設立の趣意書とあり、物にも似ず二度摺山櫻の口繪入りて、其裏に本居翁のよみ歌を記したる心憎きまでに奥ゆかし、天保八年酉の十月印行せしものにて、芝西ノ久保藤原贈貽といふ人の筆を執られしこと、此書の奥附にて知れり、事柄のあまりに珍らしく思はるゝと、其文のおもしろさままに捨もやられず、しかも流行せる女學校趣意書の手本として、且は好個の庭訓として、古めかしくも天保年間の文章を、事新らしくこの女鑑に揭げる事となりぬ、

謹みおもふに、我大御國は北極地を出づること、三十度より四十二度以内にありて、四季の氣候よくとゝのひ、地中金氣多くして、水淸く甘く、土硬く堅きが故に、其水土に孕まれ、其氣候をうけて生ずるよろづの物みな萬の國に優れり、是を以て本號を豐葦原の瑞穗の國といふ、瑞穗は稻穀の總名にして、人命の本たる瑞穗に萬を含ましめて、御神の名づけ給へるものなるよし、その瑞穗は食として生育する人の性なれば、是亦萬の國に優れること自然の道理にて、是を大和魂

大和心ともいふなり、されば開國の古へより外國に犯されたる事なく、天津日の御繼絶えず世界に獨立して、遠き西の國にも傳統の帝國と稱せらるゝを以ても、尊きことを知るべし、まして此二百餘年神祖の御武德によりて四海干戈をわすれ睦みまじはり、東北のかぎりなる外が濱に生れし者も、西南のきはめなる長崎の人に使はれ、西北なる隅なる新潟に住める女も、東南の端なる熊野浦の男を夫として萬の民のおのがまに〳〵業々に安んじ、あくまで昇平の恩澤に浴するは、人間世の幸ひ、此上もなき有がたき事ならずや、されば治平長くつゞく時は上下奢侈遊惰となることは、ためしあることにて、支那の書にも見へ、昔より鴻儒の論ずる所なれば、雀情を以て辯ずべきにあらざれど、其弊男子よりも女子はなほ甚し、然るにこれを論ずる人なきは遺憾と云ふべし、

近頃江都町々の女の驕に超過したることは、櫛笄衣服の華美は云ふも更なり、有德の者の妻妾(有德の人なれば妾は入らぬ筈なれど)を始め、其日暮しの人の女房娘までも髮結女に髮を結ばせ(行屆きたる詮鑿なり)、湯屋の男に脊を洗はせ(飛洋などは尤もこの事を憎む、せめては湯屋の女の流しは女にせまほしきなり)前垂の紐に縮緬を遣ひ、下駄の鼻緒に天鵞絨を用ふる(穿得たり)世の中となり、風俗殊の外いやしくなり、そは義太夫節新内節の女淨瑠璃のふえたるにても知らるゝ事ぞかし、

此女淨瑠璃の族大都會の町人の身分にて見物に顏をさらし、乞食非人にひとしき所業をなすこと、渡世とは云ひながら、淺ましき仕方なり、其根本を考へれば、みなその母のならはしにて、元來右體の所業をよき事に心得て、幼より其藝をしこむにより、其子も亦これにならひて、よき事を覺え、母親に三味線箱を脊負せ、己がはき物を提させて、親を供に連れ、つん〳〵として市中を往來し(淺ましき下等社會をうつし得たり)恥を恥とせざるにいたれり、これをしも忍ぶべくんば孰れかた忍ぶべからざらん、

（實にさることなり）
又この節歌舞伎役者の化粧の仕方を眞似て、鼻と襟とを分けて白く白粉ずる事流行せり、これも右等の輩より發りたる事にて、彼れ高き床の上、薄ぐらき所に居りて、淨瑠璃を語るなれば、見物に見えのよろしきを好み、役者の舞臺顔を眞似て化粧せしものなれど、其側にて見る時は、斑にしていやしきものなり、さるを素人の色くろうやせにくげなる女などの、右の姿をよしと眞似るは、淸女がいひし類にて見ぐるしき事ぞかし、
其外女に似氣なき異る化粧を好む族も見えたれど、くだ〳〵しければこゝには云はず、元來右等の町藝者、土弓場茶屋女などは色を鬻るものなれば、髮結女に髮を結ばせ、湯屋の男に脊を洗はするも尤もの事なれど、是も素人に推しうつりたるゆゑ、町々女髮結數多出來、湯屋の留桶鬪がしくなりたり、下流塞りて濁るときは、逆流して上流を濁らすに至る如く、右の弊風自然と上へも及ぼす道理にて、武家にも間間いやしき風俗の女見ゆるは歎かはしき事ならずや
扨て又女子の藝といへば、琴三味線、胡弓、鼓、笛太鼓、踊等の遊藝しらぬは恥のやうに覺え、機織り糸とる事は云ふも更なり、物縫ふ事を習ふをさへ、いやしき業のやうに思ふ風俗となりたり、故に身上相應に暮すものは、幼きより娘に踊を習はせ、多くの金錢を費して、衣裳道具等をこしらへ、こゝのさらひ、かしこの祭などと、親々も倶にうかれて附添あるき、見るにたへがたき淨瑠璃狂言などを其子に踊らせ、鼻の下を長くして見物する、親の存意わかりがたし、踊を習はする時は、身のこなしよくなると思ふは心得違ひにて子供にいやしき風俗を仕つけ色情の導きをなす仕方にて、しかも年とりては用たたぬ藝なり、
それにつゞき鼓、笛、太鼓等是亦生涯の用にたゝず三味線胡弓はわけて淫聲なる中にも、胡弓はいやしく、非人の女太夫なぞのすべきわざにて、素人の娘子供の弄ぶまじき器なり（飛洋曰く美妙なる音聲

を持てる三味線胡弓の響を淫聲と叫ばしめたる、否美妙なる音聲を淫聲化したるは抑も誰の罪ぞや、琴もむかしは組といふものばかり彈せしと聞きしに、今は長唄淨瑠璃へも合せて、聞くに聞かれぬ文句を語り彈く事になりたるは、淺ましき事ぞかし、第一手習の師匠といふもの、むかしは門弟の子供の敎へ方嚴しかりしに、今はあまり嚴しくては、子供は云ふに及ばず、其親々の氣にも入らざる故、師匠の方より子供の機嫌をとるやうになりたれば、子供の仕つけの爲にはならず、殊に右の技藝人等が所爲を眞似て、折々揃ひの浴衣、そろひの手拭を染めさせ、社中に賣りつけて、遊山を催ふし、頭上に造り花をさゝせ、大勢を引つれて遊行し、其弟子の多きといはるゝを見得にしたるなど、手習師匠にはあるまじきことにて、右等を以て、風俗のいやしくなりたるを知るべきなり、

男子には師を取り身を修むる道を習はしむれど、女として學ぶもの稀なる故に、女の法あることを知らずして、右の惡風になりゆくこと、口惜き次第ならずや、初めに云ふ我國も嘉穀の種なりとも、其肥培の仕方惡き時は、却つて病害を發する事あり、人も小天地にて、其母は地なれば、地性よく肥培の仕方よき時は、善人を生じ、肥培の仕方よからざる時は惡人を生ずるは、天地自然の道理なり、されば神功皇后は御懷妊の御身を以て、三韓を伐從へ玉ふ御武德備はらせ給へばこそ、其御腹より御誕生ましませし應神帝は八幡宮と崇め奉り、我御國の武威を守らせ玉ふ御神とはならせ給ひけれ、朝比奈義秀が勇は其母巴御前の勇をひき、相模守時賴の賢は其母禪尼の賢を稟けたるものにて、よく其理を知るべきなり、

胎敎とて婦人懷妊すれば寢るに側たず、座するに邊らず、立つに跛ちせず、邪食せず、左道を踏まず、割正しからざれば食せず、席正しからざれば坐せず目に惡しき色を見ず、耳に惡しき聲を聽かず、口に惡しき言を出さず、手に惡しき器をとらず、夜は正

しき書を讀み、朝に起ては起居振舞を正しくすれば其生るゝ子形容端正しくして、才德人に勝るゝものあり、これ胎敎を守るの德にて、人に性と習とあればなり、武家は忠孝義勇の子孫を產くる事をこそ願ふべけれ、然れば容より心掛のよき女を撰びて妻とすべき事にて、物よみ手習等、母の心がけたらんには文人を出生し、長刀小太刀等を心得たらんには武人を出産すること疑ひなし、町人の妻とても心掛よき時は我家業を稼ぐよき子を出生すべし、江戸子と云はるゝもの身上持得ず、不埒ものゝ多きは其根本母の心がけよからぬ故の事ぞかし、諸侯の奥へ幼年より奉公に出し、生涯宮仕させん事を願ふ人の事は知らず末々外々へ緣づけんと思ふ心掛の親たちは其子に右樣の遊藝を習はしむるは無用なることにてよき子孫の種を蒔かんと欲する田地にはよからぬ肥培の仕方なり、婦人は和らぎ順ひて、貞信に情深く靜かなるをよしとす、女の法をしつけんと欲するには先づ物讀すべし、されど支那の書を讀み覺え、文字がちにふみかくは、女に似氣なきやう源氏物語などにも見え、學問の仕方により、却つて害となるものなれば、唯和解女孝經、女大學等の種類、其外敎訓になるべき假名交りの文章、および詩歌などを手本として手習はせ、其意をまめやかに說聞かする方よろし、

女子は第一行儀をしつけてよし、よろづの愼み方は禮にあれば小笠原流なりと、伊勢流なりと、躾方は習はすべし、長刀小太刀等の武藝を習はするは、當時の御治世に似氣なきやうにいふべき人もあるべけれど、武士の娘は云ふに及ばず、町人の子にても、諸侯の奥に一生宮仕させんと欲する人は、必ず稽古すべき事なり、奥向は男子の勤仕するものなければ、非常の節の心掛にもなるべき事なり、さて又織縫紡績の事は、女の第一とする業なるをいやしきやうに思ひて、縫物をさへ得させぬ女のあるはいかなる淺ましき事にや、いにしへは天子の御后すら御自ら織縫したまひしと云ふ事も聞けり、たとひ家富み

人多くつかひて、物縫ふ女を召つかふ身なりとも、少しは、慰みにも習ふべき事にて、これを覺ゆる時は、木綿の布子も容易には着られぬといふ冥加を知り、質素を守る教になる事なり、因て思ふに、小女の爲に女學校といふものを、御府内所々取建て女にて、文學は可なりによめ、和洋の手跡をよくするものを、師匠として招じおき、右に申すごとく、女子の教訓になるべき筋の事どもを手本となして書き習はせ、まめやかに道理を説き示し、第一規則を嚴かにして行儀をしつけ候やうにいたし、晝より後は毎日かはる〲會日をきめて、和歌の師、躾方の師、長刀小太刀の師出席して夫々好みの藝を教へ、扨物縫ひ機を織り、糸をとり綿を摘む事を教ふる女共を抱へおきて、是亦好みの事を習はせ、此の如き法則を立て、教授致し候はゞ、幼きもの丶心は白糸の如くなれば、自然とよき風に染みて、惡しき風に染まらず、子孫の種を蒔くには、よき田地の肥培の仕かたと存候に付、予も日ならず最寄に一箇所右の女學校を取建候志願まづ其趣意を四方の小女の親達に告げ申度く、婆心の一言を書きしるし候、その仕方よろしき事におもはれ候人達は、遠慮に及ばず候間、右の女學校を何れへなりと取立て、御教諭の事を希ふ所なり、たとひ、廣く御府内におよぼし、すべての風俗を化するにはいたらずとも萬分の一にてもこれをよし野のよしとして、大和心に歸り咲きの朝日に匂ふ花もあるべきかと、をこがましくも是を山櫻木にちりばむるものなり

飛洋曰く右の女學校何れへなりとものの一句、此趣意中の最眼目なり、それより以下の七行、實に花やかなすら〲とした筆のゆきかひ、其人を目のあたり見る心地ぞせらる、

◎淸國女學生

貴國の方の態度は、如何にも溫和で、落付て居て、大陸的とでも申さうか、これは我國の人には確かに勝つて居る所で、さうありたいものと思うて居りますが、只遺憾なのは一點犯すべからざる威嚴といふものがない事であります、これは溫容あつて威足らずとでも申しませうか（下田歌女子史談）

講和を憤りし烈婦の事

錦巷隱士

日露媾和條約の新聞紙により發布されましてから、世間は遂に物騒がしくなりまして、其處にも彼處にも火事がある、人死がある、怪我人は出來る、銃劍いかめしき兵隊の巡視がある、汗馬に鞭を當てゝ、東西に馳せ違ふ騎兵の往來が止む時ないと云ふ有樣誠に太平の戰爭と申すべきであらうか、甚だ面白からぬ世の中の景氣であります、是も畢竟は國民一般が講和と云ふ事を、容易ならぬ一大事と信ずるから起る現象でありませうか、扨此に和議と云ふものを絕對に嫌ひ、却て敵味方の賞讚を受けたといふ一烈婦があります、頃は天正の中頃、出羽國置賜郡米澤の城主伊達左京太夫晴宗の女で、奥州磐瀨郡須賀川の城主二階堂遠江守盛義に嫁した御方は、啻に容色の衆に勝れたばかりでなく、勇氣萬人に秀でゝ男子も及ばぬ御器量でありましたから、盛義との中も至つて睦ましく、男子も生れました、其頃は盛義隣國の田村家と戰爭中でありましたが、何分味方に勝利少なく、領土も次第に狹めらるゝ有樣でありますから、據なく其嫡子をば會津の葦名家へ人質に遣しまして、葦名の援兵を借り受けて、領土の安全を計らうと致しました、處が不幸にも盛義はふと病に臥し、忽ち身まかりましたから、夫人の嘆きは一方なりませんが、大名の妻として、一己の悲しみの爲に國民を忘るべきにあらずと心を勵まし、一面には夫の喪を治め、一面には敵を防ぐの用意を怠らず致して居ります、然るに田村家の婿なる伊達政宗は、夫人の甥でありますから、使者を以て申送らるゝ樣は盛義殿御卒去に就ては、御嘆の程も御察し申上げる就ては田村家と速に和議を講じらるゝが、第一の得策で其御領分を私へ御渡しあるに於ては、私よしな

に取計ひ、御領内の士卒へは先例の通り宛行ひ、御叔母上は當方へ御引取申上よきに御取扱ひ致すで御座らうと申入れた、此時若し夫人が普通一般の軟派であつたならば、直に之に同意して、宜敷御賴み申す、土地も償金も何にも入りません抔と申されたかも知らぬが、夫人は實に鐵心石腸とも云ふべき男勝りの烈婦であるから、其使者を是れへと呼近けて、先以て政宗事若年の身を以て、目上を案じ、使者を遣はすこと殊勝なり、妾遽に夫に別れまゐらせたる身の、未だ日も立たざれば、悲しからぬにはあらねど、其にもまして悲しきは、四十四郷の領土を他家の軍馬に蹂躙さるゝ事なれば、いかにもして此領土を他門に渡さじとて、日夜心を苦しむるぞかし、妾事元は伊達家の娘なれど、今は岩瀬の主なれば、假令夫なければとて、領土を他家に渡すべきにあらず、四十四郷の者の思はん程もはづかし、且は亡夫盛義殿も、草葉の陰にてさぞや殘念に思召さるべければ、此儀ゆめ叶ふまじ、政宗此領土望みならば、槍先にて受取るべし、其方罷り歸つて、右の趣政宗へ申聞かせよと答へられました、イヤ使者の驚いたことは中々、此頃の或國の使者の比ではありません、眞靑になつて立歸り、此由を言上に及びましたから、政宗も大に怒り、人の深切を無にする老婆め其儀ならば目に物見せて呉れんと、大軍を發して攻め掛りました、此方は兼て覺悟の事でありますから葦名家の援兵と共に、氣落のした味方を勵まして、防戰に及び、城を堅固に持堪へましたが、不幸の續く時は致方のないもので、葦名家は摺上原の一戰に手痛く伊達勢に破られて怯氣が付き、遂に常陸へ退去致しましたから、會津は全部伊達家のものとなり二階堂家は全く孤立の姿となりました、斯る處へ伊達軍が又候數萬の兵を以て攻來る由聞えましたから諸將士皆膽を潰し、今は援兵の賴むべき者もなければ、速に講和を整へ、伊達家の申條に從はるゝのが得策でありますと、一同ぶる〳〵もので、夫人に勸めました、此時若し支那あたりの大臣ならば、よし

きた待て居りましたと云ふ如き態度で、直に和議を承諾するのでありましたらうが、此夫人決して承知しませんで、家來共に申す樣、唯今我等が和議を取結んだならば、敵は大擧して佐竹義重殿に取てかゝり、義重殿大に迷惑せらるゝであらう、我等從來小勢を以て大敵の中に孤立し、隣國の辱しめを受けなかつたのは、全く佐竹家の聲援を得た爲である、就ては政宗が攻めて來たならば、我先づ其兵と戰つて佐竹家の助勢をせねばならぬ、自分難儀の時は、他人の救を乞ひ、他人の難儀は棄て顧みぬと云ふは武門の耻辱である、若し戰ひ利なくば、上下一同討死する迄の事、妾は死すとも和議屈辱の和議は諾ずまじと、凛然として言切られました、此一言を聞て、諸將士一同奮ひ立ち、悲憤の涙を揮て城を枕に討死せんことを誓ひ、勇氣日頃に百倍して、いと賴母しく見えました、然るに何時も下役に忠義者が多く、上役には存外不忠不義の犬士があるものと見え、二階堂家の四家老の一と聞えたる守山筑後をはじめ濱尾義齋、保土原江南齋、矢部下野などいへる犬侍の一派が密に伊達軍へ内通しましたからかなひません此方は佐竹岩城の加勢を得て、政宗の兵と必死の合戰をして居る、其隙間に守山筑後は城中に火を掛けて燒立て、須賀川城は忽ち一片の烟となりました、此時夫人は怒り心頭より發して、筑後の妻を召し出し、其夫の大罪を責めて、既に手擊になし給はんとせられた、時に御側の人々御袖にすがりて、これを止め參らせる、彼是する透を窺ひ、彼の妻はほうほうの體にて逃れ去ります、夫人も亦今に至り、犬の如き者の妻を斬りたりとて刀の汚るゝのみ、何の詮なしとあきらめ給ひ、之を見遁されました、扨愈々落城に相成り、敵四方に充滿して、夫人も擒にせらるべき運命に迫りました時に、政宗又輿を遣まし、禮を盡して自分の國に迎へ歸らんとしましたが、夫人は之をも撥けて、使者を逐ひ返し、討漏されたる郞黨を左右に從へ、一方の血路を開て岩城に落行かれ、其より水戸に參り、佐竹家に留まり居られまし

たが、數年の後須賀川に歸り、髪の飾りをおろして長祿寺と云寺に閑居せられ、心徐に先立れし夫をはじめ、處々の合戰に討死せし忠臣義士の菩提を吊ひ慶長七年六月十四日に大往生を遂げられました、

當今は女子教育大に開けて、學は和漢洋を兼ね、才は天地人に通ずると云ふ女博士は深山にある樣ですが、堅固にして高尚なる氣節ある人は存外少ない樣で、今度の和議に就ても、婦人は一向に之を度外視して居らるゝのは如何のものであらうか、平生言行の活潑矯健男子を壓倒するに比較して、チト異樣に感ぜられましたから、此に二階堂夫人の傳記を講述して見ました、文明の女子固より未開時代の婆孃と同視すべからずとの御叱りを蒙りますれば、恐れ入て引退ります、（まだある）

●女子大學秋季運動會　去廿八日目白臺なる女子大學に於て秋季運動會を催したり、本年は校舍建築中に付一般來賓を招待せざりしが、頗る盛會なりしと、

愛情の本源

平田春江

吹き荒む嵐に波を絶たず、一高一低瞬く暇だに心許せぬは此の世の常習、岐路に途草摘むで、顧望徘徊終生の職分遂に果さず、多年の宿志終に遂げず、曖昧模稜の裡にあたら靈能の光りを包みて、陽炎の命を白駒の隙に苟もする者、時の古今を問はず、邦の東西を論ぜず、道路相望み相接するその中に立ち、性を盡し分を全うし、兼ねて志を達せむとするにはこれ尋常一樣の心掛にて果し終うべくも覺へず、必ずや深き素養の心の奥底に健存するものありてこそ始めて能く眞境に達し得め況いて世を形造る上に於て、消極の方面、下流の位置に立てる女子の身の上其不便困難の比較上男子よりは多きことは更にもいはず、先天の資質には終に搏天の翼なきを奈何せんしらせはや木葉かくれの埋水

下に流れて絶えぬ心を
との優しき心にほだされて
今宵たに折もはらはでさむしろに
積れる塵を人に見せまし
となさけ心むら〳〵と起り來りて、流石の小辨内侍も、苟且ならぬ契りをこそ結びたれ、又成忠の前憚りて、あはれ空しくなりたるに引かへ、こなたは爲に發緒を啓きて、天關濛々濁浪地を沒するの世にも更に其浸染する所とならず、六百年の下、我文學上に燦爛たる光明を遺しける兼好法師、煎じ來れば實に一人の女子を殺して自己を養ふの材料となしたるなり、他の爲に致さるゝも、他を致すの器識なく自己よりして苦樂榮辱の運命を發作するの力量なき可愛の者や卿等が浪風暴き世に立て、誘惑詐術の間滿遍なく潜りおほせむには、迚も男子が思ふて至らざる程の悲風慘雨あるを知る、吾等請ふ卿等の爲に見る所を攄べて、聊か心掛の料に供する所あらむとす、若し處世栞の一端ともなるを得ば幸也、

梢を掠むる雪風を凌いで清楚なる姿を現はせばこそ梅が香も一しほ貴とけく、觸らば棘の裡に婀娜たる容を保てばこそ、薔薇の花も一際目立つなれ、人のみなどか此理に漏るべき、普通の境に普通の事を爲し、尋常の塲合に尋常の考へを運らしたればとて、何の貴き所、何の目立つ所あらむや、野生の草花天地の陽氣に感應せられて、春の錦の一部は之を織り出し得む、決して壯麗偉觀を現出する上に於て分厘の力だも有するものにあらざるなり、女子は或意味より之を觀察して人の花ともいふを得べし、今試に四季いろ〳〵の花に見たて、女の一生をものせば、男女優劣論を宅の書生に挑み、飽まで權利を主張するなどしほらしき中に遠慮少く色は香に及ぼす、蕾綻びながらも氣節凛たる間は是れ梅の時代ともいふべく、頰の色も紅ゐ濃く、起居といひ物の言振といひ、よろず妖艶婀娜となり、艶も愛嬌も外に溢れて事毎にうれしく物毎に可笑しく、目遣ひ迄も多少の意を呈はすに至るは是れ桃の時代ともいふべく、肉

質勝つて空文すたれ、容貌よりは才略を撰び、風采よりは財産を問ふ、愛嬌専門とも行かず、身の爲になりさうな、またならぬやうな時代、昔から夫家に居着くとも去るとも定まるは此時季にして、或は不義或は悪事を働くも此時季なり、之を緑葉の時代ともいふ可きか、其次に來るは紅葉の時代なり、此時代は則ち自然よりは、人爲によりて艶がつき、物事に曲折あつて趣味富贍、交際社會に牛耳を取り、野暮の相手、粋の御客、皆一と呑みに腹に入れ、一所に混和して其宜しきを得るは此時代なるべし、これより先は霜枯れ三月、發達の心止りて、花も止りて花も實もなく、以上さまぐ\の時季に於る醜所のみな有するに止まる、斯の如く女性の本體を頭上より瞰下して、さて茲にいふべきは、花の形にのみ見とれずして、其粋を味ふこと是なり、世に美人といはるゝものあり、花顔柳腰輕羅を纏ひ錦繍を着て、風姿艶麗光彩爛發、巧みに人の視聴を惹き、競ふて男性に歡迎せらるゝもの則ち是なりと、若し女性其物にして啻に此に止まらしめば、世亦女流の境界ほど憐れむべきものあらざるべし、單に外貌上の美に甘むせんとするか、其清きこと梅に如かず、其美なること櫻に如かず、其汚れざること蓮に如かざるにあらずや、人はたゞ其人たる所ありて始めて能く美人といへる稱呼も起るなれ、請ふ外面に盛装を凝らせる美人を罵る勿れ、心靈上に美質を養はずして徒らに外面に虚美を衒はむとする僞美人を嗤へよ、

女はまた愛情の本源なり、此要素を缺かば女として貴き所なく、また採る所なからむ、されど茲に心すべきは此愛情の爲に其身を破ることもあるなり、要は只だ濃艶なる愛情の内に截然として紊るべからざる一道の光明を存せざるべからず、

女は頗る私心に富む者なり、自彊保有精刻の女德は之が爲に養はるゝと同時に、貪婪偏見愚痴の根性亦裏に存す、世事悉く利害相半す、故に吾等に貪婪偏見愚痴の根性存ずるが爲に女の私心を覆さむと欲する者にあらず、只だ一利を起すは一害を除くに如か

ざるの理を女の頭に吹き込むを得ば、我事足ると思ふものなり、温厚にして優美、沈着にして快活、圓滑の裡に貞節を藏し、愛情の裡に明識を有するは我固有の女徳にあらずや、泰西の文物或は其長所を採つて修養を資くべし斷じて主客其位置を轉倒するを許さず、今や奎運彬々の餘澤、女學界裡の事往々目眩し氣驚くに足るものあり、而かも能く梅花の神を會して薔薇の美を備ふるもの果して幾人かある（終）

横臥所感

山田枯柳

一

この頃の不順の天候の故か、或はまた過度の讀書の故か、ある日俄に心地がわるくなつて、本をなげうつて床に横たわつて、呼吸は強くなり、心臟は早くうち、はげしい眩暈がした、苦痛の爲に言葉も出す事が出來ず、熱は次第に高まつた、

晩になつて、自然はいつものやうにその進みをなしてゐる、鳥はいそがしさうに塒に歸り、窓からさしてゐる光線は次第〳〵にくらく、上野の鐘もかすかに聞える、小兒の走る足音や、自轉車のベルのひゞき、馬車のとゞろき、いつもの通りに我耳に這入た、自然はいつものやうに夕暮を組立てゝゐる、併しながら我はいつもの通りでなく、心地わるく、元氣なく、否々苦痛になやみながら床に伏してゐるのである、

熱の爲に食氣を全く失ひ、二日の間は何物も喉を通らず、たゞ少量の水をのんでゐた、

二

病氣は我が爲に實に苦痛である、嫌はしき事である不利益な事である、第一時間を全く損ずる、二日の間、何もせず、床に横はつてゐるのであるから、この二日といふものは、我が短き生涯のうちから徒に費やされるのである、次に健康を損する、病氣が治

つても、直にその日から元の健全な身體とはならぬ。みじかくて二三日、長くて一週の間は、また衰弱してゐて、仕事も平常の通りにする事は出來ぬ、又病中にうける苦痛も一通りのものではない、

一寸した二三日の病氣であつても、その苦痛と不利益とはこの通りである、ましてこれが長の病氣であつたら如何でせう、實に不幸であります、

併しながら、病氣といふ者は、只不利益であつて全く利益のない者でありませうか、病氣には少しの利益もありますまいか、病氣の中から何か利益を見出す事が出來ますまいか

三

こまかに考へて見ると、世の中には、全く利益のない者はないやうである。ある者は、人にさま〴〵の害をなすけれども、又一方から見ると意外な所に意外を爲してゐる。今一例をあげて申しますれば、我々の常に呼吸してゐる空氣の中には澤山微かな塵がまざつてをる。これは一寸見ては見えませぬが、日光が直射すると明に見ることが出來る。この塵があまり澤山あれば人に害をなします併しながらこの塵は全く無用のものであるかと申しますに、決してさうでないのでムいます。この塵がある爲に光線が自由に屈曲して陰をつくらぬので、若し塵が全く無かつたならば、光線はたゞ直射するばかりで、自由に屈曲することが出來ませぬ。されば全くいらないものであるやうな塵ほこりですらそれ〴〵の用をなしてゐる。これはほんの一例でありますが、このやうな事は外にも澤山あります、この間の事、私の所に女學生が英語を習ひにきてをりまして、『ローヤル』の讀本を口譯して聞かして居りますと、四季についての問答のうちに左のやうな句がありました。

『雪とは何でありますか。雲から落ちる時に氷つた水であります。

滴が小さい玉のやうに氷つた時には何といひますか。霰であります。

雪は何の用をなしますか、地をおほひて、種や、

若き植物を霜からまもります。
霜は何の用を爲しますか。霜は植物を害する多くの昆虫を殺し、又土塊をくだき、種を受けるに適するやうにする』

何でせう、人からはさむい物だ、いやな物だといはれる雪や霜でも、皆それ〴〵の利益を供してゐるではありませんか、天下に無用な物はないと、まア私は思つてゐるのであります。

佛書などを見ると、病氣を人間のおそろしい者の一つ、いやな者の一つ、これらの者がある爲に人生の厭ふ可き者であるかのやうにも説いてあります。釋迦牟尼が出家なさつた原因も、人間に病や死のあるのを見て、之をいとひ、何か他に常久の道はないかとの心からであります、お經を見ますると、釋迦牟尼が宮殿を忍び出て、犍陟といふお馬に乘つて山に行かるゝ時に心の中に『我もし生老病死の憂悲苦惱を斷たずは、終に宮に還らず、恩愛の情を盡さずば、終に耶輸陀羅を見ず』と申すことが書いてあります、又或本には『世間に三使者あり、一は老、二は病、三は死なり』とかいてありまして、病はいたはしい、おそろしい者に數へてあります。

我々とても、決して〳〵病を以て好ましい者とは思つてをりませぬ、併しながら病は人に少しも利益を爲さない者であるといふ事は斷言いたしませぬ。

私は病も多少の、否時によつては大に人間を利益することがある者であらうと思ひます、塵や、雪や霜でも、みな利益をなす如く、病も意外な所に何か益を供する者であらうと信じてをります、

四

熱の甚だ高なつた時は、苦痛の爲めに何事も思ひ出さぬ、併し熱が次第にさめると、心の中に種々樣々な記憶が回つてくる、予は病の爲めにうつら〳〵として床に横たはつてゐる時には、心は決して世俗の事に馳せず、名利に向はず、丁度靜かな山中にある湖水が四方の樹々の若葉を、その鏡のやうな水面にうつすやうに、我がすみわたつた、平和な心の面に

種々のたのしき昔をうつし出して來る、そして心はますく靜かに、おだやかになつて、雲にでも乘つてゐるやうな心地となる。若葉の陰から來た美しき人の微笑や、白い、やわらかな手の我が胸にあつた事や、多くの親友の我と別るゝを惜み船まで送つて來た事や、メリーと云へる西洋人の女の兒と一緒に馬乘りをして、予は度々落馬した事や、そのメリーと相知つた時は、メリーはまだいたつて若かゝつたが、別るゝ時には、もう立派な一人前の女になつてゐた事や、その他若かつた時の記憶はみな歸り來つて、わが耳にはたのしい音樂を聞くやうである。

露國の有名な作者ドウストイウスキーの作中に、オルデノウといふ人が病氣にかゝつてゐる時の心地をいろく書いてあるうちに、

『又ある時には、彼の可愛らしい、無邪氣な小供の時の事が、あらはれて、そのわかるい愉快と、つきない幸福が彼に再びあらはれた、彼が限りもなき大きな水晶のやうな湖の側に、時々一時間の餘も坐つて、その波打つ水音を聞いてゐる時、天の使等は彼の爲に笑ひ、彼がアカツヤで圍まれてゐる家の前の、青草が一ぱいになつてゐる廣場にゐる時は、また天の使等は、花の陰から飛んで來た、又彼の母が彼の上にかゝまり、靜かな長き夜に傳婢歌をうたひ乍ら、愛したり、接吻したり、彼に十字架を畫いたりする時には、また天の使等は、彼を樂しき夢にてねせつけながらその上を翼でおほふてゐた』

といふ一節がありました、是は小兒の時の平和な生活を再び心に現した樣をかいてあるのであります。予の病中の感は、大に是に類するのであります。

病氣の時は、體はおとろへ、何を爲すことも出來ず、只だ横はつてゐるのであるから、心の働き、殊に自分の過ぎこし方を回想するといふやうな事が盛んになつて來るのであります。身體が丈夫で、事に從つてゐる時には、希望は未來にのみ向つて、多くは過去を忘れてゐるものである。然るに病氣の時には之と正反對の有樣となります。そして此の自分の

昔の出來事や、境遇を回想するといふ事は、人に大なる利益を與ふる者である事は疑ふべきでない、自分の昔を回想するのは丁度國民がその國の歷史を讀むやうなものである、自國の歷史を知らぬ國民は、自國を防ぎ衞る點に於て多くの要素を缺いでゐるのである、自分の昔を忘れてしまう程の人は、何んで成功しやうぞ。

五

病氣の時には、よく自分の昔の事を追懷し、回想せしめる。こればかりでも十分の利益はある。まして病氣の利益は之ばかりでない、平常の罪惡を痛悔せしめ、もとの善心にたちかへらしめる事も度々ある是は歷史にも、物語にもその例は澤山載つてゐる、あまり病氣のない人は、惡事をなしても、之を顧みず、良心もその力をおさめ、ます〳〵惡にかたむく事がある、然るに病氣は彼に注意を與へるやうなものである、その注意をうけて、心を改むる事が出來れば、實に幸ひであつて病氣の爲めに多少健康は、損じても、彼の爲めには、大なる利益があつたものと云はねばならぬ。

さればとて、我々は決して病氣を歡迎する者ではない。否、つねに健康であつて、世の爲め、人の爲めに働くことを欲する者ではあるが、若し一朝病氣になつても、之をうらむことなく、却つて神が與へて下さつた御注意と思つて、之を利用して進德の端とせねばならぬと信ずるのである。多病は決して名譽ではない、併し病氣したら、之を神の御注意として、自分の心を改めるにつとめなければならぬ。

琴伴女史の訪問記に就きて

上田悦子

去ぬる七月末つ方、女鑑記者の御名刺にて、來宅のお方ありて、四方山の御話ありしが、越えて九月の

女鑑誌上に、私方訪問の記事掲載いたされ候、兼て主人より亞米利加新聞の訪問記事といふ事を承り居候が、それにもひとしき誤謬だらけの御文章、大方は訪問のお方の豐富なる御像氣力が生みいだされし、名文章と打ほゝゑまれ候が、なかに余り甚しき誤謬これあり候まゝ、一筆申上置き候、

第一佐々木先生は、主人が御懇意に致し候らへば、私もこちらへ來り候て、初めてお近しく相成候のにて、國語も以前五年程黑川先生の處へ通ひ候のみ、歌の新舊二派に就ての大議論、又琴の御議論等も、大方訪問のお方さまの、御持論と、却て面白く目新らしく拜見致し候位にて候、なか／＼小説を作りしことなどは、第一主人が大嫌にて、自分も亦左樣のと、心に思ひしとさへこれなく候、然し小説を見候は、大好きにて、小説青春など毎日面白く讀み居候、

編物が何とやら仰せられ候へど、私の參り候學校には、別に編物の科はこれなく、只自分のすきにて致し候までの事に候、自由とか教育家主義云々の項は、これも例の御想像と存し候、家庭は誠に嚴格にて、私腦病など煩ひし事は覺えもなく、それにこれと申す病氣も致さず、マア丈夫な方に候へば、父の居候頃なども、猶更自儘の振舞など少しも致されず自由どころか、反て窮屈に暮し候、寄席などへ參り候となく候へど、小供の折踊の稽古いたし候へば舊歌舞伎へは大概代りめに參り候、それも筋を撰び團菊の時のみと限られ候、歌舞伎座のキネオラマとは、名のみにて、どの樣なものに候やら、大學の演藝會とかこそ、何のことに候か、世間見ずの私には、一向わかり申さず、初耳に候、又學校の演劇會とか校友會とかも、あの時は幹事にても何にてもなく、全く關係お覺えもなきことに候、

◎華族女學校秋季運動會　去る三十日擧行せられたり、　内親王殿下を始め奉り貴賓の臨校あり、例によつてなか／＼盛會なりき詳細は次號にて

口繪解說

◎千代の松原　筑前の沿岸にある、元寇の古戰場で、歷史上に於て著名なる、吾人の記臆を離るべからざる所である、今回嘗て同縣に警察署長たりし湯池丈雄氏が、職を抛つて三十年、熱心奔走の結果、この地に、其當時身を以て社稷を守らせ玉ひたる龜山天皇の御銅像を建立したるより、いよ〳〵風景併せ有する名所となつたのである、

◎雲上の花　右は愛國婦人會總裁閑院宮妃殿下、左は東伏見宮妃殿下におはして、愛國婦人會の事業には、一方ならず御心を勞せられ、戰時尤も活動し給ひしおん方々である、

◎龜山上皇御銅像　口繪第一頁に揭げたる千代の松原に、建立したてまつりたるもので、この尊像に對し奉る今後幾億萬人、忠君愛國の誠を致すべく、訓示せらるゝであらう、また此御銅像とゝもに、湯地丈雄氏が忠誠の紀念ともなるべく、氏が三十年窮乏を忍び、聲を枯らし、血を吐き、當時の歷史を繰返して、大に士氣を鼓舞し、今回の戰爭の如きをも豫言して、大に警告する所があつた、即ち今回の戰爭に於ける、一功勞者と見ても差支ないので、龜山上皇に於かせられても、深く其忠誠を嘉みせられ、其勞を多とせさせ給ふことゝ思はれるのである、

◎貴婦人中の貴婦人　こゝに拜載せる方々は、愛國婦人會の理事評議員の方々で、いづれも愛國婦人會の事業の爲には、御身分さへも忘れて、奔走盡力せられ給ひ、兼て我交際界に於ける名花として、世人の景仰する所となられて居る、

◎尾崎男爵の家庭　男爵尾崎三良君の御家庭で、上の右の方は、去月尾崎市長の令夫人となられし英子君、左は其令妹蒔子の君、下は十年前の同家團欒の圖である、

◎名所の天長節　意匠圖案を以て當代第一流と稱せらるゝ中島春郊氏が、特に本誌の爲に揮毫せられたるものである、以來每號同氏の名筆を揭載し、讀者諸君に目の正月をさせ申さん

◎共立女子職業學校教室　女子技藝學校の第一に位せる、同校の教室で、云ふまでもなく、圖の示す通りである、

◎貴婦人と經木眞田　愛國婦人會京都婦人會支部に於ける、經木眞田製造場である、

新刊紹介（二）

◎はがき新誌（一の七）　當時流行のはがき雜誌中の大に見るべきものにて、この號には手島精一氏と齋藤松洲氏の畫はがき談おもしろし（麴町區妻戀坂町便利堂發行）

◎婦人の慰問使　奥村五百子刀自の戰地慰問の顚末をこの一行に加はりたる愛國婦人記者手島益雄氏が雄麗なる筆に寫し出したるものにて、同地に於ける景況宛然眼の前に浮出づるが如し、愛國婦人臨時增刊として出づ、定價十五錢（麴町九段牛ヶ淵愛國婦人發行所發行）

◎新公論（卅廿年十號）　『現代人物評論』例によつて面白し、山路竹越兩氏を併評したる結文に曰く、

三叉の求むる所は政治家にして、愛山の求むる所は學者なるか、花一日の美に醉ふか、月萬代の光を尊ぶか、吾人は唯彼等が民友社の一莖より分岐し來れるハイカラと蠻カラとの變化を妙とする也

猶平和の戰士、十人十色は汽車中などの好讀物なり（發行所本鄕四丁目新公論社）

◎向上主義（十四號）　本誌の本尊なる茅原向上主義子は德富蘇峰子の文章を見習いて今日のエラキ人となりたる也、本誌に德富蘇峰論あり（本鄕丸山福山町久友社）



共立女子職業學校

好學女史

近來女子教育の聲の高く、種々の所説、宛も泉の湧くごとくで、其歸着する所を知らぬ有樣であるが、畢竟女子教育の要は、文字を多く授けて、事理に明かに、品性を涵養すると、實業を授けて、事務に長け、職分を盡くさしむると、この二つの道より外はない、然るに人となることを教へずして文字ばかりを覺えさせ、然も手紙一本認めるさへ實用に遠かるやうな方針の教育が多く、學校上りといへば、口ばかり達者な不實用な、理想をふり廻はして贅澤を云ふのが、十中七八の成績らしいのである、神田一ツ橋の共立女子職業學校は、我國教育一般の傾向が、實際の必要に遠かるをも顧みず、徒らに學科程度の高きをのみ望める中に、品性を涵養しつゝ、眞に實用に適する實用教育を施し、其成績顯著なるに至つては、實に我等姉妹の爲に、大に感謝せねばならぬ、同校は明治十九年九月服部一三、永井久一郎、手島精一、宮川保全の諸氏が、女子に適應せる職業及必要なる學科を授くるを目的として、神田錦町二丁目に設立したるに初まり、同廿年現今の所に移轉し、規模は次第に大きくなつたのである、翌年森文部大臣を經て生徒の製作品を　皇后陛下の御覽に供したるが、御嘉賞あつて金貳百圓を下賜せられ、其五月

には佛國大博覽會にて、生徒の成績品は銀牌を受くるに至つて、翌年四月　皇后陛下には同校へ行啓あらせられ金貳百圓を賜うた、斯の如くで、同校は皇室の殊遇を蒙り、例年種々奬勵の恩命を蒙り、所々の博覽會へは出品、常に名譽の賞牌を受領するを例として居る、

校長は創立當時服部氏、次に中川謙次郎氏、現今は高等工業學校長手島氏の兼任と成て居る、教授科目を學科と術科に分ち、術科は裁縫、編物、刺繍、造花、圖畫、割烹、の六種で、同校の出身者は、多くの高等女學校や女子技藝學校に歡迎せられて居る、同校術科授業の概略は左の如きものである、

△裁縫　和服の裁縫及ミシン使用法、男女小兒洋服、婦人洋服及其下着類の裁方、積り方、縫ひ方、及び袋物の一端を授け、この科は婦人必用の業である所から、自然修業者も多いやうである、

△編物　毛絲、絹絲及木綿絲等を以て、靴下、帽子、肩掛、シャツ、ヅボン下等の實用品を始め、テーブル掛、ピアノ掛、窓掛等の裝飾品の編方、縫取法を授け、又同科附屬として丸打、平打等で、帶止羽織の紐、被布飾を初め、諸種の組糸を敎へる、これも希望者が極めて多いやうである、

△刺繍　半襟、服紗、窓掛、額面、掛物、ハンカチーフ等を始め、諸種の布帛に人物、草木、花鳥、山水等を刺繍する技術を授け、此科は自ら下畫を描くの便を得せしめんが爲、圖畫を兼修せしめ、其技の發達と共に、意匠を優美ならしむることに務めて居る、此科の製作品は、近來海外へも輸出し、一の商品としても益々需用の增加を見る有樣であるから爾來盛んに習得者の數を加るであらうと思はれる、

△造花　此科の製作品は、婦人の帽裝、室内裝飾に用うる外、一般の頭挿に供する所なり、其需用頗る多きを加へ、近來は海外へも輸出するに至り、殊に同校の名譽と稱すべきは、宮内省より屢々御料理用、或は御挿花料として製作を命ぜられ、調進の每時、聖慮に適ひしと承ることである、此科も圖

畵を兼修せしめ、傍ら植物學の大意を授けて、偏に花卉爛漫の天眞を失はざらんことに勉めて居る、此技は殊に女子に適せる藝術であるから、受業者の進歩も頗る著しいとのことである、

△圖畵　本邦繪畵を主として、圖案、陶器畵、及友禪畵法を授け、其効果大に見るべきものがある、其他布紗、團扇、扇子、ハンカチーフ等に、風雅な繪畵を書かしめ、或は織物、更紗、浴衣等の模樣を工夫せしめ、兼て友禪模樣、及其描法を教へ、技術意匠の發達に伴うて、益々實利實益の擧がることに勉めて居る、

△割烹　節儉を旨として、鹽梅を巧みにし、日常食膳の用に適せしむるを目的とし、その目的にそふべく教授して居る、

猶左に同校の二心得なるものを揭げたるは、同校を紹介するに甚だ必要なることゝ信ずる、

◎入學志望者の心得　（一）本校は女子に適應せる職業并に必要なる技藝を授け、他日自營の便を得せしめ若しくは着實に一家を治めんとするにあれば、讀書、算術等の諸學科は只自營若くは齊家に缺くべからざるものを授くるに過ぎず、故に主として學科を修めんとするものは、本校に入學せざるをよしとす、（二）本校生徒養成の目的は、以上述ぶる所の主旨の如くなれば、生徒學校用の衣服其他の物品も、極めて質素實用を旨とし、聊も虛飾に亘るべからず、若し此主旨を誤る時は特に女子に缺くべからざる勤儉の美德を失ふのみならず、本校生徒養成の目的にも戻るものなり、

◎服裝に關する心得　近來女子の服裝漸く奢侈に流れ、互に新を競ひ、美を爭ひ、甚しきに至つては、小女子をして綺羅長袖、以て身を纏はしめ活潑なる動作を妨げしむるを見る、此の如きは、女生徒服用の本旨とする所ならんや、當校創立以來、深く玆に着意し、單に學問技術の進歩發達を計るのみに止らず、務めて着實の氣風を失はざらんことを是れ計れり、衣服の如きは、其心を外に

顯はすものにして、決して度外に置くべからざれど當校生徒は皆能く其旨を體し、敢て虚飾に趨らずと雖も、若し世の風潮に誘はるゝことありとせんか、是れ當校教育の本旨に戻るを以て、常に留意する所なり、依つて今回當校生徒登校の際着用する衣服の標準を定め父兄諸彥の參考に資す、希くは諸彥能く當校の主旨を深察せられ、單に衣服のみならず、其他凡ての頭飾及び附屬に至るまで節約を主とせられ、假令祭式日と雖不敬に亘らざる以上は平服も亦以て厭ふに足らずとの意を了せられ以て當校と一致協力し、女子の美風を涵養せんことを希望する所なり、

吾人は第一に同校の率直なる校名に左の袒を脫ぐものであつて此心得の二ケ條の如きに最も同意を表するのである、他の美名の下に吹けば飛ぶ如き女學校とは、大に撰を異にしたるものである、

◉次號には華族女學校の内容を紹介すべし

日本女學校の紀念式

舜水女史

實に月日の經過することの早さ、西澤之助氏が、女學校を設立することに運動されたことを、ツイ昨日今日のやうに思うて居たに、三層樓の日本女學校は早くも開校五ケ年の紀念日を迎えて、其式を行ふに至り、而も千名内外の生徒を見るに至つたのは、我女子教育の爲に大に喜ぶべきことである、

西澤之助氏は、本誌の創刊者で、近來は關係は無けれども女子教育家中、稀に見る溫厚篤實の君子人で、女學校の校長としては最も適任者である、そは氏が女學校を起すや、篤學の女生聲に應じて入學し、校舍忽ち空席を餘さゞるに至つた事實が證明して居る必ず生徒が多い故を以て、其校の評を甲乙することは出來ぬ、或は多數の生徒を集むる學校は、其實質に於て、反對あるものあるかも知れぬ、而も日本女學校は、名よく其實に伴ふ良校であることを信じて

疑はぬ、紀念式は同校三階に行はれ、東久世伯揮毫の勅語を前にし、副島伯揮毫の、言忠信行篤敬の額を左にして、千餘の生徒端坐し、向つて左は來賓席、續いて同校出身者席、右は校長始め教員、續いて保證人席、さしもに廣き大廣間、立錐の餘地もない程で、當日は生憎雨天なりしに拘らず、來會者は式場外にも非常に混雜を極めて、兎にも角にも素晴しき景氣であつた、

第十題



（其十）市の鉢植

やがて式は進行し、校長の式辭について、肝付將軍の演說、得意の辯舌を揮つて、長時間女子に向つての希望を述べられ、七福神の比喩中、女子を辯才天にたとへ、財を才に改め、女子の一德として辯才も必要であるといふ事を、諧謔的に述べたるは大喝采を博せられた、殊に近時の出來事を、近時の通用語にて如才なく述べられたは、尤も女子の耳を近くしたものである、終つて佐藤將軍の演說ある筈なれば、大に樂んだのであつたが、師

團行の時間切迫したればとて歸られたは甚だ遺憾な事であつた、次に幼稚園生總代、本科生總代、撰科生總代、出身者總代の校長に向つて賀辭があつたは西校長の甚だ喜ばしく感じたことであらうと思ふ、各教室は、中江藤樹先生の幼時、如意輪堂、凱旋歡迎、桃太郎凱旋、小督の局等種々の拵へ物あり、且つその間〳〵へ成績品を飾つて、大に來客の目を喜ばしたやうである、

本誌はつゝしみて同校の盛大を祝し、女子教育の爲に其發達を祈る、

女子商業學校の紀念會

神田錦町に在りて、和田垣博士を校長とせる、同校同窓會常盤會員は去二十九日其創立二週年紀年會を、高等商業學校內に開き、ピアノ、ハーモニカ、薩摩琵琶、三曲、狂言、唱歌及び園遊會ありて造花編物、繪ハガキ、辨當、サンドウヰッチ、壽司、支那饅頭など生徒の製作品を販賣し、なか〳〵盛會であつたとのこと、

婦人衞生會懇話會

東伏見宮殿下を總裁に仰ぎ、鍋島侯爵夫人を會長とせる、私立大日本婦人衞生會にては、明四日午後一時より早稻田なる大隈伯庭園に秋季懇話會を催す筈なるが、當日は同會の爲に篤き同情を以て盡力したる、前米國公使夫人ミセスバッタ氏を歡迎すべく、猶大隈伯の演說、其他軍樂隊の演奏、及二三の餘興もあるよし也

女子高師入學法の改定

女子高等師範學校生徒の薦擧に就ては、從來東京府は一般募集の方法を執りしが、本年よりは、其方法を改め、府下に設立せる專門學校在學生、及び高等女學校其の他高等女學校同程度の學校卒業生中、該學校長の保薦したもの〻內より選拔して、薦擧すること〻し、他府縣女學校の卒業者は、本府に本籍を有する者を除くの外は、薦擧せざること〻せる由、

又該入學試驗は、東　府鷹擧生に限り、本年よりは直接女子高等師範學校に於て、之を擧行することになれりと、

女子高師の出身者

竹橋女學校倒れて、東京女子師範學校（今の女子高等師範學校）の設けられたは、明治七年の三月であつたが、明治十二年、即ち第一期の分に加はる卒業生中、重なるは左の人々である

△相馬睦子、佐方鎭子（女子高師教授）、小貝貞子（愛住女學校長）（以上十二年卒業）

△竹澤里子（共立女學校長）、有賀長子（有賀博士夫人）武田錦子（女子高師教授）（以上十三年）

△喜多見佐喜子、鳩山春子（鳩山博士夫人）古市春子（工學博士夫人）（以上十四年）

△谷田部順子（谷田部博士夫人）、後閑菊野（女子高師教授）三増とも子（在朝鮮領事夫人）（以上十七年）

△安井てつ子（暹羅招聘中）塚本はま子、野口出帯子（華族女學校助教授）（以上廿三年）

△小池みつ子（女子高師教授）（以上二十四年）

△井口あぐり子（女子高師教授）、渥美千代子、平野のす子（以上廿五年）

△十文字こと子、雨森釧子（以上廿六年）

△岡田みつ子（高等師範學校教授）西島富壽（女子高師教授）（以上二十七年）

以上の内安井氏以下は高等師範と改稱されし以後の卒業生にて夫れより上記は小學師範時代の卒業生なり扨て同校出身中雲上に奉仕したるは

△倉山やす子（高輪御所）村田梅枝子（同上）渥美千代子（東宮御所）

の三氏にて海外には

△木村芳子（肅親王家庭教師）安井哲子（暹羅クインスクール）宮川專美子（ロンドン留學）松村きく子（白耳義留學）

の外三増とも子の如く良人と倶に任地に在るもの五

六名あり。

女學校の運動會

先月下旬市内の學校にて行はれた運動會は左の如くである、

▲芝公園日本女子美術學校――生徒五十名は校長職員に引卒され廿一日早朝日光中禪寺地方に寫生の爲め出發▲山脇房子氏校長の高等女子實修學校職員生徒一同は甲武鐵道線にて日野驛より下車し百草園まで赴く△お茶水高等女學校――も百草園に▲山田輿松氏校長の日本美術女學校――生徒は王子瀧ノ川方面に赴く▲日本女子大學――の秋季運動會は廿八日に行うたとのこと、

成女學校の料理敎授

成女學校にては、第二十六回の料理講習生を募集し去る十七日より始業せるが、同校にては今回新たに支那料理をも敎授する由、

三田裁縫女塾

芝區三田綱町なる同塾にては、本科一ケ年、速成科六ケ月、高等科六ケ月、洋服專攻科六ケ月、敎員養成科六ケ月、受驗豫備科三ケ月の六部に分ちて敎授し、尚ほミシン使用法講習會を開きて、實地練習をなさしむるとのこと、

女子音樂園

麴町區中六番町四番地に、今回新たに設立したる同會は、女子の品性陶冶の爲、特に和洋音樂を敎授し且つ家族團欒の裡に是を監督する新案の家塾にて、松山鑑子專ら監督の任に當り、園長堤正夫其外數名の敎師あり、且つ毎月一回文士音樂家等を聘して講演を開き、時々生徒の音樂演奏會をも開らくとの事嚴本捷二先生一流の、人氣取的でなく、うまくやつて貰ひたいものである、音樂の稽古所はさらでも諸種の弊害が伴ふのであるから、

在留の清國女學生

帝國婦人協會附屬實踐女學校支那留學生分教場は、赤坂區檜町十番地に在り、下田歌子女史主幹せられる學校で、科目は工藝部及び師範部の二つになつて何れも滿一ヶ年卒業の豫定である、學科は教育、心理、理科、地理、歷史、算術等にて、何れも通辯を介して教授し、其他圖畫、體操、唱歌、日本語、漢文等の五課目をも授けつゝあり、生徒の數は目下師範部十二名、工藝部八名都合二十名にて、猶續々來遊の希望者ある由であるが、前途の成績如何をも計らず、漫りに多數を收容せん事は、最初の目的にあらざるを以て、今回は固く爾後の入學を謝絶し、兎にも角にも在來の者丈にて、其結果を擧ぐるとの事である、而して其の生徒は所謂儒家とも云ふべき人の娘、多く且つ一行中黄氏の如きは一家族打伴れて遊學せるもので、其姓名及び出所年齡等は左の通りである、

師範部

聶緝熙(湖南衡山縣人四十八歳)　黄盧祐(湖南善化人四十三歳)　秋瑛　揚莊(湖南湘潭人二十八歳)　張漢英(湖南醴陵人二十九歳)　姚[illegible]生(浙江山陰縣人二十六歳)　李樵松(湖南平江人二十三歳)　許馥(湖南善化人二十一歳)　(江蘇上元人二十二歳)　黄國厚(湖南長沙人二十二歳)　許璧(湖南長沙人二十二歳)　陳光〇(湖南長沙人十七歳)　胡國祥(湖南長沙人二十二歳)

師範工藝部

黄華(湖南湘潭人二十九歳)　王昌國(湖南醴陵人二十九歳)　許徵(湖南善化人二十三歳)　吳嬰(湖南湘潭人十七歳)　黄國巽(湖南長沙人十七歳)　黄輝(湖南長沙人十五歳)　胡銘環(湖南湘潭人十四歳)　蔡鋭(浙江山陰縣人十八歳)

内黄國厚、同國巽は、共に一行中の老學生黄憲祐の妹で、許璧は其實娘、又陳光璇、黄輝の兩名は其姪である、猶は同校舍監に就きて聞く所に依れば、諸子は非常に學業に熱心で、記憶力に富み、且つ精神も強固なるより學術の進歩著るしく、僅かに月餘の修學なるにも拘はらず、日語の如きは略日用の事は通辯を介せずして、用を辨ずるとの事である、内最も驚くべきは、工藝部の進歩で、造花の梅花薔薇等の手近きものに至つては、其功妙眞に迫り、迚も短時日の間に於いて修得せしものとは思はれざる程

である、又彼等は何れも非常なる勉强家のみで、日曜其他放課の時間中と雖も、決して手を空うし居るが如き事無く、談話中にも必ず編物等の手藝を營んで居る、又其性質も至つて柔順で、師を尙ぶ事神の如く、其命令一として、行はれぬといふことはない左れば豫ねて想うたよりも、敎授の任に當るものは勞勤なくして其効果は大いに擧り、此儘にて一ヶ年の修業を積まば、實に驚くべきものありとの事である、

序に彼等生活の有樣を聞けば、衣服は、授業中は同校規定の授業衣を纏ひ、外出の際は、必ず日本服に袴を穿ち、只放課後の自習時間丈は、自國の服を著用せしむる事になつて居る、食事は日清折衷の料理で、常食は米飯の極く柔かきものである、只彼等は未だ衛生志想幼稚なるを以て、動もすれば充分咀嚼せざるものを嚥下するの癖があり、爲に往々腸胃を損ずる事があるので、監督者は常に食卓を共にし、之が矯正に務めて居る、又彼等は從來其足を纏ひ、步行の妨げを受け居たる反響であるか、留學以來非常に運動を好み、體操時間中は勿論、放課後及び日曜等には、多くは運動場に出で、嬉々として各種の遊戲を試みて居る、殊に本國は、未だ醫術の充分發達せざる地であるから、其疾病等に罹つた際には、所謂西洋醫の投藥たる無色の水藥のみに甘んずる能はず、各自携帶の草根木皮を煎じ出し、又は丸藥、練藥等を併せ服し居れる由であるが、之をも俄かに制止せんは却て徒らに危懼の念を抱かしむるに過ぎざれば、當分彼等が任意の儘に爲し置くとの事である、

敎員檢定試驗の日割

師範學校、中學校、高等女學校敎員檢定本試驗日時割は左の通にて、明日より始まる、

數學(算術代數幾何)	十一月四日	午前九時より
		午後一時より
博物(植物)	同	午前八時より
農業	同	午後一時より

博物(植物)	十一月六日	午前八時より
家事	同	同
博物(動物及生理)	十一月七日	午前七時より
修身	十一月八日	午前九時より
裁縫	同	午後一時より
博物(鑛物)	十一月九日	午前八時より
裁縫	同	同
音樂	同	同
裁縫	十一月十日	同
音樂	同	同
手工	同	同
數學(算術代數幾何)	十一月十一日	同
手工	同	同
體操(兵式體操)	十一月十二日	同
數學(算術代數幾何)	十一月十三日	同
體操(兵式體操)	同	同
數學(算術代數幾何)	十一月十四日	同
體操(普通體操)	同	午前七時卅分より
數學(算術代數幾何)	十一月十五日	午前八時より
數學(算術代數幾何)	十一月十六日	同
修身	十一月十七日	午前九時より
數學(算術代數幾何)	同	午前八時より
數學(三角法)	十一月十八日	午前九時より
圖畫(用器畫)	同	午前八時より
教育	十一月二十日	午前八時卅分より
圖畫(毛筆畫)	同	午前九時より 午後一時より
物理	十一月廿一日	午前八時より
圖畫(鉛筆畫)	同	午前九時より 正午十二時より
物理	十一月廿二日	午前八時より
化學	同	同
數學(解析幾何)	十一月廿四日	午前九時より
數學(微分積分)	十一月廿七日	同
圖畫	同	同

學校

●新刊寄書

六合雜誌	二九八	東京	ゆにてりあん弘道會
愛國婦人	每號	同	愛國婦人會
裏錦	一五四	同	尚絅社
廿世紀婦人	二ノ一〇	同	北海道婦人教育會
新聲	一二ノ九	同	隆文館
中央公論	二〇ノ一〇	同	反省社
成功	七ノ四	同	成功雜誌社
をんな	五ノ一〇	同	大日本女學會
女學世界	五ノ一〇	同	博文館
婦女新聞	每號	同	婦女新聞社
國學院雜誌	一一ノ一〇	同	國學院
音樂	五ノ六	同	樂友社
婦人と子供	五ノ一〇	同	フレーベル會
日本婦人	七三	同	帝國婦人協會
日本の家庭	八	同	同文館
時好	三ノ一〇	同	三越吳服店
教育實驗界	十六ノ七、八	同	育成會
向上主義	一二三、四	同	文友社
慶應義塾學報	九五	同	慶應義塾
體育	一四三	同	大日本体育會
東京經濟雜誌	每號	同	東京經濟雜誌社
商家之友	四三	同	時事新報社
婦人畫報	四	同	近事畫報社
獵友	六ノ九	同	同發行所
教育公報	三〇〇	同	帝國教育會
教育	六八	同	君溪會

詞藻



御歌所參候從二位伯爵松浦詮先生選

初冬時雨

天

冬のたつしるしと見えてさだめなく
落葉まじりにふるしぐれかな

東京市本郷駒込東片町三一 大澤小松子

地

かきくもりふりみふらすみしくれしん
空にも冬をしらせ顔なる

東京市神田區淡路町一ノ一 合田操子

人

木からしのおとさわからく冬は來て

東京市日本橋中洲町二號地 小林芳子

いまやしくれもふるの小道

秀逸

初しくれわがやま里におとつれて
冬をしらする神無月かな

肥後 佐々有隣子

もみぢ葉も菊ものこりて今朝よりの
しぐればかりに見ゆる冬かな

肥後 友永章子

山かせの木のはをさそう音さむく
しくれふるなり冬やきぬらむ

薩摩 松原みね

東京　青柳春子

椎のみをひろひて歸る里のこの
袖にしぐれのおとしづかなり

佳調

はら／＼としぐれのあめのかゝりけり秋を惜みし袖にたもとに　大阪市　船越小仙子

こゆるぎの磯うつなみの音さむく冬を告けてそしぐれふるなり　相模　森田はる子

佐保姫がなごりのなみだ空にみちて冬の山さとしぐれふるなり　肥後　池邊草美子

きた山に時雨見えつるこのあしたみやこのそらも冬めきにけり　大和　栗山俊子

わらかけし田伏の庵のむらしぐれ木のはつもりて冬は來にけり　埼玉　横田須磨子

落葉して人の跡見えぬ古やしろ繪馬にしぐれて冬やきにけり　相模　倉橋よし江子

けふといへはさすがしぐれになりにけり昨日の秋の峯のうき雲　肥後　友永つれ子

時雨ふるふせやの軒に椎のみのおつるおとするふゆはきにけり　東京　畑江田鶴子

ひとしぐれさそへば木々のもみぢ葉も袖にふりそふ冬のはつ空　肥後　秋吉輝尾子

笠たてゝ人まつかげのたけかりに神なつきてふしぐれふるなり　肥後　佐々小琴子

ちりしける紅葉のうへにさひしくも冬來にけりと時雨ふるなり　東京　瀬藤千代子

秋すきてまたほともなき小山田のかりほす稻にしぐれふるなり　岐阜　豊田冬子

をしみつる秋はいつしかすぎぬとに音たてゝふる初しぐれかな　靜岡　竹内みつ子

やれまとにすたく虫の音かれ／＼て野守が庵にしぐれふるなり　相模　芙蓉子

うらかれし軒はの萩にはつしぐれあはれは秋にゆづらざりけり　大阪　山中益子

七草の花すりころもかへしけふいとゞさひしくしぐれふるなり　大阪　田中れん子

刈はてし田の面さひしくしぐれ來て案山子の上に冬は來にけり　金澤　北隆子

もみちちるそらはしぐれて都さへいとゞさびしき冬はきにけり　東京　田中千賀子

もみぢ葉の秋のなごりとみし枝もあとなくちりぬふへの時雨に　神奈川　豊田艮子

時雨ふる音しめやかに降りいてゝくち葉のうへに冬は來にけり　愛媛　高橋茂子

初時雨この葉まじりにおとなふは冬きにけりとしらすなるらむ　能登　高森一子

二つ三つこずゑにのこる山栗をうちたゝきてもふるしぐれかな　河内　田中あさ子

冬來ぬとかこてる花の袖もやうぬらしてそふるはつしぐれかな　群馬　竹野ふし子

ふゆ來ぬとしらせ顔にもわか庭の木の葉さそひて時雨ふるなり　石狩　加藤壽惠子

木からしの誘ひてふれる時雨をは冬のはじめとたれかさためし　陸前　前田河みさを子

陸前　前田河千年子

よもすがらふく木からしに降ましる時雨ぞふゆの初めなりける
三河 きく子

みやしろに散のこりたる紅葉をけさのしぐれぞ染めてふるなる
近江 萩原治子

いつしかに冬來にけらし松はらにけふるとみしは時雨なりけり
東京 青木たま子

けさはしも落葉ばら〳〵音のしてさびしさそふる初しくれかな
奈良 天野照子

いつしかに冬來にけらし袖やれし尾花のうへにしぐれふるなり
東京 大木光子

昨日けふ空はしくれてむらもみちそめぬかたなき冬は來にけり
上野 木暮千代子

ふる音もいとゞさびしく我が庵に冬をしらせのはつしくれかな
岐阜 青木まさを子

冬きぬとまきのあみ戸におとつれてしくれ寒くもふり初にけり
神戸 今西久惠子

ちはやふる神無の月のそてしくれきのふの秋のころも更へまし
神戸 今西操子

ふゆきぬと比叡の嶺おろし風さむく落葉が上にしくれ降るなり
福岡 三原須那子

人訪はぬ庭の落葉にふゆきぬとおとつれそめてふる時雨かな
松山 田村多豆子

ふり初るけさたに寒し袖ぬらすしくれを雪のはしめとおもへは
山口 村上操子

うき秋をおくりしまゝの袖の上がまたぬらしてもふるしくれ哉
松山 上原のふ子

冬きぬとまつふりそむる時雨にそふく風ならておとろかれぬる
大阪 田中静子

雁さりて秋たちそめてきのふけふ淋しきよるをしぐれおとなふ
三河 永井さい子

わかやどのもみぢは秋のいろながら冬としぐるゝきた山のそら
福井 岩橋花子

吹庭におつるこの葉もそれかとそしくれ勝なる冬はきにけり
津 神田みよし子

はけしくも窓うつ音におとろけは冬をしらせのしくれふるなり
三重 茨木みす子

うき秋をおくりし風のふきかはり空はしくれとなりにけるかな
秋田 細矢はる子

また秋の色とながめしもみぢ葉に降るおとさむき夕しくれかな
秋田 佐々木とら子

いつしかに冬來にけらし庭の面にこのはちらしてふる時雨かな
大和 栗山たか子

松にふくかせもつめたくなりしより空にしくれの冬は來にけり
埼玉 横田秋子

我門に冬來にけりと木からしのけふのしくれをさそひてそふく
越後 松永しけ子

桐の葉のちりてさびしきこすゑにも時雨しにけり冬あさきゆふ
大阪 山本いせ子

落葉かくしづや家路にいそくらむいつしか袖にしぐれふり來て
東京 瀬藤千代子

ふゆされは野山の千くさ枯れはてゝ落葉のうへに時雨ふるなり
東京 入江菊子

神なづききのふにかはるさま見えてしぐるゝ空の晴くもする
名古屋 木下鶴子

いつよりか神無月にはなりぬらん昨日もけふもしくれふるなり
磐城 三森須磨子

ひろのまは冬ともまだし思はぬをさよの時雨ぞさびしかりける
旭川 磯部照子

吹くかせにちりてはつゝもる紅葉の上におとつるはつしくれかな　東京　高橋珍子

かせはやみちかつちる神無月山めくりすのはつしくれかな　東京　岩谷淺子

落葉さへつもるひかすになとろけはまたもる雨のふりまさるかな　埼玉　横田やな子

家鳩のこゑもしくれて夕やまのふもとにさとにふゆは来にけり　東京　彌津恆子

ゆみませる母をみどりのまくらへに冬にけらしゝ時雨ふるなり　名古屋　近藤悼子

やまざとに冬ははやくおとつれておち葉まじりに時雨ふるなり　下野　小林すゑ子

白ぎくの咲きそめたりと思ふ間もはやしくれして冬は来にけり　能登　菅野繁子

初冬の木たちさひしきかみかきにしくれをはらふ鶴の羽のおと　相模　豊田桐子

きのふまて秋のなこりとみし山の木末おとなくしくれふりけり　東京　田中千代子

秋はてしそらよりいつかしくれ来て物さびしくもありにける哉　東京　五十嵐清子

百草はあとなくなりし冬かれにいほりもあれてふるしぐれかな　東京　辰己秀子

あかすみし八千草かれてきのふけふ庭のかれはに時雨ふるなり　河内　田中たつの子

かきふれのつなくもみえて昨日今日川かせさむく時雨そめけり　秋田　古瀬りく子

あしほ山くもたちおほふ高根より冬とさためてしくれふるなり　秋田　古瀬惟子

いつのまに冬はきにけん川つたひしくれそわたる虹のかけはし

靜女

天

よしの山かすみに匂ふはなよりも
君か操の香こそたかけれ　大阪市東區谷町一ノ一八七　黒田代音子

地

こゝろにもわらて立まふ岡の名の
鶴の羽袖やつゆけかりけん　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

人

今もなほ賤のをたまきくりかへし
君かみさをのしのはるゝかな　大坂市惠美須町二ノ六六三　船越小仙子

秀逸

立まひしよし野の雪もかまくらの
春よりはまたうからさりしを　山口　村上操子

をたまきをくりかへすてふ言のはの
花にみさをの色そみえける　奈良　天野照子

摩 松原みね子

其かみをこひてたちまふ鶴が岡
　なくねやいかにあはれなりけむ

松山 上原のぶ子

おもひきや子をすつる鼓の星つくよ
　かまくら山にわらむものとは

三重 茨木みす子

よとみなく賤のをたまきくり返し
　流れゆくせをしとふあはれさ

秀逸

東京 高橋珍子

君をのみしたふこゝろを鶴がをか立まふそらに見せしやさしさ

肥後 友永つれ子

鶴が岡まつの上にも見ゆるかなよしのゝおくをしたふみさをは

肥後 佐々有隣子

千年へて鶴が岡へのみやしろにしづやしづてふこゑのゆかしさ

東京 小林芳子

おたまきのくりかへしてもおもふかなつまこふ妹がきよき操を

東京 大木光子

みよしのゝ雪を思へばこゝろならで立舞ふ袖やいかにくやしき

肥後 秋吉輝尾子

いさぎよく世のちりひぢを拔出てともなふせこのなき玉の緒を

福岡 三原那須子

夫こふる深きこゝろを舞ひうたふ君がみさをぞ世にたぐひなき

岐阜 青木まさを子

しらゆきのつもり〳〵し思ひをばたちまふ袖のものがたりける

静岡 竹内みつ子

なつかしき花にわかれて鎌倉のはるのさかりにまふこてふかな

岐阜 豊田久子

ありし世にたちまふ君のはなのそでかへす〳〵もしのふけふ哉

長野 田島みよ子

見れど〳〵なげきのみこそ増かゞみ戀しき人は見るよしもなし

大阪 山中益子

みよしのゝ雪にわかれてあはれにもあつまの花に舞へる君かな

大和 栗山たか子

ますかゞみなみだのそでにつゝみてぞかへる都の空ぞかなしむ

河内 田中しづ子

よし野山入にしせ子のおとおひてこと葉の花をさかせけるかな

下野 木邑節子

君したふなみだをしひて舞ふ袖につゝむみさをの花咲かせけん

茨城 佐藤八重子

吉野やまことはのはなを咲かせけりちる身の末の風ひやらずて

東京 五十嵐清子

鶴が岡神のみまへにそてふりてわかれしつまのちよやいのりし

東京 大澤小松子

あかさりし花にわかれてし〳〵つと鎌くら山にまふこてふかな

東京 田中千賀子

おもしろくおのが昔をうたへどもせんすべもなき君のかなしき

肥後 佐々小琴子

星月夜かまくらやまの舞のそで千とせゆかしきすがたなりけり

埼玉 横田須磨子

世にいてぬ物とはなれど舞の袖つゆもうこかぬこゝろなりけり　埼玉　横田秋子

よし野山つまに別れし其日よりこゝろやいかにわひしかりけむ　秋田　佐々木とら子

青柳のさしもすなほにみゆれともこゝろは風になひかさりけり　秋田　細矢はろ子

かまくらの風そうらめしみよしのゝ花のかをりの葉はろゝより　陸前　前田河千年子

君いかにしのふなるらん鶴か岡にたちまふそての色にいてしと　相摸　森田はろ子

松風をつゝみの音ときくことにそのよのさまのしのはろゝかな　石狩　加藤すゑ子

神さびし八幡の宮にかなてたるまひにをみなのみさをしめしぬ　松山　田村多豆子

みよし野の雪をうたひしひとこゝろにかまくらやまの春も色なし　東京　岩谷淺子

武士のよろひの袖をうちふりしおとほりかはにひゝきけろかな　大坂　田中靜子

鶴か岡まつのみさをのちよかけて人のかゞみとうたはれにけん　三河　きく子

みよしのゝ雪はものかはいときよき君かみさをぞ人もあふかむ　愛知　柳原しづ子

雪ふかき吉野の山をたゝひとりつまにわかれしこゝろかなしも　陸前　前田河みさを子

舞ふ袖につゝみもあえすかへかへし操のふしをうたふをゝしさ　近江　萩原治子

をみな子のこゝろとなしてならはまし吉野の花とにほふ君をは　津　神田みよし子

よしの山おかぬわかれを思ふにもかへすたもとは猶やぬれけん

操かへしなすよしもなきむかしをはせめてなくさど君歌ひけむ　福井　岩橋花子

かたみなろかゝみ取出しなかむれはなほも戀しき君かおもかけ　大和　栗山俊子

いにしへにかへらぬよしを鶴か岡たち舞ふ歌のいまも身にしむ　肥後　友永章子

せの君の行衛したひてしづやしづ歌ひしいものこゝろゆかしも　越後　松永しげ子

星月夜かまくら山に幾代へてしつかのみさをはかはらさりけり　大阪　山本いせ子

鶴か岡につはさならへし君をこひてこゝろ靜にかへすたもとか　秋田　古瀬惟子

吉のやま花のたもとをかへしゝはみれのくもまの人やこひけん　秋田　古瀬りく子

吉野山くもふみわけてせのきみのあとをしたひし人をしそ思ふ　河内　田中たつの子

舞ふ袖は飜へしてもこゝろをはひろかへさぬぞあはれなりけり　上野　木暮千代子

次號兼題

(歌)氷始結、社頭雪、
(文)雪の日に滿州の寒氣のを想ふ

恐ろしくて見たきもの

荒馬のゆくへ、猫のお產、大犬の寢顔、蛇の穴(石巣鶴子)荒野の月、つらき繼母の心(若山久子)野ざらし、隣座敷の酒醉、人の心にわが行末(三輪歌子)切傷、龍卷、大切なものをこはした時(伊藤政野)岩のくゆろ時、地震のあと、夕の墓地(伊藤光子)洞穴の中、古社の拜殿、赤兒のミイラ(今津照子)叱られた時の父の顔(眞尚雪子)

華族女學校教授 井上頼圀先生撰

天

秋日汽車旅行記

群馬 竹のふし子

高嶺に澄める月を見ても、千草にすだく虫の音をきゝても、漫ろ思ひ出さるゝは親しき友にこそ、況して筒井筒ふり分け髮の幼きより睦びにし二なき友と涙に袂分ちし彌生の空を、霞に去にし雁がねの今また月に憧れて歸り來るを見ては一入友の慕はれてなん、今日しも晴れ渡りたる空には心にかゝる雲さへなきをいかで只にやは過ごさるべき、況してや穗に出し尾花は友の在す方より招くに似たる風情をや、父君の許し給ふものから、心も空に停車塲にとは向ひぬ、合圖の笛と共に聞ゆるは優しき軍歌の聲、懐しき哉、修學旅行に勇める少女等のすさびなるらん、妾も友と手をくみかはしつゝ此窓に唱ひ興じ、事もありしを今は只一人思ひ廻らす滊車の窓、送りては又迎ふるに隙なき野山の景色、何れ友を忍ばしむたねならぬはなきに、身は滊車の中にありながら、心は窓をぬけいでゝ、幼き昔に立歸り、いつしか友と手をとりて黃金の波にたゞよひつ、稻子追ひかけ、はた錦織りなす龍田姫のみ袖に戲るゝ昔の夢をくり返し、夢に夢見し心地せる折しも淒しき音に驚けば、早や次の停車塲にてありし、時計を見れば車の動き出でしより僅十五分にして懐しき友の在す地には着きしなり、あゝ十五分の滊車の旅、あゝ十五分の滊車の窓、山川の變らぬ姿を眺めては、變り果てし身も打ち忘れ、幼き昔に立歸りし事の可笑しもはた嬉しうてなん、かゝる樂しき、旅なし得るも、思へば一滴の湯氣よりなりし滊車の賜ぞかし、去にても旅路に惱みし昔の人を、あはれ十五分の間なりとも呼び戻さまほしきぞ。

地

長崎市銀町　森屋その子

かなしき物は秋なれど。また心地よき物は秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜けれど。秋の士を高うするにしかず。花の人を醉はしむると月の人を清ましむるとは自から味を異にするものなり。喜樂の中に人間の五情を沒了するは世俗の免るゝ能はざることながら。われは萬木凋落の期にあたり。靜かに物象を察するの快なるを撰ぶなり。などゝ空想にふける內、滊車は長輿の驛に着けり、大草すぎて小川つたひの谷間を行く、枯生の風にそよぎて。水の歌のみかはらぬ聲を立たり、春なりせば筆土や生へん菫や香はん、今は蝶の眠のさむべくもあらず、ゆき〳〵隧道一ッ拔くれば。あなうれし瑠璃なす海は目の前に來りぬ。銀波金波の打寄する小磯、やゝ紅帶びたる夕陽は、しづけき夕なぎの海原に、その影をおとして、かなたより我下まで金色にまばゆく輝ける、太き橋をかけぬ、ゆら〳〵とゆらめきてさながら浮べる如くに、山の端に近づくに隨ひ、いよ〳〵大きくなりまさり、やう〳〵其光を收め、ます〳〵色は紅にそまり行くめり海の面の光り行く色くさぐさに麗しとも麗し。諫早過ぎ大村に着きし頃は、早や、星はきら〳〵光りぬ大村松原越え彼杵にて下車しぬ。

人

橫濱青木町　安部ます子

すこしうらめしき秋の暮なむとする頃、深山に織なす姫が、み手きはをめではやなど、そゝのかさるゝまに、乘りいづれば、いづこの里ならむ、ほに出し尾花がもとに、咲のこりし常夏の姿をかしげにて、下葉色つく白萩の、枝もたわゝに、露の玉をぬきたるに、龍膽のみつ四つ咲るも、また一しほなり、里のわらべか、花海合戰もまた時節柄をかしうて、滊車はこゝかしこの、野邊も山里も、またゝくひまに打過ぎ

つ、河原にいづれば、白砂緑水の配合も、さながら一幅の畫面にして、淋しげなる木立が中に、柿の實のごやかに、なりたるもまはり、いましめもやらぬ、里人の、心ゆかしうてなむ、向ふを見渡せば、紅に、あるはくちば、あるは緑したゝる常盤色の錦のとはり、かけ渡せるごとくなるもなほめでたしかく、みのるほご穂はたれにたれて、案山子はおのがつとめを守り顔なり、かくうつり行く様々の、めでたさに、頭さしのべ見いでつゝ、もてかいつけたるに、心無きちりの、とび、入りて、目に入たるは、開くもいたくてをしけれど筆とめぬ、宿につきぬれば、十六夜の月ほのかに、うらがすみにもれ、溯上のさゝ波銀蛇の尾をなし、五位鷺の聲只一つ明日の山路の夢をたのしましめぬ、

秀逸

大阪　船越小仙子

釣瓶落しといふ秋の夕日は、あか〳〵と汽車の窓にさしぬ、我等は今、阪鶴線に乗りて汽車の旅にあるなり。

梅田驛を發せし頃には一室十八の乗合、互ひの談話もしめやかなりしに、神崎驛にて運動會の歸りにもや十歳ばかりの海老茶袴の一團我れ一と乗組みてより、群雀の百囀りに、頭痛や起らむと眉顰められしが、今、伊丹驛に着て、一行又も我れ一と下車したるに、涼風俄に室に滿ちぬ。

あら心地よしと思ひしも暫時、發車の鈴のけたゝましき中を車つらねて駈付けつゝ、喧ましかりし一行と引違へて入來しは、臙脂白粉の賤しき女連に圍まれし醉客、箕面の秋を探りし歸途にや、見れば紅葉の枝を携へたる、あはれ風流の遊びをし給ひしものかなと、稍心憎く思はれし折しも、窓にさし入る夕日に炫しげの眼を開きし醉客、熟柹の呼吸を吐きつゝ、何おもひけむ、手近なる一枝とり上げ、燃ゆるばかりのもみぢ葉を、一つ〳〵に捥り去りたる亂暴狼藉、林間酒を煖めて紅葉を焚きしは傳へ聞く仕丁の風流、て

れはまた夫れとかはりて露いさゝかの風雅もなく、醉ふたまぎれの殺風景、そもや紅葉に何の罪科ある、あはれ立田の山姫も涙ぐみてやおはすらむと、坐ろに人の無情の歎たれつ、見るとはなしに窓外を見れば透迤たる攝の連山には夕霧深うかゝりて、早やけふの秋も暮れゆかむとす。我等が乘れる汽車は、烟を吐いて山又山の、今、丹波路に掛りぬ。

和歌山　藤範佐美子

白菊の一輪淸く咲き初めし井戸端に、淡き一痕の殘月を、盥の中に浮べつゝ面を洗ひし妾と、早くも親しき友富美子の君に誘はれて、取るものも取りあえず、急ぎ日頃約せし旅にと、柴の戶を出て立ちぬ、月影を陷み、小路を辿り、稻田に玉なす黃金の露に、衣の袖を濕しつ、吹く朝風に鬢の髮なぶられつゝ、やがて寂寞たる寒村名倉の驛に着きぬ、點燈の光幽に、旅館の燈淡く、汽車まつものはたゞ四人、五時四十分乘車、汽笛一聲天地玆に同轉し、野走り、山奔り、川去り、森行き、一往一來、眠れる天地は車輪の響に寂しみを打破られ、月落ちし後は闇去りて顯れ出でし山川村里、前に聳ゆる高野山、麓を流る紀伊の川後に趨る葛城山は龍蛇のこど、そが中を縫ひつくゞりつ行く汽車は、妹脊の山を過ぐる頃、東天五色の雲龍田の姬の袂模様、佐保姬君の晴着かと見る間も遲く、やさしき秋の日のみ、神は、紫の輦に乘らせたまひて美はしく出でぬ、長き影を稻田の上に印しつゝ、汽車は遂に粉河の驛に着きぬ、下車しぬ、名にしおふ惠も深き粉河寺はまだ朝霧にとぢこめられ、墨畵に見ゆる七堂伽藍、西國三番の札所觀音大士の鎭坐まします所、いでや詣でばやとて行く事四丁、赤門雲に聳えて人を怒れるげなる仁王は物凄くにらめり、門をくゞりて苔靑き淸凉の地に入れば、錦を裝る紅葉は今を盛りと咲亂れ、杳々たる瀧の音は、梵鐘の聲に相和し、自然の松籟は讀經の聲に相合す、千手親音七寶の法池、何れか尊とからざるものはなし、されど根來和歌浦に行く妾等は、時の移りしに驚きて、再び停車場にと急ぎぬ、

肥後　秋吉輝尾子

立こめし朝霧ふみわけて、上熊本の停車場に至る、秋高く馬肥るの詞あり、人世のいともたのしき秋の空いかで空しくすこし侍るべきや、滊笛一聲、熊本をはなれ、三角さしてぞのりゆくまもなく、春日驛につく、人々の心もうき立らん、乗車するものいとおほく、右にながむ華陵山、はた遠近の山のは、一面に木々の梢の錦に、染てきりにかくれて、うすくこくみわたさるゝも心ちよし、稲葉をわくる風涼しう袂を拂ひ、言葉を傳ふ雁金、樂みのたねにこそ、川尻宇土をすぎ、住吉をすぎゆけば、朝日さしそふ海原に、男波女波のうちよせて、黄金の湧くが如くなるに、漁舟のかなたよりこぎくるさま、はるかにそびゆる温泉嶽の日影のまゝに、ほのぼのと霧をしのぎて見わくるは、實にすくるにいとをしまれにけり。いまだすぐるまもあらばこそ、直に三角驛なり、涼清なる海岸よ、いざよひの月さやかなる海べをてらす、愉快なる景色よ、みれどもあかぬながめよ、

能登　高森一子

一枚の赤切符をば手にせしまゝ、客車に身を投せしは、午後零時三十分、麗かに晴れたるみ空には、一點の雲だになく、窓打掃ふ秋風冷かに、日の光まばゆく照りまさりたるいと心地よし、黒烟を吐きつゝ進み行く車窓より見渡せば、金色のしとね敷き流したらむ如き、五百しろ小田あり、優しき千草八千草の己がじゝ咲き亂れたる野面あり、詩趣ある小松原あり、楓林あり、清きさゝ川あり、奇しき山あり、さては自然の美を妨げたるひろめ物、電信柱など、さながら飛ぶが如、いづれも後方に走り行く人はいざ知らず、初めてのおのれには可笑しき迄に面白う覺えつ。秋の日脚のいと早く、夕陽西に舂かんとして、紅葉せし樹々の梢は一入紅く、松の緑は光をそへて芽出度しともめでたし。

あはれ古より、秋てふときは淋しきものよ悲しき時なりなどゝ、うたひ來つるは、さても〳〵愚の極みならずや。花笑ひて鳥歌ひ、人心浮き立つ春よりも、己は寧ろ此秋をこそ愛するなれ、わきて、娛樂の旅行は秋の日に如くはなからめ。あゝ懷かしき哉秋の旅。天地萬物皆清し。不圖列車の步み緩みしと、みるみるめざす驛にぞ着きたりける。折柄うすもやこめしあなたの山の端より新月の薫微かにほのめきぬ。

相模　森田はる子

玉笹分くる風に驚かされ、出立旅はあはれも多かり。例のかるきよそひにて、國府津より東行汽車に乘る下り來る人乘る人、折柄心忙しく見ゆ、秋風を衣にしめて、つく〳〵と見れば、絹の袷重ね、コートさへきなしたるは、ことく〳〵しく覺ゆ、古めける單衣のみるからわびしげなるはいともいぢらし、とき衣ぬふ人なくてや、いづれも其心樣のよしあしはいざ知らず、唯見る形の上にては、貧富の差かくもあるよと、そゞろに讀賣新聞紙上の社會主義評論も思ひうかびぬ、車はいつしか進みて、手をのばさば屆かんばかりがけに穗に出でし尾花のまねくぞをかし、すぎゆけばあとおひまねくもかひなし、人のすさまねば、枯るゝまゝを月にまかすらん、やがて秋寒き大磯の浪風にふきはらはれ、ゆきゆけば豐あし原の平和をかされる千まち田の黄金色に、きのふこそ早苗とりしかと口ずさまれぬ、かなたにかゞし數見ゆ、やがて車におどろかされて、むら雀のとびたつ見れば、案山子はげにかゝしなるよとひとり興がりぬ、はるかの山かげにくれなゐ見ゆるは、やさしの花か、はた色づく木の葉かと、あやしむまにすぎゆくぞいと口惜し、つきせぬながめを、よばるゝ驛名におどろかされて、いそぎをりぬ、

和歌山　高内さくら子

蕭颯として、吹來る秋風の身にしむきのふけふ、我が朝夕立ちむかふ虎伏山も、立田姬がめぐみにもれず

松の木の間に染め出す錦を見るにつけ、野山のけしきの思ひやらるゝに、只にやむべき心地もせざれば、いでや近郷の秋色をさぐらんものをと紀和線にて出で立つ、野は一面に實りたる稻の、風吹く毎に黄金の波を打ちよせたるは、見るからに、ほゝゑまれける、稻穂をついばむ雀の群の鳴子の音におどろかされて、一時にぱつととび立つもいとをかし、目を轉じて山邊を見渡せば、草も木も夏の名殘のかげだに止めず、あるは濃く、あるはうすく染め出して、見る目まばゆきばかりなり、實にや昔の人の、二月の花よりも紅なりと、車をとゞめたりしも、うべなりけり、汽車はいつしか數里を走りて、五條につきぬ。あはれいにしへには「都をばかすみとともに」とうたひけん法師もありしよ、

群馬　林　廣子

頃しも秋のなかばにて、打續き空晴れたれば、軒端の楓さへ色はえて美しきに紅葉に名を得たる、宇源寺の邊りを訪ればやと、親しき友と打かたひぬ、はたなづかしき師の君の故郷も、此の地と思ふものから、尙更に思出も深からめとて、旅の心もおのづから急かるゝまゝに、例になく早く臥床をはなれ、一時も早くと、心たゞ急ぎにいそぎて、旅の意用もとゝなひぬれば、汽車にて前橋を發す。やうく東の空白みて、さしづる旭すがくし、それも昨日作りし『てるてる坊主』の惠かと、云へば、友の君も、なかくの御熱心なりしよとて笑ふ、かくて語りつゝ笑ひつゝ行くほどに汽車は、早くも龍海院の松原をすぎて、かしこにこゝにうつり變る景色、目もさめんばかりなり、かくて山に川にはた林を、幾つとなく送り迎へて、こゝは名にしおふ利根の鐵橋、川浪いとゞ淸らけく、そこ此處に群なして遊ぶ少女子の様など、一種の生けるパノラマにて、妾如き拙き筆には寫しもつきす恰も大海に小石を投じし程にも及ぶまじけれ。やがて目ざす宿に着きければ、急ぎおりたちて、裙のもすそもいと輕く、諸手を連れて、小徑をひろひぬ、あはれ樂しきは汽車の旅にぞありける。あゝ世の文明につれ、利器數多き中に、天涯萬里を縮めて、比隣となす此の鐵道の發明せられてより、世界各國に及ぼす利益の如何ばかりぞなど、歩みつゝも獨言れてなん。

越後　松永しげ子

糸より掛る秋萩、玉の露置き我宿、雁の初聲懐しき朝、兌むれば翅に掛けし友の玉章、菊見に來よとなり、汽車の便ある柏崎なれば、心嬉しと、やがて出で立つ、黄金波打つ畔道、招く薄に足輕く、驛に至れど人少し、汽車に乘れどこます、樂しき哉、我身を乘せて松原走る、乘合ふ人のえならぬ香高　傍に居たるが、いと羞しけれど、荒々しう物言ひ出でたる髭男いと恐しうてなむ、赤く熟したる石榴を、枝ながら身によせて、あわてゝ乘り入るを見るだに心せかる、破れ服の戰地より還れりといふ負傷者、墓參せむとする若き子と老女とには、諸人の目落ち合ふ、喉乾きたる折しも湯賣りに來れるは嬉しけれど、要なきに呼び歩くはさわがし

煙す煙草の香親しけれど、とんれる永く光游らけきに、石炭の煙入りくるは心苦し、とく出てよどわぶるに、續くこと八個、しばし青天滄海を見し時は言はむ方なき爽快ぞかし、米山峠車すら苦しきに、まして草鞋の紐を血染にして登りたる昔の辛さに引きかへ、今はかくと、黑き岩には都鳥安らかにむつれ、寄せくる波はこゝろのまゝに秋を歌ふ、やがて止まれる汽車の笛は、吾待つ友の耳に入りぬべし、菊の美しさは如何になど思ひしに果して我友は我を迎へて握る其手の暖く、櫻實赤き道に四つの袖、連れしとき、既に汽車は黑烟一條高くなびきて、安田の方紅葉もえて花より赤き林へとはせ入りぬ。

東京 青木叢子

汽車の旅路は夜こそよけれと母君の仰らせられるに、さればとて露繁き畦道を母君に送くられ、今より旅路に上る身とはなりぬ、盡きぬ物語のうちに早くも停車場に着き、汽笛の聲につれて、おさらばといふを互ひの名殘とし、黑き煙を跡に車は動きはしめ、見えすなりゆく、母君の御姿、見入れる眼に映ゆる故郷の山河、幻の如く現の如く、去つては來り來つては去り、今はそれも朧になり行きつ、容赦なき列車、巡れる線路は、其追ふ可き影をも奪ひ去れるなり、されど〳〵心の糸は綿々と何處までも其後慕ひて、汽車に反きて駈けるぞかし、止まりては動き、動きては又止まり、古きは去り新しきを迎へるなど、夢の裡に過ぎて、倘恍然と窓に倚れるわが面撫づる冷風に、こゝにも洩れぬ秋の哀れ徐々と身にしみて、胸掻き抱き見あぐれば、早や深緑なせる高き御空には、まばらなる星の閃き強く、遠りこめたる眞黑々の松原つゞき、何所の野ぞ、何所の山ぞ、生ひ垂れる草葉の陰、苔むせる巖の下に喞く虫の音の、喧しき車輪の響き充ちたる夜の靜を犯して、骨身にこたへよとばかりに、さてもわれは早くも旅の空なる身なりけるよ。

大阪 佐々木あさ子

汽車は重き足を揚ぐるが如く、木津川の清き流れに添ひて進行し始めぬ。入相の鐘遠く響きて、梧桐一片音なくして落ち、轉た旅人の心を寒からしむる頃なるに、今は車窓に近く笠置の山に接しぬ。嗚呼いたましき哉後醍醐帝。玉體を田夫の姿に替へさせられ只藤房、季房の二人を従へて此處を後に、何處ともなく落ち行き給へりとかや。昔を憶ひ今思出て慘らするも涙なり、鳥聲を收めて山寂寂たるに入日は力なく照し、河水滔々として今も、倘當時の歴史を物語りつ。さして行く笠置の山を出でしより、右は山又山にして黄葉紅葉の唐錦。左は木津の激流岩を嚙んで、時ならぬ花を咲かす、小鳥は朝に平和を歌ひ、溪流夕に平等を囁やく、汽車は今全速力にて此自然界を走れるなりき、車中には自己の榮耀を求むるに汲々たる紳士あり、黄金に使はれて勞々たる商人あり面に白粉を施して媚を賣る藝妓あり。人類の墮落、醜態は此に聚まり、車窓一歩を出づれば忽ち樂園。妾は窓外に顏を出して樂園の空氣を吸ひつゝ、流水岩を洗ふあたりに、優美なる野菊一輪夕陽にほゝえむを見たり、かくて刻一刻志す大河原驛に近づきつゝあり、此美なる樂園、戀しき野菊を後に殘し、エデンの園を追はるゝ心地して、汽車は山水の境を離れて、一驛、一驛又一驛、此たびは四邊濛塵を流したらん如くにして、エデンの園は遂に見えざりき。

短文

月に對して懷を述ぶる文

肥後 秋吉輝尾子

荻の上風もやうやう身にしみ、萩の下露もいよ〳〵しげくかなしむ虫の聲、稲葉うちそよぎ、木の葉かつ散る景色ものおもはざらんや、ふけ行く秋の空いかならん、隈なき月の光りに、露の白球いと美しくもてはやさるゝ今宵を、ゆくてはろけき外國の戰場におは

す兄君やいかに、此月影をながめたまふまで限もわかぬシベリヤの野戰も、中北のさまと聞けば、先ころのいくさにつゝがあらせたまはれば、砲を枕としうたたれの、いかなる夢をや結ひたまふらん、うちまれく一村すゝき裴こふさをしかの、聲なと見もし聞もし給ふ時は、さこそうら淋しうましまさん、人皆の故郷の物語も、雛母君母君はてはいとしの弟まで、かよはき女の世渡を思ひ出られ給ひては、涙にしとれやぬらし給ふことのおはしまさん、其地かはるとも雲井の月は、外國とて姿がながむる月ならんもこひしうくらしゝ兄君は相見ることあたはしと、いと、にてし、月みればちゝにものかなしうなりゆきて、日ころの思もつもり來てはふりおつる涙しけし、大和島根におり立て、女なりともなどて見苦敷心をもつへきやは、今はいよいよあきらめぬ、さはいへ今にも母上の御いたつき重り、もしやはかなくならせ給ふこともあらば、兄上といひ、母上といひ、さこそなげかせ給ふべきをと、かたくさためしま心も、くだけむを、皇國を守らせらるゝ戰地のみおほえもおそれおほしと思ふをりから、さつとふきくる嵐は、夜のふけゆくにや、いと冷なり、あほげは月は中空にありて、あはれ虫のこゑもなく、天地たゞさびしうなん、

裏まわり

群馬　竹のふし子

逍歩きの折、何心無く仰ぎ見れば、青き空に白き雲の、さながら炎滴の風に伏したらん姿に、思はず美しき雲よとさけべば、傍に居たる弟は『あゝあれは僕が、今朝お掃除した時のお庭の箒目が浮上がつたの。』

夕暮の散歩

大阪　田中靜子

何がしの法師ならねど、心淋しきまゝに、やをら立ち上りて、水音清きいさら川の邊をさまよへば、今し美しき新月は、ほのかに西の方より出で、遠く彼方へ飛び行く雁の、竿の如くなれるに、一層哀をそへ、實に夕ぐれの趣をいとゞ深からしむ、千草にすだく虫の音を聞きつゝ、家路をとめくれば、跡をしたひて、峯の松風の吹きくるも、亦淸き心地ぞする、

紅裡の白骨

東京　青木薰子

秘藏の小鳥の死を悼んで葬りける箱を發掘いて、無慘！涙の未だ乾かぬ遺骨を喰ふとする犬見付けるや脉となり、己れッと有り合ふ物さし振りかざして、跣足のまゝ飛び出し、意合腰になる途端紅ひの落葉ハラ／＼と眼を遮りぬ、アッと見上ぐる間に、犬は危くも逃げて、可哀や跡には骨のみ……。

菊

和歌山　高内さくら子

秋の夜さむに、ふしわびて、こゝもかしこもむせかへる虫のしのび音さへも、身にしみてえたへぬまゝやをら立ちいでゝ、窓おしひらき、仰ぎ見れば、中央一痕の名月鏡をみがきたらん如く、下界を照らしぬ、

そこはかとなく生ひ茂れる、八千草の中に、淸き月光をあびて、いよ／＼白き、今をさかりの白菊の花、

あはれこの花、大方の草木は見るかげもなくかれはてゝ、物淋しき、このごろひとり露霜にきそびて、千世のすがたに咲きいで、人目をよろこばしむ、いとあはれなり、

虫干

能登　うもれ木

九月十日、今日は日本晴のお天氣、而かも日曜で、弟も家に居る此機を外さず、本を干さうと言ふので、私は共同書齋から書物を運ぶ。廣げるのは弟の役目、みんな出して了つて、さて背戸に行つて見ると、廣げたとも廣げたとも庭一杯、雑貨市に來て居た本賣よりもまだ／＼澤山。

太陽の這入らぬ内にと又も二人で種類を別けてすらりと棚に飾つた、二段目が私のもの斗り、女學講義、たんぽゝ、女鑑、女學世界、女子の友、少女界、それに女子文壇が七號から僅か三冊、其外女

繪式類などかれ是れ二百册に近い、我ながら驚いた。そこへお父様は被入つて「あ、奇麗になつた、お、是が皆お前のだナ然しどれだけの利益があつた。」考へて見れば實際目立つ利益と謂ふたら更にない。私は默つて笑ふて居ると、お父様も笑ふて被在つたがやがてお座敷の方へ。

花萩咲ける小池のほとりにて

千葉　鎌田清子

どうして、皆様はかう作文が御上達なのかしら、と私は言ひながら、手にせる女鑑を閉ぢて、糸萩美しう咲き亂れたる、池の汀に佇みて、さら〳〵と吹き來る秋風に立つ小波のおもしろう、赤き金魚の浮きつ沈みつ泳げるに、心奪はれて、眺め居る折柄、耳元にて柔しき御聲にて我名を呼べるに、驚きて見かへれば、あら、何時の間にいらせ給ひしか、親しき友の順子の君よ、ばら色なせる、ふッくりしたる兩の頬に、愛らしきゑくぼを見せつ、まつ毛長うつぶやかなる目元に、溢るゝばかりの笑を湛えながら、かろく肩をたゝいて、あなた何をぼんやりして居らつしやるの、答へず、我はホゝと笑んだ、早くも女鑑見つけ給ひて、あゝわかつてよ、あなたまたきつと文章についてくるしんで御出でなすつたのでしよう、あてられていともおかしう、二人一度にホゝと笑ひぬ私も矢張りくるしんで居たのよ、何うしても考へがつかなくつて吐息ばかりついて居て、兄様に笑はれて了つたのほんとうに文章はむつかしいのね、何うしたら、思ふことがすら〳〵とかけるやうになるでしよう、だが、御上達な皆様もきつと始めはかうしてかしらをおいためなすつたのにちがいないのよ、まだ〳〵、私達は勉強が足らないのですわ、あゝそうよこれからも一層はげみませうね、折からさつと吹き來る秋風に、咲き亂れにし糸萩の花、はら〳〵と美しう散りぬ、

間瀬の磯月

越路　松永しげ子

越路の平野信濃川流れて蒲原の平原此處に作らる、眺め限りなきに、角田彌彦の二山聳えて、亦一趣味を加ふ、背面なる海岸絶景に富む間瀬なもて秀なるものとす、此の海邊にあこがれむとて出づ、車をと思へど徒歩にて行く、豆の葉の黄ばみ河骨の黄金色に咲きたるも面白し、樋曾の峠を登る、谷川音立てゝ流れ、水車靜かにめぐる、秋の千草おのがじゝ笑ひ綻びし尾花の根もとに振り捨てがたき鈴虫の音を友に、涌く泉を掬して下る、老いたれど歌聲ゆかしく嫗上りく、賞すればよく唱ふ、夕げの烟立ちける時、松竹屋に著、夕日の波を眞紅に染むる、眺め、響たる鮮魚味よし東辨天岩をつき出し、國造岩高く西にそばたちて磯邊には、幾十の漁船白帆かすむ、沖邊には佐渡の島次第に夜の霧につゝまる、寄せては返す青波の冷を賞し、汐風に胸を撫でさせて、絃月の光を仰く、渚には調ふる波の埘靜かに、粼く不知火玉を碎きたらむ如し、漁火三つ四つ二つ數ませば暗に飛ぶ螢の如く樂しみつきず、今宵はまことの波枕せまほしう思へど、さはとて宿に入る翌朝青波に眼を洗ひ、辨天岩國造岩に遊ぶ、漁船入りてく此處に三年病める娘を岩かれに海を眺めて物語る、朝めし後船にて磯を巡る、かけの松神の植ゑられし如く、七島こは岩七つあり、獅子岩明神橋、形と取りての稱、洞穴の内底圓く鍋の形したる二つをめがまなむまと稱す、波靜かに風隱に光強からずして絶景の海にあく迄遊ぶ、實に心地よや船に強かりしも、景に醉ふて還れば、畫食午睡後再遊を期して出ず、亦もや夕日波を染めて、漁歌別離を惜むが如し。

日記の一節

千葉　鎌田蕗賀子

朝四時半起床、戸の外に出づれば、さら〳〵と、萩の上葉を吹く風も、冷たけれども、有明の明星、美しく咲き亂れたる花萩に、玉かとまがふ白露きら〳〵と、散れるも、いと面白ろくて、拙き

一首を、

明星の一つ御空にかゞやきて
玉かとまがふ萩の白露

鈴虫松虫のあはれにも、柔しき聲もて、泣く音を聞きつゝ、驚かせじなと、そゞろ池のほとりに、歩を運べば、こゝにも花萩桔梗女郎花、さてはかんな等、とりぐに皆美しう、咲き亂れて、清き池の面に、影移り愛らしき金魚の、二三匹散る花片を可愛き口もて、追へるもいとをかしくて、こゝにも一首を、

池の面にまにく浮ぶ花片を
餌かとて追へる金魚のむれ

何處よりか得ならぬ香りの、風のまにく香れるに、心を引かされて、歩を運べば、もくさいの青葉の蔭より、馥郁たるに、一枝折りて髮にかざし、なほ文机の上に、書讀む友にとて、二枝三枝折り取りて、歩を返しぬ。

白菊

前橋　林　廣子

あはれ今日此の頃のいみじき露霜に、野邊の八千草、虫の聲音もはやうら枯れて、賤が小庭も一入淋くと思はるゝ頃ほひ、草葉におけろ露霜ものかはと、ま垣に添ひて咲ける白菊を見るにつけて、掛まくもかしこけれど、かしこきあたりにては、御紋章とせられいと菊をめでさせ給ふとかや、まことにこの菊こそは、露霜の中に色香すぐれて、人の操の鑑ともなるべきなれ、實に何事にまれあらゆる艱難にたへしのび、この白菊の如く、清き香を永久に失はざらんことをこそれがはほしけれ、

短歌

月　　薩摩　松原みれ子

萩すゝきさきみだれたる秋の野のつゆにやどれる月のさやけさ

観月　　福井　岩橋花子

うき秋もこよひはかりは忘られてのとかにふくもちの夜の月

月如鏡　　肥後　池邊草美子

限りなき月のかゞみをあふぎてはこゝろの雲もはらはれにけり

海邊月　　肥後　友永章子

海士の子もしほなは引てあそふらむ磯へさやけき月にうかれて

月前遠情　　肥後　秋吉輝尾子

はろはろとへだてし身さへ面かげに浮ぶやそらにすめる月かげ

月夜遠征を思ふ　　大阪　田中靜子

ますらをは劍かざしてこよひしもふろさととほく月やみるらん

九月ばかり野べのほそ道を夜ゆきて　　肥後　德永萬壽子

秋の野のこゝろほそ道わけゆけばたれを松むしなくれさびしも

花賣　　相摸　倉橋よし江子

母ひとりやみます家にいそぐかな花うるしづのくすり買ひ得て

擣衣　　東京　堀江田鶴子

一人ねの淋しきまゝに賤の女がころもうつ夜のあはれなりけり

藤袴　　奈良　天野照子

ぬきすてしは誰ともしら露のこぼれてにほふふぢばかま哉

白菊　　失　名

美しき垣根の菊を手折りきてはゝかみたまにさゝけゝろ哉

殘菊

にはの面はしもさへふかくおきぬるにいつまで菊の咲匂ふらん

殘菊　　和歌山　高内さくら子

さらにまた霜の花さへ咲きそへてうつらふ菊のいろまさりつゝ

野虫　　伊豫　絲田春子

花すゝまれく野すゑに夕ひをちて淋しくきこゆむしのこゑく

雨中虫　　石狩　加藤すえ子

ふりつゝく雨にみたれて虫の音もいとゞあはれになりまさる哉

初秋　東京　瀬藤千代子
庭のへに秋を知らすゐむしの音のものさひしくも聞えけるかな

朝秋風　肥後　友永つれ子
いつしかと秋のなかはもすきの月にさむさをしへて朝風のふく

夏の空　越後　松永しげ子
ゆふだちのさわぎしあとの夕榮を讃するがごとまふよつばくろ

案山子　東京　みよし子
色つきし秋の田みればこゝかしこに彼所も鳥を追ひげなりけり

枯野風　大和　栗山たか子
八千草のうすろひ果しむさしのゝ枯生にすこくふくあらしかな

朝顔　肥後　徳永廣子
昨日みしつがた見せんと友よべば今朝さきがはるあさがほの花

朝顔　肥後　千々波橘子
朝な朝な匂ふをみればあさがほはさかりみぢかき花としもなき

蚊遣火　肥後　松村綱子
かきあつめ庭にくゆらす蚊やり火のけふりにつけて遠き蚊の聲

水鷄　同　松村綱子
川きしの芦のしげみのをくらきにあくるもしらで水鷄なくなり

早秋　同　松村綱子
蜻蛉飛ぶ千町の田の面をちこちにはしり穂みえて秋はきにけり

松間紅葉　三河　きく子
染わたすもみぢの色のときはなる松にならひてにしきとそみる

同　長崎　松尾ます子
山ひめの手染にしけむもみぢ葉は松のひまよりをりそめにけむ

同　愛媛　樋口孝子
いろかへぬ松の色さへ染めしかと見るはかりなる峯のもみぢ葉

同　肥後　池邊草美子
枝ふりし一木の松の木がくれにそめしもみぢはにしきなるらん

沖禎介氏を弔ふ　同　徳永萬壽子
身を捨てし心盡しの御いさをはかちどきあぐる今日こそはしれ

同　肥後　徳永而有子
あだ國をおどろかしけりをゝしくも花とちりにし大和こゝろに

同　徳永廣子
國のためあだのたよりのまがれ路をたちて盡せし君がまごころ

凱旋　福井　岩橋花子
はろ／＼と我日の本のはた風を吹かせてかへるけふそめでたき

婦人闘遊的祝捷會　埼玉　横田秋子
梅やなぎさくら山ぶきさま／＼に花くらべしていはふけふかな

うき世　能登　うもれ木
思ひきやむれに描きしあたゝかきおもひも水のあわなりしとは

述懐　薩摩　松原みれ子
入りし日の出づるが如く限なく思ひつきせぬ世にこそありけれ

○　東京　青木露子
ながき汀いまはふたりのものとなりて夕やけ紅うきみの顔染ぬ

石狩川の鮭　同
來ても見よ石狩川に名に負へる魚をすなとろいさましきさま

○　上野　佐藤露子
わがはゝもありしと聞けど名のみにて奥津城しろく野菊みだる

山家の淋しさに　東京　牧野千代子
ひとりぬる片山さとの冬の夜にこゝろぼそくもしぐれ降るなり

音信　大阪　黒田代音子
時の間におもふこゝろを通はせてちさとも近きみよぞうれしき

水邊紅葉　中川雪枝
霜に色添ふもみぢ葉の　岩うつ波にかつちりて
錦おどらすうつくしさ　妹が小袖にぬはまほし

今様

たのしき友

千葉　鎌田清子

桔梗刈萱女郎花　咲き乱れたる秋の野に
やさしき友と手をとりて、　ゆくすゑ語るたのしさよ

曉千鳥

奈良　たか子

汐風さゆる播磨潟　曉と近くなりぬれは
涙と、もにも立千鳥　こゑ寒けくも鳴渡る

わすれがたみ

磐城　須磨子

影うすらぎしうつしゑに　殘れる笑顔今いづこ
昔を思ひ出てられて　逝きにし友ぞいたはしき

新體詩

靜女

長崎　森屋その子

舞の手ぶりのなつかしさ
夫のこゝろのつれ〴〵を
なぐさむべしと思ひしを
いかでかよそのあだ人の
よろづ代祝ふためならむ
とらはれの身の儚なさに
進まぬ心引たて、
舞ふや羅綾の袖袂
ひるかへせとも反さぬは
夫につかふるまことなり
なみだしのびて奏でけむ
くるしきむねの思をば
しるや知らずや吉野山
雪ふみ分けて入ひしと

花間の乙女

千葉　鎌田壽賀子

桔梗撫子花萩の　咲き乱れたる花園に
詩集片手に微笑める　乙女や何を思ふらん
丈なす髪はつや〳〵かに　ばら色なせる双頬に
無限のゑくぼは刻まれて　嗚呼美はしの乙女子よ
何を思ひて微笑むよ　柔しき君を思ひてか

わかみどり

群馬　林廣子

雨の降る日も風のひも　一と日たりとて怠らず
學びの道にいそしみし　やよ乙女子のけなげさよ
いよ〳〵はげみてすゝみなば　千ひろの底のしらたまも
高峯の花も巳が手に　手をる時こそ來るなれ

おもひ出て

皐月　上

君と相見て諸共に　語りし後はともすれは
相みまほしく思ひつゝ　ほのかにむれなごかすなり
くるしさ思しるや君　過にし秋の三五の夜

さやけき月にあこがれて
露にたはめる紫の
君がみむれにかざせしも
されど無限の情ありて
花を我とおぼさずや

さまよひ出し眞萩原
花の一枝折取りて
言はず語らずゑまざりし
永久にしたはん色みゑし

名月を見てなき父君をしのぶ

伊豫　益田春子

あはれ思ふも淚のたね
ともにめでにし月影の
はかなきものは命にて
父君今もおはしなば
さこそめてさせ給はんを
むれさへさくる思ひにて

去年の今夜は父君と
今も姿はかへれども
あゝ父君のなつかしや
今夜の月をいかばかり
一人ながむる本意なさに
月の光りもうらめしや

琴の音

福岡　山崎まつの子

昨日は姉とむつびてし
友とゆめじにかたらひて
其よろこびもしばしにて
ともしびくらき夜半の床
しのぶ思ひにたへかねて
里川づゝみさまよひて
聲はりあげて名をよべば
こたへん人のかげもなく
行くともなしに歩みより
あゝかの君ともろともに
いとゞ思ひにたへかねて
なけよなげけよ狂へよと
たづぬる人のつま音に

今日は東の京にある
手に手を取りて學び來し
さめては君のかげもなく
一人あたりをながめつゝ
あまりに君のこひしさに
東の空を望みつゝ
さし打つ淚の音ならで
一人思ひにかきくれて
たゞづむ岸の柳かげ
去年涼みせし所なる
あたりかまはずひれふせば
かすかにきこゆる琴の音は
にたるぞいよゝ哀れなる

投稿歡迎

明治三十九年和歌兼題

一月{門松 追羽子　二月{夜梅 繪葉書　三月{春の野 夢

尙從來募集せし兼題和文を廢し、隨意の題にて、左の短文短詩を募集す

一短文　百字以內　一和歌　兼題外　一俳句

一新體詩　百五十字以內

和歌兼題及以上の募集に應じ、當撰したるものには各々天一圓、地五十錢、人三十錢に相當の書籍を進呈すべし

◎投稿規定　▼投稿女子は何人にても投稿するを得▼用紙　半紙半裁又は端書を用ふべし▼住所姓名は明記せらるべし▼原稿〆切　雜誌發行の廿日前即ち每月十日まで▼投稿宛　國光社女鑑編輯局▲右の規定に違ひたるものはすべて採用せず、

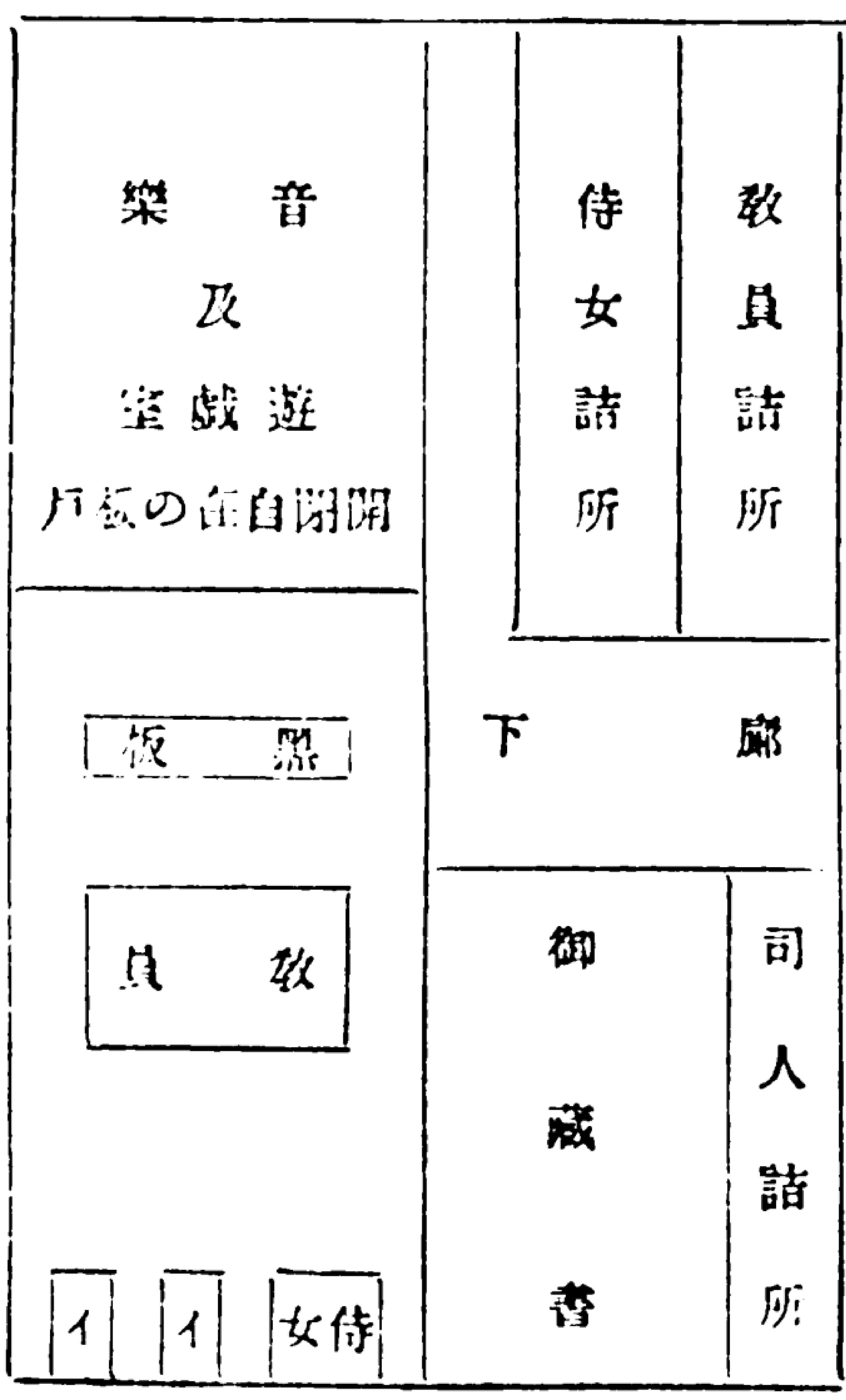


高輪御殿御學問所

高輪の宮に住ませ給ふ常宮、周宮御姉妹殿下には、夙に御聰明に渡らせられ、世上或は助言し奉るものあるにもあらざるかと疑ふ無きにあらざれども、此は大なる僻事にして、一向に兩殿下御自身の御心念より出づるものなり、其一二を承はるに、常に佐々木御養育主任を始め、近侍の人々を召し給まひ常宮より「仁」、周宮より「義」、といふ題を賜はり、各々に歌詠ましめて、此上なく悦ばさせ給ひ、御學問所の御机の如きは、玉葉の御指頭に布巾を覆ひ給ひ、隅々まで躬自ら御掃除遊ばし、教師が黒板に劃せる白墨の跡なども、多くは御自身御掃き遊ばさると申す、又盛夏の頃偶々御體を害ね給ひし折など、御勉學の程奈何と危ぶみ奉れば、好める業は病氣とても差支へなかる可しと、或は音樂或は繪畫に御心を遊ばさせ給ふとかや、彼の負傷將卒に賜はりし繃帶の如きも、是れ御親らの御氣つきにて、其他のことども、何れか感佩し奉らざる、扨て御學業は總て學校制度に倣はせ給ひて、日々の時間を定め、日の長短季候の寒暑により、多少の相違はあれども大低一日を五時間に劃り、一學科を四十分と定め、一課を終り給ふ毎に、二十分間宛休憩遊ばされ、又其の亞ぎの學科にかゝらせ給ふよし、而して其の御休憩時間中は、御庭園の運動又は遊戯など御意のまゝにて、御學問所は御殿内にありて、圖の如き構造

となり居り、御教授の任に當れる者は、皆其の時間割に應じて、交代に出仕し、詰所に控へ、時間到れば教場に出で丶、御教授申上げ、終れば直ちに退出を許さる又侍女は御學業の時間中は、詰所に四人づつ控え居り、交代にて一人づ丶御傍らの席に出仕して、御用のほどを辨じ奉るなり、以上の有樣にて兩殿下が御休憩時に、御苑内にて遊ばさせらる、御遊戯は、何も御堪能に居らせられ、中にも鞦韆とテニスは、殊に御鍛錬にて日ごろ拜し奉る者驚嘆し奉らざるはなしと、

（イは兩殿下）



總裁殿下諭旨

愛國婦人會總裁載仁親王妃智惠子殿下には、先月四日同會役員に對して、左の如く御諭旨あらせられたり、

諭旨

曩に我國不幸にして、露國と砲火を交ふるの止むを得ざるに至りし時、本會職員に望むに、特に時局に鑑み、努力事に膺るべきを以てせり、諸氏克く其意を體し、以て之が遂行に努められたるは我が大に喜ぶ所なり、今や我が皇の御稜威と、將卒の忠勇とに依り、國威更に中外に宣揚し、戰局亦將に其終りを告げんとするに當り、顧みて戰死者、幾萬の遺族と傷者との將來を考ふるときは其救護特に一層切なるものあり、本會は今日以後益々奮勵努力して、克く此事に從ふべきの急なるを覺ゆ、若し夫れ現時の規模、尚之に應ずる能はざるが如きあらば、更に其良法を講じ、以て本會

の責務を完うするに於て遺憾なきを期せよ、

明治三十八年十月四日

愛國婦人會總裁載仁親王妃智惠子

皇后陛下に獻納の裁縫機

米國大統領より、我皇后陛下に獻上せらるべき裁縫機は、豫てシンガー、ミシン會社のエリザベス工場に於て製造中の所、今回出來したる由、抑も大統領より裁縫機を獻上する事となりたる理由は、過般アリス孃來遊の際　皇后陛下に謁見し、陛下より米國の裁縫機を得たしとの仰ありたれば、アリス孃は直に此事を父君なる大統領に申達したる結果なりと、該機械はヴヰ、エス形にして在來の機械中、最も高價のものにして、機械の摩擦せざる部分は、總て金の延板にて造られ、其一端には日米の紋章を現はし、下方には日本流に日附と贈呈の理由とを記載しあり、而して其製造に着手せられたる以來、最後の試驗に至るまで、非常の注意を以て、最も熟練なる技師の外、何人の手にも觸れしめず、一室内に極めて、神聖に保管せられたり、尚ほ機械を容るべき外箱は、熱帶地に產する桃花心木と稱する珍木を材とし、絹及び羅紗を以て飾裝したるものにして、之を日本に輸送する爲には、特使を派遣せらるゝ筈なりと云ふ、

尾崎市長の婚儀

東京市民が英國艦隊員の驩迎に熱誠を表して、日比谷公園に驩迎會を催せる其の翌日十四日に、市長尾崎行雄氏は、男爵尾崎三良氏の令孃英子との結婚式を、芝榮町なる聖公會會堂に於て擧げた、此の婚儀を祝する爲、ノーエル大將より部下の將校二名海兵二十名、水兵三十名、儀仗兵として參會せしめたは、尾崎氏に取りて、實に名譽の事である、式は午後二時半を以て始まり、夫たるべき尾崎氏は、フロックコートにて式場の左手より、妻たるべき英子孃は、白衣を纏ひ、長き裾を曳きて右手より入り來

り、嬢の介添人としては、令妹君子嬢を初めミラー嬢姉妹、及びプリンクリー嬢、各水色の洋服を著け兩手に生花を捧げつゝ隨ひ、定めの席に著き、式の司會者はキング、ゲミル兩氏にて讃美歌を謡ひ、次いでオードレー氏の說教があり、樂を奏して尾崎氏と英子嬢とは別室に入つた、當日媒酌たる大隈伯には支障ありて、箕浦勝人氏代理を爲し、朝吹英二氏の立會にて誓約を終へ、夫より夫妻相携へて再び式場に現はれ、米國公使、葡國公使及び各公使館書記官、在京代議士、名譽職員等百餘名の列席せる中央を過ぎ、馬車にて華族會館に催す披露式に赴いた、列席者も亦た多くは、其後に踵いで同館へと赴きしが、披露式には更に來會者を增して二百餘名に及び尾崎氏夫妻は玄關を入りし階段の下に、一々來賓を迎へ二階に設けし休憩室に案內した、來賓の主なるは淸浦內相、松田衆議院議長、英國公使、米國公使高田愼三、大阪市會議長を初め二百餘名で、結婚式に於ける如く高崎男其の他數名接待を爲し、一同休憩の上更に階下の別室に於て立食の饗應があつた、席上尾崎氏は起つて來賓に挨拶を爲し、白耳義公使タヌタン男は祝辭を述べ、午後四時過式を了り、尾崎氏夫妻は一同の休憩中、同館の中庭なる芝生に於て撮影し、尙ほ退散後六時十五分新橋發列車にて、鎌倉地方に新婚旅行を爲られた、

優しき贈答

京都烏丸通四條下る所に、去る明治三十二年より、一昨年の秋まで、私立英語學館といふものを開設し多くの青年子弟に英語を教授しゐたる、淀三樹太郎氏は、但馬國出石郡平田村の人であるが、一昨年の十二月、志を立て米國へ留學し、聖路易の一學校に入學し、昨年來屢々彼國の教育上に關する諸種の事項を、京都にある學友の許に通信し、其中に參考となる事少からずとの事である、こゝに最も感ずべきは、同氏の夫人靜枝子にて、同女は今年三十歲にて、豐後國臼杵町の豪家江藤文內氏の次女なるが、

曾て京都府高等女學校を卒業し、今より十年前淀氏に嫁し、夫三樹太郎氏の英語學館を開設せるとき、同女は裁縫、諸禮の諸科を置きて、專ら女子敎育の任に當り、淑德の譽高かりしとの事である、さても三樹太郎氏の米國に出發するの日、多くの親族、知己、學友等見送りの爲同家に集りたる際、靜枝子は自ら長なる黑髮を根より切り、之を夫の前に差出しゆめ〳〵留守宅には心を掛け給ふな、一途に御成功御歸朝の日を待ち侍ると、涙を流して夫を勵ましたので、並居る人々も、その熱情に感ぜぬはなかつたかくて靜枝子は夫出發の後、夫の妹島子を我が家に止めて、京都高等女學校に通學せしめ、尚夫の兄德太郎氏の子息精二を京都府農學校に入學せしめ、殊更に柳馬場竹屋町上る小さき家に移りて、萬事頗る質素に夫に代はりて島子、精二等の家庭敎育に務めて居るは、實に感ずべきことである、斯の如く靜枝子は夫を思ふこと、深く夫の留學上、多大の厚遇に浴せる米國聖路易の學者ロビサー、イー、バルソンス氏の夫人に宛て、挨拶狀に數種の扇子を添へて送りしに、此の程同夫人より左の如き返翰到着したので、靜枝子は之を讀みていみじく感謝し、更に手づから日本の衣類を裁縫して、同夫人の許に贈つたさるにてもかの夫人の心の美しく優しい事よ、『我が愛する淀夫人、貴女のお手紙は最も樂しき感覺を私に與へました、貴女のお國即ち日本の最も眞實なる記錄を私にお送り下さいまして、誠に有難く、私は今日までこんなに愉快に感じた事はありません、私は力の及ぶ限り、貴女の良人のお世話を致す覺悟ではござりますれど、貴女のお手紙の中に、良人に就て書いてある嬉しいお言葉を見れば、なか〳〵及びも致しません、貴女の良人は初めて來られた時よりも、より幸ひに健康に神樣が、保護なされております、偖敬愛なる淀夫人よ、私は貴女が私に美麗な扇子を送つて下さつた事を、玆に多謝致します、其の扇子は私の部屋のうち日本物を陳列してある一室に一層美々しく飾つて居ります、扇子と貴女の御親切

なるお手紙とは、常に私が家の寳として保存致します、其の扇子の總てが開かれたのを見ると、自分等は次のやうに考へます、丁度我等の罪惡を神様が扇ぎ拂うて下され、我等の恥辱と云ふものも消滅して仕舞ひ、且神様が我等の悲しみやら苦しみやらを除いて下され、たとへば樂園にゐて美麗な家に住みて常に愛と樂しみと喜びとを以て、我等を保護して下さるやうな思ひが致します、淀夫人よ』とあつた、靜枝子は流石に敎育家の妻なり、淀夫人よと外國のゆかしき夫人に呼ばるゝは、いと名譽のことである、

山縣次官の土産美談

左に記するものは、山縣内務次官が、巡視中に取調べたる美談である

▽村落の活動　島根縣那賀郡に於ては、時局に處する經營として、小學校に於て、隨時戰事講話會を開設し、又靑年夜學會を開設せるもの十七校、讀書館を設置せるもの十五村、體育會を設けたるもの十二村の多きに及び、又徴兵適齡者幷に海軍兵志願者の爲、其身體檢査前各小學校に於て、敎科時間外を以て壯丁敎育を行ひ、其檢査合格者に對しては、入營まで之を繼續することになつて居る、

▽軍人家族救護と農耕の助成　島根縣八束郡津田村に於ては赤誠助耕隊を、講武村に於ては圓福協會同胞義會なるものを設け、軍人家族の農耕を助け、些少の賃金をも受けずして、隊員會員自ら之に服し一切被救助家族の饗應等を受けざることゝなつて居る、

▽特種の貯金と其運用　島根縣八束郡美保關村横山家眞與會は、國幣中社美保神社宮司横山眞矛が、其同族子弟を以て組織せるもので、其父眞與の遺志に基き、常に義金を蓄積し、國家有事の日に當り、臣民の義務を盡すの資に供せんとの覺悟である、昨年宣戰の詔勅煥發せられ、尋て國庫債劵募集の事あるや、時至れりと爲し、進んで該基金を以て之に應

し、爾來毎同應募して、克く會の目的を發揮して居る、この貯金運用の手段素より多くあれど、初めより國家有事の時を目的とする此種貯金の如きは、多くは其例を見ざる所である、

▽小學校生徒の力行　島根縣八束郡野浪村及び二子村小學校に於ては、第一回國庫債劵募集の際、生徒の希望に依り、共同應募規約を設け、各自の出金は父兄に依賴せず、授業放課後釣魚、採藻、貝拾、藁細工、草取、桑葉摘、害虫捕獲等に從事し、其收益を醵出して、之に應募し、勞働の趣味を感得すると同時に、奉公の微衷を表して居る、

▽漁浦婦人の活動　島根縣八束郡惠曇村大字江角は日本海に面する一漁村で、昨年第一回國庫債劵募集の事あるや、同地靑山せん外九名の婦人は之を聞て大に感奮し、各自の醵金を以て應募せんとせしも、力微にして目的を達するに至らず、漸く安達さと外二名の賛同を得たるも、尚其額十六圓餘に過ぎざりしを以て、遂に之を恤兵部に寄付したとの事である

▽軍人の慰問と紀念帖　島根縣邑智郡市木村及び日貫村小學校に於ては、職員村吏有志者幷に兒童等の手に成れる文章詩歌等を集め、軍人慰問帖と題し、印刷の上之を出征軍人に寄贈したるに、出征者大に喜び、答書を郵送し來れるを以て、之を淨書し、紀念帖と題し、學校に保存して永遠に傳ふることゝしたるとの事である、

◎東鄕商店の「花簪「凱旋」」　本鄕なる同店にては今回凱旋と稱する時期に投せる新意匠の花簪を發賣し、毎日拾本宛の賣上代金全部を廢兵救護事業に寄附し、尚一本に一枚の寄附劵を添ふる由、

◎骨皮道人の新發明　滑稽文學の泰斗骨皮道人西森武城氏は、今回鷄卵香油と稱する香油を發明し、專賣特許を得たるが、右は頭髮に滋潤する鷄卵と香油とは更に混和すべからざるものを混和すべく工夫し、好成績を得たるものにて、婦人の尤も注意する

頭髪を強くし、多くし、美しくする等効能頗る顯著なるより、貴夫人間に用ひられ、賛歌を寄せられたるものも尠からざる由、

◎大日本婦人敎育會　去廿一日午後一時より華族女學校幼稚園内に開會、ハーツホン孃（南北戰爭後に於ける米國婦人）、下田歌子（戰後に於ける女子の覺悟）兩氏の講演があつた、

◎女子義勇團　昨年二月軍人家族授產の目的を以て、九州佐賀に設立されたる同會は、創立以來慈善演劇及び擬物蒐集等の方法に依り、ミシン工場を設置し、團員も一千名以上に達し、資力も着々充實し工女一百名を收容するに至りし由、今回東京を中心に置き、全國授產事業の聯絡と統一とを企て、貴婦人の賛成を得しかば、事業資金を作るため、去る廿日より三日間本鄕座に於て義勇演劇會を開催したが、なか〳〵盛會であつたとのこと、

◎京橋區戰時婦人會　同會は昨年二月の創立にして、會長花房男爵夫人を始め、八十餘名の役員替る〳〵月番にて、慰問救恤の事に任じつゝあり、尚ほ京橋區出征遺族幼兒保育所へも、一ケ月拾五圓宛の補助をなし居れりと、

◎神田婦人會の活動　神田婦人會にては出征軍人遺族千四百五拾餘戶に對し幹事連が手分けをなして慰問を初めたるが慰問のしるしとしてはキヲヤコ地に神田婦人會と染拔きたる風呂敷を一戶に一枚づゝ贈呈しつゝありと、

◎淺草授產婦人會　出征軍人凱旋の後と雖、其の家族等は良職を得ること容易ならざれば、是が救助の方法として、大久保銀子、室田滑子氏等發企となり、淺草區軍人家族授產婦人會なるものを創立し、同區松葉町海禪寺に、第一第二の授產場を置き、前者を裁縫部に後者を下駄鼻緒製造部となし、目下

二十五名の家族者は日々通勤し居れるが、幼兒携帶者は保姆が引受けて、就業中は是れを保護し居れり

◎篤志の外國人　米國紐育市のゼー、アール、アステヤース氏は、商取引等に就ては日本人と何等の關係を有せざる紳士なるが、同氏の夫人エル、ケイ、ステヤース子は明治初年より、在米本邦留學生等の間に交際し、爾來非常の日本贔負となり、殊に今回の日露戰役に就ては、夫妻共熱誠なる同情を注ぎ、曩には海陸軍恤兵部へ金二百圓を寄贈したるが今また寡婦孤兒の救設費の内へとして、更らに金二百圓を寄贈し來れりとのこと、

◎女子の出納掛　教育圖書館にては出納掛として、此程より十八歳の女子數名を任用したりと云ふ、

○貞淑なる軍人の妻　大阪西區阿波堀通三丁目番外五百六十二番屋敷木挽職三重縣名賀郡瀧川村大字丈六堀内鶴吉(二十八)は、本年一月十九日第四師團の輜重輸卒として出征し、家には内緣の妻なる德島縣美馬郡岩倉村大字岩倉山三百卅三番地國見嘉造の妹つね(二十六)が留守をなし、夫が出征の際防寒具を調へる等の費用のため、十九圓許りの負債を生じたり、その儘に打過ぎては、夫が凱旋の際に肩身も狹かるべしと、鼻緒職を習ひ覺え、ロク〳〵に夜の目も寢ずして働き、一ヶ月六圓五六十錢ばかりの收入を得て、負債の口へ割戾し、今日にては大半辨償したるが、斯る珍らしき振舞に、近所の評判よく且内緣のことゝて、報効會其他の救恤金をも受るを得ざるを氣の毒がり、家主の泰治郞は其行にめでゝ一ヶ月二圓四十錢の宿料を免じ、一日の飯料を九錢に特減なし與へしかば、お常はいよ〳〵殊勝に勵みをりしに、天道是か非か、去六月上旬より圖らずもぶら〳〵病にかゝり、之を推して稼ぐ程に益々重患に陷り、過ぐる日遂に黃泉の客となりしが、死に臨みて、斯く

皆様の御親切なる御介抱に預り、何思ひ殘すこともなけれど、只一目夫の顔を見るよしなきが殘念なりと喞ちしには、人々覺えず胸を打れて、時ならぬ時雨に袂重りし由なるが、その葬儀には三十四圓餘の香奠あつまりたりとは、これも亡せにし人の心に感じてのことならでやは、

●二葉幼稚園の近況　明治三十三年二月中華族女學校幼稚園主任野口ゆか子、及森島みね子の兩氏に依りて、創立されたる麹町區下六番町の同園の近況に付、保姆主任松浦品子氏の語る所を聞くに、同園現在の幼兒は四十五名にして、内男二十六女十九、之を父親の側よりして職業別をすれば、

車夫	二十名	大工	二名	左官	二名
魚賣	二名	土方	二名	蒔繪職	一名
箱製造	二名	靴職	一名	工夫	二名
砲兵工廠工	二名	馬丁	一名	宿物工	一名
荷物賣	一名	府書記	一名	出征者	一名
古物商	一名	在戰地	一名	小使	一名
陸軍材料廠日雇	一名				

更に是を母親の内職より區別すれば、

洗張仕立物	十名	水菓子商	一名	教會掃除人	一名
烟草卷	十名	炭酸賣	一名	縫[illegible]	一名
軍服仕立	二名	裁縫所手傳	一名	幼稚園小使	一名
袋細工	一名	草取	一名		

此他は母なきもの、子供多くして内職の出來ぬ者、病氣に罹りて身の自由ならぬ者等なり、入園を望む者は、父兄又は後見人の職業幼兒の住所姓名年齡等を申出でなば、同園は特に其家庭の實情を調査し而して入園を許す可く幼兒は一日に必ず一錢を持參し、内五厘を保育料とし、五厘を義務貯金と定めたるが斯く日掛風の仕込となしたる理由は、日掛的ならば、一日に二錢や三錢位は困難ならざる可けれど、月に纏めて十五錢乃至二十錢とすれば、其出途に頗る困難を覺ゆべきにより、斯く定めたる次第なりと

◎日本女子美術學校の日光行　去廿一日朝六時半上野停車場を發し、廿三日午後五時半を以て歸京したる、芝公園内日本女子美術學校の日光探勝隊一行は、社殿の寫生日光植物園の撮影等を試み、更に葦舟に乘じて、中禪寺湖を横斷し、湯本に出て歸京せり、湯本は夜分寒冷を覺ゆるも、中禪寺湖畔の紅葉は、今正に二月の花よりも紅なりと云ふ

次號記事豫告　十二月一日發行

定價

一册　前金貳拾錢
三册三ヶ月分　前金五拾七錢
六册半年分　前金壹圓拾錢
拾貳册一年分　前金貳圓拾錢

全國無逓送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行　金三拾錢
半頁　三十二行　金八圓
一頁　六十四行　金拾貳圓
表紙一頁　金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

購讀注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認めありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十八年十月廿八日印刷
明治三十八年十一月三日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊業一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
（電話新橋二六三九番）
（電話新橋特八八番）

女學及家庭書類

- 島田佳矣・野口駿尾 共著 ◉ 女子技藝 編物模樣圖案 全五冊 定價 松ノ巻四十錢 櫻ノ巻五十錢 藤ノ巻五十錢 菊ノ巻五十五錢 梅ノ巻五十五錢 郵稅各二錢
- 棚橋絢子著 ◉ 女道叢話 全 定價金三十錢 郵稅金四錢
- 三輪田眞佐子著 ◉ 女子之本分 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢
- 三輪田眞佐子著 ◉ 女子處世論 全 定價金二十錢 郵稅金四錢
- 磯部武者五郎著 ◉ 家計簿記法 全 定價金十五錢 郵稅金二錢
- 藤野天城著 ◉ 女子小觀 全 定價金二十錢 郵稅金四錢
- 堀內新泉著 ◉ 女樂師 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢
- 松川寬州著 ◉ 結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵稅金四錢
- 堀內新泉著 ◉ 家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵稅金四錢
- 女鑑編輯局編 ◉ 新編ひめかゝみ 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

著者	書名	冊數	定價・郵税
梅澤清一著	清少納言と紫式部	全	定價金卅五錢 郵税金六錢
澁谷愛著	萬國女子風俗	全	定價金二十五錢 郵税金四錢
堀内新泉著	少女讀本	全三冊	定價各金十八錢 郵税各金四錢
大町桂月著	常盤御前	全	定價金十三錢 郵税金二錢
小林兩搭著	勾當の内侍	全	定價金十三錢 郵税金二錢
濱田廉著	袈裟御前	全	定價金十三錢 郵税金二錢
國府犀東著	靜御前	全	定價金十三錢 郵税金二錢
長田偶得著	顔世御前	全	定價金十三錢 郵税金二錢
杉谷正隆著	家庭訓歌 修身百首	全	定價金二十錢 郵税金四錢
高瀬眞卿著	學校家庭 修身一夕話	全	定價 特六十錢 郵八錢 並三十八錢 税六錢
指原乙子著	女子文章軌範	全	定價金三十錢 郵税金四錢

- 岡勇次郎著 ●日本米穀ノ將來 全　定價金三十錢 郵稅金六錢
- 川崎直衛譯 ●國際貿易論 全　定價金六十錢 郵稅金六錢
- 佐美孫三著 ●臺風雜記 全　定價金三十錢 郵稅金四錢
- 白耳義リーヂ大學教授ラヴレー氏原著 文學士寺內淳二郎譯 ●奢侈亡國論 全　定價金二十錢 郵稅金二錢
- 陸軍大臣寺內正毅閣下序 隈謙之序 甲秀輔編 ●德川の孔明 全　定價郵稅共金十五錢
- 山崎忠和著 ●日露の英雄 全　定價郵稅共金二十二錢
- 倉庫銀行頭取中村清藏序 中村佐平著 ●銀行簿記學 全　定價金五十錢 郵稅金六錢
- 故富士谷御杖述 ●土佐日記燈 全三冊　定價金一圓五十錢 郵稅金十五錢
- 井上頼圀校訂 小澤政胤著 ●慶長以來國學家略傳 全　定價金一圓五十錢 郵稅金十錢
- 弘田正郎編 ●豪吟集 全　定價金八錢 郵稅金二錢
- 幸田露伴序 村上濁浪譯述 ●鐵血宰相語錄 全　定價金三十錢 郵稅金四錢
- 在法科大學矢田七太郎著 ●江川坦庵 全　定價金三十錢 郵稅金四錢
- 水主天姥著 ●石田三成 全　定價金三十錢 郵稅金四錢
- 塚原澁柿著 ●山崎合戰 全　定價金卅九錢 郵稅金六錢

日露戰爭 日本赤十字社救護寫眞帖

第壹篇

●印刷鮮麗●紙質精良●裝釘優雅●紙幅菊倍判●紙數五十六葉

●寫眞百五十餘個●定價金七拾錢郵稅金拾錢

博愛慈善の人道に基き報國恤兵の大義に據りて彼我の別なく傷病兵を救護し以て我幾拾萬の將士に溫き情味を感ぜしむると共に又幾萬の敵をして我が慈愛に泣かしめ環視列國の驚歎と賞讃とを博したるものは實に今回の戰役に於ける我日本赤十字社の行動にあらずや本寫眞帖は即ちその活動の狀況を不朽に傳へんが爲に特に日本赤十字社に請ふて編成せるもの又別に大本營及諸官衙の許可を得て救護に關聯せる寫眞を掲載せるもの亦尠からず外に勇烈無双の武あると共に内に博愛慈仁の涙ある我國民の眞面目を知らんと欲せば來て本帖の紙面に輝く崇高偉大の光明を看よ

發賣所

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

日本赤十字發行所

電話新橋特八八●二六九三

明治三十八年十一月三日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾五年第十一號　第三種郵便物認可

小山作之助先生編

訂正 **重音唱歌集** 洋裝美本

第一集 定價金五拾錢郵稅不要
第二集 定價金七拾錢（定價改正）

小山作之助先生編

輪唱歌集 洋裝美本

全一冊 定價金拾五錢郵稅金四錢

右ハ發行以來大方ノ好評ヲ博シ既ニ數版ヲ重子タルガ今回大訂正ヲ加ヘ教科書トシテ文部省ノ檢定ヲ經タリ乞フ倍々需用アランコトヲ

諸大家作歌作曲

討露軍歌 **かちどき**

第三 定價金五錢郵稅三冊迄金貳錢

目次〔充員召集、遠征軍人の妻、戰死者を弔ふ歌〕



山葉製風琴
（保險附）

壹號形	金拾六圓五拾錢
貳號形	金廿六圓五拾錢
參號形	金參拾七圓
四號形	金四拾參圓
五號形	金四拾八圓
六號形	金五拾五圓
七號形	金六拾五圓
八號形	金七拾五圓
九號形	金百圓
拾號形	金百貳拾圓
メーソンモデル	
第壹號	金百參拾圓
全貳號	金百五拾圓
全參號	金貳百圓
新形壹號	金八拾圓
全貳號	金四拾五圓
足折形壹號	金貳拾五圓
全貳號	金參拾千圓

○山葉製洋琴 各種 金參百圓以上

○鈴木製ヴァイオリン
金五圓以上五拾圓位迄各種
弓壹圓以上各種
箱壹圓五拾錢以上各種
其他附屬品等各種

● 舶來洋琴參百圓以上參千圓迄各種
● 舶來風琴百圓以上千五百圓迄各種
● 舶來ヴァイオリン及弓箱等各種
● 樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器各種
● 戰捷紀念國旗印銀笛數種
● 八人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓

○ピアノオルガン

○調律修繕應需

右の外手風琴、ハーモニカ、舶來フラジョーレッツ各樂器附屬品、和洋音樂書各種郵券貳錢御送附あらば美麗なる目錄進呈す

東京市京橋區竹川町十三番地

共益商社樂器店

電話新橋五二九
電信略號キヨ